玄界放蕩記～ゲームこそ人生～

粗茶Returnees

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遠征組が持って帰ってきた戦果は複数のトリガー。

それに加えて１人の近界民だった。

「このカセットのやつはどんなゲームだ？」

彼はゲームをお気にめしたようです。

目次

玄界生活① 1
玄界生活② 9
玄界生活③ 17
玄界生活④ 26
大規模侵攻① 33
大規模侵攻② 43
大規模侵攻③ 52
大規模侵攻④ 61
新生活① 72
新生活② 81
新生活③ 88
新生活④ 95
新生活⑤ 105
攻撃手① 113
攻撃手② 120
攻撃手③ 128
攻撃手④ 135
攻撃手⑤ 142
攻撃手⑥ 149
鈴鳴第一 156
加古隊 164
国近柚宇① 172
国近柚宇② 182
ガロプラ① 188

ガロプラ②　195
ガロプラ③　203
シアン①　213
シアン②　220
シアン③　230
シアン④　238
リア・ハーヴェイ　248
A級部隊①　255
A級部隊②　264
A級部隊③　271

玄界生活①

ボーダーという組織は、近界民（ネイバー）の侵攻から市民を護る組織である。一般人の認識としてはこんなところだ。もちろんその仕事が大前提なのだが、そのための敵の情報の分析、戦うために必要なトリオンの研究、遠征部隊による近界の調査など、一般人が認識していない仕事はいくつもある。

三門市に本部があり、そこには各部隊の作戦室だけでなく、多種多様な設備が用意されている。

ここはその中の1つ。現ボーダートップ。A級1位の太刀川隊の作戦室。

「あぁァァ負けたぁぁ！」

「ふぅぅ。いや～今のは危なかった～。シアンさんこのゲームの腕はすぐ伸びるね」

そこで1組の男女がゲームで白熱の試合をしていた。勝者は女子であり、男子の方はソファの背もたれに身を投げた。

「得意なのかもしれない。ユウには負けるけど」

「そう簡単に負けるわけにはいかないからね～」

今の試合は相当集中していた。集中力が最高点に到達して試合を終えた以上、今日の試合はここまで。ユウと呼ばれた少女、国近柚宇はゲームとモニターの電源を落とした。

「シアンさんレースゲームは絶望的に下手だよね～。ここまで違いがあるのも珍しい気がする」

「得手不得手は誰にでもあるでしょ」

「車の運転はしないでね。事故になりそう」

そもそも免許なんて持っていないのだから、運転することはないのだが。

「タチカワは運転できるのか？」

「できないよ。学科で受からないから」

「ならよし」

「何がよしなんだろ」
　男の子ってすぐに対抗心燃やすなぁ笑いながらと、部屋にある冷蔵庫から飲み物を取り出す。２人分のコップも用意し、飲み物を入れたらソファで項垂れているシアンと呼ばれた男の前に置いた。
「ありがとう」
「どういたしまして～。それにしても、シアンさんもここに馴染んできたね～」
「おかげさまでな。ユウがオレのトリガーを持ってくれてるおかげだよ」
「……あの時はびっくりしたよ。わたしそういう抗争とかあんまり関わりたくないのに」
「それはごめん」
　シアンのトリガーは現在アクセサリー程度の大きさになっており、チェーンを使って国近がそれを首から下げている。交渉の末、話の流れでそうなったのだが、その場にいなかった国近からすれば寝耳に水。ぽかんと口を開けたものだ。正直面倒くさいとも思った。それでも引き受けたのは、単純に好みの顔だったから。面食い女子である。
　交渉は難航するかと思いきや、遠征組が話した経緯とシアン本人の様子を踏まえ、対等な関係で交渉が終わった。ボーダーの司令を知る人間からすれば自分の目と耳を疑うものだ。
「ま、こういう感じの着地点なら気が楽かな～。シアンさんとゲームするのも楽しいし」
「それはよかった。オレもいい師匠を持ったと思ってるよ」
「またまた～。調子のいいこと言っちゃって」
　シアンが求めたものは、「捕虜として扱われないこと」「一定の自由があること」。その対価は「シアンが持つ近界（ネイバーフッド）の情報」「敵対しないこと」。
　「敵対しないこと」が対価として認められたのは、シアンの持つトリガーが黒トリガーだから。そして、遠征組が勝てなかったという事実があるからだ。

そもそもそんな相手を連れて帰ってくるなという話になりそうだが、彼の持つ情報は捨てるに惜しいと判断されたわけだ。
「お昼ご飯は何がいい？　持ってくるよ」
「悪いな。ユウと同じやつでいいよ。こっちの食べ物よくわからんから」
「あはは、それはたしかに。それじゃ、ちょっと待っててね」
ボーダーには食堂もある。基本的には食堂内での食事となるのだが、エンジニアのように多忙を極める職員がいたりする。そのため、仕事場でご飯を食べられるようにとテイクアウトが可能となっているのだ。国近は自分の分とシアンの分とを買いに行くために作戦室を出た。
シアンが直接食堂に行かない理由は1つ。まだ彼の身分の偽装ができていないから。それさえできれば、日中から出回ることも可能となる。A級1位の隊のオペレーターを務める国近と行動していれば、目立つことにはなるが。
（遠征部隊が迅さんと嵐山隊と戦った時に協力してたら、もっとスムーズに話が進んだと思うんだよね）
思い返すのは遠征から帰ってきた直後のこと。山を抱えて帰ってきたら別の山が待ち構えていた時のことだ。シアンの他にも近界民（ネイバー）がいて、しかも同じく黒トリガー持ち。それが玉狛所属となれば派閥のパワーバランスが崩れるという話。
そこにシアンも協力して戦えという話になったのだが、本人が拒否をした。そのせいで話がややこしくなり、なんやかんやと話がもつれてから今に至る。
（本人がトリガーを持たず、玉狛を除いたボーダー最強の部隊が所持した上で監視すればいいって。理屈はそれっぽいけど巻き込まれてるよね～）
上層部持ちにならなかったのは、それだと捕虜に近い扱いとなるから。引っかかるものもあるがそれで納得したとしても、シアンの黒トリガーを管理する人間が非戦闘員では問題しかなさそうなものだ。というか問題だ。隊長の太刀川慶か、戦闘員の出水公平がいなければ

奪い取られかねないという危険性があるのだから。
（シアンさんが敵対する気なくて、今も協力的で平和的だからギリギリセーフって感じかな）
「よう国近。お前も昼飯か」
「あ、太刀川さん。個人戦（ソロ）楽しめました？」
「おう。迅が戻ってきたからな～。それアイツの分も買ってるのか」
「そうですよ～。あの人はまだ自由には動けませんから。時間かかり過ぎな気がしますけどね」
「やっぱあれか。アイツにもボーダーのトリガー持たせたいって言ったのが不味かったか」
「何その話」
　初耳の上にとんでもないことを言ってくる隊長に目を見開く。未だ信用もない人物だというのに、それを頼むのはどうなのかという話だ。けれど彼がそれを頼む理由はなんとなく察しがつく。
「玉狛に入った奴で有りなら、こっちも有りじゃねーかなって思ったんだが」
　筋が通らないわけじゃない。しかし太刀川も国近も知らない。玉狛に入った少年がどういう人物なのか。彼の父親とボーダーの上層部の関係性を。いわば例外中例外なのだ。
「太刀川さんって時々無茶苦茶なことやろうとするよね」
「迅ほどじゃねぇって。ま、あっちは予知ありきだから勝算あっての行動だけどよ」
「あの人がトリガー持ったとして、どうするの？　リベンジ？」
「リベンジならアイツに自分のトリガー使わせたいけどな」
　シアンのことを知っている人間は少ない。遠征組と上層部。そして遠征組と共に迅たちと戦った三輪隊だけだ。玉狛支部の人間すらシアンのことは知らない。唯一未来予知を持つ迅だけは、何かあると察している程度だ。それも情報規制をしているからである。黒トリガー持ちとはいえ、遠征組に1人で勝ったシアンに上層部は慎重に動いている。
　そんな事情もあって、太刀川も黒トリガーという単語は出さない。

国近と共に名前をぼかして話す。周囲に人はおらず、話が聞こえているのは食堂にいる職員のみ。彼らも深く知ろうとする気はないし、噂話をする気もない。必要とあらば記憶封印措置が行われることを知っているから。

作ってもらった料理を受け取り、２人並んで作戦室へと歩いていく。シアンの分は太刀川が持っている。

「戦ってみて分かったが、アイツは素の実力が高い。じゃなきゃ負けてない」

遠征組は黒トリガー相手でも勝てると想定された実力者たちである。しかも今回の部隊構成は隊のランクがトップ３の部隊。単純に考えれば最強編成と言える。いくら黒トリガー持ちとはいえ、その能力に頼っての戦い方では遠征組に勝てないと言えるだろう。

だがシアンは勝った。強力な黒トリガーだというのもあるが、戦い方が上手かったのも事実。太刀川はそれをよく実感しているのだ。

そして思った。

――個人戦で斬りあうの楽しそうだな、と

「リベンジはこの際置いとくさ。さすがにアレ相手の戦いは許可降りないからな」

シアンに限ったことじゃない。ボーダーに所属している黒トリガー持ちの隊員も、それを使用した戦闘は訓練で認められていない。防衛戦だったとしても、基本的には許可が降りない。その必要性が認められた時のみだ。

迅は黒トリガーを本部に手渡したことで、普通の隊員と同じようにランキングが反映されるようになった。太刀川はそこにも目をつけている。シアンの黒トリガーは太刀川隊が管理している。つまり「シアンもボーダーのトリガーを持てば混ざれるんじゃね？」である。

「せっかくあの実力があるんだ。腐らせるのは勿体無い」

「あはは、太刀川さんらしいね～」

肯定も否定もせず、適当な相槌を打った。完全に個人の都合。明らかな私情である。けれどそれが彼の性格だ。強者との戦いを好む太刀川慶という人間だ。果たして上層部が太刀川の申請を受理するの

か。それは現状厳しい話だが。もし、それが通ることがあれば、たしかに見物だろう。
けれど国近は違うことを思っていた。
そもそもシアンがそれを良しとするかが別という点を。
（シアンさん……）
思い返すのは遠征での出来事。オペレーターも同行し、遠征艇から戦闘員の支援をする。戦闘員が戦っていい範囲は遠征艇から3キロ以内と決して広くない。そして戦闘は遠征艇からそう遠くない場所で行われた。
国近はその時に僅かに見えた彼の表情を覚えている。戦闘時はいたって真面目に。太刀川と武器を交えた時は、釣られたのか少し楽しそうではあった。けれど、終わった時に少しだけ見せた表情は『憂い』だった。
「ようシアン。飯持ってきてやったぜ」
（っ……）
少し考え事に集中し過ぎたようだ。作戦室に着いたことに気づくのが遅れた。太刀川の声で気づいた。もしかしたら、太刀川もそのために少し声を張ったのかもしれない。
「タチカワか。荷物持ちご苦労」
「飯いらなかったか。俺が2つ食おう」
「悪かったって。持ってきてくれて助かるよ」
「初めからそう言えっての。それ何見てたんだ？」
シアンに弁当を手渡した太刀川が、彼が見ていた画面を覗き込む。操作の仕方は国近から習ったのだろう。
「なんかのゲームか」
「えふぴーえすってやつらしい。なかなかに面白そうでな」
「こいつ完全にゲームに目覚めてやがる」
「ただ、これやるための物がここにはないようだからさ。当面はここにあるゲームでユウに勝つことを目標にする」
「向こう1年はＦＰＳやることなさそうだな」
２人の会話は雑談というよりも歓談に近い。同い年ということ、太

刀川がシアンに好意的なことが距離感を一気に縮めたのだ。その点、ゲームでこつこつと打ち解けた国近の行動が涙ぐましい。ちなみに唯我は距離を測りあぐねて難航中。出水は国近のゲームに便乗して打ち解けている。
「やっぱユウに勝つには時間かかるか」
「1つでも勝ち越してみろ。たぶん次は違うカセットでやることになる。そしてここにあるやつ全て制覇することになるぞ。国近はゲームだと負けず嫌いだからな」
「なるほど。ちなみにタチカワは制覇したのか？」
「いや？　勝ち越せないからな」
「ふっ、ザコめ」
「1勝もしてないやつには言われたくねぇな！」
「ならば勝負するか？　今のオレならタチカワに勝つぜ？」
「ほう？　国近にしごかれてるのはお前だけじゃないってことを教えてやろう」
「あ、2人ともその前にお昼食べましょうね。冷めちゃうから」
ゲーム機に向かっていく2人を国近が呼び止め、そそくさと戻ってきて弁当の蓋を取る。太刀川は気分からカツ丼を選び、シアンの弁当は国近と同じもの。箸の扱いに大苦戦する彼のことを考え、スプーンで食べるものを選んだ。
選ばれたのはオムライスでした。
「ユウ。これってなんて食べ物だ？」
「オムライスですよ～。口に合いましたか？」
「うん。ユウが用意するやつはどれも美味しい」
「えへへ、それはどうも～」
自分で作ったわけじゃないのに嬉しそうだなと思ったが、それは口に出さずにカツを口に入れる。隊の紅一点に水を刺さない紳士隊長なのだ。
国近も会話に加わり、3人で歓談を続ける。ボーダーという組織は若い。隊員の多くが中高生だ。太刀川も同年代の相手が多いとは言えない。その意味で対等な人間が増えるのは嬉しいものだ。それが

強い相手ともなれば尚更に。
「よっし、ごちそうさま。やるぞシアン」
「ああ。これでもオレが勝つけどな」
食事が終われば、食前に話していたことを実行するのみ。カセットを本体に差し込む。コントローラーを手渡し、いざ勝負(ゲーム)開始。
「あ、レースゲームだ」
起動されたゲームを見て思わず国近は呟き確信した。
これは太刀川がそれなりに上手い腕を見せるゲームであり、シアンが苦手とするゲームである。
つまり――
「タチカワぁぁぁ!!」
――シアンがボロ負けする。

玄界生活②

ボーダーという組織は、4年前に起きた第一次侵攻で存在を公にした組織だ。そこからメンバーが増えていき、今の状態に至る。現在の司令、つまりボーダーのトップにいるのは城戸正宗。旧ボーダーと呼ばれる前体制の時から所属する古株の1人だ。彼は近界民（ネイバー）の排除を目的と公言しており、迅の柔らかな表現で言うと「近界民許さないマン」である。

そんな彼がシアンと対等な関係で話をつけることにしたのも、ひとえに未来予知青年こと迅の影響だ。彼が予知している大規模侵攻。それ以前に被害がないという予知が出ている。それはつまり、シアンが本当に敵対の気がないということ。拒めばそうはならなかっただろう。遠征組からの報告では、彼のトリガーが使い方によっては「天羽と同じ結果を生みかねない」とも言われているのだから。

「司令何のようですか？」

「来たか」

部屋に入ってきた青年を見据える。顔の傷も相まって城戸の表情は一層強面だが、シアンの気配は柔らかい。一定の余裕を見せており、威圧で押されることがない。

「君の身分偽装の件、加えてボーダーのトリガーを持たせる件について話がある」

「前者はともかく後者は初耳なんですが」

「なに？　……太刀川の独断か」

「あー、ノーマルトリガーで戦ってみたいとは言われてましたが。そういう意味だったのか」

「……まあいい。後半の件を先に話をつけよう。現状、我々の考えではそれを許可することはできない」

「でしょうな」

自分がその立場でもそうする。ここであっさりと許可が降りるなど微塵も思えない。城戸のように近界民を敵視する者がトップにい

るのなら尚更だ。
「太刀川隊から日々報告は貰っている。君がどう生活を送っているのかをね」
　無論それは不審な動きがないかの監視でもある。その意図が含まれていることは言われなくても分かるし、シアンも監視と報告が行われていることは予想の範囲内だ。
　思い違いがあったとすれば、城戸の方だろう。なにせ報告に上がってくるシアンの行動記録の８割方が、「ゲームしてました」なのだから。特に最も彼と行動を共にしている国近からは、ゲームの種類、プレイ内容まで詳細に書かれている。仕事はきっちりこなす隊だが、学業成績がやばい隊長とオペレーターの悪い面が出てしまった形だ。
　風間隊に任せればよかったと後から思ったものである。しかし、その場合今のような友好的な状態になっていたかは断言できないため、如何ともし難い話だ。
「今日は大乱闘なるものをやる予定ですよ。タチカワとイズミも非番らしいんで」
「楽しんでいるようで結構」
「どれが強いとかあります？」
「私がそれを興じているとでも思っているのかね？」
「ですよね」
「カー〇ィでハメ殺したまえ」
「やり込んでるじゃん」
　シアンが太刀川隊と親交を深めていることを日々報告に受けると、旧ボーダーの頃が過ぎってしまう。あの頃目指していたものが、今になって１つの形として現れつつあると。
　城戸はその思考を切り、話を戻した。太刀川隊からの報告があるとしても、信用に足るとは言えない。玉狛支部に入隊した空閑遊真とは事情が異なるのだ。
「君のトリガーの件は非現実的だと思っていたまえ」
「構いませんよ。タチカワが残念がりそうですけど、オレは今の目的がゲームなので」

「では、もう1つの件に入ろう。こちらが本命だ」
「身分偽装の件ですね。ユウ……くにちかが時間かかり過ぎな気がするって言ってましたけど」
　言いにくそうに名前を言う彼を鼻で笑いかけた。不意打ちでも耐える鉄壁の男。それが城戸司令である。
「私の方からもそちらの件を確認したのだが、単純にして大きな問題が1つあることが判明した」
「……それは？」
　偽装を承諾したからには技術的には問題ないはずだ。それでも時間がかかるのは制度的な何かだろうか。こちら側のことをもっと知らないといけないなと、今後国近から学ぼうとシアンは決める。
　しかし城戸の言葉は彼の予想を外させる。

「君の名字を我々はまだ知らない」

　無言の時間がきっちり5秒。予想の斜め下を行かれたことで思考が止まり、そこから回帰して理解するまでにかかった時間だ。
　それはそうだ。名前を正しく知らないのなら用意ができない。これは確認しなかったボーダーの落ち度であり、言わなかったシアンの落ち度でもある。ゲーム三昧な生活をしている場合ではなかった。ピザを注文として住所を正しく記載しないようなものである。そりゃ届かん。
「名字は……適当につけてもらって結構ですよ」
「実はその方向で話は進んでいるのだが、決める者たちが白熱していてね。どの名前にするかで軽く揉めている」
「えぇ……」
　子どもの名前を何にするかで揉める親のよう。
「君に名字を聞いてそれにした方が早いと判断して呼んだわけだ」
「ちょっと内輪揉めがありましてね。家はもう潰れてるんですよ。名乗る気もないし、まじで勝手につけてもらっていいですよ」
「……そうか」

彼の言葉を飲み込むように、城戸は静かに目蓋を閉じた。自虐的な笑みと、悲しみを灯した目。そしてその奥のもの。

迅の予知も確定するまでは可能性に過ぎない。話していて人柄は掴めてくるが、彼の危険性は未だに残る。一度彼と迅を会わせて先のことを視るのも1つの手か。

「では午後には君の身分を完成させよう。食事を太刀川隊の作戦室で取っているのなら、昼食と共に持って行かせる。正午に間に合わないかもしれないが、構わないかね？」

「いいですよ。それではオレはこれで」

部屋から出ていった後も、彼が立っていた場所をしばらく見つめる。最初の交渉の時からそうだが、彼が求めているものは現在だ。今生きていくための手段、場所を求めている。その先のことは一切口にしていない。そこが城戸たちを慎重にさせる。目的が見えない相手は不信感を拭えない。利用できるかも分からない。扱いづらいのだ。

だが、そこをいくら探ろうとも見えないのは当然だ。本人が語らないのも無理はない。本人も何も考えていないのだから。先のことを考えて玄界（ミデン）に来たわけじゃない。成り行きでそうなっただけ。

その事情を話せば少しは信用性も出るかもしれないが、そこを話す気も今はないらしい。

城戸は自身の中でシアンの危険度を高めた。今の会話。普段では考えられないような気さくさが出てしまっていた。まるで現ボーダーができる前のような。

それを引き出させるような話術は感じられない。シアンという人間性がそうさせるのなら、これほど危険なものはない。敵への潜入は、溶け込むほどに成功率が上がり、成果も大きくなるのだから。

（使うか）

端末を操作し、1人の隊員に連絡を取る。

「働いてもらうぞ」

望もうが望むまいが、誰よりも識れる人間に。

□□

城戸と話した部屋から太刀川隊の作戦室へと戻る。ボーダーの基地は広い上に似た道ばかりだ。単純な道が多いからこそ迷いもする。観光で京都を訪れる人のように。

しかしシアンが迷うわけにはいかない。極力存在を伏せないといけないから。そんなわけで案内役が必要となり、行きも帰りも手が空いていた風間が行っている。

「タチカワもそうだけど、カザマって近界民を嫌ってるわけじゃないのな」

「敵として来るのなら排除する。それだけだ」

「おかげでこっちに来れたし、ありがとな」

「礼は不要だ。必要だと思ったからそうした。それに、戦闘を続けていてはこちらに被害が出るとも思ったからな」

「トリオン体で負けても遠征艇に行けるのに？」

「お前が敵対心を強く持ってしまえば、遠征艇くらい斬れただろう？」

「……まぁね」

戦闘し、隊員が落とされてからの判断はまさに即断だった。太刀川を止め、出水の射撃と当真の狙撃も止めさせ、シアンの話に応じたのは風間だ。城戸たち上層部との橋渡し役も、中立的な立場を貫いて行っていた。太刀川の場合、シアンを気に入ったのもあってシアン寄りだったりする。

リスクリターンを考えての行動。実際、前金としてシアンが出した情報は大きかった。今回の最大の功労者を決めるとすれば、間違いなく風間だろう。

「ボーダーには派閥があるらしいけど、風間はわりと考えでは中立なのな」

「俺は組織の司令に従って行動するだけだ。命令が下れば真っ先にお前を討つぞ」

「あれ、中立じゃない気がしてきたぞ」

連れてきたからには、連れてきた責任がある。判断をしたのは自分なのだから、もしシアンが敵となれば自分の手で討たなければならな

い。それが風間の考えだった。
「三輪はお前を処分したがっていたがな」
「おっかないな。敵の言葉が信用できないってのは分かるけどさ」
大切なトリガーを自ら手放した。そこを少しは汲んでほしいなとぼやきつつ、その復讐心に多少の共感をする。自分がそうなる可能性は捨て切れない。
「そいや身分証って持ってくるのはカザマ？」
「いや、その指示は受けていない。おそらく俺ではないだろう」
「そっか。誰でもいいけど、知ってる人間だと気持ち楽なんだよな」
「分からなくはないな」
太刀川隊の作戦室へと到着し、風間とそこで別れてシアンは部屋の中へ。現状、彼にとってはここが仮宿である。寝る時はソファを使用させてもらっているのだ。
「シアンさんおかえり～」
「ただいまユウ」
部屋で出迎えてくれたのは気の抜けるような笑顔。ひりついた空気から正に一変。国近が放つおっとりとした雰囲気に、シアンは無意識下で入っていた肩の力が抜けた。
「何話してきたんですか？」
「身分偽装の話とトリガーの話。トリガーの方は無理だと思えってさ」
「へ～。太刀川さんがっかりしそうですね」
「予想くらいしてただろうし、腑に落ちるんじゃね？」
「どうでしょうね～」
シアンの言う通り予想くらいしてただろう。しかし国近は思う。あの隊長の試算では、半々の確率であり得ると思っていたのではと。
「身分の方はなんでした？」
「名字を決めるのに手間取ってるって。言ってなかったしな」
「あー。わたしも知らないですね～。教えてもらっていいですか？」
「教えない」
「えー。どうせ知られることなのにー」

それぐらいいいじゃないかと文句を言う国近に、シアンは城戸に話したことを少しだけ教える。家は既に無く、その名を名乗る気もないのだと。
「……ごめんなさい」
「別に気にしないよ。それよりユウ、こっち側のことで知りたいことがあってさ」
「わたしが話せることなら。あ、ボーダーの規定に引っかかるやつは無理だからね」
「分かってるよ。ボーダーのことを聞きたいわけでもないから」
そう聞いて安心した国近は、シアンをソファへと招いて並び座る。どういうことを聞かれるのだろうと、少し楽しみな気持ちがあった。
そうして言葉を交えていると太刀川と出水が部屋に入り、４人でゲームを開始。シアンの昼食はいずれ届くし、他の３人も弁当を用意している。備えあれば憂いなし。大乱闘大会の幕開けである。
「どれにすっかなー」
「俺はこいつだな」
「剣あるからですよね？」
「カッコイイだろ」
剣バカと弾バカはそれぞれ得意なものを。
「うーん、どれにしようかなー。シアンさんはどれ？」
どのキャラも使える国近は悩みながらシアンのことを気にかける。
「オレはこれでやる」
「すぐに決めたな」
「誰かにアドバイスでも貰いました？」
「城戸司令」
「「あの人これやんの!?」」
「あはは。ならわたしはこっちにしようっと～」
まさかのアドバイザーに驚愕と笑いの声が太刀川隊に響き、和気藹々と勝負が始まる。
ちなみに城戸司令がプレイしたことのあるカセットは初代。今から４人が行うものは３代目。見事なジェネレーションギャップが起

きていることを、幸運にも誰も知らない。

そして――

「ちーっす。お届け物でーす」

実力派エリートがシアンの身分証と昼食を届けたのだった。

玄界生活③

４人でわいわいゲームをしているところで来客。時間は午後1時前。正午を過ぎていることに誰も気づかないほど、ゲームに集中していたようだ。

迅が来客したことによりゲームも一旦中断。昼休憩を挟み、再戦される予定だ。現状のトップスコアは言うまでもなく国近であり、差が開いて太刀川とシアンが並ぶ。出水が最下位なのは、一番とばっちりを受けているからだ。

「タチカワ。昼飯を持ってきてくれたこいつは誰だ？」

「迅だよ。この前まではお前と同じ黒トリガー持ちだった」

「シアンさんが協力を拒んだ時の対戦相手っすよ」

「あ～。お前らが負けた相手か」

「うっせ。次は勝つさ」

城戸から聞いていた通り、すっかり太刀川隊と馴染んでいるなと思った。あと1人隊員がいるのだが、彼とはまだ距離があるようだが、それもいずれ馴染むのも”視える”。

「実力派エリートこと迅悠一です。城戸さんに頼まれてこれを渡しに来ました」

「シアンだ。キド司令に頼まれたってことは、お前もその派閥か？」

「いや、おれは玉狛所属ですよ。近界民（ネイバー）とも仲良くしようぜってスタンスなんで」

「真逆じゃん」

「そっ。だから関係としては城戸さんたちと対立してますね。と言っても、露骨にドンパチするわけでもないです。例外はありましたけど」

「なるほど。この前の戦闘がそれか」

「そうです。その件はもう解決しましたけどね」

迅から身分証を受け取り、そこに書かれている自分の名前を見る。どういう形で話がついたのかは不明だが、揉めていたという名字もそ

こに書かれていた。それは記憶に留める程度になるが。シアンはそれを名乗る気もそこまでないらしい。必要に応じて、という形を取るようだ。
「迅がわざわざ来たってことは、探りか。ここまで露骨にするのも珍しいな」
「暗躍は趣味だけど、そうはっきり言われるとなー。おれだってこの人に興味あったよ？」
「城戸さんたちが警戒してたのは、玉狛の人間と会うことでそっちに引き込まれないか、だと思ってたからよ」
「実際そうだと思うよ。勧誘はするなって釘刺されてるし」
「オレは今の状態でも不満はないけどな」
　わざわざ居場所を変える理由もない。交渉した相手が城戸なのだから、対立派閥である玉狛側に移るのも角が立つというもの。信用を得ていない今、わざわざ下手な刺激を与える必要もないのだ。
　身分の偽装、その内容も迅から説明を受ける。行動可能な範囲、時間、注意事項等々。それを頭に入れ、シアンは小さく笑った。思っていたよりもいい相手だと。
「外に出ても問題ないなら、ここに弁当を運んでくる必要もなくなったな」
「そこが個人的に一番でかいよ。誰かしらの時間を奪ってたわけだし」
「わたしは全然オッケーでしたけどね～。むしろわたし達が学校に行ってる日が不安でしたし、そこが解決して安心ですよ」
「昼を抜くってことはなかったからな？」
　その時は忍田と食事を取っていた。ノーマルトリガー最強の男との食事だ。何かがあっても対処できる。これ以上ない適任者と言えただろう。
「結構馴染んでるんすね」
「おかげでな。それと口調は戻してくれていいぞ」
「りょーかい。おれもこっちの方が気楽でいいや」
「迅は昼飯どうすんだ？」

「おれはもう食ってるよ。面白いもの見たら帰るかな」
「面白いもの？　お前何見えてんの？」
「すぐわかるよ」
　太刀川と迅が話しているのを横に、用が済んだのなら食べようと残りの３人がソファに座る。出水の弁当は男子高生らしくボリューム重視で、対象的に国近の弁当はそう多くない。野菜類で色鮮やかなのが特徴だ。
　そしてシアンの弁当が海苔弁なのだが、
「……出たな棒きれ」
「それ箸っすよ」
　箸という天敵と睨み合っていた。日本人だろうと幼い頃に誰もが苦労しただろう。２本の棒で食事を取るということに。幼い頃に誰もが思ったのではないだろうか。「スプーンとフォークじゃ駄目なのか」と。
　そう、シアンはまだ箸での食事ができない。扱いに慣れていないのだ。それに出水が気を利かせて、「スプーンあったよな」と言いながら立ち上がる。Ａ級部隊の作戦室には給湯室がある。その上太刀川隊は国近が徹ゲーすることもあり、簡素な生活ぐらいはできるように物があったりする。
　しかし出水は足を止めた。面白いものが始まったから。
「はいシアンさん口開けて～」
「なんのつもりだユウ……！」
「え？　だってこのままじゃシアンさんご飯食べられないから」
「お前よくこんな精神がゴリゴリ削られるようなことできるな！」
「わたしは楽しいですよ」
「オレは楽しくない！」
　抵抗の声を上げるシアンを、出水が後ろから羽交い締めにする。こんな面白いものを逃す手はないと。
「お前が言ってたのこれか」
「そっ。見てて面白いでしょ？」
「見てる分にはな」

この場にシアンの味方などいないようだ。全員ニヤニヤと愉しんでいる。
「そんなに嫌がらなくてもいいのに～。前にもしたじゃないですか」
「一番最初の食事の時か！　もう二度とゴメンだって言ったよな!?」
「じゃあ太刀川さんにやってもらえばいいかな」
「「死んでもゴメンだ!!」」
「お、ハモった」
「2人とも仲いいですね～」
国近の悪魔のような提案に鳥肌が立った太刀川は、急いでシアンの拘束に手を貸した。出水が言われなかったのは、拘束の役目をしているという免罪符があるからだと見抜いたのだ。
同じ隊員という連携力を見せ、手早く役割分担をする。出水が右を抑え、太刀川が左を抑えるという分担だ。迅はここまで見て退散した。この流れで残ってたら巻き込まれると識っているから。
「諦めろシアン！　俺たちのためにも国近に食わされてろ！」
「必死だな!?　スプーンくれたら解決なのに！」
「バカ！　それだと面白くねぇだろ！」
「お前後でしばく！　絶対しばく！　イズミもな！」
「いやおれの場合動機あるんで！」
大乱闘大会前半の部。出水が最下位の理由はバカ2人のせいである。互いに「こいつには負けねぇ！」と開始早々にタイマンを始め、このゲームの醍醐味である大乱闘のために出水が乱入すると「邪魔すんじゃねぇ！」と共闘して殺しにかかってくるのだ。ちゃんと連携するのだから質が悪い。じゃあそこに手を出さなかったらどうなるかと言うと、最強ゲーマーたる国近にタイマンを挑む羽目になる。
そんなわけで出水が最下位。そしてそこで溜まった鬱憤を、今ここで晴らしてやろうと企んでいるのである。
「シアンさんそんなに嫌？」
「精神的にキツイんだよ。やられたことないなら分からんだろうな」
「そっか……」
明らかに国近の声のトーンが下がる。何かやばいと男衆の頭に警

報が鳴る。
「わたし……シアンさんにそんなに嫌われてるって思ってなかったな……。ぜんぜん、気づけなかった……。ごめんなさい」
その声は湿っていた。無理に笑うその顔は見る者に罪悪感を抱かせる。
シアンの腕を抑えていた2人の力が強くなった。「なに泣かせてるんだこのバカ」と言外に伝えられる。
「い、いや待てユウ。別にユウのことが嫌いなわけじゃないぞ」
「もう……やさしい嘘なんて言わなくていいんですよ」
「嘘じゃないって。信用ないだろうけど信じてくれ」
「……」
「人に食べさせられるのはほんと精神が削られるけど。でもまぁ……ユウなら耐えれるかなーなんて」
「ほんと……？」
「誓って本当」
「なら食べてね～」
ケロっと国近の声色が元に戻る。涙ぐんでいたはずの瞳もぱっちりしていて、その笑顔もいつもと同じ緩やかなものだ。
「……おっと？」
「これは柚宇さんに1本取られましたね」
どうやら付き合いの長い隊員も騙されていたらしい。恐ろしい演技力である。
「ユウまじかお前」
「結構嫌がってたから、実は嫌われてるのかなーって思ったのは本当ですよ？」
「あ、そこは本当に嫌ってないから。むしろ好感持ってるから」
「うん。ありがと～」
これ以上抵抗するのはやめておこう。そう思ったシアンは力を抜き、察した太刀川たちも拘束を解いて自分たちの食事を始める。
「はいあ～ん」
「食べさせてくれるのはいいけど、自分のもちゃんと食べろよ？

そっち優先してくれよ？」
「わたしのはそんなに多くないから、ゆっくりで大丈夫なんです」
「そういう事ではなく」
　スプーンさえあればなと思いながら、口の中に運ばれたものを咀嚼する。いつもより飲み込むまでの時間を増やし、その間に国近も食べるように促す。互いに食べている時と、そうじゃない時を作るようにしたのだ。
「出水」
「なんですか太刀川さん」
「俺たちは何を見させられてるんだろうな」
「まじそれっすね」
「おい加害者共」
　何を被害者ぶってるんだこの２人はと睨みつけるも、わりと本気で嫌そうな顔を返される。これは理不尽極まりないと思いつつ、それならさっさと食べて横の部屋に行けよとシアンは手でジェスチャーした。それに同意した太刀川と出水が、掻き込むように速攻で食べていく。
「太刀川さんたちいきなりどうしたんですか～？」
「気にするな。後半を始める前に少し練習するだけだ」
「やるなら今の記録メモしといてくださいね。ＣＰＵに変えたら記録が消えるので～」
「了解」
　太刀川よりも先に食べ始めていた出水が最初に食べ終わり、弁当を鞄にしまったらメモ用紙とペンを用意して隣の部屋へ。次に食べ終わった太刀川もそれに続き、モードを変えてゲームを始める。エンドレス組手である。
「シアンさんも早く食べますか？」
「いや。ユウのペースでいいよ」
「ならこのままで～」
　暖かな陽光のような笑みに、シアンも頬を緩ませた。
「スプーンを隠してまでしたかったのか？」

「ん～、シアンさんを揶揄ってみたくなっちゃったんですよね～」
「あのな……」
「わたしは楽しいので、シアンさんはお箸を使えないままでいてくださいね～」
「そのうち習得するから」
　隠す気もなく正直に話す国近に呆れつつ、明日から特訓しようと決意する。それに気づくことなく、国近は思い出したように気になっていたことを切り出した。これからどこで生活するのかを。
「そういやそこ決めてなかったな。言われてもないし」
　これまでは太刀川隊の作戦室で寝泊まりしていた。本当に生活の8割ほどがここで完結していた。しかしこれからはその必要がない。自分の生活場所を用いられる。とはいえ、玄界（ミデン）のことを全く知らないシアンが、自力でそれを確保するのも難しい。
「基地の中に宿舎区画があるので、そこの空いてる部屋とかどうですか？」
「そういうのがあるのか。それならそこにするかな」
「じゃあ後でわたしの方から連絡しときますね～」
「ありがとうユウ。助けられてばっかだな」
「いえいえ。好きでしてることですから～」
　ボーダーにスカウトされて入隊した国近も、宿舎区画に部屋がある。まだ空き部屋があることも知っているため、極力近い部屋にしちゃおうと企む。
「そうだユウ。この身分証のやつなんだけどさ」
「何か変なこと書かれてました？」
「いや、読めん」
「……あ～。これはですね――」

□□

　実力派エリートは多忙である。今は頼まれていた仕事を済ませ、その報告のために城戸のいる部屋へと足を運んでいた。太刀川たちも

気づいていたが、届け物はただの口実。本命はシアンという人間を把握するため。未来を視るという強力なサイドエフェクトを用いれば、簡単にそれが達成できるのだ。
「心配ないでしょう。こちらから仕掛けなければあの人は敵になりませんよ」
「あの者が言っていたように、友好な関係でいればいいと？　それによるメリットはあるのか？」
「あります」
「ほう？」
　黒トリガー争奪戦。信用を得る好機を自ら蹴った男を、好きに過ごさせてどういうメリットがあるのか。近界民を嫌う城戸を納得させられる程のものが。それはよっぽどのものでなければならない。
　だが迅はその予知で確信できる。シアンをボーダーに置く意味があると。
「まず戦力になる。利害の一致があれば、遠征組を1人で退ける人を味方にできる。しかもこちらから手を出さなければ敵に回ることもない。これは分かりやすくて大きいでしょ」
「……続けたまえ」
「彼の持つ情報は、この先々でボーダーを助けてくれる。レプリカ先生の情報は広い範囲だけど、シアンさんは狭い代わりに最新情報だ」
　近界のトリガーの話もしている。開発部としては万々歳の情報源だ。もちろん湯水のように次々と話せるわけじゃない。知ってる範囲だけ。けれどトリガー技術が最も遅れているのが玄界（ミデン）というのも事実。遠征というリスクがなく情報が手に入るのなら、この上なく貴重な存在だ。
　実際、シアンの身分偽装が完了したことで、開発部は堂々とシアンを呼び出して更なる情報と技術を聞こうと考えている。それが後に愉快な事案へと繋がるのだが、先の話だ。
「何よりも城戸さん。あの人は近界民を嫌ってる」
「……」
「味方寄りでいてくれる戦力なんだ。排除する必要もないでしょ」

「……仮に排除する場合、こちらの被害は？」
「基地が吹っ飛ぶ」
　即答された内容に城戸の顔が険しくなる。それはボーダーの消滅に等しいことだから。
「あの黒トリガーが強力過ぎるんだよ。こちらも黒トリガーで対抗することになるし、天羽をぶつけたら結果的に周辺一帯が更地になるよ」
「唐沢くんの進言通り、懐柔策が有効か」
「そっちならリスクもコストもないからね。何も手を出さずに太刀川さんたちに任せてたらいいよ。それが一番互いにメリットが大きい。それに、上手く行けば味方になってくれるし」
「……そうか。ご苦労だった。下がりたまえ」
　迅を下がらせ、迅があえて言葉にしなかったことも頭に置いておく。味方になるというのが、どの派閥の味方になるのかという点。もう1つが最悪の未来の話。黒トリガーを手放しているシアンが、なぜ黒トリガーを持ってボーダーと戦う未来があるのかを。
「厄介な存在だ」
　夕刻、来訪したシアンから「カー○ィで2位取れたよ」と報告を受ける城戸なのだった。

玄界生活④

ボーダーには3つの派閥が存在する。近界民（ネイバー）許さないマン派閥と、街の守りが最優先派閥と、近界民（ネイバー）とも仲良くしたいよね派閥だ。俗に言う城戸派、忍田派、玉狛派なのだが、協力するところは協力している。というよりも、あからさまにバチバチぶつかり合うことは滅多にない。玄界（ミデン）を守るという部分は全派閥共通の認識であり、そのためなら高め合う必要があることも理解しているからだ。

そんなわけで、重要な会議も全ての派閥の人間が集まる。主に上層部と、呼ばれたA級隊員だ。今回、そこにシアンも呼ばれている。太刀川隊は任務があるため同行せず、監視の役割は風間に任された。

「オレが呼ばれる理由ってなんだ？」

「情報提供が役割だ。何を求められているのかは、会議が始まり次第分かる」

「それもそうか。カザマってゲームする？」

「自分からやることはないな」

「なら聞いても仕方ないか」

「ゲームのことなら国近に聞けば事足りるだろう」

「そうなんだけどさ」

国近に聞けばいいというのは間違いないのだが、彼女に勝ちたいという話になってくると直接は聞きたくない。他の人間から情報を手に入れ、そのゲームの知識を付け、国近に挑みたいのだ。一緒にゲームをしていたらその都度レクチャーされるわけだが、そこは受け入れている。楽しそうに話すから、拒むという選択肢が消えるのだ。

「失礼します。風間、シアン、現着しました」

「ご苦労。席に着きたまえ。全員が揃ったら始める」

「シノダさん。あと誰が来るんですか？　ジン？」

「そうだ。隊員を2人連れてくるがね」

誰を連れてくるのかは知らない。そもそも、シアンがこちら側で面識のある相手などそういないのだ。誰でもいいかと思考を投げ、風間

が座った席の隣に三輪がいることに気づいた。表情はともかく、その目は敵意に満ちている。
「ミワだっけ？　そう睨まないでほしいね」
「うるさい！」
「嫌われてるなこりゃ。そっちの２人は初めましてですね」
「自己紹介済ませとこうか。玉狛支部支部長の林藤だ。こっちがオペレーターの宇佐美」
「たまこま……、ジンがいる所の長でしたか」
「迅から聞いてるし、うちのスタンス聞いてるんだってな。よろしく」
「よろしくお願いします。ところでモモ鉄ってどんなゲームですか？」
　まったく関係のない質問が突然飛び出し、聞いていた人間は意表を突かれて唖然とした。動じなかったのは城戸と風間くらいだろうか。聞かれた林藤は声を出して笑い、その話を宇佐美に振った。
「簡単に言ったらすごろくですね」
「すごろくとは」
「……ランダムで出た数字分だけ動いて、目的地を目指すやつです。そのゲームなら目的地に着くとお金が貰えて、また新しい場所が設定されます。決められた期間だけ動き回って、最終的にお金が一番多い人の勝ち」
「なんとかイメージはできた。あとは慣れか」
「そうなりますね。カードって呼ばれるアイテムがあるので、それを有効活用するのが秘訣です」
「ほうほう。貴重な情報提供をありがとう」
「お安い御用ですよ」
　それは決して貴重な情報ではないだろと誰もが思ったが、会話に絡みたくないから誰も言わなかった。
　そろそろ人も揃うだろうと思いながらシアンは部屋を見渡し、誰がどこにいるかが派閥毎に別れていることに気づく。三輪、風間、城戸、鬼怒田が横に並んで座り、そこから見て左前に忍田。反対側に林藤がおり、宇佐美は機材の操作のために中央だ。

それならとシアンは城戸たちの対面に移動する。どこにも所属していないという意思表示のために。大して気にすることでもないのかもしれないが、念の為だ。
「失礼します」
「おっ？」
「あれ」
迅と共に入ってきたのは、玉狛支部所属の三雲修と空閑遊真。そして巨大カピバラに乗ってやってきた陽太郎だ。玄界（ミデン）の犬はユニークな見た目だな思ったのも矢先、シアンは空閑を意外そうに見る。いや、シアンだけではない。空閑もまた同様だ。
「なんでシアンさんがいるの？」
「こっちの台詞だが？」
「あれ、遊真とシアンさんって知り合いだったのか」
「こっちに来る前にちょっとね」
「ま、その話は今じゃなくていいだろ」
早くしろという城戸からの眼力に苦笑して空閑たちを促し、それを見た忍田が進行を務めて会議を始める。その間に陽太郎がそそくさと鬼怒田の隣に座っており、場所ってやっぱ関係なかったかとシアンは再度苦笑した。
会議は迅の未来予知によって起きることが確定している大規模侵攻についてだ。近界民（ネイバー）であるシアンと空閑は、情報の補足のために呼ばれている。
『こちらの世界に接近している惑星国家は４つ』
海洋国家リーベリー。騎兵国家レオフェリオ。雪原の大国キオン。神の国アフトクラトル。この４つのうちのどれか、あるいは複数国が大規模侵攻を引き起こすと考えられる。しかし可能性の話をしていくと絞り込むことはできないため、先日に現れたトリオン兵から絞り込んで、対策を練ろうという話らしい。
何も知らされていないシアンは会話を聞きながらその辺りを整理し、会話に追いつけるようにしていく。
「それで行くとアフトクラトルかキオンかな。イルガーを使う国って

あんまないし。というか、迅さんの予知で分からないの？」
「お前予知できんの？」
「そういうサイドエフェクトなもんで。でも実際に会わないと分からないんだよね。何かがあるってぐらいにしか」
「へ～」
　迅のサイドエフェクトの説明を聞き、シアンと空閑は同時に相槌を打つ。そして納得する。仮にそこまで便利なものだったら、シアンも空閑も呼ばれる理由がないのだから。
「シアンさんの意見は？」
「ん？　あー、アフトだろ」
「その根拠は？」
「オレがあそこにいたのが1年前で、国の状況から考えて大規模な侵攻をするならアフトだろうなって。キオンの状況は知らんから確定とは言えないけど、高確率でそっちだと思っていい」
「あの、近界の国の状況というのは、侵攻と関係するようなものなんですか？」
　この中で最も近界のことを知らない三雲が、気まずそうに疑問をシアンに投げかけた。学会で見るような「素人質問で恐縮なのですが」ではなく、ガチで文面通りでの「素人質問で恐縮なのですが」である。
「時期によるとしか言えない。基本的にはトリオン持ちを捕縛するための遠征とか、侵略のための遠征だから。近界の国の仕組みは今話す必要もないだろ」
「すみません」
「いや、興味あるなら後で話すよ。会議に関係なさそうだから話さないってだけだし」
「シアン。きみの見立てでは何が狙いになる」
「さぁ？　それは敵が来ないことには分からないですよ。いや、誰が指揮するかですね。指揮官が分かれば狙いの当たりもつけれると思います」
「そうか」
　アフトクラトルという国は、４人の領主がいる。それぞれが戦力を

持ち、トリオン持ちが多いほどに多くの領地を治められる仕組みだ。だからこそ、どの領主が指揮して部隊が向けられるのか。それが分からなければ狙いも特定できない。占領なのか、捕縛なのか、または別の考えがあるのか。

狙いの特定はその時に可能な限り早くすることをシアンは確約し、話は戦闘面での対策へと移る。特に気にかけるべきは、黒トリガーのこと。空閑のお目付け役であるレプリカの情報では、アフトクラトルには13本。これについてはシアンも正確な数を把握できておらず、少なくとも15本以上あるとだけ伝えた。

「黒トリガーが複数人来る可能性は？」

「あり得るとだけ言っときます。ただ見分けはつけやすいですよ。角があるんで」

「角だと？」

トリガー角（ホーン）。これについてはレプリカが説明し、大規模侵攻対策会議は進んでいくのだった。

□□

会議が終わると戻るのは太刀川隊の作戦室……ではなく、宿舎区画に与えられた自分の部屋だ。監視役の風間に見送られる形で自分の部屋に向かったシアンだが、部屋の前で立っている人を見て首を傾げた。今日は特に用事もないはずなのにと。

「どうしたんだユウ」

「あ、シアンさんおかえり～。会議どうでした～？」

「どうもこうもないよ。基本的に話聞いてるだけ。必要な時に情報を話すぐらいだし」

「そっか。話はどういうふうに纏まったんですか？」

「ユウの立場ならそのうち連絡が来るだろ？　シノダさんって纏めてから連絡しそうな性格だし、オレの話聞くと余分な情報入るんじゃないか？」

「シアンさんって優しいですね～」

「そのフリかもしれないぞ？」
「そういう嘘はわたし好きじゃないです。……立ち話も疲れるので、部屋入っていいですか？」
　頬を膨らませた国近に謝り、シアンはそのお詫びにと要望通りに部屋に通す。私物など特にない部屋。用意された家具や食器類があるぐらいだ。買い物に出掛けていないのだから当然である。
　何もないですねと微笑しながら、国近は部屋にあるソファに腰掛ける。太刀川隊の作戦室でソファを気に入ったシアンが、職員に頼んで用意してもらったものだ。同じ感触に感心しつつ、国近は自分の首から下げているアクセサリーを手に乗せた。シアンから預かっている黒トリガーを。
「シアンさん、これが自分の命くらい大切って言ってましたよね」
「そうだな」
「そんな大切なものを預かってるんですよ。フリとかでできるはずがないんです。シアンさんはそういう人だから。……だから、さっきみたいな嘘は言わないでください。自分の価値を下げようとしないでください」
「……うん。ごめんなユウ」
「シアンさんのこと話してくれたら、許してあげますよ」
「……それは……」
「少しでいいんです。家族のこととか、生まれた場所のことでも」
　少しだけ。当たり障りのない範囲。それだけでもよかった。なにせシアンの身の上話は誰も知らない。どこで生まれ、どういう環境で育ったのか知らない。どういう経緯で黒トリガーを手に入れ、どうしてこちら側にやって来ようと思ったのかも。
　あまりにも知らないことが多い。そして、少しでも知るものが増えたら、少しでも相手のことが分かれば、もっとシアンのことを好意的に捉えられるかもしれない。シアンを信じる人が、もっと増えるかもしれない。だから知りたい。
（それはただの口実……かな。わたしは、なんとなくだけど、シアンさんのこともっと知りたいって思ってる。ぽかぽかするもん）

「……許可なく誰かに話すなんてしません。シアンのことがみんなにちゃんと伝わったら、信用してくれる人も増えると思うんですけど。でも、あまり話したくないことで、知られたくないことなら秘密にします」
ただの我儘だ。それは、自分でも無茶苦茶なことを言っているなと自覚している国近にも分かるし、聞いているシアンにも分かる。
自分が知りたいだけだから話せ。そう言っているのだ。
「ほら、今は2人だけですから。他に誰もいませんし」
「……お前、そういうこと言うのは気をつけろよ」
「え？　なんでですか？」
「分からないならいい」
「？」
なんで注意されたんだろう。その理由が分からず、国近は自分の発言を振り返る。考え、今の状況を確認し、首を傾げる。考え、結局分からないから諦める。疑問が残るのはモヤモヤするものだが、ゲームで負けたわけでもないからバッサリと切り替えられる。
「はぁ。しゃーない。じゃあ家族のことを少しだけな」
「えへへ、ありがとうございま～す」
「調子のいいやつ」
飲み物をコップに注ぎ、それを国近に手渡して隣に座る。どう話したものかと一考してから、ゆっくりと口を開くのだった。
――この身の上話が未来を変える要因となった

大規模侵攻①

アフトクラトルとキオン。この２つの国が玄界（ミデン）から離れるまでが１０日。迅の予知がある以上大規模侵攻は起きる。それを前提とし、ボーダー内での緊張は高まっていた。戦いに慣れている者たちは程よい緊張。固くなることがない。訓練生たちのように未熟な者であれば、その実感が薄くかえって緊張が薄い。

訓練生と正隊員での差をシアンは感じ取りながら、作戦室で国近とゲームに興じる。平日であるのだから国近も本来学校に行くところを、大規模侵攻への備えとして本部に残っている。名目上だが。

何日の何時に敵が来るか分からないのだ。部隊を支援するオペレーターが、予め本部にいたほうがいいという考えである。名目上だが。

「おっ、クイーンきのこゲット～」

「シアンさん今それ逆走だよ～」

「なに!?」

変な雲が出現してるなと思っていたが、これはそういう事だったのかと合点がいく。進行方向を１８０度変え、アイテムを使って一気に加速する。ショートカットも利用して順調に遅れを取り戻していく。そういった戦術的な部分は覚えが早いなと感心しながら、国近は悠々と一着でゴール。シアンの画面を見る余裕もある程の独走だった。

「ユウもう着いたのか」

「うん」

「オレもこれ以上順位上がらなさそうだな」

「始めた頃に比べたら成長じゃない？　最下位常連だったのに、今はミスしても真ん中くらいの順位だし」

「アイテムのおかげでな」

「有効活用もその人の腕だよ～」

持っているものを最大限に活かす。戦いにおいて基本にして真髄。それはゲームだろうと変わらないということ。娯楽として作られて

いるはずなのに、奥深いものである。プロゲーマーという存在ができあがるわけだ。
「このカップのコースも終わったし、少し休憩にする？」
「そうだな。夜にはイズミも入れてモモ鉄だし。ユウには少し手伝ってもらいたいこともあるし」
「何したらいいの？」
「データを作ってほしい。オレが持つ情報をそこに入れたいんだ」
「いいよ～」
　ゲームの休憩が仕事というのはどうなのだろうか。社会人からすれば逆だろとツッコミが入ることだろう。だがこの場にツッコミを入れる者はいない。ゲーマーの国近（バカ）、ゲームに目覚めたシアン（バカ）。そして餅を焼く準備をする太刀川（バカ）だけだ。
　ゲーム機をどけた国近が端末を操作し、データを作るための準備を整える。それが完了すると視線で合図し、頷いたシアンが情報を喋っていく。聞きながら打ち込んでいくというのは、言葉にすれば簡単だが実際には難しい。それを恙無くこなしていくあたり、国近の能力の高さが表れていた。
「お前ら仕事熱心だな」
「気まぐれだよ」
「だろうな。じゃなかったら、忍田さんたちにその情報をもう渡してるだろうからな」
「ユウマと違って、オレはここの隊員じゃないからな。身の安全も明確に保証されてるわけじゃない。有用性を残しとかないと危うくなる」
「信用してないのはお互い様ってな」
「タチカワたちのことは信用してるよ」
「そりゃどうも」
「シアンさん続き～」
「っと、ごめんごめん」
　裾を引っ張られ、シアンは太刀川との会話を切り上げる。太刀川は情報を纏めていく2人を見てなんとなく思った。なんかさらに仲良

くなってる気がすると。それが悪いとも思わず、太刀川は七輪に火を付けた。部屋の中で何してるんだという話だが、ボーダーの基地に火事という概念はないのだ。
「黒トリガー多いね」
「あっち側で最大級の軍事国家だからな。オレも全部を把握できてるわけじゃないし」
「ここの国が来るの？」
「オレはそう思ってる。……ちょっと願望込みかな」
「シアンさん……」
薄っすらと笑う彼の表情から何が読み取れるのか。すべてを読み取ることなんてできない。少ししか知らないんだから。シアンという人間がどういう人間か、それを説明できる人は、ボーダー内にいない。
どう言葉をかけたらいいだろう。そう悩んでいる国近の肩をぽんと叩いた。
「さ、もう少しだけ付き合ってくれ」
「……うん」
アフトクラトルはトリガーがワンオフだ。ボーダーのように汎用性を上げるのではなく、強力な駒を着実に増やすやり方。トリガー技術においては、やはり玄界（ミデン）は遅れていると言わざるを得ない。無論、こちら側独自の技術もある。貪欲な研究が、急激な成長の糧となっているから。その分開発部の面々は目の下にクマができている。
国近の処理速度が速いおかげで、その作業に時間がかかることはなかった。太刀川が3個目の餅を焼いているあたりで終わっている。その匂いにやられたのか、データをＵＳＢに保存した国近がかわいくお腹を鳴らして頬を赤くした。
「タチカワ。ユウがお腹すいたってよ」
「し、シアンさん！」
「はっはっは。皿と箸を持ってこい。そろそろ終わるだろうと思って2個焼いてたから、1個食べていいぞ。ただしシアンお前は駄目だ」
「自分で焼くからいいよ」

「お前に餅が焼けるのか？　なめるなよ」
「太刀川さんこれそろそろじゃないの？」
「っと危ねー。ナイスだ国近」
「どうもどうも～」
　餅が好物の太刀川は餅の焼き加減も気にする。どれぐらい熱したら美味い餅になるのか。これまでの経験でそれを見出している。同じ隊のオペレーターである国近も、焼いているのをよく見ていたから、なんとなくでどれぐらいか分かったりする。
　そもそも餅という食べ物がなかったシアンからすれば、焼くだけだろとしか思えないのだが。さらに言えば、訳のわからん食べ物をよく食べれるなとか思ってたりする。
「お餅はこの国の文化だからね～。お米からできるんだよ」
「米？　あれからこれになるのか？」
「餅にも種類あるからな。今度持ってきてやる」
「種類？　わけがわからんな」
　そうやって餅を食べながら会話をしている時だった。
『――門（ゲート）発生！』
　緊迫した声色でアナウンスが流れていく。発生した門の数から、これが大規模侵攻だと断定。餅に海苔を巻いた太刀川も、それを飲み込んだら立ち上がった。
「来たな。国近」
「はーい」
　皿に乗せた餅と箸を持ちながら、国近はオペレーター用のデスクに移動する。上層部の方から情報を流してもらい、敵の数と展開の仕方を画面に映した。
「半包囲だな」
「5方向か。……街の方に進んでる？」
「そうみたいだね。シアンさんこれで何か分かる？」
「お前らが分かってることしか分からんな」
「……何かあれば忍田さんに言えよ。俺は上に行く」
　今の段階で分かることは戦力の分散。こちら側に発生させられる

門は、可能な限りボーダーに近い位置になるように、ボーダー側が仕掛けを施している。そこからトリオン兵が離れていくとなると、敵がボーダーの戦力を基地から離れさせたがっていると考えられるわけだ。

これは戦況を把握できている者で気付けること。その先はまだ分からず、シアンも今のピースではその先を特定できない。

なんにせよ、部屋にいては動きが遅くなる。太刀川は必要な時にすぐに動けるように作戦室を後にした。

「シアンさん、上層部が通信を繋げたいって」

「繋げてくれ。その方が互いにやりやすいし」

「了解」

『こちら忍田だ。シアンくん、敵の狙いの特定に協力してほしい』

「もちろんです。ただ、今のピースでは見えてきません」

『分かっている。気づいたことがあればすぐに言ってくれ』

そこで一旦通信が切れる。何かあればまた繋げるというやり方らしい。ずっとオープンになるよりは気楽なものだ。

画面に情報が次々と更新されていく。トラップの起動による足止め。その間に任務中だった部隊が現場に駆けつけ、本格的にトリオン兵が叩かれ始める。

「シアンさんが言ってた新型。まだ出てこないね」

「ラービットな。あれの出し方である程度絞れるんだが」

「知り合い多いんだね～」

「まぁな」

まだ仕事の時が訪れない者同士、現場の隊員の健闘を見守りながら言葉を交える。そうして話している矢先、現場の隊員から報告が入った。大型のトリオン兵の中から、新型のトリオン兵が現れたと。

「ユウ、繋いで」

名前を呼ばれた時には手を動かしていた。シアンが言い切ると同時に通信が開く。

「シノダさん。現場の映像ってもらえますか？」

『可能だ。沢村くん！』

『はい！』
「白色……プレーンか」
「プレーンって？」
　その言葉の意味を代表して国近が聞く。
「ラービットがトリガー使いを捕獲するためのものって話はしたな。その基本機能の話も」
『胴を開き、そこから伸びる手足でキューブ状に変えるという話だな。頭上には電撃を流す機能もあると』
「そう。それが基本機能。単純な性能も他のトリオン兵より高い。で、ラービットの真髄はさらにトリガーの機能を積めること」
「相手をキューブ状にするのも黒トリガーの能力のコピーだよね？」
「そう。言ってしまえば、そのトリガーの機能しか積んでないのがプレーン体。そこに他のトリガーの機能も積んでるやつがあって、それは色付きだ。どれが来るかは出してくれないと分からないけど」
『つまりこの新型も、まだ様子見のためのものということか……！』
「ですね。慎重な打ち手だ。とりあえずアフトなのは確定。いずれ精鋭も出ますよ」
　誰の指揮なのか。その見当はこの段階でついたがそれをまだ口にしない。そうであってほしいと思っている自分がいるから。思い込みは判断を間違えさせる。読み合いにおいてこれは悪手だ。
　戦況を見守る。ラービットの出現により戦況が変わらざるを得ない。「そういうトリオン兵がいる」とだけ情報があると、「どの程度の脅威か」が分からない。正確な強さ。そのラインを把握したかった。そして戦闘員の数が減る。そこで打った本部の作戦は――
「妥当だな」
　――戦闘員の数の減少を抑えること。
　戦える駒が減ればその分被害が広まる。ならばいっそ、街の被害をゼロにするのではなく、被害を最小限に抑える。理想ばかりでは零れ落ちるものが多い。堅実な手だった。
「あれ？　基地に向かってくるトリオン兵がいる」
「ん？　強襲狙い……イルガーか」

シアンはボーダー基地の強度を知らない。防衛設備がどの程度なのかも知らない。
「シアンさん？　ほぇ？」
「ちょっと我慢してくれ」
だから国近の手を引いて立ち上がらせ、そっと抱き寄せて物から離れさせる。迎撃ができたとしても1体だけ。イルガーの強度、今の迫り方からして2体は無理だと考え、衝撃に備えたのだ。
画面に映る矢印。基地に迫るそれが1つ消え、もう1つが接触したと同時に基地が大きく揺れる。
「きゃっ……！」
「へー。案外硬い守りだな」
振動としては地震と似ている。だが当然驚きもするし、怖さもある。国近はシアンの服をぎゅっと掴み、振動が収まるのを待った。
「……もう大丈夫かな？」
「……いや、まだ来る」
「シアンさん、その……このままでいい？」
「かわいいやつ」
離れているより一緒にいる方が安心する。それを見透かして、正直な感想を言うと国近が耳を赤くした。顔を見られないように俯くも、今の近さからして胸に頭を押し当ててるようなものだった。
今度の3体も1体は防衛設備で落とされた。さらに1体を太刀川が切り裂き、最後の1体の自爆は基地の防御力で耐え抜いた。先日、怪物級のトリオン持ち少女がアイビスで壁をぶち抜いたことで、基地の防御力が高くなったらしい。知らぬ間のファインプレーをしたトリオンモンスターである。
「イルガーはもう来なさそうだな」
そう言って国近の背から手を離し、元いた場所に座らせる。恥ずかしさから頬を赤くしている彼女だが、自分の役割を果たそうと意気込むことでそれを抑え込んでいく。
「へ～、タチカワのやつイルガー斬ったのか。さすがだな」
「イルガーって硬いの？」

「だいぶ硬い。でもそれを斬れるなら、ラービットも両断できるだろうな」
「忍田さんも同じ考えみたいだね。太刀川さんは新型の掃討が役割みたい」
　太刀川が出撃したことで、国近も自分の仕事が始まる。隊長のための情報支援だ。どこから向かうべきか、その進路を教える。もう1人の戦闘員こと出水はまだ移動中で、こちらの支援はもう少し先のようだ。
「そいやユイガは？」
「唯我くん出したら速攻で負けるから。スポンサーの子だし、こういうのは出せないんだ」
「だから遠征でいなかったのか」
「うん」
　ナチュラルな戦力外通告。なおランク戦には参加しているようだが、こちらでもお荷物状態だ。一応サポートとしての立ち回りは身につけたらしい。
（あの攻撃的なオッサンなら支配のためにもっと基地を狙う。ここで手を止めるやり方は……2人か）
『こちら忍田だ。敵の戦力の投入の仕方が散発的に思える』
「……まだ様子見というのがあるんでしょう。仮定段階で狙いを話すべきではないと思いますが？」
『現状何通りだ？』
「作戦考案者は2人にまで絞れてます」
『両方話してくれ』
「トリガー使い、つまりトリオン持ちが狙い。もう1つは、基地の戦力を減らした上で最大戦力を送り込む。やりそうな手はこの2つです」
　後者はすんなりと納得できたが、前者に対しては引っかかりを感じた。先日までに現れていたトリオン兵たちが、今回の敵のものだとしたら情報を得た上で作戦を立てるはず。
『こちらには緊急脱出（ベイルアウト）がある。それを徹底すれば捕縛の被害が減ることは、向こうももう分かっているはずだ』

「訓練生は？」
『……っ!!』
「ユウから聞いてますけど、訓練生にそれはないらしいですね？」
『まさか……それが狙いか！』
「前者の場合はそこが狙いになります」
　通信の向こうでざわつくのを感じる。訓練生であるC級隊員が狙われるとして、それを守るための戦力が足りないからだ。A級が新型を排除。B級は他のトリオン兵を排除。今はこの形が整っているからいい。しかしさらに戦力が投入されればそれが崩れる。
　その均衡が、今まさに崩れ始めた。
『新型3体出現！　……C級隊員の場所です！』
『くっ……！』
　現れた3体のラービット。そしてその場にいた1人の少女が放った一撃。
　それが、この戦いが佳境に入る引き金となった。

『新たに門発生。……っ！　人型近界民です！』
「……ハイレインだな」
「え？」
　画面に映し出される映像。現れた者たちを見て確信する。敵の指揮官が誰なのかを。
　通信を切る。国近の操作を見てそこは覚えた。今からの会話を聞かれるとまずいのだ。
「ユウ。さっき纏めた情報をシノダさんたちに送っといて。あと狙いは訓練生で確定」
「シアンさん……行くの？」
「ああ。聞き出さないといけないことがあるから。……ごめんなユウ」
「帰ってきてくれたら、許してあげる」
「ありがとう」
　国近の立場が危うくなる。最悪の場合無くなる。それを分かった

上で頼み、国近もまた理解した上で承諾した。
首から下げていたアクセサリーを取る。それをシアンに渡し、受け取った彼はそれを起動する。
トリオン体への換装。それと共に現れるマントは画面に映る敵と同じもの。その手には死神のイメージで名高い大鎌。
座標を国近から教わり、シアンはその方向に向かって空間(距離)を斬った。裂かれた向こう側には教わった座標の場所が見える。作った裂け目を通ることでその現場への移動を完了した。
突如裂かれた空間。そこから現れたシアンの姿に、玉狛の面々は驚き、ヒュースは鋭い視線を送った。
「これはこれは。玄界(ミデン)におられましたか。シアン殿」
「1年ぶりですねヴィザ翁。あなたには聞きたいことがある」
「でしょうな。しかし今のあなたの要望を聞くことはできません」
「分かっています。オレが勝ったら答えてもらう」
大鎌を持っていない方の手で、マントの下からそれを取り出す。それが見えた玉狛の面々は全員ぽかんと口を開け、それを知らないヴィザとヒュースは警戒する。
シアンはヴィザに突き出すように真っ直ぐと持ち、高々と宣戦布告した。
「これの”刹那の見切り”5番勝負でな!!」
それはただのｄｓだった。

大規模侵攻②

近界民の住む国は、空閑有吾に惑星国家という呼称をされている。恒星の周りを移動する惑星のように、国が軌道を描いて移動するからだ。例外もあるがそれはさておき、彼らは他国や玄界（ミデン）に向かう時、遠征艇を用いる。それはボーダーも同じであり、どこもが共通している移動手段と言えよう。

今回大規模侵攻を引き起こしたアフトクラトル。その領主の1人ハイレインは、自分たちの遠征艇の中から戦況を見ながら戦力投入を行っていた。そのサポートをしているのが、黒トリガー使いの1人であるミラだ。

「この反応……。隊長！」

「ここにいたのか。シアン」

「玄界の的確な対応も彼によるものでしょう。どうしますか？」

「……目的に変更はない。ヴィザをそちらに割くことになるのなら、代わりにラービットを投入しろ」

「了解しました」

「今浮いているのはエネドラだな。向かわせろ。時間をかける必要もない」

目的はあくまでも雛鳥の回収。金の雛鳥が見つかったのであれば、そちらが最大目標だ。さらにシアンが持つ黒トリガー。それも回収できるのであれば、戦果としてこの上ない形だ。あの黒トリガーは国を上げて捜索されているのだから。

「ヴィザ」

『少々お待ちいただけますかな』

「それほどだというのか？」

『これはなかなか意識を割く余裕がありませんな』

「……シアン。……この1年でそれほどの腕を上げたというのか……！」

ヴィザはアフトクラトル切手の最大戦力だ。年を老いてなおその

実力は衰えず、不動の強さを持っている。それほどの人物が高く評価していることに、ハイレインもまたシアンの評価を上げざるをえなかった。

最優先事項は間違いなく金の雛鳥だ。しかしシアンの黒トリガーを放置することもできない。エネドラだけでなく、さらに戦力を投入するべきか。

『ハイレイン殿。こちらは私に任せていただきたい』

「……そうか。エネドラに指示は出している。そちらのことは任せるぞ」

『承知しました』

さらなる戦力の投入。その愚策を侵さずに済んだことを、ハイレインはヴィザに感謝せねばなるまい。

なにせヴィザは今〝刹那の見切り〟でシアンと勝負しているだけなのだから。

ヴィザ翁のファインプレーである。

□□

現在、シアンとヴィザは空き家にてゲームに興じていた。外だと画面が見づらいという理由で移動したのだ。ヒュースは予想外の展開に変な汗をかき、それを見ていた玉狛の面々は反応に困った。ヒュースが哀れだったから。

「ヴィザ翁今ハイレインと話してましたね？」

「ほっほっ。さすがに気づかれますか」

「それで勝ち越しても嬉しかないけど、まぁいいや。俺の質問に答えてもらいますよ」

「無論です。こちらはお返ししますね。なかなか面白いものでした」

勝敗はシアンの3勝2敗。非常に危なかった。ヴィザが感覚を掴む前に2勝できたが、その後連続で2敗。ハイレインの横やりがなければそのまま3敗目を取られていたことだろう。

ヴィザからゲーム機を受け取り、それをマントの内側にしまう。初

めから話す気だったのだろう。ただ、ヒュースがそれを聞かないようにするために、こうして移動したというわけだ。
「オレが聞きたいことは、あなたも分かっていますよね。誰がオレの姉を嵌めたのか。教えてもらいますよ」
「……まずはシアン殿の見解を聞きましょう」
　間違っていることがあればそこを正す。そういう形で話を進めるらしい。
「知ってることなんて少ないですよ。姉さんが誰かに嵌められた。それだけです。オレは誰が裏切ったのか知りたい」
「何から話したものか。……シアン殿の姉、リア嬢は天才でした。トリガー技術においても、戦いにおいても。万能と称されるほどの方でした。何よりもその心はお優しい。敵国であれ人の死を悲しむ心をお持ちだった」
「ラービットの開発だってそこが起因ですからね。敵を殺すことなく倒す。そんなトリオン兵を求めた」
「ええそうです。黒兎（ビーラビット）と称されたリア嬢からあやかって、その名がついておりますな」
「皮肉かと思ってた」
「違いますよ。……あなたがトリガー角（ホーン）を持たないのも、彼女がそれを拒んだからです。トリガー角は未だ研究段階。短命になる可能性すらある代物。それを弟につけるのには堪えられなかった。リア嬢自身それ自体に反対されてましたし」
　それを明言されるのは初めてだった。そういう理由だろうとは思っていたが、シアンの姉はその事を言わなかった。ただつける必要はないとだけ。そう言っていたのは、トリガー角を持つ者の運命を知ったら悲しむだろうと気遣ったからである。
　リアのその性格は、軍事国家であるアフトクラトルではあまり評価されない。しかしその腕は確かで、実績を確実に残していく。
　強く優しい人間。そんな彼女は立場の弱い人にも目を向ける。その人たちの生活の支えになるものも開発していった。
　するとどうなるか。簡単だ。リアの人望が高まる。

そして、それを面白く思わないのは領主たちだ。リアの人望は領主たちの領地など関係なかった。国全体の民を想っていたから。
「それ故にリア嬢は狙われたのでしょう」
「嫉妬でか……！　そんなことで！」
「ええ。私自身すべてを知る立場にはございません。真相も知りません。しかしシアン殿よりは情報を持っています。それを踏まえた上で、憶測で話を進ませてもらいましょう」
確定だとは思うなと、ヴィザは念押しして話を続ける。
「トリガー角の研究。その技術の流用がリア嬢を追い詰めた原因と考えています」
「流用？」
「はい。脳さえあれば利用できると考えたのかもしれません。存在されていれば邪魔であっても、その発想力や着眼点は本国に欠かせないものですから」
「だからそれだけを手に入れようと……？」
「その動きをリア嬢が察知しないわけがなかった。彼女に何かあったと知られれば、その人望から暴動も起きたでしょう。だから暗躍し、民に知られることなく作戦を実行しようとした」
「……屋敷が燃やされたのは、姉さんが自分から……？」
「そうでしょう」
そうすれば民は「リアの身に不幸が起きた」とだけ認識し、彼女の死に悲しむだけで終わる。ヴィザのような上の立場の人間なら、「裏で何か起きている」と気づく。その後のための布石を打ったわけだ。
「誰がやったのか。それは不明と言わざるをえません。そして本国ではその黒トリガー、リア嬢を回収することが決められております」
場の空気が変わる。ヴィザが臨戦態勢に入り、シアンもすかさずトリガーを構えた。
「赫の兎（ビーラビット）の力は国宝級と指定されました。そしてあなたは裏切りの烙印を押されております」
「それを真っ先に言い出した奴が黒幕じゃないんですか？」
「その者はもう消されております故。隠れ蓑に使われたのでしょう。

真相は闇に消えました。そして私は一隊員。命令に従うのみです」
「……ありがとうございます。ヴィザ翁」
「構いません。生前にリア嬢から受けた恩。このような形でしか返せないことが心苦しいですが、ご容赦くだされ」
「十分ですよ」
その場にいない者に言い訳などできない。リアの死。黒トリガーの発生。屋敷の炎上。そしてシアンの失踪。見えているものだけを繋げれば、シアンを裏切り者とすることなど容易だった。
本国でどういう扱いを受けているのか。それを知れたのも素直にありがたい。
義を果たしたヴィザはもう手心を加えない。一介の戦士として、命令に従って任務を遂行するのみ。
ヴィザの持つ杖に光の輪が浮かぶ。同時にシアンが大鎌を振った。
２人のいる家が切断された。無駄な破壊もなく綺麗な切断面が出来上がり、一拍おいて崩れ始める。倒壊する家から飛び出し、瓦礫を避ける。距離を取ったところで互いに意味などなく、視界に捉えた時にはトリガーの力をぶつけ合っている。
ヴィザの使う黒トリガー「星の杖（オルガノン）」のタネをシアンは知っている。そしてヴィザという人間を知っていることもあり、どのタイミングで仕掛けるかという駆け引きが成立していた。
「申し訳ない。待たせましたなヒュース殿」
「問題ありません。ラービットが削られたことが少し痛手かもしれませんが」
周囲の家を倒壊させることで道を開き、ヴィザは最短でヒュースと合流する。瓦礫を避けて飛び出した時に戦況を見て判断したようだ。ヴィザという脅威を理解しているからシアンも、ヒュースと対峙している戦闘員と合流した。
「そのマーク、玉狛だよな？」
「木崎だ。お前のことは迅たちから聞いている」
「なら話は早い。状況は？」
木崎から敵意が向けられていないことで、シアンもヴィザたちに集

中できる。共闘するという意思表示も含め、状況がどう動いたかを木崎から聞いた。
　C級隊員たちの離脱。その誘導を烏丸と三雲が行い、小南は進行を止めないトリオン兵の排除に向かったようだ。シアンが合流するまで、木崎は追加で現れた2体のラービットとヒュースの足止めをしていたらしい。1人でそれをこなす立ち回りと視野の広さ、判断力。それらから木崎の強さがよく分かる。
「ラービットが邪魔だな。先にそこを消そう。それが終わったらオレはヴィザ翁……老人の方を相手する」
「了解したが、あの2人相手にどう新型を破壊する」
「こうやって」
　木崎を巻き込まないように数歩前に出る。2体のラービットへと目を向け、無造作に2回大鎌を振るった。
　行ったことはただそれだけだ。結果として、2体のラービットは切断されている。
「「!?」」
「ほっほっ、それが赫の兎（ビーラビット）の力ですか」
（風刃のような遠隔斬撃か？　いや、それじゃ最初に現れた時の説明がつかない）
　この黒トリガーの能力を把握しているのはシアンだけだ。シアンがアフトクラトルから姿を消す直前に、この黒トリガーは生み出されている。逆に言えば、リアはシアンが生きられるように黒トリガーになったわけだ。
　それ故に、アフトクラトル側もこの能力を完全には知らない。分析しながら戦闘しないといけない。
　その困難さ、強敵を前にヴィザは笑った。
「ヒュース殿。雛鳥をお願いします。この2人は私が斬りましょう」
「ですが――」
「この遠征の第一目標。それを放置するわけにもいきますまい」
「……分かりました。ご武運を」
「ええ。ヒュース殿も」

「行かせるとでも？」
蝶の楯（ランピリス）を展開したヒュースに向けて大鎌を構えるも、横から迫る斬撃の対応に追われる。木崎はシアンによる前情報もあり、経験による直感でタイミングを合わせて姿勢を下げて回避。その間にヒュースはカタパルトを用意し終え、ロボットアニメみたく発射された。
「私が行かせると言ったのですから、行かせさせてもらいますよ」
「さすがに余裕は作れないか。にしてもあの飛び方いいな。オレもやりたい」
「ほっほっ。では開発されるといい。あなたもまた技術力をお持ちなのだから」
「姉さんほどじゃないけど。キザキは今のやつを追え。足止めが役割なんだろ？」
「すまない。ここは任せる」
「それをさせるとでも？」
黒トリガー同士の戦いだ。ボーダーの規格から外れたワンオフのトリガーを持っていようと、自分が浮いた駒になるのは目に見えている。迷いなんてなかった。
それを止めようと星の杖（オルガノン）を構えるヴィザよりも一手先にシアンが仕掛ける。距離など関係ない。大鎌を縦に振るうだけで、ヴィザがいた場所まで真っ直ぐ地面が斬れた。初見ならそれで終わってもおかしくないのに、ヴィザは構えから攻撃を予測して回避していた。
風刃の遠隔斬撃とは違う。木崎は今のを見て確信した。風刃の場合、遠隔斬撃であるために、発射から到達までにタイムラグがある。黒トリガーである以上その速度は決して遅くない。むしろそれは軌道を読み切らないと防げないほどの超高速と言える。
（この黒トリガーには速度がない。振ったと同時に地面も裂けた）
それを分析するのは今ではない。木崎はシアンが時間を作っている間にヴィザの射程から離脱していく。
「行かせるって言ったからには、カッコつけさせてもらいますよ」
「いやはや。あなたの成長をまた見れるとは」
「存分に見てもらいましょうか。この地にたどり着くまでにもいろい

ろとありましたからね」
近界（ネイバーフット）最大級の軍事国家アフトクラトル。その国が抱える国宝級の黒トリガー同士の激突。それは周囲に分かりやすく惨劇を作り上げていった。
警戒区域であるため人はもう住んでおらず、C級隊員たちもいないため人的被害は出ない。ただ、2人の戦いの範囲にある建物が縦横無尽に切り裂かれて倒壊していくだけだ。
災害――これを称するならその言葉が相応しいだろう。
星の杖（オルガノン）の力は、使用者を中心に円を広げ、その軌道上を刃が走るというもの。風刃同様、目で追おうとして簡単に追えるものではない。角度も自在で回転の向きに決まりもない。あったとしても、常人なら関係なく斬られて終わる。
それに対してシアンは大鎌を自分の周囲にぐるりと振った。これにより接近していた刃がすべて弾かれる。こちらの黒トリガーは新しいもの。それを分析するためにも、ヴィザは簡単な攻撃しかしていない。
それはシアンも分かっているが、防がなければ斬られるだけなので振るうしかない。
「赫の兎（ビーラビット）。その力はやはり強大なようですな。この星の杖（オルガノン）と真っ向から張り合うトリガーなど、そうはありません」
「自分でもこれは強いと思ってるよ」
「空間を斬る。その辺りでしょうか」
「当たらずとも遠からず」
「これはこれは。まだまだ秘密がありそうだ」
薄っすらと笑う。真っ向から戦える相手がそういないから。本来、前線から身を引いていておかしくない年齢。普通ならそうなるところを、ヴィザはその強さから今尚第一線で戦っている。衰え知らずのその強さは、本国の戦士たちから尊敬される所以である。
今度はシアンが先に大鎌を振るう。ヴィザを狙うのではなく、自分の周囲に様々な角度で。それは誘いだ。確かめてみろという。
「大した自信だ」

「あなたを退けられれば、この戦いも楽になるでしょうからね。足止めでもよさそうだけど」
「私としても、それに付き合うわけにはいきません」
　右でも左でもない。今度は上から刃を落とす。シアンは何もせずにそれを防いだ。これにはヴィザも眉をひそめ、攻撃を仕掛けるシアンの動作に合わせて刃を動かす。２人の間。星の杖（オルガノン）の軌道上で衝突音が鳴った。
（今のは……）
「ふむ、空間だけでなく時間にまで作用するとは。恐ろしい黒トリガーだ」
「初見でこうも捌かれるとは。さすがはヴィザ翁ですね」
「シアン殿が足止めのための戦いをしなければ、異なる結果になったでしょう」
「……過去形？」
「あなたはその力を見せ過ぎた」
　分析はまだ終わっていないはずだ。たとえ今の戦闘をハイレインが見ているとしても、正しく能力を特定できるはずがない。シンプル故に答えが見えにくい力なのだから。
「斬った場所。その記録はしていますからね。あなたがどこから来たのかも記録していますよ」
「……っ!!　まさか……!!」
「私たちはともかく、今のエネドラ殿なら利用するでしょうな」
　シアンを試すように笑う。これをどう捌くのか見せてみろと。
「足止めしているのが、自分だけとは思わないことです」

大規模侵攻③

ボーダーは盤面に映る敵に意識を向けていた。見える敵に集中するのは当然だろう。街を狙う膨大な数のトリオン兵。C級隊員を狙う新型トリオン兵。戦闘員の排除を狙う人型近界民。どれも無視できるものではなく、その対応に追われるのは必然と言えた。

それ故に見落としていた。

国近から送られたシアンの持つ情報。アフトクラトルのトリガーの情報を用い、エネドラと接敵した風間隊をカメレオンで離脱させた。相性が悪い相手と戦って戦力を落とすより、強敵を浮かせて仕事をさせないことにしたわけだ。エネドラに風間隊を捉える術はなく、風間隊はそのまま東部のトリオン兵排除へと向かった。

その浮いた駒であるエネドラは、隊長であるハイレインからシアンとの戦闘を命じられていた。だが、エネドラはヴィザの下に向かうのではなく、ボーダーの基地へと侵入していた。

『エネドラ。基地への侵入は命令していない』

「うっせぇ！　アイツが猿共と組んでんなら、こっちに誘き出した方が殺しやすいだろ」

『ヴィザ翁との戦闘を見るに、室内戦はたしかに向いてなさそうだな。それにシアンの性格はリア殿に近い』

『……』

「ケッ、アイツが黒トリガー使った場所を教えろ」

□□

黒トリガー赫の兎（ビーラビット）のことを理解できていなかったのは、どうやらシアンも同じようだった。その性能を知っていても、その力を振るった時に観測機にどう映るかを知らなかった。手に入れてからずっと1人だったのだから、そこの確認が取れなかったのも無理はない。

「この……っ！」

「動きが悪くなってきましたな」
敵の狙いが何かは理解している。黒トリガー奪取のために、シアンに有効な手を使おうとしていることも。今狙われているのは、国近柚宇だ。
ここに来るために使った裂け目は、通った後に閉じている。開いたままではトリオンを消費するというのが1点。万が一そこを敵に通られたら、国近に被害が及ぶというのがもう1点だ。では再度道を開くことは可能かと言えば、それ自体は可能である。
だが、その時間をヴィザが作らせてくれない。
ヴィザを相手に無防備に背を向けるなど自殺行為。安全が保証された上で、基地までの道を作る必要がある。
「あなたはリア嬢ほどの経験がない。彼女はこういう時でも冷静になれる方でしたよ」
「姉さんに劣る事なんて、物心ついた頃から理解している！」
「粗が見えてきましたな」
赫の兎の情報が揃っていなくとも、その使用者を乱してさえしまえば宝の持ち腐れ。ヴィザは攻撃の手をさらに加速させていく。
ヴィザが抜刀したことで苛烈さを見せる攻撃を、間合いを取りながら大鎌で捌いていく。しかし集中を欠いたシアンには防ぎ切れない。ヴィザの攻撃が頬を掠め、肩を掠め、脚を掠める。体の節々から小さく漏れ出るトリオンに皺を寄せるが、ヴィザが手を緩めるはずもない。
「ここで落とせるのなら落としてしまいましょう」
星の杖（オルガノン）は、杖などと言いながらその実それ自体が剣である。そして、死線を何度も潜り抜けたヴィザは近接戦も達人の域にいる。刃で動かして剣で仕留める。あるいは剣で揺さぶって刃で仕留める。ヴィザの剣の間合いがそのまま必殺の間合いだ。
それ故にシアンは距離を取りながら戦う。下がる方向は言うまでもなくボーダー基地。だが、このままではヴィザを連れて行くことにもなり、そもそも間に合う距離でもない。
（ヴィザ翁に時間をかけてたらまずトリオンが足りなくなる。速攻を

狙うしかないか）
一度大きく跳躍し、深呼吸しながら着地する。ヴィザほどの歴戦の猛者相手に通じる手段は少ない。トリオン体である以上、疲れという概念が存在しない。尚且つ、トリオン切れを狙ったところで先に尽きるのはシアンだ。ヴィザのトリオン量は膨大なのだから。
だから倒すという手段を狙うとなると、ヴィザが対応できない手。ヴィザの予想外を突いて、その上で確実に通すしかない。
「うっし」
「ほう、持ち直しましたか。それでこそですよシアン殿」
「その余裕ごと消してやる」
大鎌に赤い光が走る。柄の部分から刃の先まで。それは血脈のように何本も走っていた。
大鎌を横に薙ぐと、その軌跡に赤い光が残る。ヴィザはそれを防ぐのではなく、上に飛ぶ事による回避を選んだ。露骨なまでに今までと違うのだ。防げるか不明なら防御より回避の方がいい。
次の瞬間、ヴィザは円を幾重にも展開して刃を走らせた。直感に従っての行動。それは最善手であり、高速で刃が削り合う音が響いている。さらに、円を展開した時には空中で体の向きを変え始めていた。刃を走らせたことで斬撃が一瞬遅れ、紙一重でヴィザの着るマントだけが斬れる。
そこにすかさず、シアンはヴィザの真下から斬撃を放った。地に背を向けている状態。完全な死角。タイムラグなど存在しない一撃。
それは必中の一撃。
そのはずだった。
「今のは危なかったですな」
「っ!?」
それをヴィザは防いだ。剣を自分の背に回すことで。
防いだヴィザは悠々と落下し、着地際に剣を振るう。それをシアンは防がずにバックステップで躱し、刃はトリガーの能力で相殺する。間合いを取り直し、戦いを楽しんでいるヴィザに冷や汗をかいた。
戦いの主導権はヴィザの手から一度も離れていない。今のも、シア

ンが死角を狙ってくると読んだ上で動いていたようだ。
「赤の一撃。同じ黒トリガーでも押し負ける出力でしたが、やはり連撃はしなかったようですね。光の軌跡も、あなたの動きを隠すため。理に適っているからこそ、読みやすかったですよ」
トリオンの消費は激しいが、連撃自体は可能だ。しかしそれをやるとエネドラと接敵した時に心許なくなる。先を憂いたからこその選択。ヴィザはシアンが利口な判断をすると、その思考を読んでいたらしい。
シアンがヴィザの行動を読んで食らいつこうと、ヴィザもまたシアンの思考を読んでくる。ならばそこは対等で、使うトリガーの性能もそう変わらないのなら、あとは経験が物を言う。そしてそれは、歴戦の猛者たるヴィザに軍配が上がる。
「あの一撃の仕組みは分かりませんが、そこからは予想の範囲内でした。焦りを抑え切れていないようですね。……今頃なら到達しているでしょうか」
（くそっ……、ユウ……！）
「他を考える余裕など、あなたにはないでしょうに」
「っ！」
初動が遅れた。強者を相手にそれは致命的。シアンは負けを悟った。自分の未熟さを悔いた。
「――『弾（バウンド）』印六重（セクスタ）」
ヴィザの初動を潰すように、空から人（弾丸）が飛来する。それへの反応が間一髪となったヴィザは迎撃が間に合わず、剣でその一撃を受け止めた。地面が刳れるほどの威力。それをやった本人はすぐにヴィザから離れ、シアンの隣へと着地する。
「ユウマ!?」
「悪いねシアンさん。これ貰うよ」
「貰うってお前、ヴィザ翁は今回の敵で間違いなく最強だぞ」
「だからおれがやるしかないかなって。シアンさん、行かないといけ

ない場所があるでしょ」
「……！　悪い。ここは頼んだ」
「任せといて」

□□

ボーダー基地に限った話ではないが、拠点というものは侵入されないことが大前提として作られる。世界的に見ても文化の違いによる形の違いがあれど、城や砦といったものを作る時の前提は同じだ。最後の守り。突破されることなく、迫る敵を迎え撃つもの。
拠点の守りに対して、攻める側は戦力の数を数倍用意しないといけない。もちろん拠点の規模、防衛設備によって違いが出るが、基本的に2倍では到底足りないとされている。理想は１０倍だ。
それ故に、単独で城を攻略できるヴィザは伝説の存在であるし、防衛設備を無視して侵入できるエネドラは、拠点の天敵と言わざるを得ない。
「野郎がいた場所はここか……って散らかり過ぎだろこの部屋ァ！　こんなとこにいたのかシアンの野郎！　バカか!?　バカだったな！」
その天敵ことエネドラは、通気口から通信室に侵入。目障りと感じた職員を数人殺害し、その後一直線に太刀川隊の作戦室へと突入した。
そして今その部屋の散らかり具合に絶叫している。ちなみに散らかっているのは、イルガーの激突によって物が落ちたからだ。責任はアフト側にある。
「誰かはいたみてえだな」
作戦室の中を見渡し、国近が使用していたオペレーター用デスクを見て呟く。その画面に映っているのは戦況を一望できるマップ。その他にも、太刀川と出水の支援ができるようにそれぞれの動きをモニタリングしている。３画面あるので、それぞれで１面ずつ使っても問題ないのだ。
これがあるのなら、エネドラの侵入も把握できたことだろう。向

かってくると分かれば、先に脱出していてもおかしくない。
だがエネドラはそれはないと確信した。侵入してからここに着くまでに大した時間はかけていない。ここが狙いだと気づいてすぐに部屋を出たとしても、誰かが逃げていくのを確認できたはずだと踏んで。
「この部屋のどこかにいるなァ」
いるという確信。それによってエネドラはわざと声量を上げた。やり過ごすという甘い狙いを潰すために。
前線に出ていないのなら接敵される恐怖も慣れていない。そこを煽ることで、物音でも立ててくれれば探す手間も省ける。そこに加えて、加虐的な性格が拍車をかけた。ドSである。
(なんで……)
その声を、国近は自分用の小部屋に身を潜めて聞いていた。布団の中は絶対見つかるから使えない。小棚の中にだって入れない。隠れられる場所は、壁に立てかけてある姿見の後ろ。普段姿見にはカバーをかけてあるため、それも利用して傍からは見えないようにしている。
「あとはこの部屋か」
「……っ!!」
近い場所で発せられた声に息を呑む。口元に両手を当て、可能な限り息を潜める。オペレーターもトリオン体になれるのだが、戦闘員のような緊急脱出はない。そもそも作戦室にいるのだから、あったとしてもこの状況では意味がない。トリオン体が潰されたらその後は生身。戦闘員以外にとって、敵の接近は死の接近と同義である。
鼓動が激しくなる。この音でバレるのではないかという恐怖が国近を追い詰めていく。その恐怖からドッと汗が流れた。額から落ちる汗が、頬を通って喉元から落ちていく。
「チッ。いねぇな。どっか見落としたか」
「ふぅ……ふぅっ……!」
コツコツと歩く音が遠ざかる。ひとまず1回はやり過ごすことができた。状況は上層部も分かっているはず。誰かしらが駆けつける

まで、なんとか凌ぐことができれば――
「なんてなッ！」
「ひっ……!!」
「気配で丸分かりなんだよバカが！」
　隠れ蓑に使っていたカバーと姿見が乱暴に投げ捨てられる。刃状で固定化されたトリガーが、喉元に突きつけられる。
　どう利用してシアンを殺すか。それを愉快げに考え始めたエネドラの後方に突如気配が現れた。
「ユウから離れろよカス」
「あぁ？　早い到着だな。尻尾巻いて逃げてきたか？」
　言われた通りに離れる理由などない。エネドラはブレードを突きつけたまま、ゆるりとシアンがいる方に振り返り、そして目を見開いた。
「ア？　なんでそいつがそっちにいやがる！」
「自分の頭で考えな」
　シアンの左腕に抱えられるように国近がそこにいた。国近自身、何が起きているのか分かっておらず戸惑いの様子を見せる。
「シアン……さん？」
「ごめんなユウ。巻き込んだ」
　恐怖一色に染まっていた国近の心が、安堵によって氷解していく。国近は何も言わず、口を噤んでシアンの背に腕を回した。
「まぁいい。テメェを殺すことに変わりはねぇからな！」
「室内戦なら有利。そう思ってんのか」
「そいつのネタは大方割れてんだよ。テメェじゃ俺に勝てねぇぜ」
「普通にやればそうだろうな。いやほんと、ヴィザ翁相手にこの手を使わなくて正解だった」
「あ？　なっ、んだこいつは……！」
　赫の兎（ビーラビット）の力は強大だが、その真価を発揮するのは広域戦。まずその大鎌の時点で、狭い場所ほど振り回しづらい。そう思ってくれていたらありがたい、という期待通りの展開にシアンは不覚にも笑ってしまった。

大鎌を一切動かしていない。それなのにエネドラの足下の空間が裂かれ、重力に従うようにそこ落ちていく。
落下先は訓練室。シアンは自分のトリガーと、エネドラのトリガー泥の王（ボルボロス）の相性が悪いことを自覚している。ボーダーの協力無しでは勝てないと認めているのだ。ならば取る手段は自ずとこれになる。
「さて、オレも向かうか。……ユウ？」
「……ほんとに、怖かったんだよ？」
「うん。ほんと、ごめんな」
回されている腕に力が入る。国近自身に大した力はないが、シアンにはそれが痛く感じた。
トリガーを一旦解除し、自由になった右手も国近の背へ。安心させるように、ガラスを扱うように優しく力を加える。
「……ありがと。もう大丈夫」
「……そっか」
「えへへ、シアンさんにぎゅってされるの落ち着く。癖になっちゃいそう」
「それはちょっと……困るかな」
「えーなんで～？」
「なんでも！」
自分の体のことを理解してほしいと思うも、それを言うわけにもいかずに咳払いして誤魔化す。
「……ユウがここにいても危ないな。行くぞ」
「は～い」
再度トリオン体に換装。手を取って部屋から飛び出し、抱えて走った方が早いと気づいてからは国近を両手で抱える。それをやられた国近は恥ずかしさから目を泳がすが、シアンはそこを気にかける様子はない。エネドラがいる場所に向かうことが急務だから。
「あの座標って何があんの？」
「ふぇ？　あ……えっと、訓練室。あそこなら敵のトリガーを解析できるから。空調設備もあるし」
「なるほど。教えてくれて助かったよ」

「うん。それがわたしの仕事だから～」
シアンの背に腕を回したのは、背をなぞることで座標を教えるため。エネドラの死角になるから。戸惑いながらもシアンの様子から読み取って行動したらしい。
国近の案内の下、最短距離で訓練室へと迫る。途中で国近を近くにいた正隊員に頼み、シアンはエネドラがいる部屋の中へ。そこでは今、キューブから戻った諏訪が、ショットガンを浴びせることでエネドラの弱点を見つけ出していたところだった。
「堤！」
『マークしました！　……いや、これは……！』
「ハッ！　黒トリガーを舐めるな猿が！」
弱点はトリオン体なら誰でも共通のもの。エネドラはそれを保護するカバーを作り、自分の体の中で常に動かしていた。それを諏訪のショットガンが探し当て、その反応をマーク。狙いをつけられるようにした。
それに気づいたエネドラはダミーを大量に生成し、何本ものブレードを諏訪に向けて放った。
「ほんと荒くなったよなエネドラ」
「……っと、サンキュー。助かったぜ」
「こっちも協力してもらってるんだから当然」
エネドラが放ったブレードを、割って入ったシアンがすべて迎撃する。シアンだけではエネドラを倒し切るのは難しいが、それは相手も同じこと。赫の兎を防御に使うと、それは鉄壁に等しいものとなる。
エネドラは泥の塊をいくつか作り、猛攻の姿勢を整える。トリガー角の侵食で性格まで変わってしまった戦友を憂い、なればこそ自分が引導を渡そうとシアンも構える。共に高め合った頃のエネドラを、彼自身がこれ以上汚さないために。
「雑魚と組んで勝てるとでも思ってんのか？」
「勝てるさ。それを扱ってるのがお前だからな」
「ハッ！　なら、やってみろ!!」

大規模侵攻④

泥の王（ボルボロス）の能力は、使用者を液体化や気体化させられるもの。エネドラは基本的に液体化を使用し、敵の攻撃を無効化しながら戦う。攻撃の際には、ブレード状にした部分を固体化し、敵にダメージを与えるという戦法だ。それは液体だけでなく気体からそうすることも可能であり、奇襲性が非常に高い。特に気体からの攻撃は防御が困難だ。しかしエネドラは「スカッとしない」という理由であまり使用したがらない。

「くそっ、ダミーが多くてどれが本物かわからねぇ！」

「その散弾で全部打ち抜けば？」

「できるか！　黒トリガーと一緒にすんな！」

「そっか。でも撃ち続けてくれよ。締めに繋げるために」

「簡単に言ってくれるな黒トリガー様よぉ！　そっちもしくじるなよ！」

「当然」

液体化しようと、トリオン体共通の弱点は同じ。それを守るためのカバーが作られ、さらに本物を隠すためのダミーも生成されている。諏訪のショットガンは強力ではあるが、ショットガン故に威力は散らばる。ダミーごと撃ち抜くのは無理だ。

襲いかかるブレードはシアンが迎撃し、作られた時間を利用して諏訪が撃つ。防御と攻撃に役割を分けているからこそ、初対面でも連携の形は取れていた。これは主に諏訪の対応力がそれを可能とさせている。

「防いでばっかでどう勝つってんだ。えェ？」

「そんなはしゃぐなよ。その時には一瞬で終わらせてやるから」

宙に浮いた泥から放たれる大量のブレード。１つの泥から平均して４本。その発射点となる泥が何個も漂うことで、多角的かつ広範囲の攻撃を可能としていた。シアンはそれを両断して捌き、諏訪は自力で回避する。それにより攻撃の手が止まり、エネドラが連撃を放っ

た。床に入った亀裂に忍ばせておいた泥からブレードを伸ばしたのだ。
シアンの意識は前方から少し上に向いている。さらに降り注ぐブレードの割合は、7：3でシアンの方に多くしていた。それらを捌いている最中の攻撃。完全なる奇襲。
「なに……！」
しかしそれをシアンは防いだ。床から飛び出すブレードを一瞥もせずに。
何もせずに防ぐというのは、ヴィザからの情報で入っていた。だがそれは、事前に大鎌を振るっていたから。攻撃がそこに残っていて、それがヴィザの攻撃をあたかも自動で防いだように見えた。そういう仕組みであるなら、シアンが大鎌を振っていない場所から攻撃すればいい。
エネドラのトリガーはそれに向いているし、実際にそこを突いた。それなのに防がれたことに驚愕を禁じえない。ブレードを避けながら見ていた諏訪も、端末室から見ている国近もぽかんと口を開けた。
「おいおいどうした。オレのも黒トリガーだぜ？」
「っ！」
驚愕により生まれた隙、それを見逃すことなくシアンは大鎌を縦横無尽に振るう。距離など意味をなさない攻撃。エネドラの体はその軌跡通りにバラバラになり、そこにあったダミーたちも斬られる。
「けっ。互いに決定打が打てねぇらしいなァ」
バラバラにするも、本物は斬れなかったらしい。ダミーもいくつか残っている。バラバラにされた体が元の形へと戻っていき、そのタイミングで諏訪がショットガン2丁を同時にぶっ放す。
「効かねぇんだよ鬱陶しい猿が！」
［マークしろおサノ！］
［はいよー］
諏訪の弾は余すことなくエネドラのカバーに命中した。それもダミーがあるのもお構いなしに視覚支援を貰ったから。シアンがその数を一気に減らし、残された僅かなカバーもスタアメーカーによって

マークされた。これでダミーを増やされようと、虱潰しで的確に破壊すればエネドラを倒せる。
先に諏訪を潰そうとしたエネドラの攻撃も、横からシアンが切り裂いて無効化する。カバーをマークしようと、それが視覚支援で見えるのはボーダーのトリガーを使っている者のみ。シアンは当然ながらそれが見えないし、ボーダー隊員であっても黒トリガーを使用していたら見えない。規格が違うし、黒トリガーは未だ未知が多いから下手にイジれないのだ。
そんなわけで、諏訪を潰されるわけにはいかない。ピンポイントにそれを潰せる人間は必要だから。
（仕組みは分かんねぇが、気体化して体内から掻っ捌けばいいだろ）
［トリオン反応拡大。気体化だと思います］
［お？　国近？　まぁいいや。空調全開だ］
［了解］
訓練室にある空調を使い、風を発生させる。それによりエネドラのトリオンが押し戻され、シアンと諏訪に届かない。
（クソうぜぇ……！）
気体化が使えないのなら、液体化でやるしかない。気体化に回していたトリオンを液体に変え、ブレードの数を増やして猛攻をしかける。泥の王のようにトリオン体を変化させるのは、いくら黒トリガーと言えど希少なもの。シアンの立ち回りから見ても、相手の攻撃を受け流す様子がない。トリオン体自体は普通だ。
迫るブレードに向けて、大鎌を横に一閃する。大鎌の通った高さにあるブレードが斬られるのはもちろん、その上下にあるブレードさえ両断されていく。ただの一撃で。
「終わらせようエネドラ。泥の王の火力は決して高くない。星の杖（オルガノン）みたいに単独で攻め落とせる力はないんだから」
「何を勝った気でいやがる。テメェの攻撃もオレの泥の王に届かねぇだろうが」
「届かなくても、届かせる力はある」
大鎌を持つ手を上に伸ばす。エネドラの視線が僅かにそこにつら

れた時、その体が乱雑に斬られた。
（っ!?　なんだってんだこれは……！　アイツは鎌を振ってねぇだろうが！）
　持ち上げられた大鎌が微動だにしなかったことは自分の目で見ている。それにも拘らず切り刻まれた。イラつきが最高潮に達する傍らで、エネドラの中で1つの可能性が過ぎった。それは肯定するにはあまりにも馬鹿馬鹿しい力。しかし否定するには材料が足りないもの。
（まさか……鎌は関係ないってのか……!?）
　そして、黒トリガーなんてものは強過ぎて馬鹿馬鹿しく思えるものだ。
「くっくっ、そういう仕組みか」
「気付いたところで、お前に打てる手はない」
「ガラ空きだぜスライム野郎」
「この猿っ！」
　エネドラの真後ろに回っていた諏訪のショットガンが炸裂する。追加で増やされていたダミーも、今のシアンの攻撃でその数を減らし、さらにはスタアメーカーで絞り込みはできている。
　印がついていたものは残り2つ。そして諏訪のショットガンは2丁あり、ショットガンは近距離ほどその火力が高くなる代物だ。黒トリガーのものといえど、破壊する火力はある。
　ショットガンが炸裂した。刺し違える形でブレードが諏訪の腹部を貫いていたが、勝敗は決した。スライムエネドラが崩れていく。
「そこか」
「遅えよ」
　カバーだけを残し、本体は移動させていたエネドラが風上にいる。諏訪はトリオンが大量に漏れており死に体。残りはシアンのみ。エネドラはシアンの体内からブレードで攻撃するため、気体化したトリオンを流していく。液体化からでは防がれるからだ。
　しかしトリオンがシアンに届かない。近くまでいくのに、シアンの体内に入らない。

（どうなってやがる！）
「お前の負けだエネドラ」
諏訪の奇襲は決まっていた。本体を急いで逃したものの、散弾は弾がバラけるもの。掠めたそれをオペレーターが見逃すはずもなく、それに再度スタアメーカーをつけている。
狙う場所は1つだけ。諏訪隊に所属する隊員笹森は、姿を消すカメレオンをトリガーにセットしている隊員だ。シアンのトリガーがなくとも奇襲できる。
「甘えんだよ」
それをエネドラは看破。攻撃のためにはカメレオンを解かないといけず、エネドラは焦ることなくブレードを笹森の胸に突き刺した。鬱陶しく思う相手は疾く退場させるに限るから。
だがそれも次に繋げるための一手。トリオン体が破壊された笹森は緊急脱出するも、その際に生じた煙幕でエネドラの視界を遮る。
「うちの隊員舐めんなよスライム野郎！」
オペレーターからの視覚支援を頼りに、トリオン切れを起こす前に諏訪が煙幕の中に飛び込んだ。ショットガンによる面攻撃。再度カバーを間に合わせて防ぎつつ、足下からブレードを出現させて諏訪も迎撃。
「威勢だけだったなカス猿」
「ちっ……！　たまには手柄譲るのも隊長の役目か」
「みんなで焼肉でも行きましょう」
「!?　この、玄界の猿共がぁぁ!!」
エネドラはその存在に気づけなかった。自分の真後ろにいた堤の存在に。笹森の奇襲も、緊急脱出よる煙幕も、それを利用した諏訪の突撃も、すべて堤をエネドラの死角にワープさせるため。そのためのシアンの動きを隠すためのもの。
今度こそ届く。
近界民と玄界民による連携から生まれ、諏訪隊の面々が繋げたトドメの一撃が。
『トリオン供給器官の破壊を確認』

「ほんっと、分かってても鬱陶しい力だ」
　スピーカー越しに聞こえる喜びの声にシアンも頬を緩め、ほっと息をつく。「自分も緊急脱出しとけばよかったかな」と、堤は2人の今のやり取りだけで苦笑した。
「シアン……てめぇ……！」
「1人で勝つとは言ってないだろ。単独行動したお前のミスだ。どうせハイレインも侵入しろとは言ってなかっただろうしな」
「うるせぇ裏切り者が！　……くくっ、次はここか？　国でそうやったように、自分の姉を黒トリガーにしたように！　ここでも愛想振る舞ってそいつを黒トリガーにするんだろ、えェ！」
「……ヴィザ翁が知らないんだし、お前が黒幕を知るはずもないか」
「あァ？　誰かの指示だから罪はねぇとでも？」
「は？　何言ってんだお前」
「ケッ。てめぇは幸せな野郎だな。自分の姉がクーデターを企んでたってのに」
「……お前が姉さんを語るな。あの一件の表面しか知らないお前が！」

「あらあら、2人の喧嘩を見るのも久しぶりね」

　突如空間に穴が空き、その向こう側に1人の女性がいる。現れた彼女をシアンは睨み、エネドラも悪態をつきながら手を伸ばした。
「来るのが遅えんだよ」
「ごめんなさいね」
「!?　っ……がっぁぁぁぁ！　ミラ、テメェ……！」
「回収を頼まれてるのは泥の王だけなのよ。あなたはもう私たちの手に負えないもの」
　トリガー角が侵食し過ぎたために、その性格は攻撃的になっている。命令にも平然と違反し、独断で動くとあって扱いづらい。しかもトリガー角の侵食が進みすぎているのなら、どのみち命が短くなる。ならばここで捨ててしまえばいいという隊長の判断だ。遠征で死ん

だとなれば、名誉ある死となるのだから。
　そう、たとえここで味方であるミラが殺したとしても、敵が殺したということにできる。
「さようならエネドラ」
「かっ……ぁ」
「……ミラ」
「もうさんは付けてくれないのね」
「本国の人間をそう簡単に信用できない。ヴィザ翁には敬意を表すけど、それ以外はな」
「そうでしょうね。……あなたもうトリオン残ってないでしょ」
　ヴィザとの戦い、そしてエネドラとの戦い。黒トリガー相手に２連戦したのだ。しかもトリガーの性能からして燃費が良いものとは思えない。まともに戦えばミラは勝てないが、トリオン切れに近いシアンが相手ならやりようがある。
　ひとまず探りを入れるために、シアンの背後に穴を作ってそこから棘を出す。それは回避されるも、回避後の足を目掛けた攻撃は刺さった。
　それで確信する。シアンにもうトリオンがないと。
「あなたの戦闘記録を取っていたけど、エネドラ相手の時にトリオンを使い過ぎね。奇襲を防ぐために常に自分の周りにトリオンを展開していた。結果論で言うと、不可視の盾ってところかしら。それの消費が少ないわけがない」
　ミラはシアンの攻撃を警戒している。動作が無くとも斬るし、距離もお構いなしに斬るのだから。小窓と称する穴を転々と展開し、シアンの攻撃の狙いを定めさせない。
「友達同士、ここで倒れるのも悪くないんじゃない？」
『シアンさん！』
　足を縫い止められ、移動を封じられたシアンの胸に棘が深々と刺さる。トリオン供給器官が貫かれ、シアンはトリオン体から生身へと戻された。それによりワープをやめたミラに目掛けて堤がショットガンを撃つも、その弾は空間に作られた穴で返された。

「彼についてはこちらの事情なのよ。手出しは無用でお願いするわね」
「それは困るな」
「っ！」
訓練室の天井近くの壁が破壊して突入というダイナミックエントリー。そこから飛び出してきた人物が狙いを定めて刀を振るう。
「旋空孤月」
角度としては穴の奥にいるミラがぎりぎり見える程度。しかし攻撃できる角度が少しでもあるのならそれで十分。斬撃を伸ばす攻撃をピンポイントで行うなど、その者にとっては造作もないことだ。
「ぐっ」
その一撃はミラに届いた。ミラの右手首からトリオンが漏れ始め、シアンに放つはずだったワープも中断させられる。
「俺より先に誰かに負けるなよ」
「タチカワ……!?　お前なんでここに……」
「国近からの通信がなくなったからな。新型をわりと倒せたし、東部は風間さんたちに任せてこっち来た」
「……おかげで助かったけどさ」
ノーマルトリガーでラービットを次々と撃破していく者がいるということを、戦況を把握し続けていたミラも確認している。それが今やってきた男だと分かり、棘による奇襲も避けられたのを見てミラは撤退を決めた。最優先事項は金の雛鳥。そちらの追い込みが始まっているのだ。
「取り逃がしちまったが、今のがワープ女だよな？」
「そう。また仕掛けてくるかはちょっと読めない」
「ならここからは移動しといた方がいいな。座標を知られてる」
「そうだな」
トリオン切れを起こしたシアンをシッシッと手で追い払い、太刀川はエネドラの死体を見て調べた。座標を知るための物があると踏んだから。
「忍田さん。これどうします？」

『救護班を向かわせている。そいつの角は未知の技術だ。解析する価値がある。慶と堤はこちらに向かっているC級たちの援護に回れ。新型が多数確認されている』
「了解」
「って、その発信機持っていくのか？」
「ここに残すよりは持ってたほうがいいだろ」
（敵を釣れたら御の字って顔に書いてあるんだよな……）
人型近界民という強敵との戦闘などそうそうない。遠征であっても、今回訪れた近界民ほどの強さの敵には出会えていない。この絶好の機会を活用したい太刀川なのだった。

□□

訓練室から出る。当主であるハイレインに聞きたいこともあるが、トリオン切れを起こしている今それをするには危険過ぎた。
これを乗り切れるかはボーダーの力次第。大勢自体は傾いているのだ。流れが来てる。問題なく乗り切れるだろう。あとは任せていたらいい。
頭ではそう分かっていても、足は外へと向かっていく。基地の外へ。ハイレインがでてきているのかをシアンは知らないが、足を止める理由にはならない。聞き出したいのだ。当主であるハイレインがあの時動かなかった理由を。
――リアを見捨てたのかどうかを
姉が気づいていたのなら、当主たるハイレインにも何かしら察知できたはず。それなのに結果は今に繋がっている。その真相が何なのか。
「シアンさんどこ行くの？」
「……ユウ？」
後ろから手を掴まれて引き止められる。トリオン体なのだから疲れはないはずだが、なんとなく息切れしているように見える。そう見えるのも、彼女の不安げな表情のせいか。

「……敵の大将に会わないといけないからさ」
「生身で？　無茶だよ！　怪我じゃすまないよ！」
「それでも――」
「だめ!!」
「……ユウ」
「立場も考えて！　シアンさん、今危ない状態なんだから……。わたしといて」
シアンは自分の素性を明かしていない。不明な部分があるなら、疑われるのだって無理はない。
今回協力しているとは言っても、相手とは知った仲だ。「すべてが演技で、最終的に目標を達成するためのものだったら？」という疑念が拭い切れていない。その状態でハイレインと接触でもしたら、最悪の場合敵と断定されて対処されるかもしれない。
そうはならないだろうと国近だって思っている。けれど、最悪の場合が１００％起きないとは言えない。迅のような未来予知なんて持ってないから。
「今しかないんだ。ハイレインと簡単に接触できる機会は、この先訪れるとは思えない。仮にアフトに戻ったとしても、オレは敵として兵を向けられるからな」
「……でも……」
「ハイレイン……敵の大将に聞かなきゃ分からないことがあるんだよ。他の人たちじゃ駄目で、そうしないとオレは地に足をつけられない」
「……」
国近だけは知っている。家族のことを聞いたから。シアンがどれ程姉を慕っていたのか。それを喪う痛みなど想像を絶する。目的無く転々と場所を移していたのも、そういうことだ。喪失感が消えず、ふわふわとした状態で今まで生きていた。
それを終わらせられるのだ。地に足をつけ、目的を定め、歩みを進められるようになるのだ。
だから、たとえボーダーから警戒レベルを引き上げられても、それ

より重いものがあるのなら。
そう思って手を放した国近は、シアンから離れようとして引き寄せられた。
「そう、思ってたのになぁ」
「シアン……さん……？」
「ユウの側にいるよ」
「え？　え？」
「それで見えてくる道も、ありそうだからな」
心から自然に溢れた笑みを、本当の意味でのシアンの笑顔をボーダーの誰も今まで見ていなかっただろう。
それを初めて見て、しかも独占しているのは国近だけ。
……なのだが。
いろいろと混乱していた彼女にそれの記憶は残らなかった。

新生活①

　大規模侵攻の被害を最小限に抑えようと、被害が出たことについて市民は不安や恐怖を元とした激情をぶつけたくなるもの。それが分かっているボーダーも、大規模侵攻の起きた日から約1週間後に記者会見を開くことを発表した。そのため現在ボーダー職員たちは大忙しだ。被害の把握、必要な支援の把握、根回し等々。やることは山程ある。

　それはそれとして、ランバネインを敗北に追い込んだ者たちは、現場の指揮をした東の誘いで焼肉に訪れていた。対人型近界民戦で最も人数を費やしたのが、黒トリガーではなくノーマルトリガーのランバネイン戦だ。ボーダーの戦闘員を最も落としたのもランバネインであり、彼の撃退は戦況を盛り返す要因だったと言える。

「まさか東さん達とタイミングが重なるとは。これ半分ぐらい席を貸し切ってる状態だな」

「そうなってますね。お店の人に話して1つに纏まるのが良さそうっすね」

「よしそっちは堤に任せた。俺は東さんに話してくるぜ」

　そんな東たちとタイミングが重なったのが諏訪隊。並びに芋づる式でついて来た太刀川隊だ。彼らが来たことに東たちも驚き、何も知らなかった出水が一番驚いている。

「出水くん抜け駆けだね～」

「いやっ、柚宇さんそんなつもりはなかったですよ!?」

「ほんとかな～？　どう思います？　太刀川さん」

「面子を見りゃあまぁ納得だな。オペレーターの国近に声かけなかったとこは、抜け駆けだろうけど」

「ぐっ！　痛いところを……！　ってか、シアンさんまで来たんすね。良かったんですか？」

「大丈夫だ。本部長には俺から『焼肉連れて行くわ』って話してるからな」

「諏訪さん相変わらずの肝っ玉っすね～」
諏訪隊に太刀川隊に東隊と荒船隊。そこに米屋と緑川が混ざっている。茶野隊と鈴鳴第一は遠慮したらしい。
席は適当にバラけて座っているが、シアンがいる席は少し異様と言えた。３人掛けできる大席で、奥から小佐野、国近、シアン。対面側は奥から諏訪、太刀川、東。廊下側で東とシアンが向き合っている状態だ。
話をしないといけないし、この場にいる者がそれを見聞きしやすいようにという考え。シアンもそれを汲み取って合わせていた。
「固く話すつもりはない。諏訪が連れてきたのだし、許可が出てるなら上もそういう考えなのだろうしな」
「じゃあまずは乾杯といきますか。食べたそうにしてるのが横の席にいますし」
「ふっ、そうだな」
ランバネイン戦に後から参加したＡ級３人組。彼らの「飯を食わせろ」という視線がいい味を出している。飲み物が届くとそれぞれがグラスを持ち、東の言葉で乾杯が行われた。
それぞれの席で好きに注文し、届いたら好きに焼いて食べる。ここにいるのは食欲旺盛な男衆ばかりだ。
「シアンさんどれ食べる～？」
席順には少しドキッとした国近も、東の雰囲気が柔らかいと分かるとほっと息をついた。今はメニューを片手に、シアンへ声をかけている。
「まだ分からん字もあるけど……えーっと、このカルビってのは何？」
「お肉だよ」
「じゃあロースは？」
「お肉だよ」
「……このタンってのは？」
「お肉だね」
「……ユウ？」
「気づいてなかったのかシアン。国近はわりと頭悪いぞ」

「た、太刀川さんには言われたくないよ！」
　バカ代表に指摘されて顔を真っ赤にした国近が、メニューを盾にその顔を隠す。これどうすんだよって視線が諏訪から太刀川とシアンに向けられ、２人とも互いにどうにかしろと視線で火花を散らし合う。
「はっはっはっ、今国近が言っていったのは牛肉かな？　ロースは肩。タンは舌だ。カルビは特定の部位じゃないから、肉という言い方は正解になるな」
「へ～」
「ユウ最初のやつ合ってたのか。すごいな」
「……でしょう？」
「最初は何種類か少しずつ頼めばいいだろ。んで、気に入ったのがあれば次にそれ頼め」
「なるほどな。スワの考えでいこう」
「そう思って入力中だよーい。白米いる人は？」
　注文用のタブレットを小佐野が操作し、カート内にはすでに何種類もの肉と野菜が入っている。希望人数分の白米も追加して注文完了。あとは届くのを待ち、届いたら焼いて食べる。その繰り返しだ。
「タチカワ。ユイガは呼ばなくてよかったのか？」
「国近が声はかけたぞ。作戦に参加してないから来るわけにはいかないって断ったんだと」
「へ～。意外とそこ気にしてんのな」
「唯我くんあれで真面目だからね～。上下関係もきっちりしてるし、育ちも良くて努力もできる子なんだよ。シアンさんも仲良くしてあげてね～」
「そのつもりだけど、避けられてる気がするんだよな。全然会ってないし」
「そりゃあれだ。嫉妬だ」
「嫉妬か」
　隊長たちが遠征から帰ってきたと思えば近界民連れてきてるし、なんか打ち解けるの早いし、しかも作戦室に入り浸るときた。唯我に

とって、居場所に入ってきた異物である。それが隊長たちと親しげだとなると、居場所を無くした気にもなるというもの。
　そこはたしかに申し訳ないなとシアンも反省。一度会ってゆっくり話をしたいものだ。そう思っていると、国近が袖を引っ張り、携帯のカレンダーでとある日を表示する。
「唯我くんの予定だと、この日に時間あるから話できると思うよ」
「なんでわかるんだよ……」
「シアンさんそういう人だし、分かりやすいからね～」
　そうなのかと太刀川に目を向けると、全く分からんとドヤ顔で返される。隣の席でも、「柚宇さんだから読み取れるんだ」という会話が行われていた。
　頼んでいたものが届き、食材を網に乗せて焼いていく。野菜は欲しい人数の分だけ小分けに。肉の味付けはタレ派か塩派かで愉快な論争が始まる。そこに、肉によって使い分けるという東の一声で一刀両断。そう思われたが、どの肉なら分けるかでまた話が続いていき、やれやれと東は肩をすくめた。
「はい、シアンさんの分のお肉」
「ありがとう。ユウも自分の分取れよ」
「ちゃんと取ってるよ～。わたしは少食だからいっぱいは食べられないけど」
「……2人ってデキてんすか？」
　小佐野の切り込みによって空気が一瞬で変わる。
　思っていたけど触れなかった人たちは「お前それここで聞くのか!?」と驚き、東のように「突くものじゃない」と思ってる人たちは、話を聞き流しながら食事を続ける。
「デキてるって、なにが？」
　そして当の本人は質問の意味が分からずに首を傾げた。シアンは自分のことではないと思っているようで、他人事のように東同様食事を続けている。
「いやー国近先輩たちの様子見てるとなんか――」
「ん？　デキてるってあれか？　国近に子供デキたのか？」

「「ぶふぉっ!!」」
「ゲホッゲホッ。やべ、変なとこ入った……」
「いずみん先輩大丈夫？」
「ははははは！　太刀川さんやっぱ最高だな出水！」
　隊長は「デキてる」の意味を理解していなかったらしい。
「え!?　ユウ子供出来たの!?」
「できてない！　できてないから！　わたし誰ともしてないもん！」
　どうやら理解していない者がもう1人いたようだ。
「してないって何を？」
「ふぇ!?　え……え!?」
「子供は池から発生するって聞いたけど、こっちはなんかすんの？」
「馬鹿だなーシアン。それ誤魔化すための嘘だぞ」
「まじか」
「子供はキャベツ育てたらできるんだぜ」
「まじかよこっちすげぇな！」
「どっからツッコめばいいんだよこれ!!」
　しっかり誤魔化されている太刀川と、その勘違いに騙されるシアン。ツッコミを放置して膨れ上がった負債に諏訪が吠えた。
「違うのか。ユウ、どうやったらできんの？」
「うぇっ!?　え、いや……それは……その……」
「話振ってごめんなさい！　勘弁してあげてください！」
　耳まで赤くなって目を泳がせる国近を見て、小佐野は慌てて話の中断を申し出た。コイバナ感覚でイジれそうな部分が、まさかのバカ連鎖爆撃で先輩を陥れるだけのものになるなんて思いもしなかった。とりあえず、国近に経験が無いということだけが判明し、これはこれで酷い結末なのだが傷は浅かった。
　混沌に発展しかけた場もこれで一旦落ち着き、頃合いでもあるかと判断した東が周りを確認してから口を開いた。シアンのことについて。
「君は近界民であってるね？」
「そうっすよ。知ってるんでしょ？　そんな空気してますよアズマさ

ん」
「……上が決めたことに異を唱えるつもりはない。ただ、君の事情を知っている人が多いほうが、動きやすいんじゃないかと思ってね」
「いい人だなー。ま、軽く自己紹介するか」
　そういう理由なら打ち明けてもいいだろう。話を切り出したということは、少なくともこの場にいる人間は信用していいということ。シアンは太刀川たちが知っている範囲の情報を他の者にも共有し、追加の情報も出していく。
　国で決められている処遇と、自分の黒トリガーについてを。
「黒トリガーのこと話していいの？」
「キド司令たちには話してる。ここにいる人たちなら別に問題ないでしょ」
「それはおれも聞きたいっすね。遠征の時まじで何も分からなかったし」
「あー、やべぇ奴ってこの人のことか」
「ぶーぶー。オレ聞いてないよその話」
「遠征の話はそうするものでもないだろ」
「そーだけどさー荒船さん。仲間外れ感あるじゃん」
「どっちにしろ今聞けるんだ。いいだろそれで」
　そんな全員に興味津々ってなられてもなと苦笑するが、黒トリガーの希少性を考えれば当然かと頷く。シアンが国近に視線を送ると、彼女は首から下げていたアクセサリーを取ってシアンに渡す。それを見えるように吊り下げながら話を始めた。
「名前は本国の方で勝手に決められてたけど、赫の兎（ビーラビット）。こいつの能力は1つのことを尖らせたものだ」
「1つ？」
　戦ったことがある太刀川と出水、そして目の当たりにした諏訪隊と国近が疑問を抱いた。どう考えても多様性に長けた黒トリガーのはずだと。
「このトリガーができるのは斬ることのみ」
「全然信じられないんですけど……」

笹森の素直な反応にシアンは頷く。自分も使用者じゃなければそう思うから。
「これは自然法則すら斬るんだよ。座標が分かれば、自分の居場所とそこまでの距離を斬ることで、瞬間移動を可能にするし。使い方次第で広範囲でもピンポイントでも斬れる」
「けどシアンさん、鎌振らずにおれの弾とか当真さんの狙撃消してましたよね？」
「ああそれな。鎌は付属品なんだよ」
「はい？」
「鎌を振って攻撃するのは、もちろんそれ自体に威力があるからだけど、それよりもそこを斬るイメージがしやすいからだ」
「つまり、攻撃の位置を正確にするためか」
「そういうこと」
だから振らなくてもエネドラを強制的に訓練室に送り込めたし、切り刻むことができた。タイミングもイメージで決められる。ヴィザに放った赤の一撃も、鎌を振るというフェイントでヴィザを動かし、浮いたところに高威力を放っていたという仕組みである。
「あのスライム野郎の気体化攻撃を防いだあれはなんだ？」
「自分の体の周りを全部斬ってただけ。だからあいつのトリオンを打ち消せてた」
「だけってあのな……」
「中・長距離が封じられたのはそういうことか。やれやれ、これだから黒トリガーってのは」
「ふむ、話を聞くにボーダーでいう銃手と射手を1つに混ぜたようなものか。攻撃は斬撃だけど、こちらのイメージとしてはこれが分かりやすいな」
シアンの話を聞いて東が理解を深める。何かに似てるなと思っていた者たちも、その表現を聞いて納得した。鎌を振るってその延長線上を斬っている時は、銃手と同じ。鎌とは関係なしに斬っている時は、射手と同じ。違いは斬撃が見えないという理不尽な部分だ。
そして視線が出水に集まる。天才射手である彼がもしこの黒トリ

ガーを使えたら、鎌を振るうことなくひたすら斬撃を飛ばしてくるのかと。
「なんかみんなの視線が酷え」
「個人的に一番助かったのは、これがあれば遠征艇が無くても国を移動できたことかな」
「なん……！」
「同じ黒トリガーならともかく、基本的に斬れないものはないんで。空間だって斬れるから、あとは近い国までの道を開いて移動。移動したら即閉じで終わりなんですよ。それのおかげで追撃から逃げられたし」
　とんでもない情報に聞いていた者たちが息を呑む。遠征艇いらずの力。やりようによっては、最近の大規模侵攻よりさらに兵を送り込める力だ。アフトクラトルがそれの回収を国単位で決めているのも納得である。そして、遠征に行っていた太刀川はもう1つのことも腑に落ちる。
　出会った場所、その国はアフトクラトルではなかった。遠征艇を持たずに移動していたのも、それがあったからなのかと。
　単独での国家間移動は前例がある。空閑有吾はそれを行っていた。だがシアンのように、その国での手続き不要での旅はしていない。遠征先の兵士がシアンの存在に困惑していたのも、それが理由だろう。
「制限はあるぞ。切り開く大きさ、距離に比例して消費するトリオン量は増えるし、距離を無くしての移動もそれを開いてる時間でガンガン消費する。だから即移動して即閉じるってのが現実的だ」
「近界での移動も相応の消費をしたってことか」
「そりゃもちろん。いくら国同士が近くなっても、必ず一定距離はある。オレのトリオン量ならオレ1人がそこを移動するのが限界。移動先ですぐに戦闘になるとわりと危険」
「……そういうのあったの？」
「そりゃあな。この通り五体満足でいるけど」
　黒トリガーを使用している時、ハイレイン達のようにマントが装着される。それがアフトのものだと知っている国に移動すれば、奇襲と

思われてしまうわけだ。
　そういう話はする必要ないだろうとシアンは打ち切り、黒トリガーの説明も終了する。一番話したいのはそれじゃないから。
「そうそう。制限付きではあるけど、許可降りたぜタチカワ」
「ん？　……まさか」
「おう。ボーダーのトリガーが今度支給される」
　待ちに待ったその報告に、太刀川は獰猛な笑みを浮かべるのだった。

「キド司令！　オレに小遣いをくれ！」
「帰りたまえ」
　焼肉後、そんなやり取りがあったとかなかったとか。

新生活②

太刀川隊のお荷物こと唯我尊は、ボーダーのスポンサーの息子である。彼の中には「尊敬されたい」という欲求があり、崩して言えば「チヤホヤされたい」と思っているお坊ちゃまだ。それもあって彼はA級の部隊に所属させろと言い、それを呑んだボーダー上層部は戦闘員が2人でも結果を残す太刀川隊に投入。

これが「A級最弱」「お荷物」と称され、「なんでこれがA級なんだろ」と言われる唯我尊の経緯である。隊長が現戦闘員最強、隊員が合成弾のパイオニアという天才。オペレーターも支援力が高いというトップ部隊且つ、全員唯我より年上ということもあり、唯我が思い描いていたようなボーダー生活にはなっていない。

しかしそこで腐らずにボーダーを続けているのが唯我尊という男。最近なんだかよく分からない男に居場所奪われてねと危機感を抱いている男だ。

「はい、2人の飲み物」

「なっ、飲み物くらい言ってもらえば淹れましたよ……」

「気にしないでいいよ〜」

「何この黒いやつ」

「コーヒーだよ。飲んだことなかったっけ？」

「ないな」

見たこともなければ飲んだこともない。未知の飲み物に戸惑うも、国近が淹れたものを飲まないわけにもいかない。シアンは一口だけ軽く味見をした。

「どう？」

「……不思議な味だな。結構苦いし」

「ブラックだもん。砂糖と牛乳で調整できるよ〜」

「へ〜。今日はこれでいいや」

「いいの？」

「ユウが淹れてくれたやつだし」

「そっか～。それじゃわたしはそっちで出水くんとゲームするから」
　ニヤけそうな口元をお盆で隠した国近は、それを給湯室に戻しに行ってから自分の仮眠室経由で移動する。話を始める２人の邪魔にならないようにという配慮だ。隣の部屋でゲームするけど、それはそれ。これはこれというわけだ。
「さてと、言いたいことは正直に言ってくれていいぞ。……こう言うと圧かけてる気もしてくるな」
「えーっと、では……国近先輩とはお付き合いされてるんですか？」
　隣の部屋で国近が操作ミスをして出水に敗北。涙目になった彼女を出水が急いで宥める。
「なんかそれスワさんのとこにも言われたな。距離感で言えばお前らとユウの距離感と大して変わらんだろ。打ち解けてるとかって話でも、むしろそっちの方が近くね？」
「ボクらは同じ隊ですし、他の隊でも隊員同士は似たようなものですよ。あとは師弟関係だったり、意外と親戚関係もあるようで、そこは距離感近いとか。でもあなたはどれでもない」
「……そう言われてもなー。アフトの感覚で言ったらこれくらい普通だからさ」
「アフ……え？」
「あ、ユイガは知らないんだったか。オレ近界民だから。この前の大規模侵攻やった国出身」
「……えええええ!?　ちょっ！　出水先輩たちは知ってたんですか!?」
「２人で話すんじゃなかったのかよ。……出身は最近知ったけど、遠征で連れて帰ってきてんだから近界民ってことは知ってるに決まってるだろ」
（なんか妙なタイミングで変な人が入り浸るようになったなと思ってたけど……！）
　パクパクと口を開閉する唯我に出水は呆れ、余所見してる間に体力が消し飛んでいることに驚く。
「話してた気でいたけど、まともな説明してなかったか。てかタチカ

ワもしてなかったのか」
「あの人からは強い奴としか言われてませんよ……！」
「あいつさー。ま、それはいいとして。それを知ってお前はどうする？」
「どうするって、何をですか」
「オレを排除するかどうかだ。近界民を憎んでる奴って少なからずいるらしいしな」
「……いえそういうことは別に。ボク個人があなたに恨みがあるわけでもないですから」
　恨みもないし、先輩たちの対応からも察してるところはある。派閥で言えば城戸派だが、ボーダー上層部が手を打たないと決めているのならそれに従うのみだ。
「恨みがないのは結構だけど、不満があるならそれも今言ってくれ。これから長い付き合いになるかもしれないんだからな」
「長い付き合い？」
「いろいろあってな」
　そこは話さないらしい。唯我もそこまで聞くつもりはなく、不満はないかという質問の答えに迷っていた。焼肉の時に太刀川が言っていたように、あるのは嫉妬。自分の居場所が無くなるのではという焦燥感。そういったものだ。
　そしてそれを口にすることが憚れる。なけなしのプライドがストッパーになっている。
「ちょいと訓練室借りるか」
「はい？」
「言葉以外で、伝えれるものってのもあるんだよ」
「……はっ！　騙されませんよ！　ボクは個人戦じゃなくてチーム戦のほうが向いてるんです！　1対1でボクを完膚無きにまで叩き落としてプライドをへし折るつもりですね！」
「そういうつもりはないけど、どうなるかはユイガ次第だ」
「いやだーー！　出水先輩助けてください!!」
「今それどころじゃない」

「後輩よりゲーム!?」

　そんなこんなで、出水の手によって訓練室へと引きずり込まれた唯我は、シアンとの模擬戦を行うことに。いくらボーダーのトリガーに慣れていないと言っても、唯我相手に負けることはなく、１０本勝負のストレート勝ちを収めていた。

「こんなのイジメだ……！　弁護士を呼んでくれ！」

「ふむ、だいたい分かったな」

「どっちがですか？」

「どっちも」

　シアンの狙いが分かっていた出水は楽しげに聞き、彼の答えに国近も頬を緩ませた。

「タチカワとやるにはもう少し時間いるけど、それは置いといて」

　項垂れている唯我の前に座り込み、視線の高さを合わせる。

「お前は伸び代あるよ」

「……情けなんて無用ですよ」

「情けで言うわけないだろ。ユイガは基本がちゃんと身についてる。自分の武器の長所と短所を理解してるし、有利な場所を取る立ち回りもできてた」

「建物ごと旋空孤月で両断されましたけど!?」

「それはそれ。今回は1対1だから仕方ないけど、相手を見誤らないことだな。不利な場面では引くっていう姿勢も見えたし、お前がどれだけ努力してるかは見えたよ」

「……！」

「隊に入った経緯は聞いた。想像と現実の違いに衝撃も受けただろう。でもお前はそこで止まらなかった。地道に努力を続けてきた。自己分析も欠かしてないようだしな」

　個人戦は向いてない。それは人によっては逃げ道を作っているだけと捉えるだろう。言い訳にしか聞こえないだろう。しかし実際はそうじゃない。Ａ級という精鋭たちの中で、素人が戦い続けたら誰だってそう思う。

唯我の良い点は、味方を援護できるポジションに落ち着いたこと。そのための技術を伸ばしていること。欠点があったとして、それを補うのも正解。他を伸ばすのも正解だ。それは人によって異なるだけ。木崎のように万能手足り得る者がいれば、太刀川や出水のように1つに特化した者もいる。

「ユイガが向いてるのは援護だろうな。それしかできないじゃない。それが向いてるんだよお前は」

「!!」

「それが分かってるから、そういう伸び方なんだろ？　今日やった10戦全部、タチカワかイズミと共闘してる想定で動いてたようだしな」

「シアンさんそこまで分かるんすか」

「対集団戦は経験積んだからな」

唯我の移動の仕方も、横槍を入れやすいポイントへの誘導が含まれていた。本能的に動けるタイプではないのだから、それは全て頭で考えながら動いたということ。迷いの無さから、体に染み付いてるとも言えるがそれはそれ。敵を釣れるだけでも働きとしては十分なのだから。

「自分で相手を落とせるならそれもいいが、味方と共闘して獲らせるならそっちの方がいい。ローリスクハイリターンってやつだ。もう一度言うぞ、ユイガは強くなれる。お前は伸び代がある」

「本当ですか……？」

「てか、そうじゃなかったらタチカワが追い出してるだろ」

「面倒だから放置って可能性もありますけどね」

「出水先輩は鬼ですか！」

「それで～？　シアンさんはどうしたいのかな？」

わざわざここまで手間をかけた理由は何か。予想はできているけど、ちゃんと言葉にして聞きたい。

「オレはユイガともわだかまりなく接したい、ってのが一番大きいな」

そこは唯我が自分の中で折り合いをつけるしかない。皆が分かっていることだから言葉は続けず、唯我も自分の心を見つめた。

「一番大きいのがそれとして～、他には～？」
「見抜いてくるの怖いんだけど」
「今のは当てずっぽうだよ？」
「ほんとかよ……。もう1つは、よかったらオレがユイガに戦いを教えようかなと」
「ほうほう。師匠になると」
「へ？」
　自分の心見つめ直している間に話が進んでいる。どういうことだと唯我はきょろきょろと周りを見つめ、出水が助け舟を出して教える。唯我が望むのなら、シアンが師匠になるという話を。
「な……！　いや、でもボクは……！」
「自分の力で強くなりたいのならそれもいい。人それぞれだ」
「ちなみに、太刀川さんは忍田本部長が師匠だし、戦術面は月見先輩から教わったって言ってたよ～。出水くんは独学だよね」
「他のシューターを参考にすることはありますけどね。射手はトリオン量が威力とか弾幕にモロ直結するんで。真似る相手はなかなかいないもんなんすよ」
「言われてみればたしかに～」
　所属する隊の中でも道が違う。だが、現在最強の座についている太刀川に師匠が2人いるというのは、唯我の中で人に頼るというハードルを下げた。
「あ、ちなみに交換条件あるから」
「交換条件……ですか？」
　嫌な予想をする唯我に気づくことなく、シアンは頷いて口を開いた。
「教える代わりに金くれ」
「うわ……」
「シアンさんかっこわるーい」
「かっこわる……!?　いや、否定できないけどさ！」
「あー、でもそっか。おれらと違ってシアンさんはボーダー所属じゃないから、固定給もないし防衛任務を手伝ったとしても出来高払いが

発生しない。収入ゼロで、完全にヒモなのか」
「そうだよ！　みなまで言わなくてもいいだろ！」
出水がバッサリと切り捨て、シアンが膝から崩れ落ちる。アフトの金を少し持っているとしても、それはこちらでは替えられないし使えない。文字通りの無駄金なのだ。
そんな彼の様子を見て、さらに唯我の中でハードルが下がった。さっきまでは上下関係。師と教え子の関係だった。だが、そこに金が発生するなら少し変わる。関係はそのままだろうと、唯我の中には「シアンに生活費を与える」という役割が出来上がる。
言い方を曲げれば「シアンに生活費を与えるために、教え子の立場を甘んじている」にもなる。
（国近先輩が言った通りか。……この人不器用だ）
「ふふっ、ははは！　そういうことなら受け入れようじゃないか！」
「なんで偉そうにしてんだ唯我」
「ははは、別にオレは構わんぞ。やるからにはちゃんと指導するし、やる気があるならこっちもやり甲斐もある」
「そりゃそうっすけど、コイツが調子乗ったら蹴り入れていいっすよ」
「暴力支配は断固反対する！」
「どう落ち着くかは、唯我くん次第だね～」
かくして、唯我は師が付くことで成長を加速させ、シアンは弟子ができることで収入を確保するのだった。
これぞまさにＷｉｎ―Ｗｉｎの関係である。
「ちなみにどれぐらいお金は用意すればいいんですか？」
「こっちの基準分からんし任せる。最低限生活できればいいし、基本基地内にいるから金使うこと滅多に無いからな」
「じゃあ、月３０万くらいですかね」
「そういうもんなのか？　ならそれで」
「やっぱコイツぼんぼんだな」
「金銭感覚ズレるよね～」
出水と国近の献策により、お金はもう少し抑えられたのだった。

新生活③

ボーダーには複数の支部がある。俗にボーダーの基地と呼ばれている場所が本部に辺り、それ以外の場所にあるボーダーの建物が支部だ。B級に隊があり、エースが攻撃手(アタッカー)4位である鈴鳴第一は鈴鳴支部の隊員。ボーダーにある派閥のうちの1つ、玉狛派はそのまま玉狛支部のことを指し、部隊は第一と第二がある。

その玉狛支部に所属している迅の誘いで、シアンはそこに足を運んでいた。大規模侵攻前なら憚れた行動だが、ある程度の信用を得られている今なら気にすることでもない。

「いい加減、負けを認めなさい！」

「そう言うならしっかり点差開けろよ、な！」

現在は玉狛支部にあるシュミレーターを使い、攻撃手3位の小南と模擬戦の真っ最中である。2点差つけた時点で終了という条件で始まったこの試合だが、そうならずに点数だけが伸びていっている。

小南のトリガーは彼女自身に合わせて作られたワンオフ。双月と呼ばれる2本の短剣を使用し、時にはそれを繋げて破壊力のある1本の斧にする。それ以外はボーダーの普遍的なトリガーを設定。近距離戦重視だが、射撃トリガーとしてメテオラもセットしている。

「あんまりにも早く終わらせたら哀れだと思ったのよ。調子に乗らないことね！」

「遠慮はいらないって言ったはずだが、言い訳かな？」

「誰がそんなこと！」

単純な武器のリーチなら、シアンが使う孤月の方が長い。しかしそれだけで優位になれるほど小南は甘くない。剣1本のシアンに対して、手数による優位で迫っていた。

長物の特徴は、有効範囲の広さと長さだ。短剣より剣の方が離れたところから切れる。剣よりも槍の方が離れた位置から攻めれる。そして飛び道具の方がそれより長い。単純な話だけで言えば、飛び道具を持つ方が有利だ。一方的に攻めれるから。

しかし欠点もある。有効的な間合いの違いだ。武器にはどれも適正距離があり、それを崩して戦うことがまず狙う点である。
（隙間を見つけ――っ！）
孤月のような剣なら、離れた相手に不利になる。そして、至近距離でも十全な戦いができなくなる。小南が狙うのは後者だ。メテオラだけで獲れる相手でもないことは、とっくに分かっているから。小南自身、得意分野が接近戦でもある。やるなら相手のやりにくい間合いまで詰めること。
張り付かれたところで簡単に落とされるシアンでもない。小南の猛攻を捌くし、逆に崩しにかかることもある。その押し引きは、戦いを重ねる毎に増えていっていた。
そんな中見つけたスキ。小南はそれを反射的に狙おうとし、足を突っかからせるように地面を蹴って慣性を殺す。今度は踏みとどまるために力を入れた足で床を蹴り、シアンから距離を取った。その瞬間に振られた孤月で腹が薄く切れたが最小限の傷である。
（あんなフェイントやってくる人いないわよ！）
「よく気づいたな」
「はっ！」
振りぬいた勢いを殺さず、そのまま1回転したシアンが孤月を小南へと投げつける。それを弾いた小南だったが、続け様に放たれたレイガストによって深手を負う。シュミレーターがそれで勝敗が決したと判断したことで、シアンが勝ち越すことに成功した。
「ズルいずるい！　レイガストなんて聞いてないわよ！」
「なら今のコナミの勝ちでもいいぞ。てかもうコナミの勝ちでいいよ」
「そんな勝ち方嫌よ！　正々堂々とあたしが勝つまでやるの！」
「じゃあまた今度な。オレが呼ばれたのってコナミと模擬戦するためじゃないはずだし」
「え？　あたしにコテンパンにされるために来たんじゃないの？」
「ようやく話を聞く気になったか。ジンも止めろよな」
「ははは、いい相手になると思って」

５０戦ほどこなしてようやく落ち着けたシアンは、呼び出しておきながらこの状況を放置していた迅に呆れる。わざわざ呼び出したのは、それなりの理由があるはずだというのに。
「うちの一部の隊員は規格が違うトリガー使うから、本部のランク戦には混ざれないんだよ。シアンさんなら遊び相手として申し分ないかなーって」
「コナミはどう考えても遊び感覚じゃなかったけど？」
「それはまぁ、千佳ちゃんのこととか。メガネくんのこととか、思うとこあったんじゃないかな」
「さては分かっててやったな」
どうでしょうと誤魔化す迅にため息をつき、シアンはトリオン体を解除する。それに少し不満そうな小南も、空気を読んでトリオン体を解除した。
「金の雛鳥が狙いって話をしなかったのは悪かったと思ってるよ。そんなトリオン量を持つやつがいるとは思ってなかったし。オレがいると分かれば狙いを変える可能性もあったからな」
「なんで変えるのよ」
「オレは裏切り者として扱われてるからな。黒トリガー抜きにそこそこのトリオン量があるし、強制的に角をつければ金の雛鳥に並ぶトリオン量にはなる。黒トリガー回収も狙ってたなら尚更そうなると踏んだんだが」
「ふーん？　そこまで考えてたのね」
ハイレインがどちらに重きを置くかは賭けだった。訓練生たる雨取を狙い、金の雛鳥を確保するのか。それとも回収対象の黒トリガーを持つシアンを狙い、新たな神として扱うか。リスクとリターン。本国で起こり得るだろう出来事。それらを天秤にかけ、ハイレインは前者を選んだわけだ。
「読みを外したことと、そこを黙っていたことは当人たちに謝りたいんだが……ミクモ今いないみたいだしな」
「まだ療養中だからね。ランク戦も１戦目は間に合わないし」
「ならその後だな。体の調子が落ち着いた頃にする。んで、コナミは

何をどう思って模擬戦に引きずり込んだわけ？」
「うぇ!?　それは……えっと……早とちりよ。悪かったわね」
「ははっ、素直なやつだな。そういう奴は好きだよ」
「すっ……!?　ちょっ、い、いきなり何言うのよ！　あたしは別にあんたなんてタイプじゃないから！」
「あれこれ勘違いされてない？」
「ははは、うん。やっぱ2人相性良さそうだ」
　顔を赤くして小南は部屋から飛び出し、いいネタができたと目を輝かせた宇佐美が追従する。これが視えていたのか、迅は高笑いだ。
「桐絵ちゃんが飛び出してきたけど、シアンさん何したの？」
「いやこれと言ってなにも」
　シュミレーター室から出ると、雨取たちと話をしていた国近が首を傾げる。何があったかではなく、何をしたのかを聞く辺り、信用があるのかないのか不明だ。
「おれの師匠どうだった？」
「へー、コナミの弟子なのか。強かったよあの子。戦いをよく知ってる」
「むっ、ということはシアンさんが勝ったのか」
「決着はついてないから引き分けだな」
「ほほう。さすがですな」
「ということは～、そろそろ太刀川さんともできるんじゃない？」
「そうだな。帰ったらその話しでもするよ」
　シアンがこちらに来てからおよそ1ヶ月。太刀川にとっては待ちに待った案件だろう。迅がランク戦に復帰したのもあり、本人は全く退屈していないが。
「ところでユウマの隣のいるのが……」
「初めまして。雨取千佳です」
「初めまして。君がそうなのか。……大規模侵攻の時は申し訳なかった」
「いえそんな！　みんな助けてくれましたし。それに、レイジさんと遊真くんから聞いてます。シアンさんも戦ってくれたって」

「オレのは……完全に私情だから」
「でもレイジさんは助かったって言ってましたし、そのおかげでわたしも助かったわけですから。だから、ありがとうございます」
「……」
　謝罪こそすれ、感謝されるいわれはない。シアンはそう思っていたのに、雨取はお礼を言って頭を下げる。
「千佳ちゃん良い子過ぎ～。シアンさんが逆に困っちゃってるよ」
「え、えっ……あの、そういうつもりじゃ……」
「ユウ」
「えへへ」
「いや助かったけど。……アフトの情勢からして、君が狙われることはない。少なくとも、君からアフトに行かない限りは」
「……えっと」
「行くかもしれないんだよねこれが」
「……は？」
　空閑が雨取の事情を話し、遠征部隊を目指してこれからのランク戦に参加することを説明する。それを聞いたシアンはそこを感心こそするものの、遠征に行けた場合のリスクの高さに渋い顔をした。
「やっぱり危ないかな～？」
「そりゃあな。知られなければ問題はないけど、向こうについてから存在を知られたら争奪戦になる。アフトは４人の領主がいるから、最悪の場合４勢力から狙われると思っといた方がいい」
「ほうほう」
「目指すなら頑張れよ」
「はい！」

　話を終えたシアンは、迅の案内で支部の地下室へと向かう。そこにいたのは同郷の人間。互いに面識のある人物。
「ヒュースか」
「……シアン」
「実はヒュースに頼まれてシアンさんを呼ばせてもらったんだ。おれ

は話聞かないから、２人でごゆっくり～」
「いいのかそれで……」
　ヒュースの扱いは捕虜。玉狛のスタンスは近界民とも仲良くしようというものだが、仮にも捕虜と同郷の人間の２人だけにするのは体裁的に問題があるはず。しかし迅がそうしないのも、未来視ができるから。２人にしたところで問題ないと判断したのだ。
　ヒュースはベッドに腰掛け、シアンが部屋にある椅子に座った。地下室と言っても電気も通っている。暗い部屋での生活でないことにシアンは内心ほっとした。
「経緯は違えど、お互い大変なことになったな」
「よく呑気でいられるものだ」
「もう失ったからな」
「……すまない」
「気にすんなって。この前ので吹っ切れてる。ヒュースはそうもいかないだろうけど」
「当然だ。オレは必ず本国に帰る」
「……オレのトリガーを利用したいならそこは諦めろ」
「そのつもりはない」
「違うのか」
　シアンが持つ黒トリガーなら、アフトクラトルに直接人を送り込むことが可能だ。アフトクラトルの軌道がまだ玄界に近いから。シアンはてっきりヒュースがそれを頼むつもりなのかと思ったが、そうではないらしい。少しでも早く本国に帰りたいはずなのに。
「その力はあちらも警戒しているはずだ。利用するわけにはいかない」
「冷静だな」
「他の手立てが見つかれば動くつもりだ。情報があれば回してほしい」
「構わないけど、それジンが勝手にやると思うけどな」
「……あいつに頼みたくない」
「ははっ。まぁ、何かあれば教えるさ。話はそれか？」

「本題は別だ」
「ほう」
　自分が本国に帰ること。主人の下に帰るための手段、それが本題でなかったことに驚く。
「我が主からの伝言だ」
　そしてそれを聞いて納得する。ヒュースは真面目な性格だ。主たるエリンからの伝言を頼まれていたのなら、それを本題に据え置いていてもおかしくない。
「主が言うには、その状態がリアの思惑通りだそうだ。オレにはこの意味が分かりかねるがな」
「……姉さんの思惑通り、か。うん、ありがとうヒュース」
「意味が分かったのか？」
「さすがに姉弟だからな」
　ファーストプランではないのだろう。けれどリアにとって最悪の展開でもない。セカンドプランもしくはサードプラン。それが今の状況だというのなら、どれだけ姉に愛されていることか。
「……ヒュース、お前がアフトに戻れる日が来たら手を貸してやりたい。けど、オレがそう動けるか分からん」
「何かあるのか」
「ちょっとな。守らないといけないものができたんだ」
「……ふっ、そうか」
　後ろ向きな理由ではない。目を見れば、それが前向きなことだとよく分かった。これも全てリアの思惑通りだと言うのなら、彼女はとんだ曲者で、計り知れないほどに弟を大切に想っていたのだろう。
　リアと大した面識のないヒュースでも、それは窺い知れるのだった。

新生活④

ボーダーの戦闘員は訓練生を含め、その九割以上が中高生である。彼らの進級の仕方には学力の他に、ボーダー推薦というものがある。ボーダーと提携している高校や大学への進学を決められるもので、バカ代表の太刀川慶が大学に進学できると言えばその確実性は保証されていると言えるだろう。太刀川の場合、それでも「なんとかねじ込めた」と忍田が心労を費やしたものだが。ちなみに親は泣いて喜んだらしい。

そんな提携校のうちの1つが、三門市立第一高等学校。ボーダー関係者が最も在籍している高校であり、太刀川隊でも国近と出水が在籍している。

その出水は三輪隊の米屋と同じクラスであり、現在は掃除当番で教室の清掃を行っていた。

「早く終わらせろよ弾バカー」

「そう言うなら手伝えよ槍バカ」

「嫌だね。当番じゃねぇし」

掃除が終わればボーダーに向かう。放課後にそこに行くのはいつものことで、彼らにとってそれは部活感覚でもあるだろう。部活と違って、開始時間が存在しないため時間は気楽なものだろうが。

「米屋くんそこにいるなら窓開けて～」

「へいへーい」

窓際にいた米屋はクラスメイトに頼まれた通りに窓を開ける。冬の寒い空気が教室内に入り込み、寒いなと嘆きながら外から聞こえてくる声に耳を傾けた。在校生たちの話し声。いつも聞こえる賑やかな雑音の中に、何か面白そうな話題が混ざっているのを聞き取った。

「どれどれ？」

「そんな身を乗り出してると落ちるぞ米屋」

「支柱掴んでるから大丈夫だって。あっちの方か」

「何見てんだよ」

「んー、なんかあれだな。正門のほうがざわついてんな」
「有名人でも来てんのか？」
「出水くんは掃除して！」
「米屋くん、その人イケメンなら」
「殺せ」
　女子の言葉に被せるように男子が本音を挟む。漫画で見るような展開が現実であってたまるかという思いと、リアルでそれがあるなら許せないという高校男子らしいノリが混ざっている。
「この教室から正門ってちと遠いからな。中心人物は見えん」
「米屋。その子が美少女なら」
「私に抱かせて」
「だから見えないって」
「安心しろ！　こういう時のための双眼鏡！」
「いいね！　助かる！」
「落とすなよ。お前が落ちても双眼鏡は落とすなよ」
「任せろって！」
　教室に残っていた男子生徒から双眼鏡を受け取り、窓から身を乗り出した米屋が偵察を開始する。３階から見ているため上下の角度に問題はない。部外者が来ているなら、制服じゃない人が当該者となる。
「あー、ひとまず男だ」
「イケメンか？　イケメンなら整形させないといけないぞ」
「断髪式でもいいな」
「あれはイケメンの部類だな。行ってこいお前ら！」
「了解（ラジャー）！」
「そうはさせないわよ！　こちらビショップ２！　手の空いている女子は至急バカ共の阻止のために正門へ！」
「ちょっ、委員長!?」
　米屋のゴーサインに従った男子生徒が飛び出し、それだけで察したノリのいい他クラスの男子たちも走り出す。それを阻止するべくクラスの委員長が掃除を放り投げて追いかけ、スマホを利用して連携さ

せた校内放送で応援を要請した。これが第3回一校動乱である。
盛り上がってんなぁと軽快に笑う出水は、未だに双眼鏡で正門を見ている米屋に気づいた。その様子は傍からどう見てもバカのそれである。
「お前まだ見てんのかよ。そっち系だったか？」
「ちげーわバカ。なんか見たことある気がするんだよなあの人」
「やっぱそっち系じゃねぇか」
「だから違うっての。……あ！　思い出した！　あの人お前んとこの隊に入り浸ってる人だわ！」
「マジか……！　何しに来たんだあの人！」
「あ、出水くんまで……！」
来るだけでとんでもない騒動を起こしているシアンに顔を引きつらせた出水は、急いで教室から飛び出していく。
「みんな掃除してよ……」
「……手伝うから元気だそうぜ！」
「米屋くんのせいなんだけどね」
「はははは、ごめんなさい」

廊下を走り、階段はスロープを滑って下りる。急いで靴を履き替えた出水は、正門まで駆け抜けて今の原因である人物との接触を試みた。
しかしそれは女子たちによるバリケードで阻まれる。先に飛び出していた男子たちも、そのバリケードを前にその足を止めていた。奥からは黄色い声が飛び交っており、それが男子たちの心の炎に油を注いでいく。
「悪い委員長、その人知り合いなんだ。通してくれね？」
「……出水くんなら良し」
「よし行け出水！　仕留めてこい！」
「だから知り合いだっての」
通してもらえた出水は、その人物を囲う女子たちにも退いてもらい、ようやく接触を成功する。見知った顔に出会えたことで、シアン

もほっとしているようだ。
「何してんすかシアンさん」
「どうしてこうなったのかはよく分からん」
「部外者が来るだけで目立つもんですからね。何しに来たんですか？」
「お前らが行ってる学校ってのがどんなものかと思ってな。見に来た」
「それなら事前に言ってくださいよ……」
「今日思いついたからさ」
「自由度高過ぎでしょ」
　ボーダーの外をある程度自由に出回れるようになったとはいえ、思いつきで学校まで来るとは誰も予想しない。自由度もさることながら、その行動力も高いと言わざるをえない。
　出水の知り合いと分かると、元の予定通り帰宅する者、課外活動に戻る者、紹介してよと出水に頼む者等々。大幅に人が減っていく。それを受けて男子たちも解散するのだが、ボーダー関係者は逆に目が止まる。
「放課後だし、適当に校内を案内するくらいならいけると思いますよ」
「イズミの予定は？」
「特にないっす」
「なら頼む。悪いな」
「いいですよ別に。ひとまず、うちのクラスに向かいながらってやり方で」
「了解」
　方針も決まり、女子たちも解散させて下駄箱へ。出水は上靴に履き替え、シアンはスリッパを借りた。学校によっては土足のまま校内に入るのだが、この高校は履き替えるようだ。そこから出水のクラスへと向かいつつ、シアンが学校というものをどこまで知っているか確認した。
「同じ部屋ばかり続いてるのも、そのクラスってやつなのか」
「そうっすね。学年ごとで階が分かれてます」

「なるほど。そういやさっき思ったんだが、みんな同じ服なんだな」
「制服ですからね。学校によっては私服登校があります。大学生だとみんな私服らしいです」
「変な決まりだな」
「そういうもんですよ」
　学校を生徒に一定の学力をつけさせる施設。そこに時間や費用、人員を割けることは、国力に余裕があるから。近界ではそうもいかない。探せば学者だらけの国もあるかもしれないが、他国との接近に備えて軍事力を伸ばす方に注力されやすい。
「ここがおれの在籍するクラス。ちょうど真下が柚宇さんのクラスですよ」
「やっぱ他と代わり映えしないな。掲示物がちょっと違うくらいか？」
「そこは担任の先生の好みですから」
「おっ、やっぱ連れてきたか～。掃除は終わらしといたぞ」
「まじか。サンキュー。飲み物奢るわ」
「それもいいが、今は違う気分だな」
「お？」
　ニヤリと笑った米屋の視線がシアンに向く。それで察した出水がやれやれと肩を竦めた。
「その人とバトってみてぇ」
「いいですかね？　シアンさん」
「タチカワの先約があるから、その後でいいなら」
「やりぃ！　オレ米屋陽介」
　握手を交わし、校内案内の続きが始まる。成り行きに合わせて米屋も同行だ。暇らしい。
「柚宇さんに会います？」
「ユウならすぐにここを出てそうだけどな」
「でもあの時に見かけてないならまだいるんじゃないっすか？　シアンさん見逃さないだろうし、それなら柚宇さんも声かけてそうだし」
「ん？　２人どういう関係なんですか？」

「話すと少し長くなるしややこしいぞ」
「そういう方面か」
　ややこしい話なら聞かなくていいやと米屋は追求を避ける。分かりやすい話なら首を突っ込むが、そこまで知りたいわけでもないのだ。ふと思ったら聞いてみた、それだけのこと。
「シアンさんっておれらが学校行ってる間何してるんすか？」
「ゲーム」
「即答だ。ま、国近先輩がいたらゲームに困らないでしょうしね」
「今ドラクエシリーズに手を出してる。５作目突入した」
「おっ、いいですよねあのゲーム」
　ゲームの話で盛り上がりながら１つ下の階へ。さり気なく国近のクラスに向かっているのは、彼女がきっと良い反応をしてくれると思っているから。面白いものを見たい出水なのだ。
「誰もいない」
「誰かいたら聞けたのになー」
「なんだ。結局ユウ探ししてたのか」
「どんな反応するか見てみたいなと思って」
「なるほどね。……ユウなら、上の方だな」
「え、なんで分かんの」
「ユウの居場所は分からんけど、黒トリガーの場所なら分かる。あれオレの体混ざってるし」
「はい？」
　訳のわからない情報に出水と米屋は顔を引きつらせた。
「黒トリガーってのは人の成れの果て。オレのやつは姉さんが成った形なんだけど、オレのここ剥いでそれを持ったまま成ったんだよなあの人」
「サイコパスにしか聞こえないんですけど!?」
　シアンが服の裾を持ち上げると、たしかに一部だけ痛々しい見た目になっている。シアンの経緯を考えれば、まともな治療ができたとは思えない。分かりやすくグロい話だった。
　黒トリガーは未だ未知のもの。誰もが同じことをしたとして、シア

ンのようになるとは限らない。算段があっての出来事だろうが、確証もないものだ。
「それ絶対柚宇さんに話しちゃ駄目ですよ」
「了解。とりあえず上行くか」
　校内探索から国近捜索へと方針チェンジ。行き当たりばったり旅である。思いつきで学校に来ただけのことはある。
「そういや、おれらがこの学校って話してないですよね？」
「タチカワから聞いた。放課後なら行けんじゃねって言うから来てみたんだが……」
「そんな気楽に出入りできるの大学くらいでしょ。最初に会ったのがうちの隊長じゃなくてよかったっすね」
「ヨネヤの隊長って誰？」
「三輪秀次ですよ」
「あー、ミワの隊なのか」
　近界民嫌いの三輪と真っ先に接触していたら、騒ぎは少し違う形になっていたかもしれない。さすがの三輪も学校で騒ぎを起こしたくはないだろうが、ミーハー女子の絡みが混ざるとなると予測不可能である。どさくさに紛れて三輪に告白する女子がいたかもしれない。
「この学校はボーダー関係者一番多いっぽいですよ」
「へ～。上の方に来ると人気ないな」
「文化部はいろいろ部屋を使うっぽいけど、この辺はそうでもないな」
「吹部が休みだからじゃね？」
「休みとか珍しい」
　推測しながら米屋と出水はふと思った。わざわざ人気が少ない場所に国近が行く理由などない。これはつまり彼女個人の都合ではないはずで、これは所謂ベタな展開なのではと。
「シアンさんここからは小声で、気配も消して行きましょ」
「ん？　了解」
「ノリいいな」
　話が見えてなくても面白そうなことだから乗っかる。思ってたよりも面白い人だと米屋の中でシアンの評価が上がった。

「2個先の部屋だな」
「それなら向こうの階段側のドアに近づきたいですね」
窓に映らないように低姿勢で3人素早く移動する。部屋の中が2人ということもしれっと確認し、ドアをほんの少しだけ開けて中の声が漏れるように。強制赤裸々スタイルである。
「やっぱこれ告白だよな」
「柚宇さんわりとモテるからなー」
「ユウが告白する側かもしれないだろ」
「いやいやいや」
お金の使い道の大半がゲームのゲーマー女子国近である。恋愛に興味があるのか怪しい。尚且つ、あったとしても学校の誰かじゃないだろと2人は否定した。
3人が盗み聞きしているとは露知らず、男子生徒の告白が始まった。やっぱそっちかと少し残念に思いつつ、どういう返事かを待つ。結果を出水と米屋は予想できているが。
「告白は嬉しいけど、ごめんなさい」
ストレートな拒絶。すぐにそうした理由も単純なもの。告白してくる人の大半が、体ばかり見てくる人だから。
国近が教室を出るのを察知した3人は、急いで移動を開始。誰にも悟られることなく退散する。シアンは昇降口で国近を待つことになり、出水と米屋は陰から国近の反応を見ることにした。
「へ!? シアンさん!?」
「よっ、ユウ」
「え、え!? なんで!?」
「学校見に来た。さっきまでイズミとヨネヤに案内してもらってた」
「そうなんだ。びっくりした〜。言ってくれたらわたしも案内したのに〜」
「今日タチカワと話してて思いついたことだからさ」
自由度高いなと出水と同じツッコミをし、靴を履き替える。案内が終わったのなら、ボーダーに戻るだけだから。
「制服見られるのって初めてだよね。どう〜?」

「どうって聞かれてもな。アフトにそういうの無かったから比較対象ないし」
「所感でいいよ～」
「そっか。うん、かわいいよユウ」
「えへへ～、ありがと～」
　国近の様子が少しおかしい事に気づきつつ、告白の場面を知っていることは秘密にしないといけないため、シアンからは何も言わない。2人で並んで帰っていると、国近の言葉数が次第に減っていった。ボーダー方面のバスにも乗らず、時間をかけて歩いている。
「……今日ね。告白されたんだ」
「ほう。イズミから聞いたけど、モテるみたいだしなユウ」
「……いつもはね、その……やらしい目の人が多くて」
「……うん」
「今日の人はね、そういう人じゃなかったの。1回断っても呼び止められて、わたしのどういうとこが好きかいっぱい言われてね」
「良いやつだな」
「でも断っちゃった」
「なんで？」
「あんまり、その人のこと知らないし」
「交際始めてから知っていくこともできるだろ？」
「でもそれなら～。……っ」
「？　それなら？」
　その後に続く言葉が出ない。それを口にしようとした途端、胸が締め付けられる感じがしたから。嫌なことを想像して、それが怖くて言葉にできない。
「……シアンさんはどう思うの？　わたしが誰かと付き合ったら、いや？」
「そうでもないかな」
「……え？」
　棘が痛い。
　胸にチクチクと刺さるそれが痛い。

「シアンさんの、ばか」

その棘が、抜こうとしても抜けない。

新生活⑤

部隊はランク順か年齢順で隊長が決まる。明確なルールではなく、どこも自然とそうなっている。そのため、太刀川隊のように「この人これで隊長なのか」と思う隊もなくはない。大変珍しい事例だし、それでも攻撃手Ｎｏ．１という名実ともに箔がついているので問題ない。逆に隊長らしい隊長と言えば、”スナイパーの祖”たる東春秋が代表例だろう。

太刀川慶は基本的に隊長らしいことなんてしない。放任主義だ。

「自分が好きに過ごすから、お前らも好きに過ごしていいぞ。ただし唯我テメェは駄目だ」といった具合に。戦闘においても、太刀川の方針が部隊の方針になりやすい。その点は影浦隊と似ていると言えるだろう。

「今回は隊長っぽいことするぞ」

「その発言がもう駄目だろ」

そんな太刀川が、珍しく自ら隊長として動いた。頼んで動かそうかなと思っていた出水も驚きだ。

「国近と何があったかは聞かねぇ。興味ないし」

「あのな……」

「とはいえ国近はうちのオペレーターだ。必要な時に働きが悪いと困る」

「それはそうだな」

「そんなわけで国近と１日出かけてこい」

絶妙に言葉が足りない。足りないが言わんとしていることは分かる。今日という時間を有効に使って元の鞘に戻れという話だ。

「ただし１７時には帰ってこい」

まさかの時間制限ありだった。

□□□

「それで、シアンさんどこに行くの？」
太刀川の指示通り国近を外に誘うことに成功したシアンなのだが、今の国近から少し距離を感じている。心当たりがないわけではない。いやちゃんとある。高校を訪れた日が原因だと予測している。
振り返ってみて、どの発言が悪かったのかも把握しているつもりだ。しかしそれは心のない発言ではない。本心なのだ。
「なんか適当に服でも買おうかと。今着てるのもシノダさん経由での貰い物だし」
「シアンさんの服ってそういうルートだったんだ」
どういう経緯なんだろと思っていたことが今判明する。シアン相手にそれがしやすい立場なのは、中立的立ち位置にいる忍田くらいなものだ。落ち着いた色合いのものが多いのもそういう理由だろう。
「わたし男の人の服とかあんま分かんないよ？」
「それは大丈夫。気に入ったのがあれば買おうってぐらいだし。ユウも自分の服を買ってもいいんじゃないか？」
「せっかくだしそうするけど、男性用女性用で分かれるし、店によっては女性用だけだったりするよ」
「え？　服ってそんな多いの？」
「お店の規模によるけど……、うーん。それなら行くのはモールがいいね」
カルチャーショックが生じ、国近は行き先をすることに。シアンの中のイメージは知らないが、大きな店というのが想像できないらしい。国近もまた、アフトクラトルのことを知らないから、そちら側の服屋を想像できない。
バスで移動し、大型のショッピングモールへ。娯楽施設、電化製品、飲食店に服屋等々。この建物内で一通り揃えることもできれば、ここで1日潰すことも可能である。シアンは気せずして最適な場所にたどり着いた。
「でっか……。なにこれ、いやでっか」
「シアンさんのところにはこういうのないの？」
「ないよ。大きな街があってもこういうのはない」

「そうなんだ。そういう生活は想像できないな～」
「たしかに。ゲームがない生活をするユウは想像できないな」
「む～。図星だから何も言えない」
　国近はこの場所に何度か来ているが、シアンは初めてだ。館内マップでどこに何があるか確認し、それを頭に叩き込んで移動開始。
「お昼の時間はどの店も混むけど、どうする～？」
「そうだな……」
　遅い時間でもいいかなと思ったものの、太刀川に夕方に戻るように言われている。その理由は出水から説明を受けており、それを考慮すると昼食を後回しにするほうがその後に影響してくる。
「早めの時間でもいいか？」
「いいよ～。一応11時ってことで、そうなるとあと1時間だね～」
「そうなるとちょっと予定変更だな」
「ん～？」
「部屋に置く小物というか、コップとかその辺も買いたいからさ。それがある店に行って、昼を食べて、服屋に行こう」
「ほうほう。計画的～」
　時間を有効に使ったプラン。それに国近も賛同し、シアンが求めるものが置いてある雑貨屋に移動した。小物から何まで手広く揃えている店だ。気に入ったものが自分も買おうかなと国近も周りを見渡していく。
　天井から下げられている案内板を頼りに場所を特定。そこに着いたところで、シアンは国近に声をかけた。絶妙な今の距離感を直すために。
「ユウにちゃんと説明しときたいんだ」
「……なにを？」
「この前ユウに言ったこと。ユウが誰と付き合おうと気にしないって言ったこと」
「っ！」
　ぴくっと肩が震えた。それの話をされると胸が痛くなる。
　国近は人知れず裾を握りしめた。

「……いいよ、別に」
「いや、ちゃんと話さないといけないと思うんだ。オレにはその責任がある」
「責任？」
「オレは……これ以上ユウを縛りたくない」
「……へ？」
　彼が何を言っているのか理解できない。
「オレは黒トリガーのことでユウを無条件に巻き込んだ。しかもユウがそれを持つことで、どうしてもユウの日常にオレが混ざることが増える。今もそうだし。……そんなオレに、ユウのことをどうこう言う資格なんてない」
　彼が何を言っているのか理解できない。
「今は阻害しちゃってるけど、ユウに幸せで平和な日常を過ごしてほしい。だから、ユウが選んだ人なら誰だっていいと思ってる。ユウを幸せにしてくれる人ならさ」
　彼が言っていることを、微塵も理解できない。
「はぁ～。薄々思ってたけど、シアンさんもバカな人なんだね～」
「え？」
　知ってしまえば何てことはなかった。そういう事ならあの発言も頷ける。納得できるとは言わないけど。
「わたし、シアンさんが邪魔だなんて思ったことないし、シアンさんに縛られてるなんて思ったこともないよ」
「いや、でもこの先は――」
「どうなるか分からないね～。好きな人ができるかもだし。でもその時はその時でいいでしょ？」
「……まぁ」
　先のことなんて分からないのだから、それを今から決める必要はない。それが必要な場面もあるけれど、今回のはそうじゃない。
「わたしはシアンさんと過ごしてる時間好きだよ？　一緒にゲームしたり、出かけたり、ご飯食べたり。朝におはようって言って、夜におやすみなさいって言う」

「行ってきます」も「ただいま」も。日常的なことを自然にできることが楽しい。親元を離れて生活しているから尚更に。
「もうシアンさんがいる生活がわたしの日常なんだから。自分を邪魔者扱いしないでほしいな～」
「……でもさ、ユウを危険な目に遭わせることもあるんだぞ？　この前もそうだし、これからだって……。それならいっそ――」
「返さないし、いなくならないでね」
「……」
　国近が黒トリガーを持たなければ危険性も減らせるだろう。シアンがボーダーから離れればそれはさらに無くせるはずだ。しかしそれを国近は先に潰す。今しがた言ったばかりだ。シアンがいる生活が日常なのだと。それをやすやすと無くしたくない。
「大規模侵攻の後にシアンさんがわたしにまた預けたのはなんで？　ボーダーに残ってるのはなんで？」
　答えは出ている。
　ボーダーでの生活を気に入っているから。ボーダーのノーマルトリガーを持っているのもそういうことだ。
「……オレが自分勝手に決めたことだぞ？　ユウの意見も聞かずに」
「嫌だったらとっくにそう言ってるよ～。わたしは、これでいいと思ってる」
「そっか……。ユウがそう言ってくれるなら、改めて誓うよ。オレがユウを守る」
「……えへへ。それ言われるの恥ずかしいよ～」
「真面目に言ってるんだけど……」
「うん。わかってるよ～。だから、これからもよろしくね。シアンさん」
「こちらこそよろしく、ユウ」
　にぱっと力の抜けるゆるい笑顔を浮かべる国近に、シアンも笑顔で返した。
　２人のすれ違いもこれで解消し、言葉で伝えることの重要性を改めて認識する。これからは誤解を招きそうな発言に気をつけようとも。

問題が解決すると国近も普段通りに。その違いに気づける人間もそう多くないが、今接しているシアンはちゃんとそれを感じ取れた。
どういう小物を買うのか。今日で一気に揃えようとすると帰りがしんどくなる。国近に手伝ってもらいながらリストアップし、優先度が高いものをマークしていく。
「……ユウの趣味混ざってない？」
「なんのことかな～」
「このクッションとやらは？」
「あったらシアンさんもリラックスできそうでしょ？」
「もって明らか使う気じゃん。てか部屋に来る気？」
「だめ～？」
「だめじゃないけども」
ボーダーにある宿舎区画。そこには一部の隊員や職員たちが住んでいるのだが、男女できっちりと分けられている。そこの部屋を寝室として扱っている者が大多数で、部屋に直接訪れる人は滅多にいない。あっても同性同士だ。異性ともなると変な噂が立たないとも限らないのである。
「わたしたちって今さらじゃないかな～？」
「言われてみればたしかに」
「意識するより、堂々としてたらいいと思うんだよね～。あの２人はああいうものって認識させちゃえば楽でしょ？」
「ならいいか」
「うん」
恋愛ごとに関して無頓着。意識するのは国近に迷惑が及ばないかだけ。そこをクリアさえすれば、わりと要望を通せちゃうことを国近は理解していた。言いくるめが簡単なのである。
「このクッションすごいんだよ～。人をダメにするクッションって呼ばれてるからね～」
「じゃあダメじゃん」
「えー」
「これ以上駄目になったらどうするんだ！」

「もうダメ人間判定されてたのわたし!?」
「だって普段の過ごし方が……」
「シアンさんも似たようなものじゃん！」
「ユウはまだ若いんだし、肌のこととか大切にしないと。勿体ないぞ」
「……っ、そこでそういうのはずるいと思うな～」
「実際肌きれいだしな。体のことは大事にしないと」
今度は国近が言いくるめられ、照れた顔を隠すように逸して髪をいじる。
「んで、ユウ。このペアコップってのは？」
「……それはその方が安いから、お得だよってこと～」
「なるほど。ユウの分のコップか。丁度いいな」
「え……やっ、ちがうよ……！　そういうつもりじゃなくて！」
「部屋に来るならユウの分いるじゃん。これで纏めて買えば得なんだろ？」
他人の恋話ならともかく、恋愛にそこまで興味がない国近でも女の子であることに代わりはない。特殊と言える生活をしているし、特殊な相手でもある。そういうのを買っちゃってもいいかなと、好奇心と細やかな乙女心でリストアップしてみただけなのだ。
そしてそれが拾われる。照れ隠しのために言ったことが仇となり、確実に国近を仕留めていた。自業自得である。
（まぁでもシアンさんは意識してないし）
彼が特に反応を示さないのなら、自分も慌てふためかなくていい。一度深呼吸し、冷静さを取り戻していく。この切り替えの速さは、さすがＡ級オペレーターといったところか。
「とりあえず、このペアコップから探すか」
「向こうの棚かな？　あ、そうだ。お会計の時領収書もらってね～。あとで払うから～」
「ん？　今日ユウはお金払わなくていいよ」
「なんで？　……焼肉のお礼ってこと？」
「それもあるけど」
シアンは玄界の物価を、日本の物価を知らない。だが、出水から話

は聞いている。あの焼肉の店は、一般的に高めの値段の店だということを。そこの料金を国近に払ってもらったことを、シアンはわりと気にしていた。
　でも理由の大部分はそこじゃない。もっと大事な理由があるのだ。
「だって今日ってユウの誕生日なんだろ？　プレゼントとかよく分からんから、オレが全部払うってことでよろしく」
「もう～。シアンさん無茶苦茶だよ～」
「実はちょくちょく不器用なんだ」
「あはは、うん。知ってるよ～」
　既に見破られていたことにちょっとショックを受けるも、それは気を取り直して押さえ込む。
「誕生日おめでとう。ユウ」
「ありがと～、シアンさん」
　今日大事なのは、彼女を祝いたいという気持ちなのだから。

攻撃手①

ボーダーの戦闘員は、実情を言ってしまえば軍隊のそれである。トリオン体という特殊な体。戦闘員であれば緊急脱出（ベイルアウト）という安全措置。普通の生活しか知らなかった世界に突如現れたＳＦ的存在たち。それにより感覚が麻痺するものの、組織を一言で表してしまうと、やはり軍隊であり、若い兵士だらけである。

ポジションも正確に分かれている。前衛を務める攻撃手（アタッカー）。中距離戦を担う射手（シューター）と銃手（ガンナー）。遠距離担当の狙撃手（スナイパー）。それらを支援するトラッパーとオペレーター。

連携を前提としながらも、柔軟性のある部隊運用。それを養える環境があってこそ、玄界（ミデン）は急激な成長ができた。

（実感は薄いんだろうな）

シアンはその仕組みを二重の意味で脅威だと思っている。着々とステップアップできる環境、実戦の積み重ね。兵士を育てるのに最適。それと同時に、死の概念の希薄化が起きやすい環境だと。

遠征組なら体感して実感しているだろう。緊急脱出を開発している国を見ていないから。トリオン体が限界を迎えれば、その場で生身になる。そしてそれが命にチェックをかけられる瞬間。

「どうした？　ぼーっとして」

「いや。この組織のどれだけの人間が、死を正しく認知できてるのかなって」

「お前さんほど認識できてる奴はそういねぇだろ。……それが気に食わねぇか？」

「そうは言わん。知らん奴まで気にかけるほど聖人でもないからな」

「どうだか」

話題に出している時点で気にかけている。それが善か悪かも、シアンの性格から考えれば善の方で。その事を自覚しているのかはともかく、太刀川の脳裏に国近のシアンへの評価が過ぎった。

――あんまりシアンを戦いにつれ回さないでね。あの人、そういう

のが好きな部類じゃないから。
　何を言っているんだと真っ先に思ったが、国近がそう言うなら可能性も捨てられないとも思った。その答え合わせのためにも、１０本勝負をこれから行うのだ。
「ブースの説明は国近から受けてるな？」
「もちろん。わからなかったら聞くし」
「オッケー。通話もできるしな。お前ここに入れ。んで俺はそっちのブース入って通信を繋ぐ」
「了解」
　シアンがブースに入るのを見届け、その番号も確認する。それを覚えたら太刀川も空いているブースに入り、シアンの番号を選んで通信を繋げた。
「俺はいつでもオーケーだ」
『オレも準備自体は大丈夫。タチカワのを選べばいいんだっけ？』
「こっちから申請送るから、シアンは承認を押せばいい」
『承認ってどんな文字だ？』
「……」
　どう説明するか太刀川は無い頭を悩ませた。こっちの文字をゲームを通じて勉強しているシアンなのだが、どうやら承認はまだ覚えれていないらしい。昔のゲームは漢字が少ないから。
「やっぱ逆にしよう。俺がいる部屋の番号を言うからそれを選べ。触るのはそれだけでいい」
『わかった』
　シアンから申請が届き、本数の設定を終えた太刀川がそれを承認する。数秒後には転送が開始され、一定距離離れた状態で向かい合うように送り出された。部隊で行う試合とは違い、個人戦はいつもこの形式。そこも設定で変えることは可能だが、攻撃手同士なのだから弄る必要もない。
「さぁ、始めようか」
　カウントダウンはなく、音声による合図のみ。
「「――旋空孤月」」

挨拶代わりの旋空孤月。太刀川は2本の孤月でクロス状に放ち、それをシアンが縦一閃に放って相殺する。
「いいね」
ノーマルトリガーの扱いも様になっている。練習していたのも知っていたが、太刀川が思っていたよりも鋭い。玉狛支部で小南と模擬戦を重ねたことが、彼の完成度を高めたようだ。
もっとも、それは太刀川の予想より上というだけで、期待通りではある。シアン自身が頃合いと判断したのも、それだけ自信があったからだ。
距離を詰める。上段から振り下ろした孤月を孤月で防がれるも、流れるようにもう1本の孤月で突きを放つ。シアンが持つ孤月は1本だけ。残りのトリガー構成を炙り出すための攻撃だ。
と言っても1つは見えている。スコーピオンと違い、孤月やレイガストはトリガー構成に入れていることが分かりやすい。孤月なら鞘があるし、レイガストもそれを納めるホルダーがある。シアンの戦闘服ではそれが見えにくいが、太刀川は既に見破っていた。
「相変わらず鋭いな……!」
「シアンもこんなもんじゃないだろ!」
予想通りのレイガスト。剣モードにし、それで突きを逸らされる。そのまま孤月の刃に沿いながら迫るレイガストを、太刀川はバックステップで躱す。
「スラスターオン」
一瞬の休みも許さず、追撃に飛ばされてくるレイガスト。
人が避けにくい箇所。つまり人体の中央。そこに寸分狂わず射出されている。それをギリギリで避けながら持ち手の部分を掴み、豪速球で投げ返す。手放した孤月が地面につく前に回収。グラスホッパーで距離を調整。15mだ。
「旋空孤月」
レイガストの左右かつ上下に斬撃の伸びの最高点がくるように放った。レイガストを避けるために左右どちらかに移動しようと捉え、上下のどちらかで避けようとも捉える。跳んで下がろうにも脚へ

の溜めが必要であり、その時間を与えるような太刀川じゃない。
（これで終わらねぇんだろ？）
そしてそれで終わるシアンでもない。一切の溜めなく旋空孤月の射程外に下がり、投げ返されたレイガストもバッチリ回収する。太刀川の視点からは仕掛けが見えなかったものの、当たりがつくと不敵に笑みが溢れた。
「他の誰もやらねぇぞ」
「お前らと同じにする理由もないだろ」
「くくっ、たしかに」
ボーダー正隊員にとっての標準装備。それはシールドとバッグワームだ。どういう隊員であれ、この２つは構成に入れている。シールドは言わずもがな、バッグワームはレーダーから身を隠すため。ランク戦において必須であり、遠征でも使用頻度は少なくない。
しかしシアンはボーダーの人間じゃない。レーダーを気にする必要がないし、遠征も国近次第だ。だから、シールドはともかくバッグワームはいらない。その分他のトリガーを入れられる。
（シールドはさすがに入れてるだろうが、２つ入れてるかは怪しいな）
割れているのは孤月と旋空。レイガストとスラスター。そして今使ったもの。８分の５が判明。シールドの数を考慮して、残り１つか２つ。１戦目でここまで割れたのは大きい。
「出し惜しみすんなよ」
「悪いな。まだ手探りなとこあるんだわ」
ノーマルトリガーを受け取った時、ある程度の説明は受けている。攻撃手用トリガーのそれぞれの特徴だったり、シールドの説明だったり。練習もした、小南相手に実戦形式でもやった。
しかし、当然だが小南と太刀川は違う。身軽さを活かした戦い方をしつつ、高い火力に繋げるのが小南で。熟練された剣筋により正面から相手を斬り伏せるのが太刀川だ。だから小南相手にレイガストを最後以外使わなかったし、太刀川にどういうやり方が合うかも手合わせをしながら探している。
小南と太刀川で共通していることがあるとすれば、どちらも二刀流

ということだろう。武器1つでの戦いが染み付いているシアンは、どうしても手数で押されがちになる。孤月による1つ1つの剣が重たい太刀川相手だと特に。
「まずは1本。貰うぞ」
「オレが掴むまで付き合えよ」
シアンが戦いながら模索しているのは、太刀川相手に実力を発揮できる戦法。具体的にはサブトリガーの使い方。それを見つけた上で勝つためにも、序盤の勝負の重要性が高い。
「次のプランだ」

□□□

ボーダーには大型モニターがある。部隊のランク戦を観戦するためのものであり、そこでは実況と解説がつく。それは訓練生たちに限らず、正隊員にも実のあるものだ。
それと同じように、個人戦のブースが用意されている場所にも大型モニターがある。こちらは実況と解説がないが、正隊員の個人戦が見れることもある。そのため、空閑のような大型新人だったり、太刀川のように知名度の高い隊員が個人戦を行うと自ずと訓練生の目が集まる。そしてその様子に正隊員たちも視線が誘導され、時に大観戦が始まることも。
現在それがまさにそれが起きており、太刀川の10本勝負の様子が訓練生たちをざわめかせている。
「なんやえらい盛り上がっとんな。なんかあるんか海(カイ)」
「お疲れ様ですイコさん！　これはアレですよ！」
「アレか。太刀川さんやん」
「太刀川さんの相手も強いんですよ！　序盤は押されてたんですけど、3本目からは互角です！」
「マジで？　やばいやん。海最初から見てたんか」
「さっきそこで聞きました」
ツッコミはなく2人の会話が続いていく。やばいのオンパレード

になりつつも、話は次第に「俺も戦いたい」という方向へ。
「太刀川さんのが終わったら頼んでみよかな」
「イコさんおれが先約入れてるんでその後にお願いしますよ」
「米屋やん。それならその後にするわ」
「これはもっと盛り上げなあかん予感！」
「何する気だ……」
　米屋に生返事をしながら海はきょろきょろと辺りを見渡し、見知った攻撃手を見つけるとそこに突撃。何やら話をしてその人物を連れて戻ってくる。
「って鋼やん」
「太刀川さんとこの勝負してる人ですからね！　上位陣との試合も見たいなって！」
「オレとしても経験を積みたいですからね。向こう次第ではありますが」
「てかぶっちゃけ、太刀川さんが本当に１０本で終わるのか怪しいよなぁ」
「米屋予約入れとるって言うてなかった？」
「太刀川さんの相手、シアンさんには取り付けてあるんですけどね。太刀川さんの後ってだけなんで、これの後とは限らないんですよ。取り付けたのもこの前だし」
「そうなんか」
　数人が順番待ちしていると分かれば、太刀川もさすがに弁えるはずだ。少なくともシアンの方から太刀川に話が通される。
　そうなることを願いつつ試合を観戦し、試合が終わると連戦ではなくブースから出てきたのを見て一安心。飲み物でも買いに行くのか、自動販売機がある方に向かっている。
「最初の２本が痛かったなー」
「結果は６対４。負けは負けだぜ」
「分かってるって。おかげで掴めたしな」
「休憩の後にもう１０本入れようぜ」
「ちょっと待ったー！」

「ん？」
やはり１０本だけで終わることはなかった。２人を追ってきてた米屋たちが静止を入れ、人が集まっていることに気づいた太刀川とシアンが若干引く。
「太刀川さんの後に試合するって予約入れてあるんすよ」
「そうなのか？」
「ヨネヤはそうだけど、もしかして他の人も希望者か何か？」
「全員５本でいいんじゃね？　その後に俺が１０本な」
「あのな……」
さらっと自分だけ１０本にしようとする太刀川にブーイングが入る。ノリノリでやっているのが海だが、彼は「自分は５本でいい」と思っているので完全にノリだ。
そうして場が温まっていく中、さらにそこに乱入者が。
「いたわね！」
「小南ちゃんやん。珍しい」
「たしかに小南が来るのは珍しいですね」
「あんたね！　あたし放ったらかして何してんのよ！」
「「ん??」」
その場にいた全員がその発言に疑問を抱く。シアンは何の話だという疑問。それ以外の人が、どういう関係なんだという疑問だ。その声が耳に届いている訓練生の中には、邪推する者までいる。
「あんなお預け……初めてだったんだから！　責任取りなさいよ責任！」
「お前小南のどら焼きになんかした？」
「何もしてないが？」
誰も間を取り持たない故に、場は混沌を極めていく。藪蛇はゴメンなのであった。

攻撃手②

国近柚宇の最近のボーダーでの生活と言えば、そのほとんどの時間をシアンと共に過ごしている。だいたいセットなのだ。とはいえ、基本的に作戦室でゲームをするのが国近の生活なのだから、そこまで大きな変化とも言えない。今日みたいに太刀川がシアンを連れ出す日も、今後は増えることだろう。

「ボクはてっきり国近先輩も試合を見ると思ってたんですが、見ないんですね」

「うん。シアンさんが戦う姿ってあんま好きじゃないから」

「もしやボクの訓練のあれはカウントされていない？」

頭の回転が悪くない唯我の呟きを、国近は聞こえなかったことにして指を動かす。ゲームしながら他のことに思考を割くのは本来難しいが、国近にとってこの程度のマルチタスクなど容易なのである。

「……シアンさんって、戦ってる時結構怖いんだよ」

「それは本気の時ってことですか？」

「うん。太刀川さんクラスが相手だと、たぶんそうなる。大規模侵攻の時がそうだったから」

参戦すると決めた時の様子も、エネドラと戦っている時も。国近の前だから抑えていたのだろうが、普段の様子からは考えられない冷徹さがその奥にはあった。そしてそこに同時に混ざる感情。国近はそちらの感情の方を大切に思っている。

「だから戦ってほしくないんだけど……、手合わせくらいならシアンさん楽しむっぽいし。困った人なんだよね～」

「そこまで困ってるようには見えないんですけど……」

「柚宇さん柚宇さん。今手空いてる？」

「どした～？」

手は空いてないが会話はできる。部屋に入ってきた出水に声だけ返した。出水もそれで取り込み中だと判断し、どうしようか一旦悩んだ。

「出水先輩今日は個人戦で暇潰しするって言ってなかったですか？」
「そのつもりだったんだけどな。ちょっと面白いことになってててさ」
「面白いこと？」
「シアンさんが注目されてるとか？」
「半分正解です。……今の展開的に、柚宇さんオコになるかもですけど」
「……ほうほう」
　キリがいいところまで進めようとしていた手を止める。その場でセーブして、国近はゲームの電源を落とす。グッと腕を伸ばして体を解すと、よしと呟いてにっこりと出水に微笑んだ。
（やべっ、ミスった）
　言葉を間違えたことを後悔するもそれは遅い。
「説明と案内してくれるよね？　出水くん」
「はい……」
　他人事のように見ていた唯我も、巻き添えで連行されたとか。

□□□

「設定も完了し、開始まで残り5分を切りました！　観戦者も多いことから、この戦いの注目度の高さが伺えます！」
「上位攻撃手たちの勝負ですからね。チーム戦ではなく個々人の試合。個人戦しかできないC級隊員たちにとっては、ある意味ランク戦より見所があるでしょう」
「なるほど！　ところで迅さんは参加されないんですか？」
「それでもよかったけど、攻撃手の解説者が必要だと思ってね。ランク戦ならまだしも、こういうのだと風間さんは関わらないだろうし」
「実際断られました！　ありがとうございます迅さん！」
「どういたしまして」
　ランク戦の観戦は客席があり、実況席と解説席も用意されている。今回はその部屋の1つを使用し、実況を海老名隊の武富桜子（たけとみ）が、解説を玉狛支部の迅悠一が務めている。

実は武富、ランク戦に実況と解説をつけるべきだと上層部とエンジニアに訴え続け、この形を作り上げた人物である。実際にボーダーの隊員の成長を促進させており、陰の功労者の1人だったりする。
「人が増えてきたので、改めてこれまでの経緯を軽く説明させていただきます。謎の人物シアンさんとの勝負を希望する攻撃手が複数人おり、そこに小南先輩も乱入。何やらひと悶着あったところで、全員まとめて勝負しようという結論に」
「シアンさん1人対他ではなく、参加者全員が敵同士というルール。バトルロイヤルというわけですね」
「そうです！　参加者は件のシアンさん、太刀川隊長、生駒隊長、村上隊員、米屋隊員、小南隊員。そして巻き込まれた影浦隊長の計7人です！」
「スコーピオン使いを混ぜたいって話になったらしいですね。風間さんが断って、影浦隊長に白羽の矢が立った」
「元々村上隊員と勝負する予定だったようですし、完全に巻き込まれ事故ですね」
「参加してるあたり、影浦隊長もシアンさんと1戦交えたくなったのだと思われます」
「このメンバーでのバトルロイヤル……控えめに言っても贅沢ですね」
「今後あるかも怪しいですし、これは必見ですよ」
　攻撃手1位、3位、4位、6位がいて、孤月を改造して槍にした米屋と、元々1万ポイント以上持っていた猛者の影浦がいる。これ以上の顔ぶれを集めるのはなかなか難しいものだろう。
「7人での戦いとなると、試合の展開が予測できないですね。近い人同士で戦うのでしょうか？」
「さぁ～、それはどうでしょうね」
「……含みがありますね」
「そこは見てのお楽しみということで」
　迅には未来予知がある。戦いがどういう展開に転がるのか、それが何パターンも視えているのだ。しかし言ってしまうと観客に水を差

してしまう。エンターテイメントを大切にする迅なのだった。
「ただ、1つだけ言うとすると」
「なんでしょう？」
「見応えのある試合になるはずですよ」

迅が場を温めていることなど露知らず、シアンは個人ブースの中で正座していた。気持ちを作るためでもなく、精神統一のためでもない。目の前で頬を膨らませている国近に真摯に向き合うためだ。出水と唯我はそそくさと退散している。今頃の上の客席で羽を伸ばしていることだろう。
「シアンさん、ほんとうに大丈夫なの？」
「手合わせの範疇だから、ユウが気にかけるほどの事にはならないと思う」
「みんな上位攻撃手なんだよ？　シアンさんが一番狙われることになるだろうし」
「その時はその時。それに、ここのシステムなら相手を倒しても本体がその場に残るわけじゃないだろ？」
「そうだけど……」
「相手が死なないと分かってるから、気楽にできるって」
相手を死なせることがない戦い。ボーダーの正隊員たちはその感覚が体に染み付いている。だから個人戦でもランク戦でも躊躇なく戦うことができる。極一部の例外もいるが、上位陣ともなれば寸分の迷いもない。それをシアンも理解している。だから今も気楽に構えていた。
けれど国近は懸念している。相手を死なせることがないと分かっているからこそ、躊躇いのない戦いだ。その感覚は殺し合いとそう変わらないだろう。シアンにとってそれはこれまでの戦い（殺し合い）と同じだ。脳内がそちら側にシフトしたら、お祭り感覚ではなくなる。
「ならさ、ユウがここにいてくれないか？」
納得しきれていない国近に、シアンは柔らかく微笑んだ。
「ユウがここから見てるって分かってれば、ユウが心配するようなこ

とにはならないと思う」
「なんでそう言えるの？」
「オレがユウに笑っていてほしいから」
「っ!!　な、なんでっ、そういうこと言うかな～」
　下手に隠すと先日のようなすれ違いになるからだ。
「殺し合いは好きじゃないけど、競い合いは好きなんだ。だから今後も誰かと模擬戦することはあると思う。その度にユウを不安にさせるのは嫌だし。ならユウが安心していられるようにするしかないだろ？　それを今日証明しよう」
「……はぁ～。シアンさんも男の子だね～」
　今後はやらないと言うのではなく、国近が懸念しなくていいように戦う。自分の我儘も、国近のこともどちらも通すやり方。本当にそうできるのであればその方がいい。
　それなら、シアンがそう言うのなら、信じて待つのが自分の役目だ。
「指切りしよ～」
「指切り？　なにそれ怖いんだけど」
「いいからいいから。小指だして～」
　小指を立てて彼へと伸ばす。それを見て彼も戸惑いながら真似た。伸ばされた小指を自分の小指と絡める。男の子と女の子で違うんだなぁとぼんやり思いながら、指切りの時の言葉を紡いでいった。彼への気持ちも込めて、詠う。
「楽しんでね。シアンさん」
「ありがとう。楽しむ範囲でやってくるよ」

□□

　戦うマップは市街地Ａ。いたって標準的なマップであり、地形の癖もない。今回の形式が形式であるため、最も戦いやすいマップが選択された。転送の方式はランク戦と同じ。全員が一定の距離を取ってランダムに転送される。
　あくまで個人戦の延長線上である戦いだ。オペレーターはつかな

い。特殊な試合でもあるため、ポイントの増減はなし。そもそもシアンがポイントを持っていないのだから当然だ。
（さてと、誰がどこにいることやら）
シアンとしては誰かを狙って動く気はない。近くにいる人から戦闘を開始するつもりだ。
しかしこの初動の時点で、シアンは他の攻撃手たちより出遅れることになる。
レーダーの使い方を知らないから。
元々時偶個人戦に付き合う程度でしか考えていなかったし、有事の際も国近の側にいるつもりだった。だからレーダーのことなんて知らない。
そして勘のいい隊員なら、この初動の遅れで絞り込んでくる。
「おっと」
遠くから投げられてきた剣を避ける。地面に刺さった2本の剣が静かに姿を消していったことから、それがスコーピオンのものだと分かる。そして今回の参加者の中で、スコーピオンを2つ編成している攻撃手と言えば。
「ウザってぇ事に巻き込んでくれたんだ。楽しませてくれよ」
「スコーピオン使いか。いいね」
家の上から跳ぼうとした足を影浦は止める。シアンが動いたからだ。降りようとしたのが読まれていたようで、そのタイミングを狙ってシアンが駆けている。足を止めた影浦にシアンはニヤリと笑い、射程に入ったところで旋空孤月を放つ。サイドエフェクトで感じ取っていた影浦もそれを避け、スコーピオンを伸ばして家の塀に引っ掛け、素早く道路に飛び出る。
「へー。そういう使い方もできるのか」
「悠長に感心たぁ余裕だな！」
スコーピオンの特徴は変幻自在であること。体のどこからでもその刃を出せること。この2つが真っ先に上げられる。また、孤月やレイガストに比べて重さがほぼ無いという利点もあり、小柄な隊員や俊敏さを売りにする隊員がよく選ぶトリガーだ。

影浦はその多様性を存分に引き出す攻撃手である。今行った移動技も、そして彼の代名詞と言われている技も。
「っ！」
「へっ。そうでなくちゃなァ！」
スコーピオンを繋げることで射程を伸ばす荒業『マンティス』。言葉にすれば簡単だが、それを実用レベルで扱える攻撃手は数少ない。初見で使われると、何が起きたか理解できずに落とされる。
それにシアンは反応し、影浦も口角を上げた。それで落ちる相手とは思っていなかったから。
影浦が腕を振るい、シアンが孤月で迎え撃つ。影浦は風間や迅とは違い、スコーピオンを刀の形にして扱うことが少ない。基本的に腕や手から生やして戦う。その上、多用するのは伸びるスコーピオンことマンティスだ。鞭のようにしなるその刃は軌道が読みづらい。
「生憎と、その手のものは経験があるんでね！」
普通の刃では信じられない動き。それを防ぎ、掻い潜りながらシアンは前へと踏み出す。マンティスの間合いでは孤月の刃が届かない。旋空孤月を使うには近すぎる。射手と銃手泣かせのその戦い方は、近距離戦を行う攻撃手にも優位に立てる。だから攻撃手は味方の援護待ちか距離を詰めるかの2択になる。
そして今回の場合、援護などないのだから前進しかない。
孤月の間合いに入りかち合う。太刀川と切り結ぶその剣速を、しかし影浦も負けじと反応している。
「ちょい、この手のやつは詰められたら日和るのが定番だろ！」
「知るか！」
マンティスをよく使うからといって、近距離戦が劣るような影浦ではない。むしろ強者とのその戦いは好物である。
ただ、1つ誤算があったとすれば、孤月1本で攻守を成り立たせているシアンの剣速だろう。
重量がほとんどないスコーピオンによる二刀流。剣を持つのではなく、刃を生やして戦うスタイル。それは剣術というよりも喧嘩に近いものだ。迫る刃を1つ防げば、反対側からもう1つの刃が迫る。剣

速改め拳速。剣を振るうよりも身軽に腕を動かしている。
それをシアンは捌き切る。片側から迫る刃を迎撃し、そのまま攻撃に転じることで反対の刃を防御に回らせる。策もない試合なら、個人での駆け引きがあるのみ。そして、駆け引きを成立させ、攻守を作らせることで手数の差を補っている。それに一役買っているのが、孤月とスコーピオン。トリガーの性能の違いである。
（かち合ってもスコーピオンの耐久度に限界がきやがる）
限界を迎えてもまた作ればいい。消費トリオンの少なさ、そのコスパの良さもスコーピオンの利点の1つである。
問題はそのタイミングだ。シアンの剣速は速い。間に合わなければダメージを負うし、遅くても限界を迎えてそのまま斬られる。だから影浦は頃合いを見切ってスコーピオンの刃を新たに生成している。この駆け引きが成立することで、2人は拮抗していた。
「うはー。孤月でその速さってやばいでしょ」
その終わりは突如やってきた。いや、今回の試合の起点を考えれば当然か。
横から聞こえた声にシアンは反応し、影浦と弾かれ合うように距離を取る。その直後に、近くにあった壁や電柱が切断されている。影浦の次にシアンに近かった米屋が乱入し、旋空孤月を使ったようだ。
「太刀川さんに張り合うだけありますね」
「チッ。もう邪魔が入ったか」
サイドエフェクトで察知していた影浦は悪態をついた。これでもかと露骨に攻撃的な視線を米屋が送ってきていたのだ。独り占めするなと言外に意味を込めて。
「太刀川とやって改めて実感してな」
「何をですか？」
「剣って片手よりも両手で振ったほうが強い」
米屋と影浦は全く同じことを思った。
「バカだろお前」
影浦は口にした。

攻撃手③

大規模侵攻の後、遠征計画を発表したボーダーは、主に上層部やスタッフたちが大忙しだ。各方面の細かな調整、遠征に向けたガイドラインの作成。元より多忙な日々がさらに忙しくなる。

そんな上層部の会議室には、モニターも設置されており個人戦やランク戦の様子を見ることも可能となっている。

そしてそこに流れている映像。現在進行系で行われている試合に、メディア担当の根付は頭を抱えていた。

「こんな堂々と姿を晒すとは……」

「枷を緩め過ぎましたな」

「近界民ってことは知られてないし、迅がそこにいる。止めずに乗っかってるってことは、悪いことにはならんでしょ」

「しかしだね林藤支部長」

そうであったとしても、シアンはボーダーの隊員ではない。その正体を突き止めたがる人は出てくるだろうし、噂話で正体を捏造する人が出るかもしれない。それを解消する苦労を考えると、どうしてもため息や愚痴を言いたくなるものだ。

「そこも迅に考えがあるんでしょう。慶も何かしら言及するはずです」

「当てにするには不安が残る2人なんですがね……」

発言力はある。影響力もある。彼らの発言を正隊員は信じるし、そうなれば訓練生も受け入れる。邪推したとしても、それを大きな声では言いづらくなる。最悪の事態になることはない。

「……今は置いておくしかないだろう」

終わったら呼び出す。

城戸は内心でそう決めた。

□□□

攻撃手（アタッカー）大会。その開幕直後に戦闘が起きた場所は、件の中心人物であるシアンがいる場所。
その後に発生したもう1つの戦闘箇所。そこでは、現隊員最強の座にいる太刀川慶と鈴鳴第一のエースにして攻撃手4位の村上鋼が交戦していた。
「また腕を上げたな」
「まだ太刀川さんには及びません。ですが、この刃を届かせてもらいます」
「やれるものならやってみるんだな」
村上鋼はそのサイドエフェクトにより脅威の成長速度を見せている。そう思う者も多いだろう。その実、彼のサイドエフェクトは強力なものだ。学習能力を飛躍的に上げている。だが、彼の強さの秘訣はそこじゃない。それはおまけに過ぎない。
村上鋼は誰よりも自分の実力を理解している。自分の強さがどの程度あるのか。現時点が何をどこまでできるのかを理解している。そして、自分に足りないもの、自分では気づけないこと。それらを貪欲かつ正直に他者から吸収する。その生真面目かつ誠実な性格が、彼の強さの秘訣である。
だから村上は、現時点で自分より高みにいる太刀川に勝てるとは思っていない。連戦すれば負け越す。勝てる時もあるが、それがこの一本に回ってくるかは不明。
それでも、否。だからこそ村上の集中は極限にまで高まる。負けるつもりで戦うなど言語道断だ。気持ちは前を向いている。
その気持ちと同じように踏み出す。盾モードのレイガストと孤月が戦闘スタイル。踏み込むことでその盾を相手に押し込む。人間が力を最大限に発揮できる位置は決まっているから、それよりも前に太刀川の剣を抑え込む。
中途半端に伝わる力を感じるのを待たずに、村上は盾の外側から孤月を振るった。初動を阻害されたのだから太刀川の防御は遅れる。その孤月は間に合わない。
「ぐっ……」

苦悶の声を洩らしたのは村上だった。
孤月を振るう腕に合わせて太刀川がサマーソルトを決めたからだ。足先で的確に肘を蹴り上げられる。腕が曲がったかという錯覚を強引に頭から外した。足を地につけた太刀川が、電光石火の速さで次の攻撃に繋げてくるからだ。振り抜かれる２本の孤月をレイガストで防ぐ。強力な一撃に堪えるために足に力を入れるも、それは足を封じられたと同じ。
普通ならそこから崩されて終わるものを、村上は上げさせられていた腕を戻すのを間に合わせ、劣勢の状態を脱する。――そんな２人を横から見る生駒達人。
「それくらいはするよな」
その成長を期待している者として、太刀川は村上の対応力を見て満足気に口角を上げた。
たとえ近接戦であろうと、その場に留まるなど的に等しい。鉄壁の防御と鋭い剣速。攻守のバランスがいい村上であっても、その場から動かずに戦うことはしない。８０００ポイントを超すマスタークラス。そこからさらにポイントを積み上げる人物が相手だと特にそうだ。
攻撃の起点とするための防御。距離感を調整しながらレイガストで防いでいると、グラスホッパーで太刀川が上昇した。
その高さは１５ｍ。
太刀川が両手で孤月を構え、村上もすぐさま行動を起こす。
「旋空孤月」
「スラスターオン」
クロス状に伸ばされる斬撃。その隙間、太刀川の下に潜り込むように、村上はレイガストのオプショントリガーを起動して滑り込んだ。いくらレイガストの盾モードでも、太刀川の攻撃は防ぎ切れないからだ。
「旋空孤月」
潜り込みながら真下から旋空孤月を放つ。旋空は起動時間によりその距離を変えられる。起動時間が短いほどにその距離は長くなり、

それを実現させるために求められる剣速も速くなる。現状、生駒が放つ旋空孤月が最速にして最長である。
距離が近いと分かりながらも、村上は旋空孤月を放った。それを太刀川は空中で振り返りながら同じく旋空孤月で迎撃する。さらに太刀川はグラスホッパーを起動し、上段から2本の孤月を振り下ろした。――それを2人の視界の端でピースしながら見ている生駒達人。
「さっきから何なんだ生駒！」
とうとう太刀川がそこに触れた。村上から距離を取りつつ、手で待ったと伝えながら。村上もそれで視線を生駒に移す。
「いや2人のレベルの高さに感動するなと思いまして。あとタイマンの邪魔するのもアレやし」
「視界の端にずっと入ってるくせに何言ってんだ」
「2対1になるのもフェアやないし」
「俺は構わねぇぞ。2人でこようと勝つのは俺だからな」
「うわカッコイイわぁ。1位やないと言えないやつじゃないっすか。村上くんはどう？」
タイマンにこだわりがあるのか。それとも生駒が混ざっての2対1でもいいか。あるいバトルロイヤルらしくするか。
「構いませんよ。太刀川さん落とさないと、どのみちあの人には挑めませんからね」
「せやな。あとで頼んでもやってくれそうやけど、今やりたいって気持ちが燻っとるもんな」
生駒が孤月に手をかける。参戦の意志が示され、太刀川と村上も気を引き締め直す。
ボーダー最高峰レベルの攻防一体の村上鋼と、ボーダー最速の剣速を誇る生駒達人。
ボーダー最強の攻撃手たる太刀川慶との戦いの火蓋が切って落とされた。

□□□

米屋陽介はトリオン量が少ない。それ故にトリガー構成はシンプルなものだ。シールドやバッグワームといった必須のもの以外だと、武器は改造孤月の1つだけ。あとはオプショントリガーの旋空と幻踊(げんよう)のみ。

トリオン量が少ないからこそ、彼は打ち込み続けた。ライバルたちとしのぎを削り、高め合い、A級にまで登り詰めている。トリオン量だけが全てではないと体現する者の1人というわけだ。

ランク戦が好きな彼は暇さえあれば誰かと戦う。特定の師を持たず、他に誰も使っていない槍術は、その日々の中で磨かれた。流派も型もない。実践の中で培った感覚を頼りに試行錯誤して身につけた力。それは柔軟な戦い方を可能としている。

「うはっ、やべぇなこの人」

そんな彼でもそう溢した。太刀川との試合も見ていたから、その実力の高さは分かっていた。だがやはり、実感するのとでは話が違う。

(まじで速え。影浦先輩がいなかったらヤバかった)

米屋が参戦し、悠長に戦っていられないと判断したからか、シアンの集中力が増している。その速度、狙いのキレが一段階高くなり、防御が減った。完全に受け止めるための動きよりも、相手の攻撃を掻い潜る動きが増えている。要はカウンターだ。

それにより長物の長所たるリーチが意味をなさなくなり、防戦に回されることが増えた。乱戦に強い影浦がいなければ、その苛烈な攻撃は全て米屋に注がれていたことだろう。

「あの刃を曲げるやつは使わないのか?」

「初見で防がれると使いにくいっすよ」

しかも米屋は交戦の初手に幻踊を使っている。脅威の瞬発力で避けつつ、幻踊で狙った箇所からスコーピオンを覗かせて掠り傷すらつけさせなかった。そこまで完璧に反応されると、使いにくくなるのも無理はない。幻踊も旋空と同じでトリオンを消費するもので、米屋はトリオン量が多くないのだから。

米屋自身、今回の試合の目的はシアンとの交戦だけなので、トリオンの節約は考えていないが。要は使いどころの見極めをしているの

である。
「2対1の現状を対応してる人相手だとなおさら」
米屋の槍、影浦のマンティス。孤月で大部分を捌きながら、的確にスコーピオンを体から生やして残りを対応。それができるからこそ、シアンは攻勢に回ることができていた。
なおかつ、影浦と交戦した後に米屋と交戦したことも影響している。この順番で戦ったからこそ、シアンは影浦に何かしらのサイドエフェクトがあると見抜けた。
(こいつ、攻撃の視線自体をフェイントにしてきやがる)
実際に物質化させたスコーピオンを飛ばしてくることもある。それがどうなるか、動作の直前まで読ませないことが、影浦への大きな牽制となっていた。
影浦は米屋と共闘するつもりはなかった。シアンとの1対1がスリリングな思いをできるという確信もある。楽しめる。そのために米屋を落としてもいいのだが、米屋もそれが分かっていて立ち回っている。あちらはあくまで影浦を利用するという考えのようだ。部隊でやるランク戦を彷彿とさせる。
「巻くか」
米屋の突きを躱したシアンが、そのまま米屋の腕と服を掴んで放り投げる。投げる先は影浦との直線上。
「旋空孤月」
孤月を抜刀。米屋への攻撃であり、影浦はあくまでその余波を受ける形。実際には狙いが影浦で、ある程度離れた場所に影浦がいる。
落下する中で米屋は槍を地面に突き刺し、腕の力で自分の体を支える曲芸を見せた。これにより米屋は孤月を回避し、初動が遅れた影浦は片手が斬られる。代わりに投げたスコーピオンが米屋の腕に深々と刺さる。
「簡単にはいかないか。影浦やっぱ厄介だな」
「孤月を手放したのはこの為か。怖い人だぜ」
トリオン漏れが起きている腕の様子を確認しつつ、米屋はこの後の行動を考える。腕を動かせるが、今2人の間に挟まれている。真っ先

に落とされてもおかしくない。ならば今の場所を離脱することが最優先。２人の動きに注意を払いつつ、横への移動を開始する。
そちらにあるのは一般的な家。塀を足場にし、さらにもう少し距離を取ろうと屋根の上に。
そこに足をつけるその瞬間、足場にするはずの家が崩壊した。
「は?!」
何が起きたのか混乱したのは一瞬。崩れ方はランク戦でよく見たもの。メテオラでの爆撃。シアンと影浦がいる方向にもメテオラは放れているが、米屋はそこに意識を向けていられない。
メテオラに気づけなかったのは、それが後ろから放たれていたから。オペレーターがいないことで、他の人の接近に気づけていなかった。
崩れゆく家の中で、迷い無く一直線に動く影。それを視界に捉える時には既に相手が武器を振りかぶっていた。
「ちぇっ、もう少し遊びたかったなー」
槍を振るのも間に合わない。身の丈もある戦斧を少女は豪快に振りぬいた。
「あ・ん・た・は!」
そこで止まるような少女じゃない。戦斧を解除し、二振りの武器へと戻しつつ彼女はシアンへと襲いかかる。
「あたしだけにしとけばいいのよ!」
「誤解しか招かないことを叫ぶな!!」
米屋と入れ替わるように、小南桐絵が参戦した。

攻撃手④

２つの戦場。そのどちらからも１番離れていた小南桐絵は、どちらに行くかという選択肢があった。それと同時に賭けでもある。小南もまた狙う相手がシアンで、それ以外に興味がない。玉狛支部で行った勝負の決着が残っているから、それも相まって他の攻撃手が眼中になかった。

味方もいなければオペレーターもいない。その戦場にそれぞれ誰がいるのかも分からない。分かるのはレーダーによる位置情報のみ。どちらも３人ずついてなおさらに迷った。

戦ったからシアンの実力は分かっている。そう簡単に落とされないという信用もある。だが、上位の攻撃手２人を同時に相手取ったら、もしもがあるかもしれない。

時間が惜しかった。迷う時間など無駄でしかない。小南は直感に従い移動を開始。

戦いにおいて高所が有利とされるのも理由がある。まず射線が通ること。できる仕事を増やすためにも、銃手や狙撃手はそこを抑えるのが鉄則とされる。射手も編成によっては当てはまるが、出水や那須のようにリアルタイムで毎回弾道を引く人は例外だ。

次に、視界が捉える情報を増やすこと。索敵という点でも高所は有利だ。障害物が少なく、陰に隠れている人以外は視界が捉える限り見えるのだから。

だから小南もそうする。屋根から屋根へと移動しながら、極力高い位置を取って戦場へと近づく。今向かってる場所にシアンがいないと分かれば、すぐにもう１つの場所に迎えるように。タイムロスを減らすためにも、高所を取りながら最速で移動した。

「いた」

遠目にシアンの姿を確認できた。他には米屋と影浦がいる。

極力気配を消しながら迅速に接近。家を１つ挟んで向こう側に３人いる距離まで近づくと、今いる場所から道路へと飛び降りながらメ

テオラをセット。間にある家を吹き飛ばす用と、残りは適当に牽制用。
　着地に合わせてメテオラを半分発射させる。誰にも気づかれていないから、メインとサブの両方を使ったメテオラフルアタック。半分だろうと威力と数は十分。
　一瞬でレーダーを確認。運の悪いことに丁度1人が爆破される家へと近づいていた。
　メテオラが家に着弾。爆発し、倒壊していく家とそれでバランスを崩した米屋を走りながら視界に捉え、コネクターを起動させる。双月を1つの斧へと変えるトリガー。自分専用のもの。それに合わせて時間差で残りのメテオラも2人に放っておく。
　瓦礫に紛れようと最初に視界に捉えていたから問題ない。向こうもこっちに気がついたけれど、もう遅い。跳躍し、高さを合わせ、すでに振りかぶってる。
「ちぇっ、もう少し遊びたかったなー」
　そんなことは知ったことではない。小南はどこか冷めたような顔で、その瞳には僅かな怒りも灯しながら双月を振り抜いた。
　米屋を緊急脱出（ベイルアウト）させ、それを一瞥もすることなく小南はその足を進める。双月を二振りの剣へと戻しながら、よく分からない怒りを作らせる相手を倒すために。
「あ・ん・た・は！」
　顔を見たら勝手に口が開いていた。込み上げて来る妙な感情にさらに苛つく。それをぶつけるように、彼へと双月を振り下ろす。
「あたしだけにしとけばいいのよ！」
「誤解しか招かないことを叫ぶな!!」
　そんなの知らない。それもこれも目の前の彼が悪いんだ。

□□□

「あーっとここで小南隊員が奇襲！　米屋隊員を落としてそのままシアンさんへと襲いかかる！」

「米屋隊員は運が悪かったとしか言えませんね。ただ、小南隊員も今回の特別仕様をよく理解して奇襲してます」
「と、言いますと？」
「オペレーターの存在です。Ｃ級隊員にはまだ実感の沸かない話だと思いますが、正隊員は任務やランク戦で必ずオペレーターの援護を受けます。常にマップ全体が見えていて、バッグワームを使われない限りその動きを把握できる。なので敵が寄ってきてることも、戦闘員は視界に捉えなくても把握できるわけです」
「そうですね。わたし達オペレーターにとっては基本中の基本として教わります」
「そう。その恩恵が今回はない。バッグワームを使う必要もないし、戦っている当人たちは戦闘に意識を割くのでレーダーを見る余裕もない。その結果、Ａ級の米屋隊員でも奇襲に完全に飲まれたわけです。タイミングはあれ狙ってないでしょうから、事故みたいなものですけど」
「ということは、米屋隊員以外でも同じ結果になったと考えていいのでしょうか？」
「基本的にはそうでしょうね。影浦隊長はサイドエフェクトがあるので例外として、太刀川隊長みたいに足場を自在に作れるグラスホッパー持ちだと、話は違ったかもしれません」
「なるほど」
「付け加えて言えば、シアンさんが戦闘に集中しているので、余計に米屋隊員も周囲への意識を削がれたわけですね」
　レーダーの存在が頭にないシアンは、自分の認知する範囲がそのまま情報の入手源だ。他の乱入も頭にはあるが、先に倒せるのならその方が後々楽になる。だから集中していた。そして小南には、それを利用して確実に奇襲を決めるだけの実力がある。そのサイドエフェクトで察知できる影浦でも、あのタイミングなら手痛いダメージを貰ったことだろう。
「さて、ここからの展開にも注目したいですね」

□□□

太刀川たちの戦闘箇所と、シアンたちの戦闘箇所。どちらも3人ずつではあるが、その内容は違っていた。村上と生駒が手を組んだことで、太刀川は完全なる1対2の状況。シアンの方だと、影浦と小南が手を組まないので1対1対1。だが、小南はシアンにのみ攻撃するため、少し特殊な戦況だ。

双月を振るう。コネクターを使用すれば高い火力を出せる戦斧になるのだが、その分使い道が限られる。確実に相手を仕留められるタイミングでなければ、その使用は控えたい。

支部で行った戦いで嫌というほど理解させられた。シアン相手に斧モードにすると、それは隙を自ら作るだけの行為になるのだと。

単純な話だ。破壊力が増す代わりに、二刀の時よりも速度が落ちる。それは誤差程度のものだが、その差が大きい。さらには、斧の方が動きを読まれやすい。だから小南は、双月を繋げずに戦うことを選んでいる。

（もやもやするけど、ここは我慢！）

小南の性格から言えば、斧モードで豪快に倒したいというのが本音だ。もしくはメテオラを織り交ぜて戦う。しかしメテオラを使うなら、それはそれでメテオラに繋げるための戦闘運びが求められる。主導権を握らなければ決まらない。

そこがまさに綱引き状態だった。

双月のリーチは孤月より短い。それを活かすためにシアンへと張り付く。その距離では孤月を使う方が窮屈だ。

そこに遠慮も容赦もない影浦の攻撃が伸びる。2人諸共貫こうとするその狙いは、シアンが寸前で躱した。背後からの攻撃であっても、まだそちらに意識を割けていて反応できた。

それを喰らったのは小南だ。シアンの体で見えていなかった小南は、彼の動きで理解するも反応が僅かに遅れた。シアンの胸の高さは小南にとっての顔の高さ。眼前に飛び出してきた刃を、小南は驚異的な反応速度で致命傷を避けた。頬を斬られるも、比較的浅い傷だろ

う。
（気は乗らねぇが、余裕残してんのもウザってえ）
邪魔をするなと目で訴えてくる小南を無視し、影浦はため息をつきながら髪を荒く掻いた。本当なら明確な終わりが来るまで1対1で遊んでいたい。だがシアンはまだ余力を残した状態だ。
互いの全力でぶつかりたい。どうせなら1対1で。
けれど小南が邪魔だ。そしてランク戦と同様に時間制限もある。小南が負けるのを待っていては、残りの時間が足りなくなるかもしれない。
――仕方がない。本当に仕方がない。
影浦に目で訴えた瞬間を狙った一閃。小南に迫る孤月。それをマンティスで牽制することで中断させる。
影浦が小南を守った。それに意外そうにしながらシアンは2人から距離を取る。
「助けなんて求めてないんですけど」
「うるせェ。共闘だ。勝つならこいつの全力を引き出してからの方が気持ちいいだろ」
「……それもそうね」
玉狛支部での勝負は、互いに制限がかかっていた。小南ならメテオラを使わず、シアンなら孤月一本。最後だけレイガストを使われたがあれはノーカウント。
双方が縛りのある状態。その勝負も悪くはないが、全力を出し合った上で勝ったほうが気持ちいいというのも頷ける。
そして今も、シアンが余力を残しているのは小南にも分かっていた。もう1つの場所で戦っている太刀川。彼との勝負を想定しているのだろう。それは気に食わない。
「言っとくけど、あたしに連携なんて求めないでよね」
「勝手にしろ。勝手に合わせてやる」
連携が苦手なわけじゃない。下手に合わせては足を引っ張り合うだけだと分かっているから、小南は好きに動くと宣言した。それに影浦は同意する。自分のサイドエフェクトは乱戦向きだが、マンティス

自体は援護にも向いている。ならば今回はそちらに回る。状況次第では変えるが。
「上等。行くわよ！」
小南が双月を構えて突っ込む。
「メテオラ！」
駆け出しと同時にメテオラも発射した。ちゃっかり旋空の間合いを取っていたシアンの出だしを崩すために。本人へ向けるだけでなく、その足元も狙う。集中させるのではなく広げて放ち、面攻撃にした。
メテオラは爆弾だ。その爆破範囲にこそ真価がある。直撃しなくても、爆破範囲内であればノーガードの場所を削られるのだから。
「旋空孤月」
適正距離ではないが、旋空孤月をシアンは使った。最上段のメテオラを両断し起爆させる。ついでに小南も狙ったが、そちらは姿勢を下げることで避けられた。
残っているメテオラは角度をつけられている。タイミングを合わせて後方へ大きく跳べば回避可能だ。
「そうするだろうな」
跳ぶタイミングを狙って影浦が物質化した剣のスコーピオンを投げ飛ばす。
それを孤月で防ぐも、今度は着地際を小南が狙った。タイマンの時では使用を控えていた斧モードで。
「スラスターオン」
急いでレイガストをホルダーから取り出し、緊急脱出代わりにスラスターを使う。避けるためではなく、カウンターとして。剣モードではなく盾モード。剣モードだと影浦の攻撃を防げないから。
「ぶにゃっ！」
盾を顔に押し付けられ小南は、可愛くも変な声を出した。しかしただでカウンターをさせる小南ではない。斧モードの双月から片手を放し、レイガストの盾をずらした。
「っ！」

「逃がすかよ！」
シアンもレイガストから手を放し、地面を強く蹴る。小南によってずらされたレイガストの方へと飛び込むために。ずらされた盾を再度盾として有効活用するために。
だが影浦の反応速度も速かった。そしてスコーピオンを巧みに操るその実力を見せつけた。
レイガストの盾を活用し、その次の隙もなくすために飛び込み前転をしたシアンだったが、その左肩からトリオンが漏れていた。その量は多くないが、傷は完全に肩を貫通している。
「地面の下から……。スコーピオンは奥が深いな」
「ようやく傷を負ったな。ここからだぜ」
モールクロー。マンティスと同じ要領で、その距離を伸ばしたバージョンだ。小南を避けた上で盾も避けて攻撃を当てるのは難しい。だから下から狙った。
案の定シアンにとっては想定外。胸を刺せればそれで終わりだったのだが、そこは間一髪といったところか。
「いいね。楽しくなってきた」
獰猛に笑う影浦と、不敵に笑うシアン。
その勝負の決着は、着々と近づいているのだった。
「あたしを無視してんじゃないわよ！」

攻撃手⑤

個人戦のブースは、個室でありながらも少し広い。同じ部屋に5人までなら、窮屈な思いもしないことだろう。そのため、仲のいい人と同じブースに入る人もいる。

ボーダーはどこにでもモニターがあると言えるくらいその数が多い。個人戦のブースにもそれぞれある。だから国近は、シアンの戦いをその部屋の中から見守っていた。

驚き、感心し、刃を交える。

戦いを純粋に楽しむその姿は、太刀川たちのように好戦的な攻撃手と重なっている。

それ自体は悪くない。「楽しそうだな」「男の子だな」と思いながら見ていた。小南の相手をしている時は胸の中に靄がかかるが、それも今はいい。今は懸念が勝っているのだ。

「シアンさん……」

無意識のうちに彼の名前を呟いた。当然、その声は届かない。

画面に映る彼。誰よりも側にいると自認しているのに、遠く感じてしまう人。それは知らない一面があるから。初めて見た時に抱いた思い。それに関することは何も知らない。

けれど予感はある。

今のままでは不味いのだと。

国近はゲームを通して彼の性格を知っている。自分と同じ負けず嫌いだ。彼の場合、それはゲームに限った話じゃない。太刀川とよく張り合う。

戦闘も例外ではない。

全力を出して負けるならまだ受け入れられよう。余力を残して負けては、自分を叱ることだろう。

今よりさらに集中力を増せば、押され始めている状況を立て直せるかもしれない。彼はきっとそうする。そうしてしまう。

予感が正しければ、それは国近にとって見たくない姿だ。

けれど同時に信じたい気持ちも抱いている。そうならないようにすると言ってくれたのだから。
「シアンさん」
今度は意図して言葉を紡いだ。
祈るように。胸の前で手を重ねて。

□□□

勢力が入り乱れた戦いと、整った戦いとでは全く違う。全員が自分以外を警戒して戦うのであれば、目の前の敵にのみ集中することはできない。漁夫の利を取られるのが関の山だ。シアンにのみ攻撃していた小南でも、影浦の動き自体は警戒していた。
全員が全員、完全に前のめりにはならない。だからこそ余裕が生まれてくる。
それが今はない。
影浦と小南が完全に手を組んだ。攻撃手3位と元1万ポイント以上の攻撃手。即席であろうと、お互いの手の内を知っているから連携も可能だ。この2人ほどの実力者なら。
何よりも、役割を割り切っている点がその力を存分に引き出させているのだろう。小南が突っ込み、影浦が援護する。
性格で言えば影浦も最前線で戦うタイプだ。強者との戦いを楽しむ。だが、彼の代名詞たるマンティスが援護も可能なトリガーである。しかも小南のトリガー構成は援護に向いてない。この形になるのは必然だ。
「ははっ、これはまいったな」
「まだ笑う余裕があるのね」
空元気だ。この2人を本当の意味で同時に相手にするようになって、余裕を残せる相手の方が珍しい。シアンの知り合いの中でも、それができる人物は片手で収まる人数しかいない。代表格はヴィザ。
シアンは迷った。この2人の狙いは、シアンに100%の集中をさせて、その上で勝つこと。全力を引き出させないと満足できないか

ら。
しかしシアンはそれをしたくない。その状態こそ、国近が見たくない姿なのだから。シアンもそれをしないと約束している。
「エンジョイ勢ってのは許されないか」
「負けた時の言い訳にでもする気？　カッコ悪いだけよ」
「たしかにな」
どうせなら勝ちたい。やるからには勝ちたい。
どちらを選ぶか。
たとえカッコ悪いことになっても、国近との約束を守り通すか。それとも2人に勝つために最大限集中して挑むか。
「どっちもだな」
「……？」
国近との約束を守った上で、小南と影浦に勝つ。どちらかしか選べないと考えるのではなく、どちらも選ぶために考える。決められた選択肢の中で戦うのは、ゲームの世界だけだ。
だから、９０％代までにする。そのギリギリを保つことにした。
一旦太刀川のことを忘れる。この場にいない攻撃手のことも忘れる。意識を割いていて勝てる相手ではない。
旋空を使うには短過ぎる距離。ならば、最速で詰めるだけ。
「っ！」
距離を詰めたときに最速で放てる攻撃は何か。それは突きだ。当人の速さと武器のリーチ。それらによってばらつきは出るが、武器を伸ばすだけで攻撃が成立するのだからそれより速いものはない。到着がイコールで攻撃を意味している。
それを小南は双月を胸の前で交差させて防ぐ。突きの厄介さは速度だけじゃない。攻撃範囲の小ささだ。剣を振るうのなら、その刀身のどこであろうと防御を成立させられる。しかし突きは点だ。武器が細いほどに防ぎづらい。そして、防いだとしても攻撃した人間次第でその破壊力はその一点に凝縮される。
「チッ！」
シアンの突きを防いだ小南が後方に飛ばされる。入れ替わるよう

に影浦が仕掛けた。体のどこからでも出せるというスコーピオンの特性を使った変則二刀流。
突き出した孤月を体ごと引く。後方に少しずつ下がりながら影浦の攻撃を流していく。右から、左から。交互に迫る攻撃を捌いていく。下がる速度、方向。それを調整することで、影浦の刃が自分に届く時間を乱れさせた。手数が劣るのなら、1本で捌けるように動くのは当然だ。
それだけでなく、飛ばした小南から距離を取るのも狙いだ。連携されては押される。ならば、一時的にでも片方を射程外に飛ばす。1対1の状況を作り出す。
大きく後ろに下がらないのは、影浦がそうさせないから。マンティスの間合いで戦ってしまうと、そこから大きく下がられた時に対応できない。逆に距離を詰めてしまえば、大きく下がろうともマンティスで追撃ができる。
「やってくれたわね！」
飛ばされた小南が素早く復帰する。一直線にシアンの下へ戻るのではなく、射線を通すために屋根の上へ。
「メテオラ！」
狙いは直撃ではなく、彼の後方。後退させないための妨害行為。それによりシアンは足を止めるしかなく、その場から逃さないために影浦が猛攻を仕掛ける。そして小南はそれに任せない。自分の手で取りに行く。
メテオラは妨害だけでなく、煙を作らせて自分の身を隠すため。
コネクターで双月を繋げる。ボーダーが所有するノーマルトリガーの中で最大火力を誇る斧形態に変える。
煙越しであろうと、トリガーの光でその位置は特定できた。影浦にはサイドエフェクトがあるから問題ない。
（たとえ気づけなくても、シアンを敗北させられるのなら諸共でもいいでしょ）
小南に遠慮なんてものはなかった。
「避けろ！」

「え？」
駆け出した直後に煙の向こうから聞こえた声。それの意味を理解せぬまま、されど経験則から反射的に体が回避行動を取った。直感に従った回避。どう避けるのが正解かもわからない状況で、しかし小南は正解を引き当てる。
煙の向こうから伸びてきた光。光線のように真っ直ぐ伸びたそれが、小南の脇腹を掠めた。
（今のは……）
トリオン漏れが起きる脇腹を抑えながら煙の向こうを警戒した。晴れる前にシアンが煙を突き抜けて屋根の上に。小南を狙った代償か、その左手は影浦に斬られていた。
「まさか教えるとは。何も言わないものだと思って仕掛けたのに」
「ハッ。共闘だっつったろ」
「良い奴かよ。え、めっちゃ良い奴かよ！」
「うっせぇぞ！」
「照れるなよ」
「どこをどう見たらオレが照れてんだコラ！」
サイドエフェクトが無くとも、温かい目で見られると鬱陶しい。そしてサイドエフェクトがあるから、余計にシアンの視線が鬱陶しい。
ケラケラと笑うシアンを見て舌打ちする。片腕を無くしたのに笑っている。余裕はないはずなのに、それでも笑っているのだ。彼もまた、純粋に戦いを楽しむタイプだと影浦は断定した。
家の上にいる相手。影浦と小南のどちらも道路にいる。中遠距離戦において、基本的に高所が有利だ。相手の位置を把握しやすいのと、射線を通しやすいから。
近距離戦をする人間だけなら大した意味もない。だが、シアンは旋空を使う。片腕が消えようと、孤月を振れるのなら射程を伸ばせる。近中距離戦ができる。
「メテオラ！」
距離があるのなら、射程が長い方が有利だ。高低差があるのなら、高所の有利を活かせる人間が優位に立つ。それを潰すために距離を

詰めようとすると、詰めるまでの間が被弾しやすくなる。
ならば前提条件を崩せばいい。
メテオラは簡単に言えば爆弾。家を破壊するぐらいならどうとでもできる。
「旋空孤月」
そのために放たれたメテオラをいくつか切断して起爆しながら、連続して旋空を使うことで小南にもその刃を伸ばす。
そうするとフリーになるのは影浦だ。そして彼は混戦の方がその真価を発揮できる。メテオラが飛んでいようと関係ない。
（左手は斬った。レイガストはない。が――）
右手に握っている孤月ではなく、切断面から生やしたスコーピオンで影浦の攻撃を弾く。
「そうするよなァ」
「ほんと、良い奴だよお前」
小南のメテオラによってバランスを崩した家が倒壊していく。その中でも影浦は攻勢に回った。スコーピオンは使い手次第でどうとでもなるトリガーだ。その特性を存分に使い、シアンの離脱を阻害した。
仕掛けた理由の1つは、シアンがスコーピオンを使うことを小南にも教えるため。もう1つは、攻勢に回り続けるため。
肩の損傷と左手の切断。スコーピオンを使うのならそこまでの不利ではないが、トリオンは確実に削られている。加えて今の状況、瓦礫と共に自由落下する中で影浦と交戦。攻撃が止んだことで小南も着地を狙おうと動き出している。
絶体絶命。一撃死を免れたとて、貫う一撃は勝敗を決めるだろう。
観戦している者たちはそう思った。
対峙している2人はそう思わなかった。
だから油断なんてしない。気を抜くことなんてあり得ない。どれだけ追い詰めようと、確実に相手を戦闘不能にしない限りその手を緩めない。上位攻撃手である彼らは当然、それを心得ている。
着地する前に、人ひとり分の高さでシアンが身をよじる。瓦礫を足

場に回転し、防がれはしたが影浦を蹴ることで僅かに跳んだ。
孤月を小南の脚に目掛けて投げる。それくらいやるだろうと読んでいた小南は、最小限の動きでそれを軽傷に済ませた。回避しなかったのは、攻撃の手を止めないため。
斧形態の双月はすでに構えている。この距離ならあとは振り抜くだけ。
「ーー!?」
振り抜こうとしたタイミングで引っかかりを感じた。突然のことで視線が一瞬そちらに向かってしまう。それを戻しながら体を後ろに倒してシアンとのすれ違いをやり過ごした。
着地しながらシアンが孤月を取る。体勢を戻したのは小南より先だった。
小南に畳み掛けようとするシアンを止めるべく影浦がカバーに入る。2人の距離、自分との距離。2人の動きの予想。誤射の確率を下げることも考慮して使ったのはマンティスだ。好んで使う技である以上、その使用に確固たる自信がある。
それを待っていたかのように、シアンは横に跳んだ。つまり影浦の方へ。マンティスを孤月で逸らし、体を斬られるのも必要経費として流す。そして仕掛けた。これまでのことをブラフにして。
「……ごめん、ユウ」
「っ！　……テメエ」
影浦のトリオン体に罅が入る。シアンとの距離はまだある。だが、影浦の胸にはたしかにシアンの伸ばしたブレードが刺さっていた。
後ろから横薙ぎに迫る斧。回避は間に合わず、防御の術もない。影浦に続くようにシアンも活動限界を迎える。だが、置き土産に投げたブレードが、小南の胸にも突き刺さっていた。
3人勝負は、全員脱落という形で決着するのだった。

攻撃手⑥

「攻撃手(アタッカー)大会しゅーりょぉー!!」

大歓声が起きている観覧室に、武富の高らかな言葉が響き渡る。それは熱の入った言葉で、彼女も楽しんでいた証であると共に、周囲を静まらせる目的もあった。それの狙い通りに、観客たちは次第に話し声を無くしていく。

「シアンさん、小南隊員、影浦隊長の3人は立て続けに緊急脱出(ベイルアウト)。その後に決着がついた太刀川隊長サイドですが、こちらも同様に3人とも緊急脱出しています。ですが、1番最後に緊急脱出したのが太刀川隊長なので、今回の優勝は太刀川隊長となります!!」

「シアンさんも太刀川さんも、上位攻撃手(アタッカー)を2人同時に相手してこの結果ってのが恐ろしいですね」

「それでは最後の部分を振り返ってみましょう! まずは影浦隊長たちの方から! こちらはシアンさんが家の上を取ったところから、一気に決着まで進みましたね」

「メテオラで高所の有利を無くさせて、影浦隊長が距離を詰める。サイドエフェクトとスコーピオンの特性を考えれば、自然な流れですね。現状、影浦隊長ほど変幻自在に扱えている隊員はいませんし、混戦に強いことも考えれば有利です」

「しかしシアンさんもスコーピオンをセットしていた。軽いスコーピオンで対応しながら、落下中に影浦隊長を蹴ってます。これは次の動きのためですよね?」

「そうですね。踏ん張りを効かせられますから、次の動きも俊敏に行える」

「下で狙っていた小南隊員への孤月での牽制。その後、小南隊員の武器の柄の部分にシールドを発生させてます」

「これで小南隊員の攻撃が一時的に阻害されてます。刃の部分ではそのまま割られていたでしょうね」

「それを読んで柄にシールドを発生させたと」

「はい。本命はそちらだったのでしょう。孤月を投げたのは、シール

ドを警戒させないため。攻撃手対決なので当然と言えますが、これまで一度もシールドを使っていないのも効いてますね」
　攻撃手のトリガーではシールドを簡単に割られる。しかもシールドを発生させるぐらいなら、自分の武器で防いだほうが早い。攻撃手同士での戦いで、シールドを使うことは滅多に無いことなのだ。
　しかもシアンはこれまですべて武器トリガーで対応してきた。先日に何度も模擬戦をしたからこそ、余計に小南の中でシアンがシールドを使うというイメージが薄まったわけだ。
「この後小南隊員が体を倒したのは、攻撃を警戒したからですか？」
「合ってますよ。スコーピオンを使うことが分かっていたから、孤月を手放していてもそちらを警戒しないといけない。シールドを張られていたことを認識する暇もなかったでしょうね」
「張られていると認識できたら変わっていたと？」
「張られていると分かっていれば、孤月とシールドでメインとサブを使っていることが分かりますからね。孤月をオフモードにしていたら別ですが、脚を掠めているのでオフモードにしてないことは把握済みです」
「なるほど……。その後は小南隊員を狙うと見せかけて影浦隊長への奇襲ですね。マンティスをいなして距離を詰めるかと思いきや、離れた場所から影浦隊長を貫いてます。これは、孤月からスコーピオンを伸ばしたということでしょうか？」
「これはマンティスですね」
「え!?」
「孤月からスコーピオンを伸ばすというのは、開発初期に試してみたことがあります。孤月＋スコーピオンより、スコーピオン＋スコーピオンの方が伸びますし変化も加えられる。シアンさんと影浦隊長の距離だと、ギリギリ孤月＋スコーピオンでは届かないんですよね」
「えーっと、ですが使っていたのは孤月のはずでは？」
「孤月の切れ味を無くしたんですよ。そうすれば抜いていても他のトリガーを使える。おそらく横跳びの時点でスコーピオンです。よく見ると孤月の刃が少し太くなってますから、スコーピオンで薄く覆っ

たのでしょう」
　迅の予想では、孤月を握っている部分からスコーピオンが伸びて覆っているとのこと。カメラの位置の都合上、それは現在確認できないが。
「このギミックがあって、影浦隊長も対応が間に合わなかったんだと思います」

「って迅さんが言ってるけど、そうなの？　カゲ」
「なんでここにいんだよゾエ」
「いや～、カゲがお祭りに参加してるって聞いて嬉しくてね～。側で見守ってあげようかと」
「キショいんだよ!!」
「えぇー！　ってそれはともかく、どうだったの？」
　見ていた限り、影浦と一緒にランク戦をこなす北添には信じられない光景だった。影浦が完全に不意をつかれたような落とされ方は、東春秋以外で見たことがないからだ。
　そんな北添の質問に影浦は舌打ちする。あの一瞬。突如として消えた刺さる感覚。その時のシアンの表情。マンティスを撃ち込まれた直後に見せた彼の表情。そして謝罪の言葉。
　それが何を意味するのか。正しくは分からなくとも、なんとなく察する部分もある。
「あいつに全力を出させない方がいい。分かったのはそれだけだ」
「ん？　どういうこと？」
「そのまんまの意味だよ」
「質問の答えになってないけど、カゲがそう感じたならそれがいいんだろうね。ところであの人、太刀川さんと同い年って聞いたよ」
「……」
　今さら過ぎる情報だ。影浦は聞かなかったことにして個人戦ブースから出ていった。

影浦が去ったことに関係はなく、観覧室では迅の解説が続いていた。
「当てて逸した直後、気づかれないようにブレードで突く動作をしていますが、これは小南隊員への布石ですね。孤月＋スコーピオンだと思わせておいて、孤月の持ち手の下の部分、頭（かしら）からブレードを出して投げてます」
「それって可能なのでしょうか？　孤月の内側からってことですよね？」
「見た限り、持ち手の部分に刃を被せたってイメージでいいと思いますよ。あの一瞬ですから、ちゃんと生成するのは間に合わないと判断したのでしょう。実際両断されてますし」
「小南隊員への対処は間に合わないから、相打ち狙いにしたと」
「ですね。影浦隊長に近づいたのは、小南隊員と少しでも距離を作るため。家の敷地内で戦闘を続けたのは、小南隊員の移動ルートを狭めるためですね。ジリ貧で押し切られると判断して、自分が落ちることを前提にした動きに変えてます。負けず嫌いですね」
言い方を変えれば勝利への執念。これがランク戦なら、十分な戦果だ。1人で2ポイント取っていて、隊のエース2人を落としているのだから。
だが迅は忠告を忘れない。この箇所はあまり真似てほしくないから。
「捨て身の攻撃は戦果こそ上げれば賞賛もされますが、失敗すればデメリットしか生みません。生きてさえいればできることも増えますから、皆さんは生存を優先的に考えましょう」
「そうですね。では、今度は太刀川隊長たちの試合ですね。太刀川隊長対生駒隊長＆村上隊員。こちらは全員が孤月を使用する戦いとなりました」
「攻撃手同士の連携は難しいですからね。影浦隊長はマンティスがあり、小南隊員もメテオラがあるので、場面に合わせて担当を分けられましたが、生駒隊長と村上隊員はそうもいかない」

生駒旋空があろうと、太刀川が立ち回りで射線上に村上がいるように動いた。生駒がどう動こうとも、太刀川にはグラスホッパーもある。機動力が敵わない。
「そこからの切り替えも早かったですね。いつも前後での連携をしていたので、２人はそこに意識が向いていたのを、左右での連携に切り替えた。東隊の奥寺隊員と小荒井隊員を参考にしたのでしょう」
「両隊員と違って、グラスホッパーは持っていないわけですが、そこを割り切った２人の猛攻はさすがの太刀川隊長も厳しかった模様」
「左右から挟めば問題ないですし、それを嫌って距離を取ろうと２人とも旋空がある。生駒隊長は４０ｍまでが射程ですし、グラスホッパーがあっても一息では射程外まではいけない」
そんな分かりやすく不利な状況だったのにも拘わらず、粘り勝ちによる優勝を掻っ攫っているのだから現役隊員の頂点というのもバカにできない。バカなのに。

その解説を耳にしていない人物が、影浦とは別にもう1人いた。今回のお祭り騒ぎの中心人物ことシアンだ。
彼はまだ個人ブースの中にいる。解説も流れている。流れているのだが、彼にとって今はそれどころじゃなかった。困ったように眉を顰めている国近に、深々と土下座を決めているから。土下座の文化は唯我から聞いた。
「約束を破ってごめんなさい」
「うーん、カメラのアングルの問題で、シアンさんがそうなったのは、わたし見えてないんだけどね～」
「ユウに見えてなくても、やっちゃったのは事実なんだ」
「それ、たぶん一番最後のとこだよね？　引き分けに持ち込むための一連のやつ」
「うん」
「カゲくん刺してから桐絵ちゃん刺すまでが速すぎたもんね～」
「あれは、マンティスで最大限伸ばすってやりながら、影浦に刺さる前から引き戻しを始めてる。供給器官を刺してる時にはすでに縮み出

してる状態で、だから孤月の後ろのとこからスコーピオン出すのが間に合った」
「解説を聞きたかったわけじゃないよ？」
「あれ？」
　戦いの最中での閃き。咄嗟にやってみたらぶっつけ本番でできたこと。それをちょっと元気に話すシアンに、国近は再度苦笑した。やっぱり彼は戦い自体は楽しめる。上位陣のように、戦うことを楽しめる人種だ。
　退屈はしてほしくないから、それ自体はいい。けれど、彼が１００％を引き出すと「楽しむ」ということができてない気がする。国近はそれが嫌なのだ。楽しんでほしい。笑顔でいてほしい。生き生きとしてるほうが、見ていて胸が暖かくなるから。
「シアンさん自身どうだったの？　あの時の感覚は」
「……あれの最中は、何も感じないよ。それまで感じてたことも全部遮断されて、その時最適と思った動きをしてるだけ。楽しさはないかな」
「……難しいね～」
「本当にな」
　上位陣たちは軒並み、全力でのぶつかり合いを楽しむ人たちだ。そうでなければ得るものもない、という至極真っ当な意見でもある。
　けれど、それに合わせてしまったらシアンは楽しめない。後から「うまく動けたな」とはなっても、それはどこか他人事のように感じてすらいる。
「今後のことはひとまず置いといて、本当にごめんなさい」
「別にわたし責めれる立場でもないんだけどね～」
「けど何かしらケジメはつけないと」
「ケジメか～。シアンさんも男の子だね～」
　下げている頭をぽんぽんと叩かれる。上げていいよと言われて上げると、そのまま優しく力を込めて引き寄せられた。
「ユ、ユウ……!?」
「シアンさんでも慌てることあるんだね～」

「そりゃあるよ！」
柔らかな胸へと引き寄せられ、シアンの顔が熱くなる。国近からは耳が赤くなっていることしか分からず、自分でもちゃんとそういう反応してくれるんだなと思うと、キュッと胸を締め付けられる感覚を覚えた。
それはどこか暖かく、同時に怖さも感じる。
それをシアンに悟られないように細く息を吐く。なんとなく、悟られたくなかった。そして、赤くなっているであろう自分の顔も見られたくなかった。考えなしにやってみた行動で、自滅してるなど知られたら恥ずかしいことこの上ないのだ。
「ケジメなら～、わたしに1個何でも言うこと聞くっていうのは？」
「何でもって怖いんだけど……」
「怖くないよ～。いつ使うかも決めてないし。あ、期限は無期限ね～」
「それは全然いいよ。……ユウのためになることなら、腹を括ろうかな」
「えへへ、嬉しいな～。そうだ、今度2人で出かけようよ」
「お願いとは別だよな？」
「もちろん」
「いいよ。どこ行きたい？」
「それも2人で今度決めよう」
一緒に決めるのも、楽しそうだ。
「それとシアンさん。その状態で喋られるとくすぐったい」
「……」
「……えっち」
「なんでだよ！」
城戸からのお呼びがかかるまで、シアンと国近は睦まじく言い合いをするのだった。

鈴鳴第一

シアンに直接連絡を取れる人間は少ない。彼の連絡先を持っているのは上層部と太刀川隊。あとは数人の正隊員だけだ。そのため、彼を呼ぼうと思ったら基本的に誰かを経由することになる。

今回のそれは国近だった。

「鈴鳴支部って遠いのか？」

「そこそこかなー」

「あれ、シアンさん鈴鳴に行くんすか？」

「なんかご指名を受けたから」

「柚宇さんと出かけるって話は？」

話を耳に挟んだ出水が会話に混ざる。聞いていた話と違う予定に、純粋に疑問を抱いたようだ。

「わたしはいつでもいいかな～って。結花ちゃん経由だけど、来馬先輩からのお願いみたいだし」

「あ～」

鈴鳴支部に所属する隊長で、鈴鳴第一を率いているのが来馬辰也だ。彼は人の良い人間として知られており、後輩たちから慕われている。特にそれは鈴鳴支部の隊員に顕著に表れていて、彼らの戦い方は「来馬を守ること」を重視したものである。

出水も面識があり、たしかにあの人からの頼みだと自分でもそうするなと納得した。けど今回は他人事。一応の横槍は入れておく。

「柚宇さんあまり他の人のを優先しないほうがいいですよ」

「なんで～？」

「シアンさんはこの前ので注目の人ですし、一度会っておきたいって人がそれなりにいます。自分はいつでも予定を合わせられるからって遠慮してたら、当分先送りになるかもです」

「ほぇ～。シアンさん人気者だね～」

「手合わせ希望が多そうだけどな。コナミからも連絡来てるし」

「それの予定も入れてるの？」

「保留にしてる。急ぎってわけでもないからな」
小南の性格を考えたら、こちらもあまり先送りにできない案件だろう。結局1対1での決着はついていない。呼び出し理由もそれだろうと当たりはついていた。
「今回はユウ経由だったけど、もしかしてイズミの方にも話来てたりする？」
「それなりに。米屋とか緑川とか。あとはB級の方で何人か」
「手合わせ希望ならいっそどこか日を決めて連戦でもいいな」
「その方が手間省けますからねー。その時についでに連絡先交換しといてください」
「そうする」
手合わせの日程は、国近との予定が決まった後に確定させる。
そうやって方針を決めて、シアンは国近と鈴鳴支部へと出かけた。

□□□

鈴鳴支部は、玉狛支部と同様にボーダーに連なる場所だ。玉狛との違いは、派閥がないことだろう。あえて言えば中立の忍田派といったところか。
「こちらから出向くべきところを、ご足労いただいて申し訳ない。鈴鳴第一の隊長をさせてもらってる来馬辰也です」
「いやいや、本部であまり目立つなと司令に苦言を言われてたから、こっちの方が助かるよ」
「鋼と今ちゃんから聞いてます。シアンさんは太刀川隊のお目付け役だとか。道理で強いわけです」
「主に部屋の清掃面なんだけどな。あと敬語じゃなくていいよ。ユウから聞いてるけど、年変わらないんだろ？」
「そうで……そうだね。いいならそうさせてもらうよ」
緊張していたのか、ほっと肩の力を抜く来馬にシアンは頬を緩めた。彼ほどの根っこからの善人はそうそういない。自然と彼のために力を貸したくなる気さえしてくる。カリスマ性の一種だ。

「来馬先輩、中に入ってもらいましょう」
「そうだった」
　支部の中に通され、対面するように設置されているソファに座る。今いる4人分のお茶を入れたのは、鈴鳴第一でオペレーターを務める今結花だ。国近と同級生である。
「いつも柚宇がお世話になってます」
「オレもユウに世話をかけてばかりだよ。そちらこそ、学校でユウが世話になってないか？」
「大丈夫だよシアンさん。もう卒業だから！」
「あんた卒業救済テストが待ってるでしょ」
「そこはいつも通りお願いしま～す！」
「元気に言うわね……」
「あはは、今ちゃんは頼りになるからね」
　今が国近の手助けをするのは、今に始まったことじゃない。テスト前になると毎回こうなるのだ。国近は成績の悪さを気にしないのだが、進級に支障が出てくるから手付かずというわけにもいかない。そんなわけで、今やクラスメイトに助けてもらっている。
「卒業救済とは？」
「ボーダー推薦っていう特別枠があるので、大学への進学とかは問題ないんです。でも、成績が結構酷いので、それで卒業しちゃうと他の生徒への示しがつかなくて」
「あー、贔屓になるし、それでも卒業できるならボーダーに入ればいいって思考になるのか」
「はい。なまじ太刀川さんという前例がいるので、その後にできたテストになります」
「あいつそんな酷かったのか……」
「太刀川くんのご両親は、彼が大学に入学できるって決まった時に泣いて喜んだらしいからね」
「いい両親だなぁ」
　バカを代表する存在。ボーダー推薦という枠が、合格ラインを大きく下げられるに至ったのも彼をねじ込もうとした結果である。

だが、太刀川の成績の悪さは当時の生徒たちの中でも有名だった。半歩譲って卒業はまだしも、その成績の悪さで大学に入れるのは周りから見て面白くない。それで学校側は、ボーダー推薦であろうと一定の成績を証明させるようにしたわけだ。

3年生の3学期のテスト自体難易度が緩い。なんなら、それまでの成績が一定ラインを超えていたらテスト免除すらされる。それ故に、3学期のテストの通称が「卒業救済テスト」なのである。

「ユウお前……ゲームしてる場合じゃないだろ」

「もっと言ってあげてくださいシアンさん」

「でもねシアンさん。結花ちゃんだってテスト受けるんだよ！」

「自分の実力把握のためよ！」

「そ、それに！　シアンさんが……！」

「俺？」

「シアンさんが、その……えっと……。放っておくと何するかわからないから～。これは仕方ないことかな～って」

「俺発信で賑やかなことはしないけどな？」

いつも誰かから声をかけられて行動している。基本的に受け身で、自ら動いたのは大規模侵攻の時と学校に訪れた時くらいだ。

後者が特にインパクト強いせいで、シアンの否定も説得力が足りていないか。

「まあまあ。それなら予定を決めちゃえばいいんじゃないかな？」

「予定を？」

「うん。例えば、国近さんがテストを終えるまでは、シアンくんも目立った行動を取らない、みたいな」

来馬の提案にシアンと国近は顔を見合わせ、それも有りだなと頷いた。

「ユウと出かけるって話もテスト後でいいな」

「ん～、先に出かけれた方がやる気出るかもよ？」

「とか言って、あんたのことだから両方狙ってるでしょ」

「どうでしょう～」

「わかりやす」

「ユウにとってその方がいいのなら、それでも俺は構わないぞ」
「やった～」
この人はこの人で甘いなと2人の関係を見抜いた今は、現実というものを叩きつけることにした。
テストの日程という現実を。
「週明けからです」
「テストが？」
「はい」
「……まじで？」
「まじです」
嘘をつくとも思えないし、嘘をつく理由もない。ちらりと横を見たら国近が顔を逸らした。事実のようだ。
これはどうしたものかと頭を悩ませたが、それを一旦保留することに。ここに来たのは国近のテストの話をするためではない。目的は来馬との会話なのだ。それを察した来馬が、わかりやすく咳払いした。切り替えの起点だ。
「実は僕もこの前の試合を見させてもらったんだ。映像は残っているからね」
「ということは手合わせか？」
「あはは、まさか。僕の実力じゃ到底敵わないよ。鋼とは対戦していなかったみたいだし、そちらはお願いできたらなって少し思うけど」
今この場にはいないが、その試合の映像は村上も見ている。というよりも、村上が見ていたものを来馬が途中から見たのである。そしてその後に言葉も交えている。対戦してみたいのかと。
「希望通りの戦いになるかはわからないが、それ自体は問題ない」
「どこか調子が悪いのかい？　日は改めてでも全然いいよ」
「いやそういうわけじゃないんだが、事情があってな。影浦と小南の2人相手にやった最後の動き、あんな感じのは期待しないでほしい」
「……うん分かった。それでも鋼が学べるものはあるだろうし、鋼が来たらその事は伝えておくよ」
「助かる」

深入りはしない。その上で相手の望まないことは綺麗に避けた。細かな気遣いができるのも、来馬の良さだろう。
「それと、僕自身としては戦術面とか相談してみたいんだ」
「データはこちらになります」
今(こん)には事前に話していたようで、鈴鳴第一の戦闘記録と3人分の個人データが用意されていた。シアンがそれを受け取り、国近は横から覗き込む。
「近中遠が1人ずつか」
「エースは村上くんだね～。太刀川さんは、『隊長を守る隊』って言ってたかな」
「……みたいだな」
映像を倍速で流しながら国近の話に納得する。隊の最大火力はエースの村上。しかし隊の心臓部は隊長の来馬だ。立ち回りからしてもそれが顕著に表れている。
狙撃手はともかく、他が合流の動きをするのは悪くない。それはどの隊でも見られる動きだから。ただこの隊だと来馬の生存を優先するから火力を出しにくい。それでも点を取れているのは、この隊のポテンシャルと村上の強さあってのこと。
提示された資料と、少し話してみて見えてきた来馬という人物。それらを踏まえ、脳内で整理してからシアンは口を開いた。
「やりたいこととすべきこと。この2つは決まってるのか？　隊の目標でもいい」
「目標か……。鋼の負担を減らしたいと思ってるよ。僕自身が強くなったら、鋼ももっと戦いやすいと思うから」
「実際、それぞれの距離での実力を考えたら近距離戦が突出してるからな。見えてるならいい。あとはもっと具体化することだな」
「もっと？」
「到達点を明確にイメージできる方が、今すべきことも見えてくるだろ？　誰かを目標にするのでもいい。A級のガンナーとかな」
「なるほど」
「あと、クルマなら言わなくても分かってるだろうけど隊での共有な」

連携を前提としているのなら、隊員同士のコミュニケーションは大切だ。それは初めからするつもりだったようで、来馬は静かに頷いていた。
「中距離戦とかは本職じゃないからな。近距離戦をする人間として、どうされるのが嫌かって視点でなら話はできる。そういう形でいいのなら模擬戦もな」
「それはありがたい。でもあまり君の時間を貰うわけにもいかないね」
シアンが相手である必要はない。それこそ、攻撃手として上位に位置する村上を相手にすればいい。来馬が頼めば彼は手伝うはずだ。
それともう1つ、来馬が遠慮気味な理由がある。彼の視線の先を追えば自ずとそれは判明した。邪魔をしないようにと距離を取って会話をしているオペレーターが2人。今と国近だ。
先程の会話と今の会話で来馬は理解したのだ。シアンは基本的に予定が空いている。それこそ安請け合いをどんどんするくらいに。そして、だからこそ国近との時間が減っていく。来馬としては、そうしたくない。
「シアンくんはもう少し、国近さんを優先してもいいんじゃないかな？」
「そうしてるつもりなんだが……いや、そう見えるのなら改めて見るよ」
自分がそう思っていても、周りから見れば違うという話はよくあることだ。
男2人がそんな話をしている一方で、花の女子高生たる2人がどういう話をしているかというと、珍しく女子らしい話をしていた。
珍しくというのも、国近は根っからのゲーマー女子。今との会話も他愛のない話が多い。学校だとそれこそ勉強面の話が多かったりする。だから女子らしい話というのは、主に国近にとって珍しいのだ。今も驚いていたりする。
「どうする気よ。テスト前にあの人と出かけるなら時間がないわよ？」

「……うん。出かけたいけど……今まで服気にしてなかったし」
「ほんと今さらよね。シアンさんも気にしてないんじゃない？」
「今まではそうだったよ？　でもこれからもそうとは限らないというか……」
　シアンはこちらの世界のことを知らない。だからファッションも知らない。それもあって国近は服装を気にしていなかったが、いざ出かけるとなると変わってくる。お洒落をした女性も多い。シアンでも気づくことだろう。国近はそれを危惧していた。なんとなく、周りと比べてほしくないのだ。
　ただ、今（こん）はシアンの事情を知らない。相談するにも多少ぼかしながらになる。しかしそれはそれ。相談内容の重要な点はシアンのことではないから問題ない。
「ならいっそ選んでもらいなさいよ」
「え？」
「デートの内容も決めてないんでしょ？　なら丁度いいじゃない」
「でー、と？　なんで？」
「……はぁ。あんたらみたいな男女が出かけたらデートって言うのよ」
「??」
「ともかく、テスト前に出かけるならそれにしなさい。出かけないなら、テスト最終日に一緒についていって選んであげる。その後にシアンさんと出かけなさい」
「え～、じゃあどうしよっかな……」

加古隊

ボーダー内の男女比は明らかに男性の方が比率が大きい。エンジニアは無論のこと、隊員でも女性の数は少ないのだ。オペレーターでは女性しか見かけないものだが、総数で比率を出すとやはり少ない。そのため、女性の戦闘員というのは希少だ。

A級でもB級でも、どこかの隊に女子が1人混ざっているといった具合だ。それ以外だと、A級の加古隊とB級の那須隊。この2部隊のみがガールズチームである。

加古隊は隊長である加古望の感性に合わせて作られているチームだ。イニシャルがKであり、センスのある人間を加古がスカウトした。

そんな加古の趣味はドライブだったり、創作料理こと創作炒飯を作ることだったりする。

「作戦室っていうか、家って雰囲気強いなここ」

「作戦室の内装は基本的に要望通りになるのよ。私は料理も好きだから、こうしてキッチンを用意してもらってるってわけ」

「なるほど」

「シアンくんって嫌いな食べ物ある？」

「たぶんない。こっちの食べ物で口にしたことないやつもまだ多いだろうから、断言はできない」

「あらそうなの。ならチャレンジしてもらうのもいいわね」

「変なやつは出ないよな？」

「大丈夫よ。昨日今日料理を始めたってわけじゃないもの。ね？　双葉」

「はい。加古さんは料理が上手な方です」

「それならよかった」

「そっちに座って双葉と待ってて。腕によりをかけて作るわ」

「それは楽しみだ」

エプロンをつけた加古は、髪の毛が邪魔にならないように後ろで一

纏めにする。趣味とはいえ拘りもあるのか、料理へと気持ちを切り替えた加古の目は真剣そのものだ。
「どんなのが出てくることやら」
「たぶん炒飯です」
「ちゃーはんって、たしか卵とか何個か具材混ぜたやつだよな？」
「はい。加古さんの得意料理ですし、お呼びしたわけですからそれを作るかと」
「へ～。あんま食べたことないから、俄然楽しみだな」
　この発言を同年代の人間が聞けば正気を疑うことだろう。加古の作る炒飯がどういったものなのか。それを知っているか否かで大きく変わるものだ。
　キッチンにはテーブルカウンターもあり、その向こう側の部屋は季節に合わせて内装が変わる。今は冬なので、影浦隊と同様にこたつが置かれていた。あちらは冬が終わってもこたつを片付けるかは怪しいが。
　シアンは黒江と向かい合うようにこたつに入り、部屋にあるテレビを黒江がつけた。
「他の隊員は？」
「来てないですね。頻繁に本部に来る人たちでもないですし」
　加古隊のメンバーは４人。隊長である加古と、目の前にいる黒江。この場にいないのは、希少なトラッパーである喜多川とオペレーターの小早川だ。直接の戦闘はしないため、普段から腕を磨く必要もないのである。それ故に本部に来る理由があまりない。
「クロエはまだ小さいのにＡ級ってすごいな」
「小さ……。加古さんがスカウトしてくれましたから。Ａ級に入るだけでしたら難しくはないんですよ。入れてもらえばいいだけなので」
「そういう仕組みなんだ。でもクロエは実力も伴ってるだろ？　いい動きだったよ」
「……ありがとうございます」
　加古に頼まれた用事自体は既に終わっている。黒江と戦ってほしいというものだ。そういった頼みは他にも何人かいるわけだが、仲介

した太刀川が少し疲れた様子だったのでシアンが承諾したのだ。シアンは真相を聞かなかったが、同年代である彼にとって「加古＝炒飯」であり、「炒飯＝断頭台」なのである。トラウマ気味だ。

そうして黒江と１０本勝負を行い、結果的にシアンが勝ち越している。負けたことは悔しいのだが、相手からの賞賛はなんとか飲み込んでいた。

「クロエは戦闘の後の振り返りってしてるか？」

「もちろんです」

「じゃあ、戦闘中は？」

「……っ、それは……」

「責めたりなんかしないよ。クロエの年齢であそこまで動けてるのは優秀だし。ただ、やっぱりまだ若い。失敗、ミス、それがあると視野が狭まってる」

「……はい」

それも加古から指摘されていることだった。指摘されたことがあるとしても、簡単には直せない。まだまだ若い黒江がそうなるのも無理もないことではある。ただ黒江は向上心が強い。今の自分に足りていないものに真摯に向き合う子だ。

「今回の１０本勝負、クロエ自身で気づけたことは？」

「動かされてました」

料理をしながら、聞こえてくる会話に加古は静かに微笑む。

「シュンが空閑って人にやられたのとほぼ同じですね。最初に勝って、その後負けてムキになる。そこからはドツボ」

「ユウマってそんなことしてたのか……。試合内容を把握できてるなら良し」

展開は同じだが中身は違う。黒江はそこも理解している。だからほぼ同じと言ったわけだ。

空閑はわざと負けて緑川を調子づかせ、そこから勝つことで完全に試合を支配した。

それに対してシアンが狙ったのは、黒江の引き出しを1試合目で全て引き出させるという行為。本当はその上で勝とうとしたのだが、試

作トリガーである韋駄天によって初手を取られている。２試合目は韋駄天に対する仮説の確認でもう一度負け、その後は対応して勝っている。そして、韋駄天が破られたことにムキになってしまった黒江は、ついぞもう１つの試作トリガーである魔光を使わなかった。

そういう試合展開だったから、結果的に緑川たちの試合とほぼ同じに見えるというわけだ。

「韋駄天だっけ？　あれはたしかに強い。人の体で反応できない速さを出せてる。だけど、種がバレた相手は対応してくる」

「実戦は１回勝負ですよ」

「タイマンなら勝てるだろうな。でも、ボーダーだって戦闘記録取ってるだろ？　それは近界側もやってることだ。共有されてしまえば、その後の敵は情報を持っている状態になる」

「それでも、軌道さえ変えたら――」

「そこを織り込んで対応するだろ」

「……」

言葉を遮られてムスッと黒江は機嫌を損ねた。韋駄天は黒江が好んで使うトリガーだ。それをここまで言いくるめられると面白くない。

「要は使い方次第だ」

面白くなさそうにしているのはシアンも見て読み取っている。けれど言葉を止めたりはしない。さっき言った通り、韋駄天が強いトリガーだと思っているから。腐らせるには勿体無い。

「情報を持ってるなら、それはそれで相手はやりにくいんだよ。いつ回避不能の韋駄天が来るか分からないからな」

「対応した人に言われても実感ないです」

「あれはクロエに使わせただけ。クロエは駆け引きも鍛えないとな」

「駆け引きですか」

「そう。韋駄天を使うクロエへの対策は２つ。１つは韋駄天を使えない状況に追い込むこと。張り付くか射程外からすり潰す、とかな。もう１つが、韋駄天を使わせてカウンターすること」

「……さっきのは、使えない状況に追い込んでから間を作ることで、あ

たしに逆転狙いの韋駄天を使わせたと」
「そう。これが駆け引きってわけだ。冷静さも失ってたから、反射的に飛びついてくるだろうって思ってた」
　その予測通りに黒江は動き、スコーピオンでカウンターを狙ったシアンに迎撃された。
　もしそこで黒江が留まれていたら、内容ももう少し変わっただろう。
「オレの体感で言うと、クロエは才能がある。強いし、さらに強くなれる。韋駄天はあくまで手段の1つとして、それ以外の腕も磨いたらいいよ」
　黒江が使うトリガーは孤月だ。他にセットしているのはどれもオプショントリガーで、あとはシールドとバッグワームである。
　これ以上ないほどにシンプルな構成。それ故にやることは絞られる。近接戦の腕を上げること。そして、戦闘の運びを相手に取られないようにすること。冷静さと駆け引き。
「双葉、韋駄天以外は使わなかったの？」
「旋空は使いました」
「そう。ふふっ、負けず嫌いね」
「オレもそう思うよ。だからこそ強くなれる。オレが保証する」
　気づいているのか気づいていないのか。おそらくは前者だろうと予想しながら、加古は炒飯の仕上げに入る。
　魔光を使わなかったのは、次に繋げるため。またシアンと戦いたいという黒江の意思表示。魔光を使うとしたら、それは次に戦った時だ。
「あらあら、そう言ってくれるなら双葉をシアンくんに預けようかしら」
「加古さん!?」
「太刀川くんクラスの人なんだし、鍛えてもらうのも悪くないんじゃない？」
「それはそうですけど……」
　勝ちたい相手に教えを請うのは黒江のプライドに引っかかった。

悪くないどころか、それが実現すればこの上なく有意義だ。
頭ではそれが分かってる。分かっていても、気持ちのほうがそれを良しとしない。
「たまに手合わせする。それくらいならどうだ？」
「え？」
「オレ個人としてはクロエの成長を手助けしてみたいけど、安請け合いし過ぎるなってクルマに忠告されててさ」
「来馬くんに？　どうして？」
「ユウとの時間を優先するためにそうしろって」
「ユウ……柚宇ちゃんのことね。へ～、そうだったの。ごめんなさいね、そこは把握できてなかったわ」
「うん？　今何に謝られてる？」
鋭い加古だけでなく、山娘からシティーガールに進化した黒江も察した。思春期少女、そっちの話にも当然興味はあったりするのだ。
もっとも、２人とも深読みし過ぎているが。
「柚宇ちゃんのことどう思ってるの？」
「どうって、大切に思ってるよ。オレのせいでいろいろと巻き込んでるし」
「あら」
加古はこの時点で自分の勘違いを理解した。黒江は誤解したままである。
「縛ってる部分もあるはずなんだけど、……ちょうどいいや。カコみたいな女子に聞いてみたかったことがあるんだけどさ」
「答えられることなら答えるわ」
「オレはユウを縛ってると思ってる。でも、ユウはそんなことないって言うんだ。それぐらい気にしないって。オレは明らか、ユウの人生に大きく影響を与えてしまってるのに」
「うーん、いまいち状況が見えないけど、所感でいいかしら？」
「大丈夫」
３人分の炒飯と飲み物をこたつの上に置いた加古が、エプロンとヘアゴムを外してこたつに入りながら答える。

「縛られたい女の子もいるってことよ」
「……どういうことだ？」
「双葉は分かるかしら？」
「いえ」
「まだ早かったわね。シアンくん、見方を変えるといいわよ。縛られるっていうことは、それだけその人に特別扱いされるということなの」
「曲解に思えるんだが!?」
「そうならないのよ。だって、その人の意識も、時間もが自分1人に向けられるのだから」
「あー……そう言われるとまぁ……」
「特別扱いは誰だって嬉しいものでしょ。もちろん程度によるけれど」
　行き過ぎた感情は、シアンが危惧するように相手を束縛する。一方通行ならストーカーのように。
「気持ちに正直に前向きに。柚宇ちゃんが大切なら、優先的に考えてあげなさい」
「そっか。ありがとう、だいぶすっきりした」
「これぐらい構わないわよ。こっちも双葉のことがあるんだし」
「っとそうだった。クロエはどうしたい？」
　大人な恋愛相談だなぁと感心していたところで話題を振られた。ビクッと分かりやすく反応した黒江に、シアンは改めて聞き直した。たまに手合わせするぐらいでいいのか。それとも定期的にするのか。
　今の話の後でそれを選べと言われるのもなかなかに苦しいものだ。
「……たまにでいいです。いろんな人と対戦するのも大切だと思うので」
「そっか。ならそうしよう」
「偉いわね双葉」
　加古に褒められ、黒江は素直に目を細めた。ちょっと刺々しい時もあるが、基本的には年相応の女の子なのである。
「そうそう、忘れない内に連絡先を交換しておきましょうか。毎回誰

かに仲介してもらうわけにもいかないし」
「だな。クロエのも教えてくれ」
「あ、はい」
端末を取り出し、それを操作して連絡先を交換する。加古は相手の数が多く、黒江はそれなり。シアンはまだ連絡先を知っている相手が少なかった。加古の4分の1以下である。ちなみに黒江も加古の半分以下だったりする。加古の人脈は広かった。
「シアンくん柚宇ちゃんと出かけたりするの？」
「あんまり。今度ユウのテストが終わったら出かける予定。どこ行くかはまだ決まってない」
「そう。ちなみに服は？」
「シノダさんから貰ったやつしかない」
「道理で」
その後の言葉はしまう。言ってはいけないことだってあるのだ。
「決めた。その出かける日までの間に私と予定を合わせましょう」
「は？」
「あなたの服をコーディネートしてあげるわ。柚宇ちゃんのためにも」
「よろしくお願いする」
国近の名前が出されては断れないのだった。
ちなみに炒飯は美味しくいただき、太刀川に驚愕されたとか。

国近柚宇①

特別ってなんだろう。
最近ちょこちょこそんな事を考える。
意味はわかる。辞書みたいな説明はできないけれど、『他とは違う』『超大事』。そんな感じの使い方。
クラスメイトとか、オペレーターの子とかに最近よく言われる。
「可愛くなったね」って。今まではどうだったんだろうって意地悪で返すけど、そうしたらみんな言う。「もっと可愛くなった」って。
学校だとみんなと同じ制服だし、ボーダーだとラフな格好かトリオン体のどっちか。メイクだって全然しない。だから見た目に変化はない。
性格が変わったわけでもない。わたしはいつも通りにゆる～く生活してる。こっちもやっぱり何も変わらない。
それなのに可愛くなったと言われる。身に覚えがないから曖昧に笑って流したり、本気で首を傾げたり。そうしてたらある日言われた。
――「特別な人ができたんだね」
どういう意味かわからない。わたしの周りに変化があったとしたら、それは1人しかいない。他の人とはたしかに違うし、特別といえば特別かもしれない。だけど、クラスメイトが期待するようなことじゃない。そのはず。
「テストが終わって魂も抜けた？」
「ん～？　まだ元気だよ～。ちょっと考えごと～」
「ゲームでしょ」
「違うよ」
「でしょうね」
でしょうねって、さっきの言い切りはなんだったんだろ。
「ゲームの考え事をしてる時は、もっと楽しそうに考え込むもの」
「そうなの？　……えへへ、そうかも～」

「何で嬉しそうなのよ」
「結花ちゃんはわたしのこと好きだね～」
よくわかってくれてる。
「勉強をサボらせないためによく観察したからね」
そういう理由だったか。たしかに勉強中にゲームのこと考えてたら、すぐにバレるようになったもんね～。
「その考え事については後で考えましょうか」
「うん」
テストも終わって、ＨＲも終わった。荷物も少ないから帰る準備はいつも以上に早く終わる。鞄を持って席を立つ。他のクラスメイトに「ばいばい」って言いながら教室を出た。
今日はこのまま帰りにお昼を食べて、それから服を買いに行く日。わたしも一応はそれなりの服を持ってるけど、一度意識しちゃってからは気になってくる。ボーダー内では相変わらずなのに。”一緒に出かける”というその１点が引っかかる。シアンさんはルックスいいし、本部長経由で貰う服が大人っぽさを引き上げる。
（一言で言えば”かっこいい”）
だから、そんなシアンさんに並んで歩くわたしのファッションはどうなんだろう。そう考えてしまう。
そんなわけで今日は、いつも頼りになる今結花ちゃんに付き合ってもらう。
「出てきた出てきた」
「２人ともお疲れ～。どうしたの？」
「テストも終わったし、一緒にお昼でもどうかなって」
「ほうほう」
「いいわね。４人で行きましょ」
下駄箱まで行くと他のクラスの加賀美倫ちゃんと人見摩子ちゃんがいた。２人とも成績が悪いわけじゃないし、結花ちゃんと同じで実力把握とかで受けてたみたい。記念受験ならぬ記念テストって人もいるくらいだし。
「お昼どこにする？」

「安定なのはファミレスだけど」
「せっかくだし少しくらい奮発するのもありね」
「わたしはどこでも～」
「少しは考えなさいよ」
「え～、じゃあスイパラ～」
「太っても知らないわよ」
「わたし食べても太らないからだいじょ～ぶ」
「国近はお腹にはいかないもんね」
「加賀美それ自分で言ってて悲しくない？」
「ふっ、表に出なさい人見」
　これはわたしノーコメントの方がいいよね～。
　倫ちゃんと摩子ちゃんの追いかけっこが始まった。珍しい光景でそれを結花ちゃんと見ながら笑う。倫ちゃんは美大に行くから、同じ校内で過ごせるのもあと僅か。せっかくだし、今の２人を写真撮っとこっと。
「スイパラは後の予定的にはありね」
「うん？」
「そのまま服を見て回れるじゃない」
「お～たしかに！」
「そっちが本命でしょ……」
　スイパラの場所がどこかは全然意識してなかった。なんとなく気分に任せて言っただけだし。
　そんなこんなで学校からスイパラへ移動。モールの中にあるし、服屋さんもいろいろあるしで都合がいい。百貨店ってやつだね。
　店の中はそんなに人が多くない。この時期のこの時間で店に来れる人って、わたしたちみたいな3年生か、大学生。あとは主婦層か高齢者ぐらい。お店がお店だから、若い人が多いし女性ばかり。
「食べ残しだけはしないようにね」
「自分が食べられる量は把握してるよ～」
「２人の会話聞いてると、たまに同い年なのか疑いたくなるのよね」
「結花ちゃん大人びてるもんね～」

「今相手だと国近が子供っぽくもなるし」
「わかる。どっちもだよね」
「あれ？」
「柚宇が妹は……勘弁願いたいわね」
「え～」
　話し方は軽いのに、声自体に重みがあって本音っぽい。もし姉妹だったらと想像してみても、今とあまり変わらなさそうな光景しか思い浮かばないや。
「そういえば国近、東さんがあの人とコンタクト取りたがってたよ」
「ほぇ？　ふぁんふぇ？」
「飲み込んでから話しなさい」
　あの人ってシアンさんのことだよね。東さんが何の用事なんだろ。
　このショートケーキ美味しい。後でおかわりしよう。
「意見交換がしたいとかなんとか。何人かに指導してたりするんでしょ？　その観点かも」
「教える側としての意見交換ってこと？　う～ん、シアンさんは東さんほど体系的な指導じゃないからね～」
「それが逆に刺激になるんでしょ」
「とりあえず、後で会った時に聞いてみるね～」
「会うのは確定なんだ」
「うちの作戦室にいつもいるから」
「あ～。てっきり毎日会うのを決めてるのかと思った」
「そんな感じあるしね」
「そうかな～？」
　３人ともに「うんうん」って頷かれた。周りから見たらわたしたちそう見えるんだ。同じ隊でもなければ、親戚でもない。年も違うし同業者でもない。そう考えると、そんな風に見られるのも仕方ないのかな。
「国近はどうなの？」
「どうって？」
「シアンさんのことどう見てるの？」

「わっ、まさか国近でコイバナする日が来るとは」
「そっちの話？」
「どっちもいっちゃう？」
　摩子ちゃんが意地悪だ～。他の２人も止めてくれないし。
　一旦ブリュレで間を取ろう。どう答えたらいいのかも分かんない。正解不正解とかじゃなくて、自分でもぼやけてる意見を言葉にするのが難しいから。
「……放っておけない人、かな」
「というのは？」
「ええっと～。……ちょっと待ってね」
　シアンさんのことって、どこまで話してもいいんだっけ。摩子ちゃんは東隊、倫ちゃんは荒船隊。どっちの隊も焼肉の時にいたけど、メインの目的は出水くんたちとの焼肉で、２人はいなかったんだよね。わたし以外でオペレーターだと諏訪隊の小佐野だけ。結花ちゃんもいなかった。
　東さんも荒船くんも、言いふらすような人じゃないから、シアンさんの正体は広まってない。ここにいる３人なら話しても大丈夫そうだけど、こういう感覚で話すと広まっていくものだよね。
　そうなると、シアンさんが近界民（ネイバー）ってことは内緒にして。それに関連する情報も出さずに話さないとだね。……３人とも感づきそうだな～。それはそれで、隠すのに協力してくれるか。
「シアンさんってね、時々消えそうな印象があるんだよ」
「消えそうな？」
「それって儚いイメージってやつ？　那須みたいな」
「ん～、ちょっと違うかな。体が弱くてってやつじゃなくて、ふらっとどこかにいなくなりそうな感じ～」
「そう？　うちの支部に来た時はそんな印象なかったわよ」
「普段はそうなんだけどね～。一緒にいてくれるし」
「惚気か？」
　釘を差すの早くない？
「そーいうのじゃなくて。話を戻すけど、シアンさんが戦う時がそう

なんだよ」
特に、シアンさんが戦闘に１００％集中してる時がそう。そこにいるはずなのに、どこか遠くに行っちゃいそうな感じ。
初めて会った時の、近界の方での印象も残ってる。戦わせちゃいけない人なんだなって。
「へ～。私たちは全然交流ないから、それについてどうこう言えないなー」
「でも一番一緒にいる国近がそう言うなら、そうなんだろうね。それで放っておけないって思ってるんだ？」
「うん」
「シアンさんについてはいろいろと気になるとこあるけど」
「気になるって何が？」
「取らないから！」
「すごい食いついたわね……」
なんでだろ。なんでか引っかかっちゃった。
「そういう意味じゃないから安心して。それにみんな、あえて聞かないようにしてることだし」
「それには感謝だね～」
「国近は、異性としてはどう見てるの？」
「……へ？」
「いいわね。私も聞きたかったし」
みんな乗り気だ……。
異性としてって言われてもなぁ。わたし今までそういうの気にしてなかったし。シアンさんが特別なのは、事情があるからだし。
「今考えてみたら？　異性として見れるか見れないかでもいいし」
逃げ道をちゃくちゃくと塞がれてく……。
「質問形式にしよっか。まずは外見から！」
「外見は柚宇の好みでしょ」
「今が答えてどうするの……」
「でも有力情報ね！」
摩子ちゃんなんでそんなノリノリなの……。

そりゃあシアンさんは容姿は好みに合ってるけど。初めて見た時も、タイプな見た目だなぁとか思ったよ。
「シアンさんの悪いとこ言える？」
「え～、なにその質問」
「いいからいいから」
悪いとこって言われても。こういうのって、不満がないと出てこないよね。
「……パッとは出てこないかな～」
「なら次は反対に、良いところ。好きなとこは？」
「カッコイイとこ」
「それは知ってる」
「即答かー」
「開き直ったのかな」
それ以外だよね。
「一緒にゲームしてくれるとこ」
「そこ重要なのが国近らしい」
「毎朝おはようって言ってくれるし、夜もおやすみって言ってくれるとこ。ご飯も一緒だし、歩く時にペースを合わせてくれて～」
「エンジンかかってきたわね」
「人見まだツッコんじゃ駄目だからね」
「生殺しなんだけど？」
「子供っぽいところもあって～、お箸に慣れてないとこも可愛くて～。本気を出してるとアレだけど、真剣な顔もカッコよくて～」
「長くなりそうだからここらで止めましょう」
「え？」
「止めましょう」
「まだ良いところあるよ？」
「それはまた今度聞くわ。それで、柚宇にとって、シアンさんのどんなところに一番惹かれるのかしら？」
「一番？」
「質問の仕方がもう答えだしてない？」

「今(こん)は国近から一番聞いてたからかな」
どういうとこだろ。
服の内側にあるシアンさんの黒トリガーを取り出してみる。アクセサリーみたいなやつ。それを手のひらに乗せて見つめながら考える。
「シアンさんと太刀川さんたちとではまた違うんでしょ？」
「うん」
違うんだ。太刀川さんたちも、朝にあったらおはようって言ってくれるし、ゲームも一緒にしてくれる。けど、シアンさんとはやっぱり違う。それは当然の話なんだけど、ちょっと当然でもないことで。
それはなんでかって言うと――。
「シアンさんはわたしを特別にしてくれる？」
思い当たった答えがそのまま口に出ちゃってた。
贔屓目とかじゃなくて特別視でもなくて。シアンさんは”特別にしてくれる”んだ。
「……そっか」
シアンさんが目立ったことをするわけでもない。他の人たちとそう変わらないし、関係的にちょっと優先はしてくれるぐらい。一番一緒にいるようになっただけ。
――あぁ……
でも、それでもシアンさんはわたしを特別にしてくれる。それは、わたしにとってシアンさんが特別だから。
――これが恋なんだ
いつからかなんて考えない。きっといつからでも理由にできる。一目惚れって言うこともできるし、大規模侵攻の時って言うこともできる。だから、たぶん大したことじゃない。
大事なのは、わたしがシアンさんのことを好きだってこと。
この気持ちは、誰にも譲れない大切なもの。
「国近が乙女顔してる」
「も～、どんな顔それ～」
「鏡でも見なさい」

「だらしない顔？」
「それはないわね」
「じゃあいいかな～」
　ある程度は想像できるよ。にやけちゃってるもん。顔も赤くなってるかな。
　でもいい。なんとなく、幸せな感じだもん。
「ちなみに聞くけど、シアンさんが他の女子と2人きりだったらどう思う？」
「うーん、内容によるかな～。桐絵ちゃんみたいに、手合わせ目的とかなら大丈夫」
「じゃあ2人で出掛けてるとかなら嫌なんだ？」
「かもね～。想像してみても……うん、ちょっといやかな～」
　モヤってしたもん。
「国近って小南のこと名前呼びだったっけ？」
「前に玉狛に行った時にね～」
「なるほど」
　桐絵ちゃんは……うん、大丈夫大丈夫。あの子はシアンさんをそういう目で見ない。
「……あれ？　わたしこれからシアンさんとどう接したらいいの？」
「今まで通りでいいでしょ」
「ほんとうに？　それでいいの？」
「それじゃあ、加古さんにでも相談してみるのは？　彼氏がいるかはさておき、恋愛相談の経験は豊富そう」
「失礼なニュアンスだったよ加賀美」
　加古さんに相談か。たしかに加古さんそういう話得意そう。
「ファッションとかも聞いてみるのありだよね。加古さんのＳＮＳ見るといつもおしゃれだし」
「ほうほう」
「ちなみに今日は買いに来てるみたいで……ぁ」
「どったの～？」

「国近は見ない方が――遅かったか」
倫ちゃんの携帯の画面に映ってるのは、加古さんのＳＮＳで。
なんか文章が書いてあるけどわたしの意識はそこに向いてない。
わたしが見えてるのは、加古さんと２人で映ってるシアンさんの写真だった。
――恋ってしんどいんだね
――違うって思ってるのに、胸がキュって痛くなる
シアンさんの、ばか。

国近柚宇②

国近柚宇の部屋は、女の子らしい部屋と辛うじて言える内装をしている。少女漫画に出てくるような女子の部屋ではないが、かわいらしい小物が少しばかりあるのだ。貰い物ではあるがぬいぐるみがあったり、クッションの色は明るい色だったり、家具も質素なものではなく控えめな可愛さが添えられているものである。

彼女の部屋は基本的に最低限のものとゲームぐらい。国近の持つゲーム機はそのほとんどが作戦室に置いてあるものの、自室に置いてあるゲームもあったりするのだ。

そんな部屋のベッドで、国近は布団に包まっていた。

現在の時間は午前8時。今から着替えて学校に向かっていては間に合わない時間。今日は土曜日なのだから遅刻の心配も必要ないのだが、いつもなら朝食も済ませている時間である。

「ユウ大丈夫か？」

「うーん、しんどいかも～」

「だよな。何か飲み物か食べ物いるか？」

「あんまりげんきないかな～。のみもののはほしぃー」

「ちょっと待ってろ」

私生活が酷かった国近ではあるのだが、シアンがボーダーに来てからは改善されている。週末であろうと朝に起きて朝食を取るし、徹夜だってめっきり減っている。作戦室にある仮眠用ベッドは最近役目が減ったことに悲しいとかなんとか。

部屋にある冷蔵庫を開けてみると、その中に関してはまだまだこれからと言ったところ。飲み物かフルーツかゼリー系のすぐ食べられるものばかり。冷凍室にはアイスがしっかりと。

「コップはどれ使ってもいいよな？」

「うん」

スポーツ飲料が国近の部屋にあるわけがなく、シアンはお茶をコップに注いだ。ジュースとどちらがいいか一旦迷ったが、こちらの方が

飲みやすいかなと思ったらしい。
お茶を注いだコップを片手に彼女の側へ。近くにある丸テーブルにコップを起き、起き上がる国近の背に腕を回して支える。
「飲めるか？」
こくりと頷いたのを確認し、シアンはお茶をゆっくり国近に飲ませる。起き上がるだけでも相当しんどいようで、国近はシアンの肩に寄りかかっていた。
「また欲しくなったら言ってくれ」
「ありがと～。それと、ごめんなさい」
「謝ることでもないだろ」
「だって……シアンさんとのお出かけ……」
「今日が駄目でも何回でも行ける。まずは体調を治さないとな」
「……うん」
慎重に体を倒させ、再びベッドに横にさせる。熱がある国近の顔は赤く、時たま咳き込むことも。
本当なら、テスト明けの週末であるこの日に約束通り2人は出かけていた。国近は昨日に買った一式を着て、それに臨むつもりだった。しかし蓋を開けてみれば風邪である。熱もそれなりに高い。幸いにも、何かの病気というわけではないが。
「お昼になったら、食べやすいものを食べて薬飲もうな」
返事はなく、頷きがあった。
バカは風邪をひかないというが、バカだから国近は風邪をひいている。シアンにとっては元気な印象しかないのだが、この子は盛大にやらかした。原因に心当たりはある。本人は決して口にはしないが。
「加古とシアンの写真のことを風呂上がりに悶々と考えていたら体が冷えて風邪をひいた」などと口が裂けても言えないだろう。
そんなことも露知らず、シアンは国近の看病をしている。生まれの良さから、この方看病なんてしたことはない。病気知らずの健康体でもあったため、自分が風邪を引いたこともない。だから看病は探り探りだ。
「シアンさんてかして～」

どうすればいいのかを今(こん)と小南から聞き、教わったとおりに行動している。それ以外は、国近の要望に従うのみだ。
布団の中から出てきた彼女の手に、自分の手を重ねる。自身の手の一回りは小さな手。きめ細やかな肌。彼女自身の印象と同じように、彼女の手は柔らかいものだった。
「これでいいのか？」
「うん。こうしてくれてるとうれしい」
「そっか」
手の中でもぞりと彼女の指が動く。指と指の間にすり込ませるような動き。それに合わせてシアンは指を開き、それからまた閉じた。元の形には戻らない。手を重ねていた状態から、指を絡めた状態に変化している。
（わたし単純だな～）
悶々とした想いはまだ残っている。渦巻いている。けれど今はそれすら覆い尽くしているものがある。
圧倒的な幸福感だ。
一緒の部屋にいる。２人きりでいる。心配から、初めての看病をしてくれている。さらには手を触れ合わせている。
それだけでも国近の心は幸福感で満たされていた。暗い気持ちを静まらせられるほどに。
その感情を飲み込むように目を閉じ、シアンがいる方に寝返りを打つ。布団が少し捲れても、すぐにシアンがそれをかけ直した。その小さな優しさでも嬉しく、頬を緩ませる。反対の手もシアンの手に重ね、ほんのりと力を加えた。
「シアンさんのておっきぃ～」
「そりゃユウよりはな。それよりもできれば寝てほしい」
「ねるよ～。でもなんかもったいないなぁって」
「なにが？」
２人でいる時間が減ることが。実際の時間では長くても、寝ていては体感時間が短くなる。それが勿体無いと感じるらしい。
「寝かしつけるのも看病か？」

「どうでしょ～。わたしをねさせられるかな～？　けほっ」
「早く治すには寝るしかないだろ」
　咳き込んだ国近の頭をそっと撫でる。丁寧に、慈しむように。この行為も慣れたものではない。それはどこかぎこちなく、けれど彼の気持ちは十二分に伝わるものだった。
　国近はそれを払うことなく受け止める。女性にとって髪は命に等しいもの。他人に触られることを嫌う女性さえいる。のほほんとしている国近であっても、異性に髪を触られて流せるかは相手次第だ。知らない人は論外として、顔見知り程度でも遠慮願う。同じ隊員であっても、素直に受け止めることはないだろう。
　だから、シアンの手を受け入れるのも、ひとえに彼のことを好んでいるから。
　撫でられるのを感じながら、彼女は懐かしさを感じていく。異性に頭を撫でられる経験など、家族以外になかったから。父親と祖父くらいだ。しかし当然ながらその２人とも違う。年は近く、淡い想いを抱く相手なのだから。
「シア～ンさん」
「ん、悪い。落ち着くかなって思ったんだけど」
「ううん。とめないでいいよ～」
　離された手を戻してもらう。不快感など抱いていないから。
「おねがい、きいてほしーなーって」
「お願い？」
　心地よさが睡魔を誘い込む。だんだんと意識がぼやけていくことを、なんとなく感じながら言葉を続けた。
　熱が、初恋が、彼女の思考を定まらせない。まともな思考をさせない。
「わたしね。シアンさんといっしょにいたい」
「いるじゃん」
「いまだけじゃなくて～、これからも」
　浮かぶ言葉がただ漏れ出ていく。
「シアンさんが、となりにいないとやだ」

「……」
「ほかのこじゃなくて、わたしといっしょにいてほしい」
だから我儘も言える。抑える理性は働かない。
「これからもね、いなくならないで」
「いなくならないよ」
「……こわいんだよ。シアンさん、とおくにいっちゃいそうだから」
「……ユウ。それは大丈――」
言いかけた言葉を一旦遮る。彼女の口からは言葉ではなく、可愛らしい吐息が漏れ出ているから。
シアンが思っていたよりも早く、彼女は眠りにつけたようだ。シアンは撫でていた手も離し、手は繋いだまま楽な姿勢に座り直した。
「大丈夫だよユウ。ユウが不安に思ってることにはならないから」
それは静かな決意。
玄界（ミデン）に来て、過ごし、決めた道筋だ。
寝ていてもその言葉に安心できたのか、彼女は穏やかな表情で眠っていた。それに釣られ、シアンもベッドに突っ伏すように眠りにつくのだった。

□□□

ボーダーの開発部は多忙である。基地の補強からトリガーの研究開発、近界側のトリガーの解析などなど、やる事は常に山積みされている。その忙しさは、部長である鬼怒田の隈を見れば明らかであり、元上位攻撃手だった寺島雷蔵の激太りがその環境を物語っている。
そんな開発部だが、仕事に当然優先度をつけている。担当の振り分けもある。例えば、鬼怒田は必ず近界のトリガー解析に携わるといった具合だ。
「どう思います？　鬼怒田さん」
「信憑性に欠けるな。玉狛の空閑を借りるとしよう。それと、気は乗らんがあの男も呼ぶ。こやつの話が正しいのか判断するためにもな」
「もし真実だったら？」

「決まっておろう。初めに決めていた通りだ」

ガロプラ①

玄界（ミデン）のトリガー技術が急成長しているのは、ボーダーの技術が伸びていることを示している。それを支えているのがボーダーの開発部であり、使用するトリガーの研究開発の他、近界のトリガーの分析も担っている。

その開発部のトップが鬼怒田であり、開発部が多忙であることを体で表現しているこの人物は、常に目に濃いクマがある。そして肥満である。

「君に来てもらったのは、我々が入手した情報の正確性を確かめたいからだ」

鬼怒田が呼んだのは、アフトクラトルにいた人物の1人たるシアンである。主人に忠誠を誓い、頑なに情報を渡さないヒュースとは違い、彼ならあっさりと情報を渡すからだ。

「入手した情報ですか」

「そうだ。大規模侵攻を仕掛けた指揮官。その者なら傘下にある国をこちらに向かわせるという話だ」

「それ誰から聞きました？　ヒュースが話したとは思えないんですけど」

「質問をしているのはこちらだ」

「対等のはずですが？」

「まぁま～。話したら教えてくれると思いますよ。ね、鬼怒田さ～ん」

シアンへの信用度が低い鬼怒田は、あまり親しくしようとは思っていない。シアンも無理にそうなろうとは思わないが、司令の城戸とは対等な関係であることを話して決めているのだ。一方的なものには身構える。

そんな2人を同行してきた国近がふんわりと取り持った。どっちが先かで空気を悪くしても仕方ないだろうと。鬼怒田も国近の言葉にふんと鼻を鳴らしている。同意と見ていいのだろう。

「……ハイレインならそうするでしょうね」

「なぜそれを我々に言わなかった？　まさか忘れていた、などとは言わないだろう」
「迅の予知があるのなら、オレが言う必要もないでしょ」
「たしかに迅の予知でそれを知ることはできる。だが、相手の情報までは迅の予知では分からない。こちらと友好的でいたいと言うのであれば、君の方から言ってくるべきではないのかね」
「アフトクラトルの侵攻を阻めたボーダーなら問題ないと思ったので」
　有用性を示す。それによってボーダーでの居場所を貰っているのに、今回それを怠っては立場が悪くなる。それが分からないわけではないはずが、シアンはそれをしなかった。
　ボーダーとの関係を悪化させたいのではない。それでもいいと思ったわけでもない。
　彼の中での重要度が変わっているだけだ。
　ちらっとそちらを見て、小さく笑ってから鬼怒田へと視線を戻した。
「オレはユウの安全を守れたらそれでいい」
「っ！」
「まさかここで惚気を聞かされるとは……」
　弾かれるようにシアンの方を見た国近の目の輝きには驚きと喜びが混ざっており、その頬は周りを和ませるほどに緩んでいた。
　それに対して鬼怒田はげんなりと息を吐き、単純故に厄介だとシアンへの評価を改める。
　すでにシアンは居場所を固めている。一定数の隊員との交流を持っている。しかもそれだけではない。玉狛支部のスタンスからして、それなりの交流があるシアンに対して本部側が措置を取れば、玉狛支部が対抗措置を打つ。意図的かはこの際どちらでもいいが、今となっては強硬手段に出にくいのだ。
「ガロプラとロドクルーン。今こちら側に近い軌道を取っている国で従属関係にあるのはこの２つだ。何か情報はあるか？」
「どちらにも指示は出てるでしょうね」

「どっちも攻めてくるってこと？」
「その可能性は高い。国の大きさとしてはそんなにだけど、強い人は強いからな」
「また近界民が来るのかな？」
「ガロプラはそうだろうな。従属化したのも比較的最近の部類だし」
上の様子を窺うという意味でも、ガロプラは生真面目に人も派遣するだろう。
「外回りのことは正直そこまで知らない。アフトクラトルのことなら祖国だから情報を持ってただけなんで」
「それは予想の範囲内だ。何か知っていれば共有してほしいというだけなのでな。こちらの本命としては、入手した情報の信憑性だ」
空閑のサイドエフェクトによって、その情報の正しさ自体は把握できる。しかし分かるのは、相手が嘘をついているかどうか。それだけだ。その情報自体の正しさはまた話が違う。情報源の人間が勘違いしていては、本人の中で〝本当〟のことでも、現実には違うということもあり得る。
そこをシアンに補わせている。彼自身の今の思惑を把握するのも兼ねて。
まだ協力的かどうか。
「ロドクルーンの情報は特に持ってないですけど、ガロプラなら多少は」
「なんだと？」
「アフトクラトルから出た時に飛んだ先がガロプラだったんで。大した情報でもないでしょうが、一応後で纏めておきます」
「あ、これ纏めるのわたしのやつだ～」
言葉を先回りし、茶化すように口を挟んだ国近にシアンは笑った。肩の力を抜かれたように、シアンも釣られて笑う。図星だから。
「今回も頼んでいいか？　ユウ」
「うん。いいよ～」
話に一区切りがつき、鬼怒田はやれやれと首を振る。２人のペースは独特なもので、どうにも調子が崩されるのだ。自分のペースに持ち

込もうにも、自然と減速させられて空回りさせられる。主な原因が国近にあることが、ちょっとした懸念材料だ。
　話を切り替えた鬼怒田に連れられ、シアンと国近は奥の部屋へと案内された。そこには元攻撃手の寺島雷蔵もおり、ガラス越しには1体のラッドがいた。なぜか座布団の上に鎮座している。
「情報源というのが、このラッドですか？」
「そうだ。中身は違うがな」
「中身？」
「雷蔵」
　鬼怒田の指示に従い、寺島がラッドを起動させる。テレビを点けるような感覚で。
「あァ？　またオレに……テメェかシアン」
「……エネドラ？」
「アフトの角を分析していた過程で判明したのだ。脳と繋がっていたこの男の角に、本人の人格情報等があるということが」
「ほぇ～。そこまでできるんだ～」
「その女は、あの時の奴か。ククッ、随分とご執心なようじゃねェか」
「記憶もあるのか。どうせなら粗暴になる前の状態がよかったな」
「流してんじゃねぇよ」
　アフトクラトルの角は、それが伸びていくと脳に影響を与え、人格すら変えてしまう。直近の例が目の前にいるエネドラで、今となっては口の悪い喋るラッドである。
「従属国が来るって言ったのもお前だな？」
「問題でもあったか？　国と手を切ってるのはお前も同じだろ」
「まーな」
「……」
　すんなりと流される。それ自体は予想の範疇ではあるのだが、エネドラはシアンが僅かでも言葉を溜めると思っていた。シアンは祖国を嫌っているわけでもないから。
　以前の彼と今の彼の違い。それも傍らにいる彼女が関係しているのだろう。そう推察できるほどに、彼らは分かりやすい。

「チッ。テメェならお前とは違うとか言って噛み付くかと思ったが、牙まで抜かれたらしいな」
「噛むなら歯じゃね？」
「言葉の綾ってもんを知らねェのか！」
「ラッドの方が親しみやすさありますね～鬼怒田さん」
「ふん。口と性格の悪さに目を瞑ればな」
　そうは言いつつも、大規模侵攻での出来事は記憶に新しい。エネドラという存在に対して、国近が抱く気持ちは恐怖が何よりも勝る。国近は他の誰にも見えない位置で、シアンの袖を小さく摘んでいる。
　ちらりと斜め下から彼の顔を見る。元々は友達だったというエネドラの今の姿に、何か思うところでもあるのだろうか。
　いや、そこを気遣うのはもう遅いなと国近は自嘲気味に笑った。だってもう彼らは武器を交えたんだから。互いに、相手を殺す気で。
　自分だったらどうだろう。そんな事は起きないと思うけれど、もし起きたら、戦えるだろうか。友達に武器を向けられるだろうか。例えば今たちに、例えば同じ隊の隊員に、例えば……。
　無理だ。そんなことになったら、心が辛い。
　そうだ。辛いはずなんだ。
「今のお前をブン回したら目って回るのか？」
「おいこらテメェなに考えてやがる！」
「鬼怒田さん、やってもいいか？」
「許可するなよハゲ！　情報くれてやってんだからな！」
「勝手にするんだな」
　巻き込むなとはっきり書かれた顔。鬼怒田はその顔のまま寺島に後を任せて退室していく。若者の勢いについていくのはしんどいのだ。
「どこ行くんだハゲ！　待て！　いや待つな！　ついでにこのバカ連れていけ!!　おい!!」
「懐妊するんだなエネドラ！」
「孕んでねぇよバカが！　それ言うなら観念だ!!」
「へ～、そうなんだ～」

「その女もバカかよ！」
「わざとだよ」
「ブッコロしてやりてぇ!!」
「君ら実は仲いいんじゃない？」
「気色悪いこと言うな……！」
　見事なツッコミ劇だったと寺島は感心したふりで適当に拍手し、本題はもう終わってるなと結論づけた。元上位攻撃手とはいえ、今はもう立派な開発員（ワーカーホリック）。彼もまた多忙を極める人間の一人なのだ。先日エネドラと映画鑑賞していたが。
「エネドラの尻尾を抜くと電力が供給されないから、目が回ることはないよ」
「そうなのか。残念だ」
「用が済んだんならさっさと帰るんだな。テメエにこれ以上付き合う気はねぇよ」
　しっしっと虫のような脚を器用に動かされ、シアンと国近は作戦室に戻ろうかと踵を返す。寺島はここの部屋に残るようで、椅子に深く腰掛けた。もしかしたら、この部屋が彼に与えられた部屋なのかもしれない。
　部屋の散らかり具合とか、仮眠用のグッズがその可能性を高めている。
「ユウ、ちょっと外で待っててくれるか？」
「ん～？　……うん。いいよ～」
　シアンの顔色をうかがい、何かあるんだな～と察して頷く。それを自分は知ることができないということに、幾ばくかの寂しさも感じて。
　彼の隣にいたい。周りから見れば、それは叶っているように見えるんだろう。
　でも違う。たしかに前よりは近づいた。物理的ではなく、精神的な距離感が。それでもまだ、彼の後ろにいる。守られている。
　そう。彼にとって、庇護対象なんだ。
「……遠いなぁ」

閉まった扉を見ながら呟いた。
その扉が、彼と自分の関係を表している。そんな気がした。

「エネドラ」
「あ？」
出ていったかと思いきや、まだシアンが残っていた。単眼で器用に怪訝そうな態度を示したエネドラは、億劫そうに反応する。
平和ボケしたシアンに、もう興味もないようだ。
「余計なことは話すなよ」
「……ククッ。余計なこと？　例えば――――のことか？」
「……バラされたいのか」
「ハハハッ！　そんなにあの女に知られるのが嫌か？　テメェもハイレイン共と同じかと思ったが、どうやらそうでもないらしいな。で、いつまでそうするつもりだ？」
「お前には関係ないだろ」
シアンの眼光が鋭くなる。露骨なまでに反応するのは、分かりやすくそれ以上踏み込むなと線引きしているから。
その行く末を見るのも愉快だが、今は無力もいいところだ。仕方ないかとエネドラは肩を竦め、自分から提案した。
「これ以上互いに干渉しない。それでいいだろ」
「ああ。じゃあなエネドラッド」
「待てテメェ裂かせろ！」

ガロプラ②

ガロプラは近界の中でも大きな国とは言えない。最大級とされるアフトクラトルの従属国であるのだから、それも当然と言える。

敵対国を従属化させるための有効な手段は、相手の弱点を握ること。アフトクラトルは国の命たる母（マザー）トリガーを抑えることで、敵対国を従属化させている。反乱されれば即座に国を潰せるように。

それでも規模がそれなりにある国となると、従属化にリスクも伴う。当然ながら、反乱のリスクだ。

もしその国が、捨て身覚悟で侵攻してきたら。真っ向からやりあえば当然アフトクラトルが勝つものの、時期によっては損耗の規模も変わる。そういったリスクも加味した上で、従属国は選ばなければならない。

それ故に、ガロプラの規模は大きくはないのだ。仮に反乱されてもアフトクラトルは痛手に至らず、それでいてその国の戦力は悪くない。支配する側にとって、これほど都合のいい国は少ないだろう。

そんなガロプラから派遣された人員は6人。トリオン兵や新型のトリガーを携え、遠征艇で玄界へとやって来ている。それに対してロドクルーンは、人を割く余裕がないようで、代わりにトリオン兵を約300体差し出している。

「状況を確認するぞ」

6人全員が囲うテーブルからホログラムが展開される。そこにはアフトクラトルから与えられた情報があり、ボーダー側の戦力が載っている。

戦闘員の数、組織としての総数。具体的な数値を出せるわけではないが、大規模な攻勢を仕掛けたアフトクラトルが掴んだ情報だ。当たらずとも遠からず。現実との差は、誤差として対応可能なほどに少ない。

「黒トリガーの数は1本から3本。それとは別に、アレの存在がある」

「1と3じゃ全然違うってのに、その上でシアンのこともあるのかよ」

隊長であるガトリンの話に、レギーことレギンテッツが悪態をついた。この場で唯一の女性隊員であるウェンがそれを窘める。
とはいえ、レギーがついた悪態は全員が共感できるものではある。黒トリガーはたとえ1本であっても戦況を覆すものだ。その数だけは、正確なものが欲しかった。
何よりも、1本あるいは3本というのは、あくまでボーダーが所持する数の話。シアンが持つ黒トリガーがカウントされていない。
「アフトの話では、シアンは玄界と共闘したらしい」
「今回も出てくると？」
この問いはラタことラタリコフのものだ。ガトリンはそれに首を横に振った。
「俺の見立てでは出てこない」
「その理由は？　我々は一度シアンと交戦していますよ？」
「互いに望まぬ形で、な」
ガロプラに飛んだ後、シアンは最初はガロプラで休んでいた。消費したトリオンを回復させるために。
それが一転したのは、アフトクラトルから通達があってからだ。従属国全てに告げられた内容は、シアンを捕まえること。妥協点は、黒トリガーのみの回収。
それによりガロプラはシアンと交戦。彼の黒トリガーである赫の兎により多大な被害を受け、前線を下げている間にシアンが他の国に移動という形で戦闘は終了した。
「アレは戦闘を生き甲斐としているわけではない。もしそうなら、我々の被害はさらに大きかった。おそらくは、かかる火の粉を払う程度の対応だ」
「アフトはシアンの回収も狙った。それにより交戦が起きたと見ているわけですね」
「そうだ」
実際にはシアンの方から出向いているが、それも目的があったから。なければ動かなかっただろう。それこそ、地雷を踏まれない限りは。

「……真相はなんにせよ、シアンとの交戦は避ける。玄界は黒トリガー４人を含むアフトの精鋭を退けている。十分手強い相手だ」
「そこまでの余力はないですからね」
「ロドクのトリオン兵３００があっても、シアンに出てこられたら無いも同然だものね」
ガトリンの決定にコスケロとウェンが同意。黙っているが、他の者も賛同しているようだ。
全員の賛同を確認したところで、ガトリンは一拍おいてから再度口を開く。
アフトクラトルから出された指示を遂行するために。そして、彼らの思惑からは外れてやるために。

□

エネドラによる情報提供。シアンによる追加情報。そして迅による予知。
３者による情報を下に、ボーダーは水面下で対策を練っていた。大規模侵攻から日が浅いこと。発表している遠征に時間をかけたくないこと。それらを踏まえ、情報を共有する範囲を制限し、いずれ来る敵に備えている。
「三上だ～。やっほ～」
「国近先輩。お疲れさまです」
「おつかれ～」
けれど常に気を張っているわけではない。予知ができる迅がいるのだから、それ用のシフトを組んで過ごすだけでいい。
「お一人なんですか？」
「休憩中だからね」
最近では国近が単独でいることが珍しい。セットでいるものだと思っている三上は、辺りを一度確認してから尋ねた。
眠気もあるのか、国近はあくびをしてから廊下にある長椅子に腰掛けた。休憩中と言うからには、またゲームなのだろうと予想できる。

予想して、再度疑問を抱く。わざわざ作戦室から出てくる理由はないのではと。
「飲み物欲しくなったから～。三上が先でいいよ」
「ではお言葉に甘えて。……あの人とゲームしてたんですか？」
「あの人……うん。シアンさんとだよ～。出水くんは今日の試合解説あるし、太刀川さんは他のとこで待機だからね～」
　ナチュラルに唯我についての言及がないが、スポンサーの息子たる唯我にこの手の話は届かない。何かしら理由をつけて外されるのはいつものことだ。秘匿で行われていた遠征も然り。
「仲いいですよね」
「えへへ、ありがと～。でもシアンさん開発室に出かけちゃった」
「開発室に、ですか？」
「うん。寺島さんとカタパルト作るんだって～。この前からちょくちょく出かけてるんだよ～」
「カタパルト」
「そ～～、カタパルト～」
「……誰が飛び立つのでしょうか」
「ん～。風間さん？」
「ぷっ。ちょっ、笑かさないでください……！」
　想像してしまったらしい。あの生真面目オブ生真面目の風間が、ロボットアニメみたく飛び立つ光景を。
「終始真顔でいそうじゃない？」
「ふ、ふふっ。あはははは！　国近先輩やめて！」
「風間さんに言っとこ～っと」
「本当に勘弁してください」
「は～い」
　怒られはしないだろうけど、そんな話をされてしまったら次会う時にどんな顔をすればいいか分からない。
　ガチトーンで止めに来た三上に、国近はにこにこと楽しそうにしながら頷いた。そんな反応をされては、本当に大丈夫なのか疑ってしまうが。

「もう。……あ、間違えて違うの買っちゃった」
「ならそれわたしが貰うね～。お金渡すから、三上はそれで買ったらいいよ」
「え、いいんですか？」
「わたしのせいだしいいよ～」
「ではお言葉に甘えて」
　買った飲み物を国近に渡し、代わりに受け取ったお金で今度こそ目的の飲み物を買う。それを片手に、近くに設置されている長椅子に並んで腰掛けた。
　チラッと横にいる国近を伺う。シアンがこちらに来てから、彼女がずっと身につけているアクセサリー。それがアフトクラトルの国宝の1つとされる黒トリガーで、シアンが彼女を信頼している証。2人の関係を繋ぐキーアイテム。
　見るのはそれだけじゃなくて、そこから少し上に上げていく。ゲームにばかり時間をかけているのに、ハリのある綺麗な肌。同性として羨ましい上に、最近ではさらに変わった気がする。
「何かついてる？」
「あ、いえ。……国近先輩が前以上に綺麗になった気がして」
「そう？　ありがと～」
「あの……お二人はお付き合い、されてるんですか？」
「へ……？　ぁ、えっと……そう、なれたら……いいなー。なんて」
　照れくさそうにはにかみ、国近が三上の視線から逃げるように目を泳がせた。それでもなんとか答え切ったのは、本心からそう思っているから。
　その姿はこれまでの彼女からは想像できないものだった。異性よりもゲーム。3度の食事よりもゲーム。勉強よりもゲーム。何に置いてもゲームを優先していたあの国近柚宇が、今では一番縁のなさそうだった恋の最中なのだから。
　綺麗だと思った。照れてる今は、先輩なれど可愛いと思った。
　それが三上には、少し羨ましくも思えた。

「告白はされたんですか？」
「し、してないよ！」
ボーダーはたしかに近い年齢の人たちばかりだ。冬島や東のように、年の離れた隊員が珍しいくらいで、三上の年齢からすれば上も下もほとんどが４歳差以内。同年代も多いし、男性の方が多い。
さらには、ボーダーは入隊時の面接も力を入れている。善性というものを持っている人たちが、この組織に入っている。
だから、粗暴に見える隊員も「実は良い人」だったりするのだ。烏丸のようなイケメンもいるし、性格の良い人たちも多い。他校の生徒もいるのだから、そういう目で見れば、出会いの場として申し分ないわけだ。
三上はそれ目的でボーダーに入ったわけではない。けれど、花の女子高生である事実。恋愛話に浮かれる時期でもある。その上、目の前にはその恋愛真っ最中の先輩がいる。
興味を持たないわけがなかった。……もっとも、今さら仲間をそういう目で見ることは、彼女には難しいようだが。
「……だって、怖いからね」
「怖い、ですか？」
怖い人ではない。三上でも分かるそれを、国近が分かっていないわけがない。ならば怖いというのは、シアンのことではない。
そういえばと思い出す。クラスメイトも、告白するのに勇気がいるとか言ってたなと。
さらっと言えそうな先輩でも、それは同じらしい。
「あの人なら断らない気もしますけど……」
露骨なまでに国近を優先しているし。
「絶対は……ないでしょ？」
「……はい」
第一次侵攻が起きるまで、異世界なんてないと思っていた。
それまでの現実が、常識が、絶対が。完全に覆った日だ。
だからこそ、この世に絶対はないと皆知っている。
「もし、断られたら……今までの関係が終わっちゃう」

受け入れられなかったら、叶わない恋心を抱いたまま、処理しきれず。それでも任務の関係上シアンの側にあり続けないといけない。
そんな日々に、耐えられるなんて国近は考えられなかった。
考えたくもない。
誰よりも近くにいられる。彼の隣りにいられる。今のその日々が好きなのだ。失いたくない。壊したくない。変わりたくない。
今が崩れ去るかもしれない。
その可能性を拭い切れないから、国近は足を踏み出せずにいる。
「それにね」
彼はきっと断らない。
じゃあ、彼は自分を愛してくれるだろうか。
同じ気持ちを向けてくれるだろうか。
そうならなかったら。1人よがりの関係が出来上がる。
「わたしはそれも嫌なんだよね……」
世の中の恋愛なんて、おそらくはそうなる人も多いのだろう。付き合っていても、別れる人だって大勢いる。
理想を夢見ていることは国近もわかっている。わかってはいるけれど、それを求めずにはいられない。
「恋愛って……難しいんですね」
「みたいだね～。ゲームみたいに好感度が見えたら簡単なのに」
「ふふっ。でも先輩、それだとヌルゲーだーとか言いません？」
「あはは～。……うん、言うと思う」
見つめ合い、おかしな話だとどちらも声を出して笑う。ＩＦを語り、そうなったらそうなったで退屈だと言うのだから。
ひとしきり笑い合うと、国近がふと不安を吐露した。
「ライバルは、いらないんだけどね～」
漫画とかゲームなら展開として出てきてほしかったりする。その方が波があるから。でも現実ではいらないなと、自分がその立場に立ってみて思ったようだ。
「いるんですか？」
「どうだろうねー。でもシアンさん、加古隊の作戦室の出入り増えた

から。……加古さん美人だし」
　言いながらムカッとしたらしい。口を尖らせて、すね気味な様子だ。
　それを察しながら、恋愛は本当に怖いなと三上は理解する。視野が狭まるらしい。しかも、他の女子がライバルに見えてくるらしい。
「小南もシアンさん追いかけてるし！」
　小南がシアンを追う理由は、国近の考えとは見当違いと知っているはずなのに。もしもを考えるとやっぱり駄目になる。
「2人とも線細くて綺麗だから……」
「たしかにそうですけど、国近先輩もスタイルいいじゃないですか」
　何がとは言わないけれど。あの2人に勝っているものはあるじゃないか。それを言っちゃうと一番自身が傷つくから、三上は絶対に”何が”とは言わないけれど。
「ずっと考えてても気持ちが落ちちゃいますから。この話はやめにしましょう」
「三上が振ってきたよね？」
「あの人は優しい人ですよね。話してみてそう思いました」
「あれ～？　シアンさんと話したことあったの？」
「前に少し。すごい良い人ですよね」
　好きな人の良いところの話をすれば、国近の思考も切り替えられる。そう思って彼女のツッコミをスルーして、強行に出てみたのだが。
　三上は思わぬスイッチを押してしまった。
「へー。2人で？」
「え？　……あ」
　気づいた時には遅かった。立ち去ろうとした三上の肩を、国近が素早く掴んで阻止した。
　非力なはずの彼女の手が、妙に重たく感じた。体を動かせずに固まり、目前でにっこりと笑う先輩に冷や汗をかく。
「もう少しお話しようね～」
　三上が解放されたのは、作戦の開始が告げられてからだった。

ガロプラ③

警戒していた敵の襲撃。それを知らせるのは警報ではない。極秘裏に行われる防衛戦ということもあり、この日に行われるランク戦も時刻通りに開始される予定だ。それに合わせて、一部の例外を除いてランク戦参加者は何も知らされていない。正隊員ではないC級隊員たちも同様だ。

そんな状況下で、敵の襲撃を知らせるのはこの男。未来予知のサイドエフェクトを持つ迅悠一だ。作戦内容は本部の防衛。隊員の多くは警戒区域から迫りくるトリオン兵の対処に当たる。

「出水くんが解説に呼ばれてるから～、太刀川隊は動けるの太刀川さんだけだね。1人だけだとわたしも楽だな～」

「それは結構だけど……」

「？」

「いや、何でもないよ」

「何かあるやつだ」

その何かは話さないのだろう。シアンは首を振ってそれ以上のことは言わなかった。

それなら追及しても仕方ないかと国近は息を吐く。彼の懸念を予想することはできるが、それがあっているかもわからない。自分の希望も多分に含まれている。そういうのは一旦シャットアウトだ。作戦が始まるのだから。

初恋真っ最中の国近ではあるが、A級1位の部隊のオペレーターである。切り替えなんてお手の物。いつもはゲームに使っているモニターだって、今はオペレート用の画面になっている。

「迅さんの予知とシアンさんの情報。天羽のサイドエフェクトも使うみたいだし、相手に同情しちゃうね～」

「オレが知らないものだってある。従属国なら黒トリガーもないはずだけど、新型トリガーくらいは作れるしな」

「それもそうだね～」

「……まぁ、作戦を綿密に練ったのに相手に先回りで備えられるとかは、たしかに同情できるけど」
「シアンさんならどうするの？」
隣りに立つシアンを見上げる。太刀川は他の上位攻撃手（アタッカー）と共に、遠征艇の前で待機している。敵がまだそこまで進行していないため、国近の仕事もまだだ。
時間はあるかと思い至り、シアンは少し考え込む。相手に予知能力を持つ人間がいて、要所要所で待ち構えられていたら。いやこの前提は違うか。
「相手に予知があると知らない状態でってことだよな」
「うん」
「そうなると……。特に何もしないかな」
「なんで？」
「手札が限られてるから」
遠征する側の弱点は、使える手段が限られている点だ。トリオン兵の数も限られ、戦闘で使用すればその数はみるみるうちに減っていく。そして自分たちが使用するトリガーの情報も、相手に知られてしまう。
遠征というものは基本的にリスクが高い。十分なリターンが得られるとも限らない。その遠征先に何日も留まるわけにもいかない。戦闘するなら尚更だ。
となれば、肝心なのはそこで何をするか。ガロプラの場合、玄界（ミデン）への妨害。そのための作戦を練った。
「作戦は綿密に練るほど自由度が低くなる。ある程度アドリブが効くようにしてても、限度がある。今回なら狙いが遠征艇。それの破壊のために辿り着かないと行けない戦力と、敵の妨害を想定してそいつと同行する戦力が必要だ」
大量のトリオン兵を使って外から仕掛ける。それ自体を囮として、数人が中に潜入。本命を隠すとなるとそこに割けるのは最低人数であり、それでいて優秀な戦闘員。
ボーダーもそれを予測しているから、ボーダーの上位攻撃手４人を

最終防衛ラインに配置した。
「囮を囮と思わせないためには、手札の大部分をそっちに使う。んで、残された手札でやりくりしないといけないから、たとえ相手に先読みされてると察しても、無理にそこから裏をかこうとはしない。作戦が瓦解したら最低限すら達成できなくなるし」
「ま～そうだよね～。……シアンさんが狙われる可能性は？」
言葉が少し震えた。
国宝の回収はアフトクラトルの狙いの1つ。それをアフトクラトルが指示している可能性だって十分にあり得る。
迅の予知でも、シアンの読みでも、ガロプラはそれを狙わないとしている。国近はそれを信じたいが、不安は拭えないものだ。
「それは一番ないよ」
けれどシアンは国近のその不安をやんわりと否定した。安心させるように穏やかに笑って。
「ガロプラとは一度交戦してる。黒トリガーの性能だって向こうは承知だ。その上でオレを狙おうとは思わない。それができるほど、今回の敵は戦力を用意してないからな」
3画面の内の1つを見ながらシアンは言い切った。そこに映っているのは、ボーダーの外で行われている戦闘の様子だ。映像ではなく、戦力図での表示。盤上の上に大量の矢印があり、下側がボーダー。上側が敵側。その上側の矢印は、数が多すぎて大変密なことになっている。
そこにそれだけの戦力を使っているのなら、シアンを狙う余裕がない。そもそもシアンが使う黒トリガーは、トリオン兵を一掃できる。ガロプラはその被害をよく覚えている。何よりも、黒トリガー持ち相手に、ノーマルトリガー数人で挑むのは自殺行為だ。近界民の方が、そのことをよく理解している。
「もしものことがあっても、ボーダーのトリガーがあるし。最悪の場合は黒トリガーを使うから」
「……うん。じゃあそうならないことを願おうかな～」
国近としてはシアンに戦闘してほしくない。彼の性格を考えたら、

この手のことで手を抜くとは思えない。そうなると、集中し過ぎてあの状態になる。それは極力回避したいのだ。
彼女のその心配とは裏腹に、シアンは「必要ならそうしよう」と決めていた。国近がシアンを気にするように、彼もまた彼女のことを気にかけているから。
国近柚宇の安全。それこそが彼の最優先事項である。
「ん～、太刀川さんの出番もそろそろかな」
「みたいだな。……となると、うん。やっぱりオレのことは無視だな」
「立場的にそれって大丈夫なのかな？」
「大丈夫だろ。アフト自身が失敗したことだし、できないと分かっていての指示だろうから。アフト内での体裁も必要だしな」
従属国を動かしたのなら。その先に国宝の1つがあるのなら、それへの命令も出さないといけない。小さなことで突かれても面倒なのだから。さらに踏み込んでしまえば、適度な無理難題は必要だ。従属国として牙を砥がせても、多少それを折っておく必要もある。変な気を起こさせないためにも。
不遇な立ち位置。従属国というものは、そういうものである。
「基地に侵入した敵が3人だけど、ジンがこっちに何も言わないし、大丈夫そうだな」
「……シアンさん何かやろうとしてる？」
なんとなくではあるが、国近はそれを見抜いた。敵わないなとシアンは苦笑し、元々隠すつもりもなかったからあっさりと認める。
「これに便乗しそうだからさ。個人的にも、ちょうどいいかなって」
「？」
詳細までは語らないらしい。あるいは語れないことなのか。
どちらにせよ、終われば聞き出せることである。それなら今聞き出さなくてもいいだろう。
であれば、国近が聞くことはこちらになる。
体の向きを変えて、正面から彼を見上げる。座っている状態で、立っているシアンを見つているから、いつもより顔を上げた。その目を、ずっと見ていたくなる彼を、真っ直ぐと。

「帰ってきてくれる？」
その一言に、どれだけの言葉と想いを凝縮したのだろう。スカートを摘む手に、力が入っている。
「もちろん」
迷いはない。言葉を詰まらせることもない。
シアンの中で、決心していることもあるのだから。
「ユウのいる場所が、オレの帰る場所だから」
「……えっ」
その言葉の意味を、どう受け止めたらいいのだろう。
浮かれ、熱され、締め付けられる。その通りの、期待に則した意味なのだろうか。
意識すると顔が熱くなる。スカートを摘んでいた手は胸に移り、抱きとめるように握った。
下げてしまった視線は彼の手を捉える。僅かに持ち上がった手は、しかし何も触れることなく下げられた。
「それじゃあ行ってくる」
「あ、うん。行ってらっしゃ～い」
彼がいつもの調子で言うから。
彼女もできるだけいつもの調子で返した。
そうしないと、仕事にならない。
1人になった部屋で、いつものことのはずなのにそれを寂しく感じた国近は、頬を2回叩いてモニターに向き直った。

□□

今回の戦闘はそう長引くものではない。情報を集め、作戦を練り、持ち込んだ手札をふんだんに使う。それでいて目的が遠征艇の破壊だからだ。最短最速で遠征艇を破壊、それが叶わずとも効果的な損傷を与える。その要の1つが時間なのだ。
外の戦闘は、可能な限り多くの敵を引きつけること。理想はそこで

の勝利でもあるが、あくまで理想だ。敵を引きつけ、時間を稼ぐことが仕事になる。もちろん攻勢の押し引き、その塩梅は難しい。
　そしてそれは、どうやりくりしてもジリ貧になるものだ。数で劣ろうとも、高い連携能力で着実にボーダーが対応している。トリオン兵の数も減らされ続け、敵の弾幕による防衛ラインを突破できない。そもそも突破の必要もないのだが、「戦果一つなく戦力を失っただけ」という結果は、現場を指揮する者にとって何よりも堪える現実だ。
「くそっ!!」
　レギーはそれを少しでも変えたかった。市街地を狙うと見せかけることで、相手を釣ろうとした。しかし予知は変わらない。未来が変わらない。ならばボーダーは動く必要もない。
　そのレギーの前に、ヒュースが姿を現した。
　彼の目的は無論本国に帰ること。自分の主を守るために。その最速の手段は、従属国に接触し、アフトクラトルにまで送り届けさせるというもの。
「――っ、どわっ！」
「なんだ……!?」
「今のは……」
　そこに生じていた重たい空気の中に、一発の砲弾[1人の男]が叩き込まれた。レギーの背後にある公園にそれは着弾し、砂煙と共に轟音と爆風を周囲に撒き散らす。
「やっぱ、着地の時に難ありだな」
「シアンか」
「なっ！　っ……シアン、だと……！」
「ヒュースとガロプラか。ジンに教えてもらって助かった」
　違う場所に行ったら本末転倒だったからなと軽快に笑うシアンとは裏腹に、ヒュースもレギーもその表情を険しくした。
　ヒュースにとって、シアンは味方とも敵とも取れない曖昧な相手だ。この状況になぜ絡んだのか。何が狙いなのかわからない。その上、彼がボーダーのトリガーを所持していることを、ヒュースも知っている。それに対してヒュースは何も持っていない。警戒しないわ

けにはいかなった。
　そしてヒュース以上に、レギーにとってこれは厳しい状況だ。悪夢と言える。隊長のガトリンにして「交戦したくない」と言わしめた相手が目の前にいるのだ。しかも、直接は戦ったことがなくてもその強さは知っている。たった1人でガロプラに膨大な被害を出させた怪物だと。
「何が狙いだ」
「一応情報の把握だな。期待程度ではあるが」
　シアンは肩の力を抜きながら答える。交戦の意思がないことは、その目で表していた。それで警戒を解くほど、ヒュースもレギーも甘くはないが。
「アフトからの指示がどういうものか。踏み込んだ内容を聞いておきたくてな。具体的には、ヒュースの処遇とオレへの対応」
　その話にヒュースは目を細めた。自分の処遇について今の段階で知れるのなら、たしかにそれは知っておきたいことだ。
「素直に答えてくれると助かる。尋問とか趣味じゃないし」
「……答える義理があるかよ」
「ないな」
　あっさりと認められてレギーはガクリと肩を落とした。拍子抜けでもあり、戸惑いもある。今話していて感じるシアンの印象と、元のイメージがかけ離れているのだ。
「オレの予想だと、ハイレインはヒュースを切ってるはずだ。不穏分子を取り除くのがあいつのやり方だからな」
「答える義理はないって言ったろ」
「ヒュース。取り付くシマがない」
「お前は何をしに来たんだ」
　素っ気なく答えた。ヒュースもそのペースに付き合う気はないらしい。それを気にすることなく、シアンは軽い調子で会話を続けていく。
「そりゃあお前が本国に戻るなら、それを止めようと思ってな。単独で帰っても孤軍になるぞ？」

「それが本命か。……だがオレはお前とは違う」
「……そうだな」
否定することはない。その言い分は何一つ間違っていない。
ヒュースはエリン家にて育てられた人間。仕える側だ。それに対してシアンは仕えられる側。シアンの家はエリン家のように、格式のある家柄だった。それ故に心構えも変わる。
ヒュースの忠誠心はアフトクラトルという国よりも、エリン家当主という個人に比重が置かれている。シアンにはそこに該当する人間はおらず、今さら国への忠誠心も湧かない。そこが2人の決定的な違いだ。
「それでもオレはお前の邪魔をする。未来を断たれる選択より、未来に繋がる選択をしようぜ。別の選択肢もあるんだろ？」
驚きはなかった。玉狛での話をシアンにも流しそうな人物に心当たりがあるから。
僅かに生まれた沈黙。その静寂はすぐさま破られた。
「……お前らさっきから人を挟んで話をすんな!!」
「いや、優先事項はガロプラじゃないし」
「このっ……！　ふざけやがって……！」
レギーのフラストレーションが上がっていく。だが最後の一線は超えない。戦闘は起こらない。隊長の命令と、過去の悪夢がそれを押し留めている。交戦して勝てるなどと、万に一つも思っていない。そして何よりも、シアンの黒トリガーなら理論上ガロプラの遠征艇を破壊できてしまう。
つまり、遠征という今回の状況においてはとりわけ、シアンとの敵対が死に直結するということだ。
そんな選択は取れない。
「むっ、とりこみちゅうだったか」
「は!?　ガキ……!?」
「……！　ヨータロー……？」
「くるしゅーない。らくにしていいぞ」
「誰も畏まってないぞー」

突如として場に首を突っ込んできた乱入者もとい闖入者(こども)に、ヒュースとレギーは困惑する。試作カタパルトで飛んできたシアンだけは、陽太郎を見かけていたから驚かない。

カオスな空間にレギーは頭が痛くなってきたが、悲しいことに陽太郎もレギーが目的ではない。陽太郎もまた、用事があるのはヒュースの方だ。

足となってくれた雷神丸から降り、陽太郎はヒュースへと歩み寄る。

「ヒュースを止めに来たか？」

「ちがう。ヒュースにこれを返しに来たんだ」

「……!?　蝶の楯(ランビリス)……」

「……止めないのか」

「ヒュースがかえりたいのなら、とめたくない」

「ヨータロー」

「かえるなら、ちゃんとかえるっていえ」

「……すまない」

陽太郎が差し出したトリガーをヒュースが受け取る。それは元よりヒュースのものであり、帰るのであればそのトリガーが大きな力となる。丸腰とでは雲泥の差だ。

その様子に困惑するレギーの後方で、シアンは静かに目を閉じた。陽太郎のおかげだろうが、ヒュースが想像よりも馴染めている。その事は兄弟子としても嬉しい。だが、こうなったのなら選択肢が自ずと限られる。たった1つのものに。

「悪いがガロプラには退場してもらう」

「は？　……っ!?」

「遅い」

背後を振りかった瞬間に、レギーの首と胴が分断された。武器が見えていなかったのは、その必要がなかったから。なにせボーダーには、体のどこからでも出せる便利なトリガーがあるのだから。

「くそっ……！」

「……シアンっ……！」

２つのスコーピオンを繋げる技マンティス。それによりレギーは切断され、トリオン体を破壊されたことで緊急脱出（ベイルアウト）が行われた。これまでの近界民（ネイバー）にはなかった技術。それがあるからこそ、ガロプラは踏み切った作戦を行えていた。そしてそれを国近から無線で聞いたため、シアンもレギーを落とすことでヒュースの道を１つ切れたわけだ。

「言っただろ。オレはお前を無駄死にさせる気はないんだ」

「むっ。かえったらヒュースはしぬのか？」

「殺される可能性が高い。だからオレは単独で帰らせる気はないんだよ。さっきの奴が教えてくれればよかったんだけどな。もしくはさっきからそこで見てるジンか」

シアンの視線の先には、黒トリガーである風刃を片手に建物の上に立っている迅がいた。

全員の視線を向けられたことで、暗躍が趣味な迅はその場から飛び降りて３人と１匹の下へ。

「どうも実力派エリートです」

シアン①

端的に言って、ガロプラの作戦は失敗に終わった。誰が悪かったわけではない。全員のパフォーマンスはよかった。その上で失敗に終わったのは、ボーダーが上手だったというだけである。

展開した作戦の全てが最善で対処され、目標物の前でも猛者たちが待ち構えていた。不気味に感じさえする鋭さだった。

それ故に誰かが責められることでもないのだが、作戦にない行動を取ったレギーにウェンは言及する。

「まぁまぁ。レギーにはトリオン兵全部任せちゃってたし」

「それよりも気にすべきなのは、シアンが出てきたことでしょう」

避けたいリスクを犯しかけたレギーの話から、それよりも大きな問題となり得る存在へと話題を変える。過ぎたことよりもこれからについて。作戦が失敗した今、重要なのはそちらだ。

「何がシアンを行動させる要因となったのか。レギーの記録を見るに、アフトの捕虜を止めるために動いたと思えますが……」

「引っかかるわね。あのシアンがそんなことするなんて思えない」

「とは言っても、こちらは戦闘時のシアンしか知らないわけだし」

ウェンの意見を否定するわけでもないが、コスケロは安易に同意を示すことはできなかった。平時と戦時の違いは、人によっては大きなものだ。戦時のシアンしか知らないのだから、あり得なくはないと可能性を頭に残している。

それでも、ウェンの意見に納得できるものもある。第一印象が強烈過ぎただけなのか。あるいは。

「レギー。お前はどう感じた」

隊長のガトリンが腕を組みながら問いかける。この場の面々で、唯一対面したのはレギーだけだ。その時に肌で感じた情報は価値が高い。

話を振られたレギーは、どう答えたものかと眉間にシワを寄せて頭を悩ませる。感じたものはある。あるのだが、明白な答えは得られて

いない。言葉にどう表せばいいのか、それが難しいのだ。
「説明じゃなくていい。感想で構わないから言ってみてくれ」
部下の悩みを察し、ガトリンは言葉を変えて促す。
それならばと彼は、ある程度頭で纏めつつ言葉を発した。
「……言葉を交して感じたのは――」

□□□

「んで？　結局どうしたんだ？」
「どうって？」
「迅が絡んだんだろ？」
「あ～」
個人戦用のブースがある大部屋の一角。ソファに埋もれて休憩しているシアンに太刀川は事の顛末を問いかけた。
太刀川にとって、そこまで興味のある話でもない。雑談程度にはなるというだけのもの。そこに加えて、自身の立場柄聞いておく必要があるから聞いている。それ以上でもそれ以下でもない。
シアンの隣に座る国近は、私情込みで話を聞きたいようだが。
「特別何かがあったわけでもないぞ。ジンがその場を纏めて終了ってだけだからな」
「それ絶対なんかあったやつだろ」
「シアンさんは関わらなかったの？」
「関わってることには……なるんだろうな一応」
国近の問いかけを、シアンは頭を捻りながら答えた。なにせシアンの取った行動は、ヒュースの思惑の妨害である。後から判明したのは、シアンの介入が無ければ五分五分だったということ。ヒュースがガロプラを介してここを去るか、あるいはこちらに残るか。
その2択だった状況を崩して1択だけにした。ヒュースに選択肢が無くなり、ボーダーの遠征の利用のみがヒュースの帰る手段となった。そのためにヒュースもまたボーダー隊員として今日入隊している。その話し合いもシアンの存在によって難航しかけたが、三雲は何

とかそれを果たした。
「シアンさんはお咎めとかなし？」
「咎められる理由もないからな。ヒュースには文句言われても仕方ないけど」
「わざわざお前が動く必要あったか？　迅もその場に向かってたんだろ？」
「オレの基準では必要があった。無為に死なせる可能性は減らしときたくてな」
「仲いいんだね～」
「仲がいいというか、一応弟弟子にあたるからな。面識は少なくても分かってて死なせるのは夢見が悪いだろ？」
「それもそうだね～」
「お前よくそれで遠征だの何だのできてたな」
　ボーダーのトリガーとは違い、近界のトリガーには緊急脱出（ベイルアウト）が搭載されていない。ガロプラは搭載したがそれも日が浅い。
　トリガーやトリオン兵を用いた戦争を繰り返す近界だが、その機能については考慮されていなかったようだ。
「戦争を仕掛けるのは、勝てる見込みがあるから。あっちはトリオン兵を多用するのが主流だからな。人的被害はほとんど出ない」
「緊急脱出がないのもそれが理由？」
「それもあるとは思うが、そこに消費するトリオンすら戦闘に回すからだな。人を投入する時は、大局を変えたりトドメを刺す時がほとんど。そうなるとその日の内に勝敗を決めることになる」
「勝敗がそのまま生死の分かれ目になるわけか」
「属国化される時は生き残れるけどな」
　現ボーダーでは防衛任務でトリオン兵を相手にするか。あるいはランク戦で切磋琢磨するか。基本的にこれでのみトリオン体を利用する。そして近界民への知識が乏しい世間の目もある。安全装置の設置は必要不可欠なのだ。
　体制や環境。これらが玄界と近界のトリガー技術の発展に違いを生むのだろう。

「今周りに人いないからいいけど、この話ここでする内容じゃないと思うな～」
「それはそうだな」
「大丈夫だユウ。オレもタチカワも周りを把握してるから話してる」
「う～ん、別に2人のそれを信じてないわけじゃないよ？」
「うん。ありがとうユウ」
　もし仮に誰かに聞かれてしまったら。事情を知らない人間が知ってしまったら、シアンの立場が危うくなるかもしれない。この世に絶対なんてないのだから、国近はそのもしもを気にし、シアンはその心配に礼を言った。
「ところでシアン。お前の弟弟子って強いか？」
「強いぞ。今は鈍ってるだろうが、いい腕してる。剣の心得もあるし、ボーダーのなら弧月使うんじゃないか？」
「ほほう。お前のお墨付きか」
「太刀川さん新人刈りはゲームでもタブーだよ～」
「シアンのお墨付きなら新人扱いじゃなくていいだろ。ちゃんと合意を取ってからやるって」
「そもそも今日来るの？」
「来る」
　もっともらしい国近の疑問をシアンが断言する。2人の視線は彼に集まり、シアンは根拠を続けて言う。
「所属支部もそうだが、遠征狙いだからミクモたちの隊に入るしかない。ランク戦も残り少ないって話なら、早いうちにB級に昇格したいはずだ」
「……シアンさんランク戦見てたっけ？」
「いや。小南から聞いた」
「……ふーん？」
「……ユウ？」
　何やら機嫌を損ねてしまったらしい国近に困惑し、意見を求めようと太刀川の方を見たらわざとらしく視線を逸らされた。
「さーて期待の新人が来るまで誰かとやるかー」

「おい」
「じゃあ後でなー」
『気づいてるならお前も向き合ってやれよ』
『っ!?　……わかってる』
　あまりにも予想外な。あのバカ代表たる太刀川慶が言うとは誰も想像できないようなことを言い残し、太刀川は誰がいるかをモニターで確認しながらブースに入っていった。
　それを最後までは見送らず、シアンは一度長く息を吐いてから隣りの少女を見た。これまた分かりやすく、そしてわざとらしくそっぽを向いている少女を。
「ユウ」
「つーん」
「実況よかったぞ」
「えっ!?　き、聞いてたの……!?」
「そりゃあまぁ。ユウの実況だし」
「聞くなら聞くって先に言ってよ～」
「なんで」
「え、それは……そのぉ。……はずかしいから、かな」
「いやいつもの調子で楽しそうにしてただろ」
「そういうことじゃなくって！」
　実況そのものが恥ずかしいのではない。着眼点はそこではない。それをシアンに言うのもまた胸がつっかえる。
　国近はそれをうまく言葉に変換することができなかった。
「オレはユウがちゃんとこなせるんだなって感心してたんだけど」
「えぇ……、いつも仕事はちゃんとしてるじゃん」
「そうなんだけどさ。なんというか、離れてみるとまた違う感じがしたんだよ」
「え。……それって……どういう？」
　心臓が握られたような感覚がした。なにせ”いつもとは違う”と言われたのだ。転び方など2つに1つだが、その内の1つは最悪なものでしかない。心臓に悪い2択だ。

「良いなぁって」
「ほぇ？」
「ユウ自体が変わるわけじゃないんだけど、ユウの良いところの見え方とかが変わって見えてさ」
「それって、つまりどういうこと？」
「え？　ユウがかわいいってこと」
「～～っ!!　ぅぅ、しあんさんのばかぁ」
「なんで!?」
　聞かれたから答えた。シアンにとってはシンプルなことなのだが、乙女国近にとっては爆薬である。熱くなった顔を両手で覆い、俯いて絞り出した声はか細いものだった。
　この状況にシアンは、また振り出しに戻ったのではと思ったが、そっぽを向かれたわけではないから前進はしているなと捉え直していた。
　それから3分ほどだろうか。国近が気持ちを落ち着かせて顔を上げる。それからソロランク戦のモニターを見やり、利用してる隊員たちを見渡してからシアンに視線を向けた。
「シアンさんが言ってた子はまだ来てないのかな」
「さっきアラシヤマ隊の子と歩いてたぞ」
「あれ？」
「使い方教わってる最中なんじゃないか？」
「あ～、かもね～。試合見る？」
「そうだな。せっかくだし」
「じゃあもっと見やすい場所にゴーゴー」
　国近が身軽にひょいとソファから跳ね上がり、数歩進んでから振り向いて首傾げる。
「シアンさん？」
　てっきり合わせて立ち上がると思っていた彼が、まだ立っていない。何か考えているのは伝わるが、それが深刻な悩みとも思えない。
　側に戻ろうかと思った矢先、シアンが立ち上がって視線が重なった。それが不意だったのもあって、国近の心臓はビクリと跳ね上が

る。
「週末は防衛任務のシフト入ってなかったよな？」
「たしかそうだね。入ってないはずだよ～。徹ゲーする？」
「それも悪くはないけど、デートしよう」
「うん。……うん？　え、で？」
「ユウ、オレとデートしてほしい」
　その発言に国近は目を見開き、なにも言葉を発することもできずに、ただ静かに頷いた。

シアン②

いつもより早く目を覚ます。昨晩は寝付くまでに時間がかかってしまった。必然的に睡眠時間は短い。

それでも彼女に眠気はなかった。セットしていた目覚まし時計が仕事をするより早く目覚め、設定を解除してからシャワーを浴びる。

今までなら大して気にしなかった。徹夜でゲームもしていたし、作戦室にある自分の仮眠ベッドで寝て、寝起きで太刀川や出水とまたゲームをすることもあった。要は、体裁を気にする相手がいなかった。寝起きでシャワーを浴びることがあるのは、寝汗で気持ち悪く感じる時くらいか。

けれど今は違う。彼と出会ってからは違う。無意識に目で追うようになった頃から、なんとなく服装や髪を気にしていた。意識するようになってからは、毎朝シャワーを浴びるし、部屋を出る前に必ず自身の見た目を鏡で確認するようになった。

シャワーを浴び終わり、髪を乾かしているとふと気づいて笑ってしまう。鏡に写る自身の顔が、どうしようもなく緩んでいた。

今日という日をどれほど楽しみにしていたのか。顔にはっきりと書かれている。

「わたしって、けっこう単純だったんだね～」

誰に言うわけでもなく、ほんとに、どうしようもないなとひとりごちる。

仕方ない。言い訳もしない。もう認めている。

「ほんとうに……」

その後に続く言葉は――出なかった。

認めていてもやはり恥ずかしい。気持ちを言葉にすることも。彼の名前をそこに繋げることも。胸の内がこそばゆくなる。

「……よし！」

髪の手入れまで済ませたところで、化粧道具を用意する。まさか使う日が来るとは。遠征前の自分に言っても……いや、遠征直後の自分

に言っても信じないだろう。
今(こん)たちと一緒に買いに行き、同い年の女子たちからレクチャーしてもらった。それをどこから聞きつけたのか、加古もやってきて教えてくれた。
密かにこつこつと練習を重ね、お墨付きももらってついに。今日という日に自分のために化粧を行う。
なにせ今日は、ようやく叶ったデートの日なのだから。

□□□

シアンの行動範囲はもちろんのこと、国近柚宇の行動範囲も狭い方だ。近界(ネイバーフッド)という例外を除けば、ボーダーや学校の周辺で完結している。インドア派な女の子なのもあるが、ボーダー隊員は概ね行動範囲は比較的狭いだろう。ドライブを趣味にしている加古のような人間以外、あまり離れた地域には行かない。
それを今日2人は行う。ちょっとした遠出をする。
そのための待ち合わせ場所は、デートの定番たる駅前……ではなくボーダー内である。同じ建物に住んでいるのだから、別れて駅に行く必要はない。
集合場所へと足を進めると、予想通り先にそこに彼がいた。視力は決して良くはないけれど、遠目に見ても彼だとわかる。ずっと、それこそ毎日見ているのだから、間違えようはずもない。
自然と足が早くなる。ファッションを気にし始めた時に、クラスメイトが学校に持ち込んでいた雑誌を見て、ヒールも良いなと思った。今(こん)たちに相談してみてから、一緒に店に見に行った。そこで選んだ靴を今日使っている。
「わっ――」
慣れない靴は危ないからと言われて、ハイヒールは選んでいない。足首捻りやすそうだなと自分でも思って、それはすぐに選択肢から除外した。
選んだものは、ヒールが高過ぎずそれでいてお洒落に思えるもの。

それでも浮かれていたせいか躓き、
「大丈夫かユウ？」
彼に受け止められている。
「うん、おかげさまで。ありがと～シアンさん」
「どういたしまして」
躓いたことへの驚きはあったが、受け止められたことへの驚きはなかった。心のどこかで、護ってくれるだろうという期待があるから。
それは傲慢で、高望みで、思い上がってるだけのことかもしれない。けれど、現にそれが起きると、無意識にふにゃりと頬が緩くなる。
「えへへ、おはよ～」
「おはようユウ。……行こうか」
「あ、うん」
浮かれていることは誰の目にも明らかだった。シアンでも分かるし、国近自身も自覚できている。
そのことを指摘しようかとシアンは考えたが、それはすぐにやめた。それは水を差す行為だ。今の国近の様子は、彼女がどれだけこの日を楽しみにしていたかの表れでもある。そしてその気持ちを、シアンも理解できる。
だから何も言わない。今日という日のデートを楽しむために。
「ユウ」
「？」
「今日はいつもと違うんだな」
「えっと……」
何について言われてるのかは、彼の視線で把握できた。服装だって普段着るものとは違うし、メイクにしてもそうだ。それらすべてを含めて言われてる。
そこまではいい。その先は分からない。どういう意味で言ったのかは分からない。
そこを聞こうとした矢先、答え合わせは彼の口から行われた。
「きれいだ」
「え」

「こういう時どう言ったらいいかはあんま知らないから、ベタなことした言えないけどさ。……ちょっと大人びた感じもあるし、控えめだけどおしゃれにしてるとこがユウらしい、と思う」
「……うん」
「……オレは、そういうの好きだな」
「っ！　あ、ありがと……」
言及してほしかったことではある。褒めてほしかったことでもあるし、好印象を抱いてほしいことでもあった。
それをいざ言われると、嬉しさと恥ずかしさが混ざり合って視線を逸してしまう。
「その……シアンさんも服、似合っててかっこいいよ」
顔を直視して言うことはできなかったが、お返しをすることはできた。
シアンもまた、普段着ている服とは違った。そもそも普段着は忍田のお下がりで、中には少し時代遅れ感のある服もあった。しかし今着ているのはまったく違う。国近も初めて見る服装だ。
それを指摘されたシアンは、少し驚いてから嬉しそうに微笑む。
「ありがとうユウ。カコのおかげだよ」
「加古さん？　……あ……えっ？」
「せっかくだからコーディネートしてやるってカコに言われてさ」
「それって」
「今後も使うけど、そうなるな」
「そっか。……えへへ、じゃあお揃いだね～」
「？　あー、たしかにそうなるな」
シアンも、国近も。どちらも今日という日のために準備をしてきた。
ペアルックではないが、行動自体は被っている。
それはたしかに、お揃いと呼べた。
いざデートをするとなっても、シアンも国近もデート初心者である。何をどうすることがデートなのか。そもそもデートとはいった

い何を指すものなのか。考えれば考えるほどドツボにはまるものであり、2人はそれぞれ周りにそれとなく――当人たちは隠せているつもりで――聞いている。
　それぞれの調査の後、話し合って決まった予定は『互いに1つずつ行きたい場所を決める』である。
「シアンさんはこれやったことある？」
「いや初めてだよ」
「ならよかった～。シアンさんがやったことないことを、一緒にしてみたいなって思ってたから」
「そう言うユウはやったことあるのか？」
「一応経験者だけど、上手ってわけでもないかな」
「ならユウに教わることもできるわけだ」
「うん！　任せて！」
　2人が訪れているのはアイススケート場だ。理由は国近が言った通りである。
「シアンが経験したことがないものを共有したい」
　それだけだ。いたってシンプルな理由であるも、誰しもが納得できる大きな理由でもある。「好きな人に自分の好きなものを好きになってもらいたい」という考え方もあるが、言うまでもなくそれは既に達成されている。シアンだってゲームは大好きだ。
　それでは他はというと、石狩鍋とじゃがバターである。食べ物である。恋愛初心者の国近に、初デートに自分の好きな食べ物を含めることはできなかった。
　そうして選ばれたのがアイススケートである。自分ができるものであり、シアンが知らないものだ。ちょっとした遠出の必要もあるため、ボーダー関係者に見られる可能性は限りなく低い。……デートの相談をした時点で手遅れだが。
「ここからも見えるけど、あんな感じで氷の上を滑る遊びだよ。専用の靴はそっちで借りられるっぽいね」
「バランス感覚が大事ってわけか」
「体幹ってやつもかな」

「ユウにはなさそうだな」
「むぅ～」
そう言われるのは少し不服だが、否定できることでもない。
国近は頬を膨らませてシアンの肩を軽く叩いた。やさしい打撃を加えてから国近は受付に行き、入場するための手続きを済ませる。先払い方式であるためそれも済ませ、シアンの分は後から請求するつもりだ。
「おまたせシアンさん。こっちがシアンさんのスケートシューズね」
「サイズ教えたことあったっけ？」
「あったんじゃない？」
1度くらい言ったことはあるのかもしれないし、1度も言ったことはないのかもしれない。今までの全ての会話を一言一句覚えているはずもなく、「まぁいいか」とシアンは考えることをやめた。知られていたとして、問題になるようなことでもないからだ。
アウターを脱いで身軽になり、荷物等はロッカーの中へ。スケートシューズに履き替えたシアンは、立ち上がってバランスの取り方を確認する。
「支える部分が細いけど、わりとなんとかなるものだな」
「氷の上に行くとまた違うけどね」
「摩擦がないからか」
「そういうこと～」
国近もスケートシューズの紐を結び終え、「行こっか」とシアンに呼び掛けてスケートリンクを目指す。スケートリンクの出入り口は決まっており、休憩のために出てくる人もいる。
国近が先にリンクへと滑り出し、他の人の邪魔にならないように少し進んでから端で止まった。
「壁の段差に手を置きながらがいいよ。急がずゆっくりね～」
「ちょい、ユウ待てまって！　ここ滑るんだが！」
「そりゃ氷の上だもん」
ゲームで負けそうな時とはさらに違う。普段見れない”余裕のないシアン”の姿に、国近は静かに笑う。

なんとか両足ともリンク上に乗せたシアンが、ペンギンのような歩き方で進んでいく。それにはもう国近も耐えられず、声を出して笑いながら近くに寄っていった。
「楽しそうだなユウ」
「ぷふっ……！　うん……！　だっていっつもカッコイイシアンさんが今かわいいんだもん」
「……すげぇ複雑だ」
「でもシアンさんも滑れるようになるよ。ゲームと一緒」
「滑り方を教えてください師匠（せんせい）」
「ふっふーん。いいでしょう。って言っても、言葉にすると単純なんだよね。足を交互にゆっくり前に出すだけだから」
「それが初めからできれば誰も苦労はしないんだけどな」
「大丈夫だいじょーぶ。わたしが横でサポートするから」
他のスケーターたちがどうしているのか。基本的な動作を目で確認したシアンは、すぐに体を支えられるように片手を壁の側に備えながら前へと進む。
それはギリギリ滑っていると言えるレベル。ペンギン歩きから半歩前進したぐらいだろうか。重心を一定に保つのは難しく、揺らいでは壁に手を置いてバランスを取る。
「想像の倍以上に難しい……！」
「わたしも初めはそんな感じだったな～」
それは恥じることではない。誰しもが通る道であり、空閑とヒュースも自転車に苦戦を強いられた経験を持つ。氷雪の国を除けば、ほぼ全ての近界民（ネイバー）は自転車でもアイススケートでもコケるだろう。
「とりあえず一周を目標にしてがんばってみよ」
できないからってやめるつもりは毛頭ない。
国近もうまく滑られるわけではないと言っていたが、今のシアンほどではない。ゆっくりならコケることなく滑られる。ならばシアンの目標もそこだ。国近が楽しめるように、同じレベルに到達してなんの気兼ねもなく共に楽しむ。
「みぎ～ひだり。みぎーひだり。そんな感じそんな感じ」

声でシアンをサポートしつつ、国近は時おり周りも確認する。その時に目に入ったのは、子どもが2人で手を繋ぎながら滑っている姿だ。兄弟だろうか。背の高い方の男の子が軽く手を引いてリードしている。

それは教え方の1つなのかもしれない。他にも、道具を用いながら滑るというやり方もある。自転車で言うところの補助輪だ。おそらくはそのやり方が、最も安全かつ有効的なやり方だろう。安定性が上がり、慣れてくればあとは自身で滑るだけ。

しかし今この場にはない。借りることもできるが、それはさすがにシアンも躊躇うし、国近も提案しづらい。

「ユウ？」

「その……両手に支えがある方が、シアンさんも滑りやすいかなって」

ならばやることはこれになる。

シアンの左手に国近は自分の右手を添い合わせた。普段から距離感が近い2人ではあるのだが、意識して触れるのは違うのだろう。あるいは、自覚したからか。

国近はシアンの視線から逃げるように顔を逸らし、そのせいで赤くなっている耳を晒してしまっている。煩くなる鼓動は彼女の体温を高め。氷上であるのに「ちょっと暑いね」と誤魔化すように嘯いた。

「ユウはいつも優しいな。ありがとう」

「……うん。どういたしまして」

数秒そこに止まっていると、他の利用客が2人の視界を通っていく。それからシアンは国近の手を包むように握り、そのまま彼女をぐいっと引き寄せた。

「ほえ？」

今からスケートを再開するという予想を外された国近は、気の抜けた声を出しながら目を丸くして顔を上げる。

引き寄せたからか、2人はその方向に働いた力によって僅かに滑り、すぐそこにあった壁へとシアンの背が当たる。国近はその腕の中におり、周囲の目も気にしてかその顔は紅葉みたく真っ赤に染まっていた。

「すべ、す、すべりゃないの？」
「滑るけど、なんかな。……そういう気分なんだ」
「どういう？」
　ショート寸前だった脳をなんとか保たせ、恥ずかしさに耐えながらその顔を見上げる。
　好みの顔だから、その顔が好きなのは当たり前だった。けれども今はそれだけじゃない。シアンだから好きで、シアンだから惹かれている。心の底から。
　どういう表情でも好き、と言うとそれは嘘になる。だって隣りで笑っていてほしい。悲しい顔はしてほしくないし、させたくない。
　うまく言葉に表せられない今の表情はどうだろう。好きか嫌いかで言えば、好きなのだろう。少しだけ悩ましげに見えるのは、悩んでいるのを隠したいからか。そんな彼に、何かできたらなと思った。
「シアンさん」
　――その決断を、いつ振り返ったとしてもやっぱり後悔することはなかった
「わたしもいるから。シアンさんからしたら頼りないかもしれないけど、でもシアンさんの力になりたい」
「ユウはいつも助けてくれてるし、頼りないなんて思ったこと微塵もない」
　間髪入れずに言い切ったシアンは、一度大きく息を吐いてから国近の背に腕を回してさらに引き寄せる。それが宝物なのだと。大切なものだと示すように。
「好きだよユウ」
「うん。……うん!?　え!?　すっ……!?」
「誰にも渡したくないって思うぐらい、ユウのことが大好きだ」
「あ……うん……　うん！」
　重ねた手はそのままに。空いている左手を自分の胸の前で握った。
　夢などではなく現実で。言われた言葉は本物だ。
　それを飲み込むほどに込上げる感情があり、張り裂けそうな胸の膨らみは涙へと変わる。

「わたしもっ……だから……。すき、だから……これからっも……ずっと……ずっとそばに、いて……！」

それはいつしか言った国近の望み。

異邦のものに対する恋する少女の、何よりの願いだった。

シアン③

デート以降2人の関係が変わったのかと言うと、特に変わったものはない。それは拗れた理由があるのではなく、単にこれまでと大して変わらないからだ。

無自覚から自覚へと変化し、相手の気持ちが分からないという不安が解消された。これは当人にとっては大きな変化なのだが、周囲からすれば目に見えて分かる変化ではない。とっくに気づいていた一部の人間に言わせれば「国近ちゃんが気づいてなかっただけよ」とのこと。

何よりも、互いの気持ちが判明したとして、露骨なまでにいちゃつくような2人でもない。

「あれ？　シアンさん出かけるんすか？」

「玉狛に用事があってな」

「ってことは柚宇さんも？」

「そうしよっかな。でももう少し待っててシアンさん。先行ワンキルできそう」

「エゲツないことしてるな。……ユウが来てくれるなら、向こうでやることをちょっと変えられるか」

ゲームラブ＆負けず嫌いな彼女は、対戦相手の顔が見えないオンラインで対戦ゲームをするのはどうなのだろうか。負けると泣く国近の性格も相まって、シアンはその手のゲームに渋い顔をする。

とはいえゲームが彼女の趣味だ。止める気は毛頭ないし、本人が楽しめているなら万事ＯＫである。

「出水も行くか？」

それを見届けながらシアンは出水を誘った。玉狛支部から戻った後、出水がゲームに参加するかは不明である。しかしもし参加する場合、ボーダーに残って待つのも退屈この上ないだろう。

出水は太刀川のようなランク戦狂いではない。その上、出水と正面から打ち合える射手（シューター）などそうはいない。時間を潰すのも一苦労だろ

う。
「あー、面白そうっすけどやめときます」
「えー？　出水くん行かないの？」
「行って何するかは想像つくんで。せっかくなら、玉狛第二が何をするか知らずにランク戦観たいんすよね」
「あ、そっか～。一応出水くんの弟子だもんね」
「そんなとこですね」
　玉狛第二の隊長を務める三雲修は、一応出水と同じ射手にあたる。本来ならボーダーに入隊できないほどの少ないトリオン量を補うため、防御性の高い近接トリガーのレイガストを併用しているが、主な戦闘距離は中距離なのである。そのためポジションを1つ当てはめた時、”一応射手”という言い方になるのだ。
　ポイントさえ貯まれば、万能手（オールラウンダー）とも呼べるのだろうが、それは当分先のことになりそうである。
　ともあれ三雲は射手のことで出水に相談し、いくつかアドバイスも貰っている。三雲本人は合成弾を教わるつもりだったようだが、それはまだ早いと出水が判断した。
「そういうことなら出水くん、このゲームやってていいよ」
「いやそのゲームのルール全然知らないんすけど。まぁ適当に時間潰すんで大丈夫っすよ」
「そっか」
　対戦も終了したようで、国近はばたばたと音を立てながら身支度を整えていく。急ぐ理由もないのだが、待たせるのも悪いと思ったらしい。
　出かける予定がなかった国近の服装は完全に部屋着だ。しかし作戦室の一画を我がものとしている彼女は、外出用の服もそこに用意している。正確には用意するようになった。今回みたいに、急に出かける時に備えて。
「次の玉狛第二の試合、期待してていいんすか？」
「ランク戦は運要素があるからな。まぁでも、前回よりはキレがあるように引き上げるつもりだ」

誰をとは言わないし、出水も聞かない。それはもう分かりきってることだ。
そしてその言葉を受け、出水はニィッと口角を上げた。
「そりゃあ楽しみっすわ」

□□□

シアンが玉狛支部に足を運ぶのは、弟弟子にあたるヒュースのためだ。ヒュースが電撃加入を決めての最初のランク戦。その様子をシアンも国近と一緒に見届けていた。近接よりの万能手として加入し、周囲の期待と想像を上回る働きを見せた。これにより玉狛第二は、空閑とヒュースの2大エースでより盤石に点を狙えるようになったわけだ。
だが以前からヒュースを知るシアンの目には、その姿が鈍って見えた。数ヶ月間捕虜として生活していたため、どうしても動きのキレが以前より劣る。それを感じさせない動きではあったのだが、分かってしまうものは仕方がない。
気になってしまうから、ヒュースの感を取り戻させようとシアンは決めたのだ。
「なぜお前から持ちかけてきた」
玉狛支部にある訓練室に入り、ヒュースはシアンと対峙して問う。面識はあれど互いをよく知る仲というわけでもない。その真意をどうにも読み切れない。何か裏があるんじゃないかと勘繰りたくなる。
そんなヒュースにシアンは肩をすくめて嘲笑する。難しく考え過ぎだと。
「お前が遠征部隊に入るとして、蝶の楯(ランビリス)を使用できるかは怪しい。真っ当な考えでいけば、ボーダーのトリガーを使うことになるはずだ」
「……だろうな」
「で、お前はまだ動きが鈍い。そこを戻させる」
「それが分からないと言っている。お前に理由はないはずだ」

「あるさ。お前が死ぬ可能性を減らせられる。同郷のよしみだよ」
「……ふん。礼は言わないぞ。お前のせいで話が少し拗れたからな」
「じゃあ今回ので帳消しにしてくれ」
「それはお前次第だ」
やるというのなら、ヒュース自身が納得できる状態にまで引き上げる。とことん鍛え直す。それが達成できた時、ようやくヒュースはシアンへの溜飲を下げるだろう。
そうなるためにも、シアンは一切の緩みが許されない。加減などいらず、ヒュースのキレを取り戻させる。いや、以前よりもさらに上へ。それがヒュースの望むところだ。
「始めるか」
同時に戦闘体へと換装する。室内はすでにフィールドが展開され、ランク戦で使用される市街地Ａへとその姿を変えていた。
「どちらかが活動限界になる度に仕切り直し。そのタイミングで初期位置もシャッフル。互いにオペレーター付き」
「ああ」
初回だけは向き合ってる状態から。
ヒュースは弧月を構え、シアンも弧月を帯刀する。
「旋空――」
そのまま居合を仕掛けようとするシアンに弾丸が殺到した。
トリガー角（ホーン）を持つヒュースのトリオン量は多く、出現させた弾の半分だけでも１人を落とすことができる。さらにはヒュース自身の操作技術の高さから、その時々に合わせて弾道を設定できる。
（なんだっけコレの名前）
それぞれの弾が角度を変えながら展開し、左右に前方に上からと多面的にシアンへと迫る。変化弾（バイパー）と呼ばれるそれを、シアンは後方へと弾かれる形で回避。お返しとばかりにシアンも弾を出現させヒュースへと打ち出した。
（っ！）
これにはヒュースも驚かされたが、意表を突かれるほどではない。

シールドを展開させながら落ち着いて避け、今得た情報を整理していく。
（弧月と旋空。射手（シューター）のトリガー。まだ通常弾（アステロイド）とは決められないな）
爆発はしなかったため炸裂弾（メテオラ）は候補から外す。だが他のものとはまだ決められない。弾をカーブさせられる追尾弾（ハウンド）やヒュース自身が使う変化弾は、何も設定しなければ真っ直ぐに飛ばせられるからだ。
そのことを頭の片隅に置きつつ、小南から聞いていた情報はすべて捨てた。
――あの人が設定してるトリガーは全部近接用よ
小南は嘘をつける性格ではない。その彼女が言っていたことは事実だったのだろう。しかしそれは古い情報だ。今のシアンのトリガー構成ではない。
残りの情報を探るのも兼ね、ヒュースは再度変化弾を放って様子を見る。開いている距離を詰めてくるか。それともシールドで防ぐのか。
シアンの行動はそのどちらでもなかった。家と家の間に逃げ込み、ヒュースの視界から姿を消す。
「（シアンさんの反応が消えた。バッグワーム使ってるね。……トリガー構成だいぶ変えてるね）」
「（そのようだな）」
（どう攻めてくる。射撃トリガーを持っていても、その練度は高くないはずだ。必ず距離を詰めてくる。奇襲狙いか？）
玉狛支部に到着して早々トリガーを弄っていたのは、バッグワームを追加するためだったのだろう。国近が来たことで、お互いにオペレーター有りの状態で実践ができる。タイマンなのだからランク戦の環境には程遠いが、経験を積めることに変わりはない。
「（ランク戦ならヒュースくんもバッグワーム使う手もあるにはあるけど、今回はそうしてもねぇ）」
「（なんであれ待つだけだ）」
動くことなくその場で待つヒュースに、家越しで弾が飛来する。弧を描いていることから、それが追尾弾であることは明白だ。他の射撃

トリガーをまだ持っている可能性を考慮しつつ、先程のもハウンドだったのだろうと仮定する。
適度に散らされて飛んでくる弾を、ダブルシールドで盾を広めに展開しながら避けていく。それが誘導だと分かっているが、その方がまだマシだとも理解していた。
（来るか）
シールドを1つ解除し、弧月に手をかけて周囲を警戒。家々を挟んだ向こう側にいたことは事実だ。平面的に見てシアンが仕掛けられる方向は3つだけ。ヒュースから見て正面か左右。この3面だ。
ヒュースの視界は広い。市街地マップ程度で1対1のこの状況なら、僅かな影も見落とすことはない。
視界の端で動きを捉えた。レーダーではまだ映っておらず、ヒュースがそちらに体ごと向くのと同時に、オペレーターの宇佐美の声が聞こえた。
「（距離３０！）」
その距離を告げられている間に、シアンはバッグワームを解除して弧月を構えていた。
家と家の間、塀を伝って出てきたシアンは、そこから地面へと飛び降りるのではなく、グラスホッパーを展開してそれを足場にする。
「旋空――」
（エスクード）
「――弧月」
「……ッ」
今度は振り抜かれた。
エスクードの耐久度では、上級者の旋空弧月を防げない。それは先のランク戦で村上によって実証されている。それを踏まえてヒュースはエスクードを活用した。それを足場にするというブラフを作り、実際には転がるようにして結局地面に戻るだけ。
子供騙しのようなやり方だが、自分の位置を上下に素早く動かすことで、相手の狙いをずらさせる。
それでも完全に外させるまでには至らない。シアンは３０ｍとい

うヒュースとの距離を、グラスホッパーを活用することで縮めながら旋空弧月を使った。それは踏み込み旋空弧月とも違い、跳躍してから弧月を振るうまでに少しの間がある。

これによりある程度は相手の動きに合わせて狙い直すことができ、ヒュースの片足を奪うことに成功する。

しかしそれで終わるわけではない。グラスホッパーを活用したのは、あくまで距離を詰めるため。旋空弧月はおまけだ。それで落とせれば美味しいなというだけ。

（ちっ）

ヒュースも何もしないというわけにはいかない。片足を斬られたことで着地時にバランスを崩したが、すぐさま対応する。グラスホッパーの性能は空閑との模擬戦で把握している。距離は縮められているのだから、中距離戦ではなく近距離戦。使うトリガーは弧月。

グラスホッパーで跳躍しながらシアンが投げてきた弧月を、ヒュースは立ち上がりながら弧月で弾き、その弾いた弧月がヒュースの右肩に刺さる。

（っ!?）

「オレだって足場以外に使うぞ」

ヒュースは不利を背負わされ、スコーピオンを手にしたシアンにそのまま押し切られる形で一戦目が終了した。

２戦目からはランダム配置だ。シアンはそれをいいことにバッグワームを使用し、ヒュースがいそうなところを目指して移動する。その足は緩やかなもので、この瞬間はどうやら通信を楽しんでいるらしい。

「（シアンさんグラスホッパー気に入ったでしょ）」

「（バレたか。実際便利なのもあるけど、使ってて楽しいんだよ）」

「（投げた弧月も反射させてたもんね～）」

「（検証も兼ねてな）」

「（……シアンさん？）」

その場に止まったシアンにどうしたのかと聞いてみた。何か狙いがあるようにも思えない。
「(いいなって思って)」
「(ん？)」
「(ユウの声にサポートされながら、命のやり取りにならない戦いをするのも楽しいなってさ。ランク戦とか、楽しいんだろうな)」
「(うん。きっと楽しめると思うよ。わたしもランク戦でシアンさんのオペしてみたいし。太刀川さんとシアンさんの2人が前衛で～、それなら出水くんももっとのびのび弾撃てるでしょ～。唯我くんはいつの間にか落ちてるの)」
「(いやサポートしてやれよ)」
「(あはは、じょうだんじょうだん～。……でも、絶対楽しいと思うな。シアンさんと太刀川さんなら、撃墜数で勝負したりするだろうし)」
「(……否定できないな)」
ありありと想像できる。出水が悪ノリしてキルパクするのもありそうだ。そうやってひとしきり笑いあったところで、シアンはバッグワームを解いた。使っていたのは、ただ単に話す時間を作りたかっただけ。
2戦目からは、ヒュースの剣術の腕を引き上げるのも兼ねて積極的に近接戦闘にするつもりだ。
「(っと、そうだシアンさん。林藤支部長からＯＫ貰えたよ)」
「(それはよかった。ありがとうユウ)」
「(何を頼むの？)」
「(それはまだ言えない)」

シアン④

街の外れ、玉狛支部からもある程度離れた河川敷の一画で、迅に連れ出された三雲と空閑はある人物と会っていた。その人物は、先日ボーダー本部に攻勢を仕掛けた張本人。ガロプラのメンバーのラタとレギンデッツである。

争った者同士がこの短期間で穏便に会合できたのは、玉狛支部の方針とガロプラ側の柔軟な対応によるものだ。

今回の目的は、事前に林藤と迅から持ちかけられた玉狛支部との同盟。その回答のために接触し、果たしてそれは秘密裏に結ばれたのである。

同盟を結んだとはいえ、ボーダー本部からすればガロプラは敵である。人目を避けるように場所を選んだが、それでも長時間共にいるわけにもいかない。これで解散になると思いきや、ラタが最後に1つだけと追加の話を持ち出した。

「聞いておきたいのですが、あなた方ボーダーは、シアンという存在を理解していますか？」

ラタの発言の意図を読み込めたのは、予知を持つ迅だけだった。迅は「そういうことか」と無言のままに、前々から予知していた内容に納得する。

しかしそれはサイドエフェクトがあってこそ。三雲と空閑はその意味の説明を求めた。

「やはり、知らないようですね」

「呑気なもんだと思ったが、知らねぇなら納得だな」

「まぁ玉狛（うち）はあまりシアンさんと接触してないからね。あの人の立場が特殊だから」

「なるほど。そちらに呑（ミデン）み込まれた、というわけでもないようですね」

「そっ。ボーダーはあの人と対等な関係を構築している。で、あの人は基本的にトップチームと一緒にいてね。うちとは違う派閥と仲がいいって感じかな」

「そういうことですか」
シアンの今の立ち位置を迅が明かす。ラタもレギーも、そうなると余計に頷けるものだと唸る。
シアンは、うまいこと入り込んだのだなと。
「……あなた方はシアンをどう見ているのですか？　個人的な意見で構いません」
「どうって、強い人？」
「責任感もある人だと思ってます」
「なるほど」
空閑にとっては、師でもある小南に匹敵する相手。三雲にとっては、大規模侵攻後の出会い。それらの印象が強いのだ。
ラタはそんな空閑と三雲の答えに相槌を打ち、
「シアンを人として見ているのですね」
それを切り捨てた。
「っ!!」
「え……!?」
迅はその言葉に瞑目する。彼にとっては、察している答えの解説を聞いてるようなものだ。
「な……にを……」
一番動揺を隠せなかったのは三雲だ。空閑も驚いているが、それを言葉では表さない。嘘ではないことも把握し、真っ直ぐにラタを見ている。
「そうですね。あまり長く時間を取るわけにはいきませんが、順を追って説明しましょう。……かつてアフトクラトルには天才がいました。たった1人で国力を数段引き上げさせた類を見ない稀代の天才、リア・ハーヴェイという女性です」
三雲の動揺が落ち着くのを待たずに、ラタは話を進めた。言葉通り、本来敵同士である人間が、長いこと接触するわけにはいかないからだ。なおかつ、三雲がこの時にすべてを飲み込めずとも、空閑と迅がいる。1人でも理解すればそれでいい。
「彼女は天才でしたが、その頭脳がずば抜け過ぎていました。彼女の

理論に周りがついていけないんです」
「ついていけてたら、近界（ネイバーフッド）はほとんどアフトの支配下だったろうな」
「ほうほう。そこまでの人か」
聞いたことがあるような、ないような。
空閑は話を聞きながら記憶を掘り返していた。たとえ聞いていたとしても、あまり思い出せないあたり当時は興味も薄かったのだろう。
「その彼女の弟こそがシアン・ハーヴェイであり、3年ほど前に命を落とした人物です」
「は……？」
今度こそ、三雲の思考が完全に止まった。その言葉を疑った。
なにせシアンは今もボーダーにいる。太刀川隊をはじめとした多くの上位陣と交流している。
それなのに命を落としているとはどういうことなのか。
それが本当なら、いや。空閑が何も言わないのなら、それは本当の事なのだ。しかしそうだとしても、それなら――
「それならいったい、今のあの人は誰なんですか!?」
三雲のその反応にラタは一時目を閉じた。
シアンは本当に、うまいことやっているのだなと。鬼才にして異才な天才たるリアは、やはり怪物だった。
「彼はシアンですよ。そこは合っています」
違うのは、シアンを名乗るモノに対する表現。
「シアンの死後に、リアが3年かけて完成させた研究の結晶。他に例のない。そして誰にも真似出来ない技術の塊。完全自律式人型トリオン兵。それが今のシアンです」

□□

「シアンさんが……ト、トリオン兵……？　なに、いってるの……？」

その声は震えていた。その顔は引きつっていた。信じたくないとその表情(かお)が、その目が語っている。
彼女の、国近柚宇のそれを、シアンは申し訳なさそうに小さく笑うしかできなかった。
シアンの話を聞いているのは、唯我を除いた太刀川隊とボーダー上層部。無論玉狛支部の林藤も同席しており、彼はそのスタンス上この話に冷や汗をかいていた。想像すらしなかった内容だ。
「自覚したのはアフトが攻めてきた時。戦いの終盤だった。オレはあの時、ユウに引き止められたときに自覚した。オレの中に何かがあるなって」
国近が止めなければ、シアンはその後も戦場に出ていた。トリオン体を破壊された後でも、ハイレインと対峙するために。
それは半分近く無意識なもので、何かに突き動かされているようなものであった。なんとも言い難い確信が自分の中にあり、こうしなければならないと思い込んでいた。それを払拭させられたのは、他ならぬ国近のおかげであり、それでシアンは自分のことを察した。
「オレは3年前に一度死んでいる。変わった黒トリガーが相手だった。トリオン器官を抜き取られて、ついでにその時に心臓もな」
「ふむ。たしかトリオン兵による被害でもその事例はありましたねぇ」
「違いは過程ですね」
「過程ですか?」
根付の言葉を、忍田が補足する。
「たしかにトリオン兵は、トリオン器官があるとされる胸部を貫くことがあります。しかしそれは、そうしないと中身を取り出せないからと推察されます。ですが彼の言う黒トリガーは、それをせずに取り出せるというものでしょう」
忍田の補足にシアンは頷き、根付はそれを頭に入れた上で疑問を呈す。
「それに何のメリットがあるんです? どのみち戦争であるのなら……」

「殺すほうが無難ですね」
　根付は言葉を濁そうとしたのに、それを唐沢がはっきりと言い切った。ハンカチで冷や汗を吹きながら、根付は唐沢の方を見る。彼は話を続けた。
「しかし、相手を殺さずにそれを回収できるのなら、それはそれで使い道があります。人質ないし捕虜。あるいは労働力（奴隷）の確保です」
「なっ……！」
「その文化があるのかは知りませんがね」
「実際オレは殺されてるしな」
　ないとは言い切れない。近界だって多くの国があるのだから、ひょっとしたら、そういう国もあるかもしれない。少なくとも、身分制度はあるのだから。
「そっちの話はさておき。死んだ後、オレは姉さんの手によって生き返らせられた。ザオ○クよりかはザオ○ルの方が近いかな」
「いきなりゲーム用語を出さないでくれないかね？」
「え、今の説明わかりやすかったですよ？」
「それ君たちだけだよねぇ」
　発言した出水は、「そうかな」と太刀川と顔を見合わせた。太刀川隊は全員ゲーム脳である。シアンが来てからゲームの時間が前よりさらに増えた。その影響かもしれない。実は城戸も、わかりやすいなと内心で思っていた。
　シリアスな空気を、そうやって薄めるのはシアンとしても助かった。シアンにとって、上層部に対しては報告だ。おまけ要素だ。本命は、気になるのは太刀川隊の反応。それを時々見つつ、話を続けていく。
「どういう手段かは知らない。なにせ死んでる間の出来事なんて記憶にないからな」
「ふん。解析しようにも、その肝心のものは文字通り胸の中というわけか」
　鬼怒田のエンジニアらしい発言にシアンは笑い、それから自分の頭をつんつんと指差す。

「それと脳ね」
「……なるほど。トリオン兵というのはそういうことか」
この場のほぼ全員が息を呑む中、城戸は淡々と進めていく。今までに出た情報だけで、おおよその見当がついたらしい。
「完全自律式人型トリオン兵。……君がそうだと言うのなら、その在り方が何よりの説明となる、か」
城戸は疑わず、鵜呑みにもせず、得た情報に対して自分の頭で咀嚼していく。
「人と同じように自由な思考が可能である反面、それは使役者にとってリスクも生じる。裏切りというリスクに対する措置が、思考系統に組み込まれていると」
「そういうこと。けど姉さんは天才過ぎた。トリオン兵としてのシアンじゃなくて、生前のシアンとしての思考が可能になってる」
「トリオン兵であるなら、機械的且つ合理的な思考になっていたはずだもんな。たしかにお前さん、非合理的な行動も取るわな」
玉狛支部に足を運んでいる様子を、林藤だって見ている。それが主に小南との個人戦のためだとしても、それをやるメリットはたしかに薄い。「楽しいから」という理由があっても、それだけで動くのは機械らしくない。とはいえ、それができるからこそ、完全自律式と言えるのかもしれない。
なんにせよ、他のトリオン兵との違いが大き過ぎる。毛色があまりにも違う。今みたいに申告されない限り、人だと周囲が信じ込むほどに。
「……それで、君がそれを我々に話す理由はなんだ。君にとってその行為はデメリットしか生まないはずだが？」
忍田の言葉に皆の視線が再度シアンに集まる。
そこが主目的だ。その話をすることこそが、シアンがこの場を望んだ理由だ。
これまでのはあくまで前振り。話したいことを話すために、知っておくべき前提を伝えただけ。
そしてこの行為こそ、シアンがトリオン兵らしくない証。自分の立

場を危ぶませる行為は、この上なく非合理的なものだ。
それを口にする。今回の目的。自分の決断を。
「オレが変わったら始末してほしい」
一拍の静寂があった。
それを破ったのは、彼を想う少女だった。
「何言ってるのシアンさん!!」
「ちょっ、柚宇さん落ち着いて……!」
「落ち着けないよ!! だって……こんなの……こんなの……!」
彼女らしくない大きな声だった。いつものんびりしているマイペースな彼女からは、想像できない声量。その声と瞳には怒りも、哀しみも、嘆きも篭められていた。
しかし誰が彼女を咎められようか。自分の彼氏が、恋人が、もしもというｉｆの先で、自分を始末してほしいと頼んでいるのだから。
立ち上がろうとする国近を隣に座っていた出水がなんとか止める。今この場だけはと。
シアンも何も言わなかったが、「ごめん」と視線で語っている。国近は言葉を押し殺し上げた腰を下ろした。激しい濁流が胸中で渦巻き、きつく縛られた口元は揺れている。
「現状は必要のないことなんだけど、この先のことは分からんからな。……ジンはなにかしら視てるだろうけど」
未来予知ができる迅がまだ何も言っていないのは、視ているものが可能性の低いものだからなのか。それとも……。その真相は誰も知らない。
「前兆みたいなものは出てる。というか、オレとは違う何かが起きてる感覚がある」
その言葉に国近はハッと息を呑んだ。それがいったい何かを、国近も垣間見ている。集中しきった状態で見せる冷徹さ。普段の様子とはかけ離れた雰囲気。
それが何であるかは、この話の流れで理解できた。理解できてしまった。
それこそが本来の姿。トリオン兵としてのシアンの姿だ。感情と

いう無駄を省いた状態。何に揺らされることなく、合理的な判断の下に行動する兵器。
「オレの完成から数日で屋敷に襲撃があった。技術やら理論書、制御系統とかはその時に焼失していて、製作者たる姉さんは黒トリガーになってる。だから、オレがアフトクラトルの誰かしらにコントロールされることはまずない」
そこは安心してほしいと、ボーダーが真っ先に憂うべき項目を消す。スパイではなく、誰かの制御下に置かれることもあり得ないと。そもそも迅が警告していないのだ。後ほど再度確認を取るにしても、息をつけることに変わりない。
それでも警戒しないといけないことはある。それこそ、シアンが何よりも危惧していること。
「姉さんの狙いがどっちだったのかは、今じゃ確かめようがない。ただ、オレがトリオン兵になった時の行動は少しだけ予想できる」
「では、その時はそれを合図に我々は君への対処を行うとしよう」
「……それで、予想できる行動というのは？」
「黒トリガーの回収」
端的であり、そして何よりも現実味を帯びていた。
本来所有していないといけない黒トリガーを、他人に渡しているのだから。それを回収しようとするのは、当然の行動である。
「よし、話はわかった」
「……本当にわかったんですか太刀川さん？」
腕を組み、これまで黙っていた太刀川が、声を発すると共に立ち上がった。彼はボーダーの中でも屈指の学業成績の悪い人間だ。俗に言うバカだ。
その太刀川に対して、出水はいくつかの意味も含めて聞いた。本当にわかったのかと。
その出水に対して、太刀川はにやりと笑って返す。自信満々に。確信を抱いて。それだけで出水も理解する。この隊長は本当に、何もかも承知したんだなと。
「お前が国近に手を出した時が合図だろ？」

シアンが絶対に取らないであろう行動。それが合図になると理解している。その声色はいつになく真剣で、隊員の出水も、師匠である忍田も目を細めた。
だが当の本人はそんな2人の反応を気にしない。
シアンを引き込んだ者としてのケジメもある。ボーダー1位としての役割もある。
いや、そんなことは建前に過ぎない。
誰にも譲れないことだ。たとえ迅であろうと渡してやらない。
これは一種の使命とも言えた。
「その時がきたら俺がお前を斬る」
たとえその時、自身のオペレーターに恨まれることになろうとも。
「だからお前は国近を護り続けろ」

「いいんですか城戸司令。太刀川くんに任せて」
シアンや太刀川たちが退出した後、唐沢は肩をすくめながら問いかける。
実力の話ではない。仮にシアンが敵対行動を取ったとしても、ボーダーの総力には敵わない。もちろん黒トリガーを回収されていれば、簡単に済む話ではないのだが、そうでないなら早い話忍田に戦わせれば片がつく。
だから唐沢が確認しておきたいのは、組織としての対応の話だ。さっきのは太刀川個人が宣言しただけに過ぎず、城戸はその事について何も言及しなかった。
若者たちのイイ感じのやり取りを見せられて勝手に退出されただけである。……もしかすれば、普段から城戸の表情が固いのも災いしたのかもしれない。
「……構わない。元よりそういう取り引きだ」
「!?」

「取り引き……。それは誰とのです？」
シアンとの取り引きと今回の件は合致しない。彼との契約内容は、”敵対しないこと”が前提で結ばれている。
それに対して今の話は、”敵対した後”だ。その話は今日出たばかりのはず。それなのに「元からそういう取り引き」とはどういうことなのか。
自分が知らないだけなのかと唐沢は他の上層部の様子を確認したが、鬼怒田や根付はおろか、旧ボーダー時代から付き合いがあるはずの忍田と林藤すら驚いた様子だ。
つまり、城戸は個人でその者と取り引きをしたというわけだ。
それが誰かはこの場の全員予想はついていた。しかし共有してもらうためにも聞かないといけない。
その人物の名を、城戸はいつもと変わらぬ声色で告げた。
「リア・ハーヴェイ。彼の姉だ」

リア・ハーヴェイ

何でもない日の日中だった。日本は平和な国で、遠いどこかの国の情勢は時おり荒れる。玄界（ミデン）にとって、それは普通のことであり良くも悪くも日常の1つである。

それはいついかなる時代でも変わらない。激動の時代という特別はあれど、概ねいつもの世界である。

その日の日中、ボーダーに向かおうと河川敷を歩いていた城戸に、1人の女性が声をかけた。女性――というにはまだ若く、少女――というには大人びている。いわゆる若い女性というやつで、ぱっと見た印象だと女子大生くらいだと思うだろう。

「少しいいでしょうか？」

「はい。どうかされました？」

彼女の容姿からして、日本人ではないことは明白だった。それにしては日本語が堪能だなと率直に思い、留学生だろうかと仮定。道にでも迷ったのだろうかと城戸は自分の中で予想を立てた。

「お話がしたくて、お時間を頂いてもいいですか？」

「あまり長くは取れませんけど……」

「あー。若い女性と一緒にいると社会的にどうこうというやつですよね。もちろんそこも配慮して、人の目を避けられる場所にしますとも」

「むしろ逆効果な気もしますが」

「何も起きませんからご安心ください。城戸正宗」

「!?　……なぜ、私の名前を？」

「そう警戒しないでください。簡単に入手できた情報だからですよ」

「……君は何者だ」

「ふふっ。自己紹介してませんでしたね。私はリア。リア・ハーヴェイ。あなたがご存知の近界民（ネイバー）の1人です」

■

リア・ハーヴェイと名乗った彼女は、本人の言う通り近界民だった。疑いようなどない。近界（ネイバーフッド）という存在は非公開であり、それを知っている者たちはボーダーに所属している。もしかしたら海外にも、という可能性は捨てきれないが、彼女の容姿からしてそれもなち。

アジア系の美しい漆黒で長い髪を持つも、その瞳はルビィのように赤い。

その組み合わせは、地球上ではおそらく見られないものだ。その上、彼女の日本語は流暢だ。トリオン体ならそれも可能にさせる。

「いえ、トリオン体ではないですよ。今の私は生身です」

「……それではどうやって言語を？　短期間で習得できるものではないと言われているのだが」

「あまり時間はかからなかったですよ。ちょっと忍び込んでネットをざっと流し読みしながら音声聞いただけ。私にとっては難しいことではないので」

俄には信じ難い話だった。しかしトリガーを見せられながら言われると説得力はそれなりにあり、受け入れるしかなかった。

「そもそも、一応敵地とも言える場所に潜伏するんですから、トリオン体を使うわけがないじゃないですか」

「……むしろ逆ではないかね？　言語の壁を超えるためにもトリオン体は必要だ」

「普通はそうらしいですね。でも、私なら国内全範囲でトリオン体を探知できるようにします。戦争と外交と訓練に警備。それぐらいにしかトリオン体は使わないのだから、探知される場所は決まってる。それ以外の場所で反応があれば、即ちそれが潜伏者というわけです」

「理屈はわかるが……、それの実現もやろうと思えばできるのだとして、こちらでは難しい話だな。玄界（こちら）は近界（そちら）に比べて広過ぎる」

「そのようですね。トリオン技術も遅れているようですし。……それが必要ないから、ということなのでしょうけど、それでは攻め込まれた時に痛い目を見ますよ」

「我々ボーダーは共存の道を選んでいる」

「そのようですが、悲しいことに武力は必要なんですよ。この世から欲と力が消えない限りは」
そう口にするハーヴェイは、私の目にはあまり悲しんでいるようには見えなかった。むしろ、もうとっくに諦めているような。諦観している者の様子だ。
「君の目的は何かね。雑談ではないのだろう」
「……そうですね。では、取り引きしましょうか。私とあなたの個人間で」
「取り引き？」
「私のお願いを少し聞いてもらうだけですよ。ちなみにこれは他の人に相談するのも駄目です。この場で決めて、そして私と会ったことは頃合いまで内緒にしてもらいます。迅くんに気づかれるのも面白くないので」
なぜ迅のことまで知っているのか。どうやってそこまで調べ上げたのか。それらは聞こうとしてもはぐらかされた。
胡散臭い話だと思うこともなかった。それは彼女がいたって誠実であったからであり、彼女は私が拒めないカードを持っていた。脅迫などではない。迅の予知に引けを取らない先読みの力。
群を抜いた天才である彼女が、”ただの計算で導き出した答え”。
――アリステラが襲撃されるという話
「……!!」
「どういう規模の戦争になるのか。トリオン兵の傾向。予測される被害。全部教えてあげますよ。その先どうするのが有効な手になるのかも。その代わりのお願いは簡単なことです。私のかわいいかわい仔犬（シアン）が来たら、預かってほしいだけ。ある程度の自由付きで」
「それは、対価が釣り合っていないように思えるが？　そもそもアリステラが襲撃されるという確証など――」
「――確実にそうなりますよ」
淡々と、呆れたように彼女は、こちらの言葉を遮ってまで言い切った。
そのまま流れるように、彼女はその結論に至った根拠をつらつらと

並べていく。他の国[星]の情勢といった要素を話し、私の中での信憑性を高めていった。物語のように細かく全てをというわけではなく、適度に情報を散りばめる形で。

信じたくない話であり、外れてほしい予測だった。しかし彼女の話はそこで終わらない。辿る道だと言わんばかりにその先のことまで言及する。繰り返したくないのなら、どう変わることが最適だと彼女が考えているのかも含めて。

「私を誘導するつもりか？　仮に君の望む形になったとして、その後に何がある」

「いえ特に。私にとってはちょっとした遊びってくらいで他の何でもないですよ。城戸さんにはメリットがあることが待ってます」

「私に何をさせようとしている」

「城戸さんはあなたの望む道を進めばいいだけですよ。私としては、シアンを一時でも預かってくれればいいだけのこと。その後のことは気にしません」

彼女の言動を理解することはできない。本当の望みが何なのかまるで見えない。いや、そのシアンとやらをこちらに任せたいというのは本音だろう。ただ、本当にそのためだけなのだろうか。

「まぁまぁ、死にゆく私の遺言だと思ってそれぐらい聞いてくださいよ。どう転んでも城戸さんの役に立ちますから」

「……なにかの病か？」

「いえいえ健康体ですとも。でも数年後には死にます。そうなります。ですからあなたと会うのも今日が最初で最後。これでもちょっと必死なお願いだったりするんですよ？」

余裕を感じさせておきながら言うことではない。

「……それも計算だと言うつもりか」

「はい。私頭いいので」

自信に繋がっても良さそうなことを、嫌そうに彼女は吐いた。

「頭がいいと碌なことないですよ。国は軍事に傾向してやらなくていいこともするし、どこも効率の悪いことしてるし、体裁なんて気にするし。要は、気づきたくないことも気づいちゃって、それの原因も

解っちゃうんですよね」
　もう会うことはないからだろう。彼女は抱えていたものをぼろぼろと吐き捨てていく。愚痴を零すその姿は、唯一と言っていいほど彼女が年相応の姿を見せた瞬間だった。
　国名は言わなかったが、国の上層部がどうとか。同格の他の家がどうとか。国の在り方から国の発展具合まで。それどころか”人”がどうかまでつらつらと話し続けた。
　話している時の様子のせいか。短な時間で終わらせたかった話し合いを、どうしても中断させる気にはなれなかった。
「煩わしいことは多かったわけですけど、個人的に気になった謎とかも解明できてるんで満足してるんですよね。死に際に思い残すこともないですし」
「……こちらについてはまだ知らないことが多いのではないか？」
「あら～、城戸さんは優しいですね～。渋さもあるから女性にモテるんじゃないですか？」
「揶揄うのはやめたまえ」
「これは失礼。……まぁ玄界（ミデン）が抱える謎を解明するのも悪くはないですけど、やる気はあんま出ないですね。私はもう自分の人生飽きちゃって……他のことはどうでもよくなったんですよ」
「他のことというのは、具体的には？」
「全てですよ。人の生死も、国の存亡も人生も。世界を解明した先にあるのは虚無感だけ。だから本国の発展も見限りましたし、詳細な資料とかも書くのやめました」
　今は自由なのだと言わんばかりに、彼女は大きく腕を広げながら体を伸ばす。
「人生なんて遊び（ゲーム）と同義ですからね。飽きたらやめる。それだけです。で、あとは本国へのちょっとした仕掛けとかのやることやって、私の死後に次の人生（ゲーム）を始めさせるんです」
　いたずらを仕掛ける子供のように彼女は笑った。そしてその発言内容を、この時理解することなどできなかった。
　たとえ理解できていても、止めることは不可能だ。誰が相手であっ

ても彼女は足を止めない。誰に何を言われようとも、彼女は考えを変えない。
強固な決意によるものではない。まるで運命に従うように、彼女にしか見えない1つの道を歩んでいる。
「あ、そうだ。真面目な話と愚痴だけでは悪いので、最後に面白い話と置き土産をあげますね」
「気遣いは無用だ」
「まぁまぁ聞けよ」
「急に口調が強くなったな」
「空閑さんも知らないような話ですよ」
……もはや驚きも出なくなっていた。彼女なら何をどれだけ知っていようとも当然だと思えてくる。何ができても当たり前で……なるほど。誰しもにそう思われるのは、本人の言うとおり煩わしいものなのだろう。
重荷にはならない。負荷になることはない。ただただ煩わしいだけか。
「不思議に思いませんか？」
「それは何に対してだ」
「近界そのものですよ。その在り方が不思議じゃないですか？　国は母トリガーが支える。神をそれに同化させることで国土を広げられる。それが常識として知られてますけど、母トリガーはどうやって生まれたんでしょうか。そしてそこに住む人も」
考えたことがなかったわけではないが、宇宙誕生の謎と同レベルの話だ。考えてやすやすと解明できるものでもないとして、次第に考えるのをやめていた話。
それを彼女はやったのだと言う。
そのお披露目をある程度ぼかしながら私に行った彼女は、いくつかの置き土産を残して姿を消した。

■

「彼女がこちら側に残していったものには、鬼怒田開発室長に完成させてもらったものも含まれている」
「……緊急脱出（ベイルアウト）ですか。確かにあれは優先事項として念押しされたことを覚えとります」
旧ボーダーやアリステラが多大な被害を受けた戦争。その際には間に合わなかった技術だ。正確には、間に合わないと断定できるタイミングでリアが城戸と接処した。当時のボーダーの技術力を把握し、自身の要望を受け入れさせるために。
それはともかく、隊員の身をより守るための技術であり、ボーダー内で互いに切磋琢磨しやすくなる代物だ。第一次侵攻の後ということもあり、鬼怒田も開発部も時間を惜しまず作り上げた。
それ以外にもリアが置いていったものはあるが、わざと理論を虫食い状態にしているものがほとんどだ。それはつまり、ボーダーの技術力や研究度が、リアの理論に追い付いていない証である。
「城戸さん。シアンのことはひとまず様子見ってことでいいのかな」
「概ねそのつもりだが、こちらも備えはしておく」
「備え？」
林藤の疑問に答えるために、城戸は用意しておいたある資料を取り出し、それを上層部全員に行き渡らせる。
「これはまた……」
それに目を通し、それぞれ独自の反応を示す。林藤は頬を引きつらせ、忍田と唐沢は重く息を吐いた。根付と鬼怒田は、それぞれの分野を理由に軽く頭を抱える。
「鬼怒田開発室長。遠征艇の増築とこの資料の２つ目の完成を並行してもらいたい」
それはリアが残した唯一無二の技術結晶。
それの制御装置の作り方だった。

A級部隊①

「なぁ、これ必要なことなのか？」
「そうなんじゃないっすか？　上層部からのお達しなんで」
「遠征選抜の直前によくやるぜホント。今までやったこともないってのによ」
「それだけ今回の話は重たいってことっすよ。それに、あの件自体は太刀川さんの預かりでいいらしいですし」
「ま、そこを抑えれてりゃあ十分だな。……やっぱ必要ないんじゃね？」
「振り出しに戻さないでくださいよ」
　太刀川と出水はそうやって話し合いながら、ボーダーにある一室へと向かう。そこ自体は何の変哲もない会議室であり、全A級部隊と玉狛第一が入り切る程度には大きな部屋だ。
　話す内容も、太刀川隊はすでに把握しきっていることで、それを他の隊に周知するための場だ。それなのに招集されているのは、それだけではないということなのだが、こればかりは太刀川たちも知らない。面倒なことでなければいいなと願うばかりである。
「ようやく来たか。お前たちが最後だぞ慶」
「時間には間に合ってるじゃないっすか忍田さん」
　そう言いながら空いている席へと座った。場所は決められていたのだろう。それぞれが隊ごとに固まって座っている。
　一瞥して気づくことは、現A級部隊の他に元A級部隊の二宮隊と影浦隊、そして元A級1位を率いた東もいるということか。
「忙しい時期に集まってもらったのは他でもない。この場の全員に共有しておきたい件があることだ」
「端末を使っての通達では不都合があるような話ですか」
「……そうだ。この件は上層部とこの場にいる者のみが周知し、一切の他言も許されない話だ」
　その言葉に全員の意識が切り替わる。例外を除いてB級すら知っ

てはいけない話となると、「大規模侵攻以前では一般的に秘匿されていた”遠征”の話よりも重たい」ということになる。
この事自体を、Ａ級とはいえ中学生にも話すかは一度上層部で議論にはなったが、ボーダーが隊での行動を前提にしていることを鑑みて中学生にも伝えることが確定した。
「スカウト旅に行っていた者を含め、彼との接点を持っていない者も多いだろう。まずはこの件の中心人物のことから伝えさせてもらう」
そうしてボードに映し出されたのはシアンだ。攻撃手大会をした時の写真だろう。
忍田の言の通り、スカウトに行っていた者たちは当然シアンのことを知らない。帰ってきてから話を聞いたことがある者もいるようで、「この人があの」といった反応を示す者もいる。攻撃手上位の一条なんかは「この大会混ざりたかったなぁ」と違う反応をしているようだが。
「知っている者にとっては改めてになるが、基本情報から共有させてもらう」
シアンの名前と近界民だということ。今は太刀川隊と基本的に行動を共にしていて、彼が持っていた黒トリガーは国近が常時携帯していること。今はボーダーのトリガーも保有していて、個人戦に顔を出すこともあること。人柄といった個人面も含めて――これは太刀川隊に確認取りながらになったが、それらが終わったところで本題に入る。
「以上がこれまで判明していたことだ」
「判明？」
その言い方に誰もが引っかかった。実際に声に出したのは誰だったのか。それを特定する必要性もなく、忍田は話を続ける。
「本人からの自供もあり我々も先日知ったことだが、彼はトリオン兵だ」
「「……は？」」
「「……え？」」
「かつてアフトクラトルにいたリア・ハーヴェイという女性が、亡き弟

シアン・ハーヴェイの蘇生を試みた結果、我々の知る彼(シアン)が誕生した」
「いやいや、まじか……。忍田さんちょいストップ。衝撃的過ぎる話だ」
冬島が忍田の話を止めさせた。その内容はたしかに、あまりにもぶっ飛び過ぎている。
そう思うのも、思考が停止しかけるのも無理からぬことだろう。面識のないスカウト組ですら、ボードに映っているシアンを見てその目と耳を疑っているのだ。面識のある面々の衝撃はそれ以上だろう。
１００歩譲って「初めからトリオン兵でした」ならまだいいだろう。だがシアンは「元は人間で一度死んでいる」というオプションが着く。頭を抱えたくなるものだ。
「いや、でも食事とか普通に取ってましたよね」
「オレらも一緒に焼肉行ったしな」
「なぁ？」と米屋が緑川と出水に目を向けながら言う。緑川はまだ驚きの中にいながら「うんうん」と頷き、すでに話を聞いている出水は静かに頷いた。
出水のその様子から、この場のほとんどの人間が理解する。太刀川隊は先にこの話を聞いているのだと。
「食事は関係ないんじゃないか？」
そう言ったのは東だ。
「俺たちだってトリオン体でも食事を取れるんだ。トリオン体での食事がエネルギーにちゃんとなるように、シアンにとっての食事もそのまま活動の源力に変換される。そんなところだろう」
「人と変わらないトリオン兵と言うのなら、トリオンの回復の仕方も人と同じでしょうね。睡眠は当然として、そこに食事もプラスで加わる。稼働自体にトリオンも使ってるでしょ」
続いて話したのは冬島隊でオペレーターをしている真木。東が避けた表現をばっさり使うのは、物をはっきりと言う彼女らしかった。隣に座る三上は、その物言いに困ったように苦笑した。
「それで上はどう決めたんですか？」
わざわざ集めてまでこの話をしたのは、情報の共有だけが目的では

ない。どう対応するのか、上の判断は何なのか。つまり、今後のことも議題になっているはず。
　それを問うた嵐山に忍田は一度頷いて口を開いた。
「彼がもし今の自我を消失した時、つまり人間性が消え真にトリオン兵となった時我々は彼を討つ」
「ちょっ！」
「それが上層部の判断だ。その時が来た時の対応は、太刀川隊長に一任されている」
「そういうことだ。ま、仮にそうなったら俺が斬る。誰も手ぇ出すなよ」
　その眼差しも声も、真剣そのものだった。
　上層部が先に決めていることも踏まえ、この場での話は「もし太刀川が失敗したら他の面々で事にあたる」という通達なわけだ。この話に異議を唱えられる者などいない――はずだった。
「加古隊は反対するわ～」
「へ？」
「加古さん!?」
「……なにを考えている」
　にっこりといい笑顔で意見した加古に多くの隊員が驚愕する。それをよそに元隊員同士であった二宮が、腕を組みながら加古に真意を問うた。
「なにって、この話に反対ってだけよ。何もそれだけが対処法というわけでもないでしょう？　別の道の模索をしたっていいんじゃないかしら」
「それが無いと判断してのこの結論だろう」
「現時点では、でしょ？」
　その言葉に二宮は押し黙る。加古の意見もまた筋と根拠のあるものだ。
「シアンくんがもうダメだったら私も諦めていたけれど、今の話だとまだその時でもないのでしょう？　それに、その時が来ても討つんじゃなくて拘束を私は提案するわね」

「たしかに拘束するのも手の1つか。シアンが戻れるなら、それに越したこともないしな」
「東さんは話が早くて助かるわ～」
「……はぁ。加古さんに先を越されちゃったけど、玉狛支部もその決定には断固反対するわ」
「そちらのスタンスではそうなるだろうな」
　代表して表明した小南の弁に風間が頷いた。玉狛支部は「近界民とも手を取っていこう」と考えていた旧ボーダーの思想を受け継いでいる。たとえシアンがトリオン兵だろうと、すでにシアンを知っている以上そこを曲げるつもりもない。隠しているとはいえ、近界民である空閑やヒュース、クローニンも擁しているのだ。今さら誰も驚きはしない。
「だが本部長の言い分からして、林藤支部長も受け入れていたということにならないか？」
　忍田は「上層部の決定」とした。その上層部の1人が、玉狛支部の長である林藤だ。上と下で意見が食い違っていないかと指摘されたことで、小南の纏う空気がひりついた。
　無音が場を支配していく。そうなりかけたところで、1人の男がへらっと笑いながら手を上げた。
「あ、風間さん。それ俺が話を切り上げちまったせいだわ」
　太刀川慶である。
　実際太刀川が半強制的に会議を終わらせたことで、上層部もそれ以上の議論は大して行わなかった。城戸がリアと交した約束もある。
　上層部の意見は、この件に関しては「太刀川慶の意見が上層部の意見」という形になる。
「そういうことなら話は早いじゃない。太刀川くんが意見を変える。それで収まるでしょ？」
「まぁな。ひとまず、それぞれの意見を聞いてみるか。加古さんの隊と玉狛は聞いたからいいとして。他はどう？」
「……うちはどっちでもいいわ。必要なら処分する。指示に従うだけよ」

「あの、真木ちゃん。隊長俺なんだけど……」
「俺としちゃあ撃ちたくはねぇな」
「おまえ面識あったっけ？」
「直接はないっすけどね。でもま、他人ってほど切り捨てれる距離でもないんで」
「へ～。ま、とりま冬島隊は指令次第ってことで」
　遠征経験のある当真であっても、さすがに友人の彼氏を撃つことには思うところがあるらしい。それを考えてから当真は、太刀川が既に覚悟を決めていたことに気づく。この場がなければ、1人で背負い込んで斬ったであろうことも。
　そうならないために、迅が裏で忍田に話し、この場を作らせたわけだが。
「風間隊も同じだ、と言いたいところだったが、今回は加古の意見に賛同する」
「へ!?」
「あら？」
「風間さんさっき、え!?」
　一番困惑を示したのは、感情が素直に出やすい小南だった。加古も、いやその他にも意外だと感じた者たちはいるようで、視線が風間に集まった。なんなら隊員からも目を丸くされている。
「個人の考えで言えば上層部の決定に従うだけだが、うちのオペレーターはその気にはなれないらしい」
（ぁ、気づかれてたんだ……）
「視点を変えれば、シアンという存在はボーダーのトリガー技術にはないものだ。再現することは倫理面からしても反対だが、他に流用できるものも発見されるだろう」
「……それって、シアンさんで研究するってことですか？」
　風間のその発言に反応したのは、これまで押し黙っていた国近だ。その表情はいつもの明るさを持っておらず、話を聞いたその時から気が滅入っていることが見て取れた。睡眠も、食事も、ろくに取れていないのだろう。その彼女が反応したことに、三上は静かに息を呑ん

だ。
「……最悪の場合だ。率先してそんなことをしようなどとは考えていない」
「……」
「ま、とりあえず風間隊は反対と。次は草壁隊」
「そうは言われても、うちと片桐隊は完全に面識もないんですけど」
　自分のオペレーターのことを気にかけながら、太刀川は努めて気楽に草壁隊へと話を振った。草壁隊はボーダーで唯一オペレーターが隊長を務める隊だ。しかも隊長の年齢は１５歳。Ａ級最年少隊長である。それを務められる胆力の証に、この議題と空気の中でも草壁は通常運転だった。
　まず草壁は唯一スカウト旅に行かなかった緑川に意見を仰いだ。バトラーな彼なら面識もあるだろうとという読みがあってのものだ。
「ん～。オレはバトってもらったことないけど。普通にいい人って感じ」
「参考にならないわよ。……はぁ、判断材料もないから、草壁隊は太刀川先輩の指示に従います」
「時間貰えるならこれから会ってみたいけどねー」
「猶予が分からないんだから仕方ないな」
「嵐山隊は反対側だな。何度か話したこともあるし、今さらあの人をトリオン兵として見ることはできない。人道に沿った対応を取りたい」
「なるほど？」
「……さすがにわかりますよね太刀川さん？」
「ははは、出水の中の俺どうなってんの？」
「割り切る割り切らないの話で言えば、割り切れる。ただ、そういう人間ではありたくない」
　それは嵐山の信条による意見なのだろう。入隊当初から嵐山は真っ直ぐな男だ。自分の中で芯を持ち、それを裏切らない、恥じない生き方をしている。
　秘匿事項になる事から口外されることはあり得ないが、それでも

「身内が危険だから斬りました」などと、自分の大切な弟や妹たちに言えるはずもない。彼らに胸を張ることなどできない。だから嵐山はこの話に頷くことなどなく、その隊員も同意見だった。
「……あんたのことは正直苦手だが、こちらは上の決定に従うまでだ」
「淡々としてんなー。片桐んとこは？」
「雪丸が意見を持っているようなので、俺の代わりに任せます」
「お、いいの？　二宮さんと影浦先輩のとこも意見固まってるだろうし、これって二分されるのが分かるだけじゃないっすか。だから、バトって決めるのはどうですか？　この決め方もどうなんだって話ですけど」
「それも考えたぞ？　玉狛が反対すんのは目に見えてたしな」
「あ、そうなんすか？」
「何より始末って案を出したのはシアンだ」
「っ!!」
「それは……つまり」
　本人が終わりを望んでいるということだ。片桐はそこまでを口にはしなかったが、その憶測は狂いなく当たっている。
　それで合点がいった者も少なくない。なぜ国近があれほど憔悴していたのか。なぜ太刀川隊の空気が固かったのか。なぜ上層部がその決定を下していたのか。それらはすべて、シアンと最も過ごした者たちと上層部が、シアンの言葉を聞いていたからだ。
「だから勝負で決めようぜ」
「「は???」」
　にやりと笑ってそう言い切った太刀川に、全員の目が集まった。今の話の流れからして、どう考えてもそうはならない。それはないという流れのはずだった。
　だが太刀川はその逆を言う。どこか晴れた様子で、宣言するように。
「今表明した上層部側と玉狛側の2陣営で、さすがに全員は多すぎるから代表を出してそれで決める」
　なにを言い出しているのだと問いたいところだったが、太刀川の真

意にそれぞれが気づいて頬を釣り上げる。乗ってやろうじゃないかと。
「やれやれ。忙しい時期にさらに忙しいことになりそうですね忍田さん」
「まったくだ。だが……、これは彼に良い薬になりそうだな」
「たしかに」
東と忍田が肩をすくめながらそれを見守り、この場の締めに必要なステップへと入らせた。
それは他でもない――
「太刀川。お前の隊はどうするんだ？」
「ふっ。決まってるじゃないですか東さん」
「玉狛側ですよ」
――太刀川隊の所属だ。

A級部隊②

解散という流れになったのだが、国近はある人物に声をかけられてその場に留まった。太刀川や出水は先に作戦室へと戻っていき、他の隊もその多くが退室していく。
「ご飯も食事もちゃんと取らないと駄目よ？」
「加古さん……。そこまで気にしていられなかったというか」
「ま、そうよね。よければこの後美容について教えてもいいけど」
「う～ん、嬉しいですけど今日はやめときます」
「そう。ちゃんと、彼と話ができそう？」
「っ！　……加古さんはなんでもお見通しなんですね」
「柚宇ちゃんが分かりやすいだけよ。それに、話した方がいいとも思って声をかけたんだから」
国近がその気なら背中を押すだけ。足踏みしていたら踏み出させた。加古からすれば、どっちであろうと大した違いもない。
幸いにも国近は自分からその気になれていたようで、シアンへの対応の流れが変わったことにより、その目も前をしっかりと捉えている。加古はそれに安堵して微笑む。
「ありがとうございます加古さん」
「うん？」
「さっきの会議で、加古さんが流れを変えてくれたことです」
「あーあれ？　たまたま私だったってだけよ。私が言わなくても桐絵ちゃんかレイジさんが言っていたでしょうし。それに、太刀川くんもその可能性を捨ててたわけじゃなかったみたいだし」
「実はわたしもびっくりしちゃいました」
「あはは」と恥ずかしそうに笑う国近に、加古はそうだろうなと思った。太刀川慶はあのタイミングまで、加古と小南が反対を表明するまでは意見を９０％以上固めていた。今回の話し合いの場がなければ、確実に１人でやっていただろう。
それを崩すための場であり、太刀川が背負い込まなくていいように

する処置。場を設けた忍田と影の功労者たる迅の狙いはそこだった。
　そしてそれにより、太刀川は完全に吹っ切れた。「シアンの思い通りにはしてやんねー」とのりのりで次の場をすぐに用意する。
「太刀川くんも、柚宇ちゃんと同じ気持ちだったのよ。完全に受け入れてたわけじゃない。初めは1対1を想定していたのでしょうね。そうすれば背負うのは自分だけで、出水くんも唯我くんも、何より国近ちゃんをその重みから遠ざけさせられる」
「太刀川さんがそこまでのことを？」
「ふふっ。具体的に考えられてたかは分からないけどね。でも隊長という立場でもあって、シアンくんを引き込んだ張本人でもある。そういうのも要因としてあるんじゃないかしら」
　「私の勝手な憶測だけどね」と付け足されたが、その可能性がないとは言い切れない。先程の話し合いの中でも、国近を気遣う言動があったのも事実だ。
　伊達に”隊長”という立場にいるわけではない、ということなのだろう。
「欲を言えば、もう少し話を持って行きたかったのよね～。でもあれ以上は見込めなさそうだったし、欲をかいて裏目に出たら元も子もない」
「はい。あとはシアンさんを説得するだけです」
「試合を介さないと伝えきれないなんて、どうして男の子はそうなのかしらね」
「でも、伝えられないより断然いいですよ～」
「それもそうね。それなら、うちからは双葉を出そうかしら」
「各隊からの代表でしたっけ？」
「まだ決まってはいないわね。でも双葉は出たいでしょう？」
　ちらりと斜め後ろに振り返りながら聞いてきた隊長に、問われた黒江はふたつ返事で頷く。
「勝手に師匠にいなくなられては困ります」
「……いいな～。今だけは、わたしも戦えたらなーって思っちゃうや」
「……先輩の分もあたしがぶつけます」

「ありがと」
「そうは言うけど柚宇ちゃん。あなたにしかできないこともあるのだから、そのことを忘れちゃだめよ」
「わたしにしかできないこと、ですか？」
「そう。柚宇ちゃんだからできること」

◇

太刀川たちが話し合いをしている間、シアンがどこで時間を費やしていたかというと、作戦室ではなく自室だった。作戦室にてゲームをやっていても良かったのだが、今はそういう気分にはなれなかったらしい。
それでは自室で何をしていたのかと言えば、特に何もしていない。そもそも単独での行動が難しい立場でもある。状況も状況であるため無闇に行動するわけにもいかないのだ。
「これからはどうすればいいわけ？　姉さん」
しかし、ずっと寝ているというわけでもないのだが。
ベッドに腰掛けて座るシアン以外、この部屋には誰もいない。この空間には正真正銘シアンしかいない。ならばその言葉は空気に溶け込んで消えていく。返事はない。
そのはずだった。
〈私に聞いても仕方のないことよ。これは貴方のゲームなんだから〉
「ゲームね。こうやって出てきてる時点で、姉さんも絡んでるでしょ」
〈先に言っておくけれど、私はシアンの記憶にあるリア・ハーヴェイとは別よ？　リア・ハーヴェイに近い思考ができる機構。それも使われる予定は無かったもの〉
「現に出てきてるけど？」
〈シアンが生まれたからよ。シアン・ハーヴェイでもなく、トリオン兵でもない中間の存在。限りなく低い確率の中から誕生するシアン用に、リア・ハーヴェイが気まぐれで用意してただけ。驚かせてそれを楽しんで消える。それ用でしかないのよ〉

「気まぐれでそれができるとか、姉さん頭良すぎでしょ」
気まぐれと言えば気まぐれだが、「どうせなら完璧に」という欲を持ち合わせていたのも事実だ。その優秀過ぎた頭脳からその可能性に気づき、一応やっちゃうかと思い至って作られた。
作られたリアはそう言っているが、出現条件から考えればそれが本当の事ではないことは明白だった。
第一条件としてまず”シアン”の発現。可能性が低いというのに、リア・ハーヴェイはその可能性を前提に研究と開発を進めていた。
第二条件はシアンが”今の状態になること”。シアンが発現した上で、その自我が薄れていく状態になる。安定していた場合、このリアは永久に出てこなかった。
そして最後の第三条件は、”シアンがリアに気づくこと”。これが満たされることで初めて、リアはその機能を動かしてシアンとの会話が可能になる。「姉らしいこともしてみるか。でもお節介は別だしな」という葛藤から、この3つ目の条件が組み込まれた。
〈リア・ハーヴェイはもういない。シアンは自分の好きに動けばいいのよ〉
「日々オレが薄れるのを感じながら?」
〈怖くなったからあんな頼みをしたのね。仲良くなった相手を傷つけたくないから、対抗できる実力を持つ太刀川慶に頼んだ。上層部にも話したのは、規格外の強さの彼がいるから。はぁ、シアンあなた逃げたわね〉
「にげ……?」
〈それ以外の言いようはないでしょ。自分を諦めて周りに対応を投げつけた。自分があの子を傷つけてしまうかもしれない。その言い訳すら用意した。そうでしょ?〉
「……」
否定の言葉は出てこなかった。否定したい気持ちはあったが、その指摘は紛れもない核心を突いている。
沈黙するシアンをリアはただ観測した。落胆などない。怒りもない。呆れることもなく、平常なまま。

〈シアン・ハーヴェイの記憶があるからそれに引っ張られるのでしょうね〉
「？」
〈シアン・ハーヴェイはリア・ハーヴェイのような天才じゃなかった。幼心からそれは理解していた。でも慕う気持ちはあったから、リア・ハーヴェイに質問ばかりしていた。どうなっているのか。どうしたらいいのか。リア・ハーヴェイの答えに、示した道に突き進んだ〉
　その道の先にあった戦いで命を落としているのだが、それを憎むこともなかった。そんなのは筋違いもいいところだ。示されようとも、進むかどうかは自身で選んでいたのだから。
〈でもシアンは違うでしょ。シアン・ハーヴェイの記憶があるだけで、違う存在よ。そしてそれは私も同じ。だから私はシアンに道を示すなんてことはしないし、シアンは自分で見つけていくしかない〉
「……あー、そういうことか。うん、やっぱりリア・ハーヴェイは優しかったんだな」
〈どこが？　死ぬとわかってた弟を止めなかった姉よ？〉
「それを避ける手段も、可能性もあった。それを選ばなかったのは、手繰り寄せられなかったのは、シアン・ハーヴェイ自身だ」
〈……そう。決意は変わらないのね〉
「うん。オレはオレだと理解したからこそ、オレみたいな存在はいちゃいけない。この技術は完成させられるべきではなかった。リア・ハーヴェイに用意されたゲームは、脱線すら想定されてたけどこれ以上続かせるわけにはいかない」
〈うーん、その決断をどう受け止めるべきかしら。まあでも、私には止める力もないわね〉
　説得すら元からするつもりはなかった。リアの役割は、シアンが迷った時の話し相手でしかない。存在が薄れれば必ず迷う。自分の在り方に戸惑う。どうするか決めた後でも、むしろ後だからこそ「正しかったのか」という迷いが生じる。
　その決断の揺らぎに対する話し相手。リアができることはそれだけであり、そしてただ反応を示すだけだ。先を示さず、その腕を引か

ず、その背中を押すこともない。シアンがどんな選択をしようと、肯定も否定もしない。決めたなら進めと言うだけだ。
〈シアンが決めたようだから、私はもう消えるわね。ほんと、らしくないことをしたものだから、何の為に用意されたのか分からないわね〉
「そうでもないよ。姉さんと話せてよかった。ありがとう」
（リア・ハーヴェイは自分で道を作れた。1本の直線の道を。けれどそれは本来あり得ないこと。一直線だけの道なんてないし、分岐しない道もない。それが当たり前なのよ。それだけは覚えておきなさいシアン）

◇

「まったく……この忙しい時期にこれとは……」
「おや根付さん。何を考えているんだーとかは言わないんですね」
「それはそうでしょう。彼の問題はデリケートです。隊員たちは1人の人間として認め、その上で軽く扱うべきではないと、はいそうですかと斬り捨てていいものではないと考えたのですから。我々が任せた後での決定ですよ。ケチをつけるのはナンセンスです」
「それはごもっとも。しかし本人は終わりたがっている。この試合での勝敗だけで解決するとも思えませんね」
「開発部に顔を出しに来ましたよ。事後にはご自由になどと。まるで死後の臓器提供じゃったわい」
「すでにそちらまで動いてましたか。太刀川くんたちはどうするのか。まさか試合しか考えてないなんてあり得ないでしょうしね」
「まずは勝つこと、ですねぇ。このメンバー表……なかなか難しい試合が想像されますよ」
「ふん」
　根付、鬼怒田、唐沢の3人は、試合のメンバー表へと目を落とした。A級が2チームに別れての試合だが、全員参加というわけではない。各チームから代表で10人ずつ選出される。
　つまりそれは、A級によるオールスター戦なのである。

A級部隊③

「こんな日が来ると誰が予想できましたでしょうか！　A級のランク戦ですら貴重というものなのに、まさかまさかのA級ドリームマッチ!!　2つのチームに別れてそれぞれ代表者が10人ずつ！　今回もしれっと混ざってるシアン選手は何なんでしょう！　実況はもちろん私（わたくし）武富が務めさせていただきます」

例に漏れず今回の試合も観戦可能となっていた。当事者たちにとっては、お祭り感覚でできる試合ではないのだが、予想していなかったことでもない。A級の試合ということもあり、C級だけでなくB級の隊員もその多くが観戦している。防衛任務に当たっている部隊は運が悪い。

「さて、解説にはこちらもまさかまさかの忍田本部長にお越しいただいております！　本当に恐縮なのですが、お越しいただいてありがとうございます」

「この試合となるとA級からは誰も来れませんからね。今のA級の実力をこういう形で把握できるのは、私としても貴重です」

そしてその試合をどう見て学ぶのか。この場にいる隊員たちのその姿勢も見られることは言うまでもなかった。しかも武富にいたっては真横で実況である。誰よりも胃が痛い状況だが、プロ魂からか咳払い1つで切り替えた。

「私の緊張はひとしおと言ったところですが頑張ります。もう1人解説には寺島先輩に来ていただいてます！　現在はエンジニアですが、かつては凄腕の攻撃手（アタッカー）の1人！　レイガストを開発された方でもあります！」

「経歴紹介も含めてありがとう。本当ならこういうのはやらないんですけど、本部長直々の頼みで来ました」

「そしてそして！　最後にはこの方！　少数精鋭の玉狛支部を束ねる林藤支部長です！」

「迅にやらせようかと思ったんですけど、逃げられちゃいました。は

はは」
「林藤も昔は前線にいた人間で、中距離戦の心得もあります。その辺りの解説は任せていいでしょう」
「おっと中距離戦全般を振られちゃったか。まぁ解説の流れは普段のランク戦のものと同じでいいでしょ。細かな解説は終了後の振り返りの時にでも」
「そうですね。忍田本部長、今回の試合ですが注目すべき点はどこでしょうか？　A級の試合というだけあって、どれも見逃せないとは思うのですが」
「そうですね。注目すべきは、どう連携を取っているかです」
「連携、ですか。たしかにドリームマッチとは言っても即席チームではありますもんね」
　武富の相槌に忍田はこくりと頷いて続けた。
　今のボーダーは毎月新人が入る体制になっている。以前からいるC級ならまだしも、比較的最近加入しているC級たちに向けて普段以上に丁寧な解説が必要だ。
　忍田も、他の2人もそこを念頭に置いている。
「普段のチームとは別での部隊戦であり、防衛任務とも違う。A級の人間なら即席でも問題なく合わせられますが、互いの強みをどう活かし合って動くのか。せっかくなので今回はそこに注目してほしいですね」
「チームでの連携や動きがあっても、そのチームがずっととは限らない。実戦教育を念頭に置いてる東隊が良い例だな」
「なるほどー、たしかにそうですね。そうなりますと、如何に他の人と合わせられるかが鍵になると」
「一概にはそうも言えないけど、基本的にはそうですね。ただその点で明らかに不利なのは、シアンがいるチーム2の方でしょ」
「というのはどういうことでしょう寺島先輩」
「即席チームとはいえ、互いのトリガー構成はそれぞれ頭に入ってる。太刀川や風間みたいにボーダー設立時からいる隊員だと、人柄や得意戦術だって知られてる。つまり連携が取りやすい。けどシアンにそ

れは求められない」
「シアンの人柄を一番知ってる太刀川隊は敵チーム。小南とか、シアンと仲良くしてる他の隊員もほとんどがそうだしな」
「さっきも言ったけど連携面は戦闘の1つの要因でしかない。けど、それが求められた場面で差が出るのは分かりきってる点になる」
「逆に言えば、シアンたちチーム2がそこをどう対応するのか。事前の決めごとも大事だな」
「戦いは開始前から始まっていると……」
「矛盾してる聞こえ方だけどそういう事」
入隊したばかりの新人たちは混乱しそうなものだが、そこも含めて勉強だろう。
この日、この時間は、何よりも重厚な時間になる。
「しかしそうなりますと、両チームが作戦会議の時間をどう活かせるか。そこも重要になりますね忍田本部長」
「今回だと特にそうですね。通常のランク戦と異なり、今回はランダムでマップが決められる。決まってから開始までの10分間。そこの質の差は大きく響くことになりそうです」

◇

「解説じゃああ言ってるが、シアンならその辺どうとでも合わせられる。メンバーのトリガー構成もすでに頭に叩き込んでんだろ」
「とはいえ大した連携までは取れないはずだ。状況次第ではお前の望む展開にはならないだろう。誰がシアンを落としても文句は言うなよ」
「そこまで子供じゃないですよ風間さん」
「シアンはあたしが斬るわ。そんでもってうちに引き込む」
「支部長はそんなこと言ってなかっただろ」
「城戸さん派閥の太刀川のとこより、玉狛所属の方がいろいろ楽でしょ。近界民もいるし」
「それ決めるのはそれこそシアンさん次第だろ。ねえ柚宇さん?」

「まぁね～。私は残ってくれた方が嬉しいな～」
「元の鞘に納まるのが、落とし所として理想ですよね」
国近の願望に三上が賛同して背中を押す。この件に関しては、三上は”対国近限定全肯定みかみか”なのだ。
理想とは言ったが、ただ元通りになることが理想とは思っていない。互いに抱えてるものをすべて清算して、以前よりも強固な関係性になって戻ってほしい。三上の思い描く理想はそっちだ。
「こっちと向こうとじゃモチベーションの差もありそうですけど、向こうが手を抜くこともないっすよねー」
「ないでしょ。A級に共通点があるとすれば、その1つが負けず嫌いなんだから」
「ははははっ、そりゃ違いないな」
「あ、マップが決まったみたいだね～」
「……予想していたマップの1つだな」

◇

「このマップは……どういうマップだ？」
「ふざけるな、と言いたいところだけど、個人戦しかしてないなら知らないのも当然か」
「市街地B。C級へのデモンストレーションも考えれば当然ね」
「時間も多くない。すぐに作戦を練りましょ」
「こっちのオペレーター気が強いのしかいねぇな」
「それが何か？」と3者の視線が集中し、当真は首を竦めた。
かつて東隊でオペレーターを務めた月見、現A級2位の部隊のオペレーターを務める真木、そしてボーダー唯一のオペレーターで隊長の草壁。
こちらのチームのオペレーターを務めるのはこの3人だ。ちなみに真木はこの件で三上と対立する流れになったことにショックを受けている。風間隊が向こう側に行くなど予想だにしなかったことらしい。

「市街地Ｂは高低差のある建物が多いマップよ。一見射程持ちが戦いやすいマップだけど、射線を通せる場所と通せない場所がそれなりに別れてもいる」
「つまりその辺も織り交ぜて作戦を考えるわけか」
「そういうことね。出水くんは射線関係なしで攻撃できるから、そこは忘れないように」
「わかった」
　弾の軌道を変えられる変化弾（バイパー）。それをリアルタイムで好きに毎回引けるのは、Ｂ級にいる那須とヒュース、そして太刀川隊の出水だ。ヒュースはその経歴上まだ那須ほど綺麗に引けるわけではなく、そして那須と出水の撃ち合いでは出水が勝つ。
　某信者から対マン最強と称される二宮相手にすら、出水は撃ち合いで４割の勝率を保っている。射手（シューター）というポジション上、生まれ持つトリオン量の差が、そのまま戦いに影響するにも拘らずだ。
　たとえどんなマップだろうと、相手から警戒されるのは当然である。
「なんにせよ、こちらはこちらにしかない強みを活かす。それは絶対必要な条件だ。いつも以上に働いてもらうぞ」
「了解だ真木ちゃん！」
「あれ？　隊長ってどっちだっけ？」
「気にすんな。冬島（うち）隊はいつもこんな感じだ」
「へ～」
　いっそ隊長変わればいいのに、と思ったシアンだったがそれを口にすることはなかった。
　言ったら冬島は泣く。

◇

「さあマップも決まり、残り時間も僅か３分ほど。ここで今回の参加者の発表をさせてもらいます!!」
「「おお!!」」

「「ついに!!」」
　ざわつく観客席の様子から、そういえばまだ発表してなかったなと解説陣は思い返した。彼らはすでに知っている身だったからこそ、両チームがどう作戦を練るのだろうとそれぞれ脳内で思い描いていたところだ。
「まずはチーム1の攻撃手（アタッカー）から！　この3人が共に戦う姿を今後見る機会があるのか！　トップ3の太刀川隊長、風間隊長、小南隊員！　さらには乱戦で怖いもの知らず、奇襲が効かないでお馴染み影浦隊長！　そして加古隊所属、A級最年少の1人の黒江隊員！」
　その発表と共に、5人の顔写真がトリガー構成付きで大型モニターに表示された。会場のざわつきも盛り上がりへと変わっていく。
「ははは、こうして見ると豪華だな～」
「影浦隊長は諸事情でポイントこそ減ってますが、実力は攻撃手の中で5本指に入ります。黒江隊員も次世代を担う1人として期待される隊員。他の3人は補足するまでもないですね」
「はい。では残りの5人も紹介します！　合成弾のパイオニアにして天才射手！　あの二宮隊長と撃ちあえる出水隊員！」
　B級ランク戦はつい先日まで行われていたものだ。それ故にほぼ全員が二宮の存在を知っている。その二宮と撃ちあえるという紹介は、あまりにも「なにその化物」感が強い。
　しかし熱が入ってきた武富は止まらない。次々とメンバーを紹介していく。
「未だにボーダー唯一の存在！　攻撃手、銃手（ガンナー）、狙撃手（スナイパー）の全距離でマスタークラスに到達している完璧万能手（パーフェクトオールラウンダー）の木崎隊長！　その木崎隊長に続いて万能手Ｎｏ．２にしてボーダーの顔！　嵐山隊長！　そしてそしてＡ級唯一のガールズチームの隊長にして、Ｎｏ．３射手の加古隊長！」
「基本的に各隊長には出てもらってますが、錚々たる顔ぶれですね」
　忍田の言葉にまったくだと観客たちがうんうんと頷き、やがて1人足りないことに気づいた。
　１０人対１０人の試合なのに、紹介されたのは9人である。

あと1人は誰だろうと予測が飛び交う中、武富は再び口を開く。主に時間を巻かないといけないせいで。
「最後はこの人！　狙撃手の祖にして何人ものA級隊員を生み出し、今期のB級ランク戦でも被撃墜ランキング堂々1位の！　東隊長!!」
「聞いた時は驚いたなー。東もこういうの出るんだなって」
「東さんまでいるとか、俺ならこのチームと戦いたくないね」
「オペレーターは国近先輩、三上先輩、綾辻先輩の3人です。さて寺島解説員の言葉には納得の余地しかありせんが、そんなチーム1に挑むのがこの方々！　お祭り騒ぎにはこの影あり！　強い事以外知られていない謎の清掃員ことシアンさん！」
（（そういえばそんな役職にしてたな））
「清掃員なんだ」
「なんでも太刀川隊の作戦室を主に掃除するそうですよ」
「そうだったんだ」とか「そういえば聞いたことあるような」とか。知られてないｏｒ忘れられていたシアンの役職に、武富も苦笑するしかなかった。
余計な情報言っちゃったなーと軽く反省しながら、気を引き締め直して紹介を続ける。
「現攻撃手5位にしてダブルレイガスト使い！　片桐隊の一条隊員！
万能手3位にして以前の侵攻でも大活躍の三輪隊長！　隊長経験もあり草壁隊を支える中核！　佐伯隊員！」
「ランキングで考えると見劣りしそうだが、あれはポイントの性質上期間の長い奴ほど上位になりやすい点があるからな。特に攻撃手はそこが顕著だ。こいつらも十分張り合えるぞ」
林藤のフォローを聞き届けてから、武富は残りのメンバーを紹介する。
「個人総合2位！　射手1位の射撃の王！　対マン最強とも言われる二宮隊長！　自他ともに認めるその二宮隊長の信者にして、銃手の頂点に立つ里見隊員！　銃手3位にして狙撃手も務める稀有な存在、片桐隊長！　一射一殺の必中狙撃を繰り出すＮｏ．１狙撃手当真隊員！　その当真隊員に引けを取らぬ技量を持ちます、Ｎｏ．２狙撃手の

奈良坂隊員！　そしてＡ級にしかないポジション、トラッパーの冬島隊長！」
「Ａ級にはスポッターというポジションを行う隊員もいますが、今回は控えてもらっています」
「トラッパーの冬島さんが参加してるのも、冬島さんが隊長だからって理由だな」
「チーム２のオペレーターは月見先輩、真木先輩、草壁隊長の３人です」
　時間を一瞥し、ドンピシャで間に合ったことに武富は安堵して高らかに宣言した。
「時刻になりました！　各隊員はランダムに転送されます。では、試合開始!!」